

---

# 混沌なき箱庭

天原ちづる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

混沌なき箱庭

### 【Nコード】

N1141J

### 【作者名】

天原ちづる

### 【あらすじ】

交通事故で死亡した葉月はある世界の女神によってその世界の住人に創り変えられた。

落とされた先は<混沌なき箱庭>と呼ばれる世界。

そこで一緒に落とされた元獣人のジークと共に、女首領が率いる組織、戦列の<テール>にやっかいになることになって……。

一筋縄ではいかない団員たち、狂信的に世界の終焉を目指す<ゼルダの使徒>、そして崩れる世界の均衡。

義姉弟となった葉月とジークは、<混沌なき箱庭>を救うことが出

来るのか！？

## ■登場人物紹介■

### ●葉月<はづき> (28↓13)

薄橙の肌・濃い灰色の髪・灰青の瞳 (転生後)

元々地球のあるく神話の向こう側>の生まれだが、交通事故で命を落とし、エルフイムによって姿を変えられ、<混沌なき箱庭>に落とされた。

たれ目気味であるので温和に見られがちだが、中身は結構辛辣で頑固。

### ●ジーク (25↓10)

浅黒い肌・焦げ茶の髪・焦げ茶の瞳 (転生後)

元々獣人の世界<猛る牙>の生まれだが、戦で命を落とし、葉月と同じように姿を創り変えられ<混沌なき箱庭>に落とされた元黒豹の獣人。

非常に真面目でまっすぐな性格。元の種族と職業柄、獣染みた強さを持つ。

### ●カーサ (31)

浅黒い肌・黒髪・薄茶色の瞳

<ゼルディア国>の都市<ウクジェナ>に縄張りを持つ組織<テラン>の女首領。

豪胆で自由奔放な親分肌。勘が鋭い。

### ●ブノワ (35)

薄橙の肌・薄灰色の髪・青みの強い灰青の瞳

<テーラン>の副長で組織のまとめ役。  
甘い顔立ちの伊達男で、女性には優しいが男には容赦ない。無精  
ひげ。

● トーリス (38)

薄橙の肌・濃い灰色の髪・薄い灰青の瞳  
副長補佐。

無口で厳ついが、気配り上手。筆跡は意外と可愛い。

● タイロン (23)

薄橙の肌・灰色の髪・灰青の瞳  
副長直属。葉月の指導役。  
明るく面倒見も良い兄貴。筋肉馬鹿。

● ケヴィン (27)

薄橙の肌・薄い灰色の髪・灰青の瞳  
実行部の第四隊長。  
いわゆるイケメンだが軽薄な雰囲気を持ち主。

● エルフィム

白磁の肌・白銀の髪・薄灰青の瞳  
<混沌なき箱庭>を創った神々の一柱。  
葉月たちを<混沌なき箱庭>に落とした張本人。見た目は幼女。  
無邪気で冷徹で寛容で奔放な砂と荒野の女神。

## ■戦列の<テール>組織図

大雑把で分かりにくい<テール>の組織図。  
一応、こんな感じで組織されてはいるが、結構流動的で臨機応変に動く。

注：挿絵表示を「する」にして御覧ください。

> i 2 3 4 4 0 — 3 1 1 0 <

参謀はほとんど首領付に近い。

副長が忙し過ぎる。

葉月とジークは人数にカウントされていない。

ここに名前が載っている主要員ですら、全員ちゃんと出せるか自信ない……。

他にも料理長やら庭師兼雑夫やら下働きやらいるが、団員とは言わない。

## 各部署の説明

### <首領直属>

- ・その名称通り、首領の直属の部下。
- ・書類仕事が嫌いな上司に代わってデスクワーク率が高い。
- ・比較的まとまな人物が多い。

### <副長直属>

- ・その名称通り、副長の直属の部下。

- ・ 副長の仕事の範囲が広い為、割と何でも屋。
- ・ 一芸に秀でた人材が集まっている。

< 諜報部 >

- ・ 間諜、いわゆるスパイ。
- ・ 情報を得る為、各所へ散らばっているので全員が本拠地に揃うことはまずない。
- ・ 影が薄いから濃いので個性豊か。

< 医療部 >

- ・ 団員たちの治療はもちろん、地域医療にも貢献している。
- ・ 外科・内科共に高水準の治療を行う。
- ・ 割と穏やか。

< 勘定部 >

- ・ 財務と総務を司る。
- ・ 団員以外の使用人は勘定部の管理下にある。
- ・ 怒らすと怖い守銭奴の集まり。

< 実行部 >

- ・ 四つの部隊に分かれている< テーラン >の主戦力。
- ・ 地域のパトロール、用心棒、犯罪者の搜索などを行う。
- ・ 部隊は隊長の個性によって性格が異なる。

## 1・<世界の落とし子> 1・1（前書き）

<当連載について>

PC向けサイト「深藍海都」で連載中の作品を転載しております。  
サイト更新を優先しており、こちらへは数話遅れで投稿致します。  
完結するまでこちらの話数がサイトに追いつくことはございません。  
先が気になる方はサイトの方をご覧ください。  
ご了承の程よろしくお願い致します。

1・＜世界の落とし子＞ 1・1

キキーツ。

耳障りな甲高い音。

誰かが、「危ない」と悲鳴を上げた。

右から左折して来た車は、何を急いでいたのかスピードを落とさずに曲がってきた。

横断歩道を渡る、歩行者に気が付かずに。

どしん、という重たい音が体に響く。

はね飛ばされ、宙を舞う体。

痛みは感じなかった。

ただ、呆然として首を巡らす。

自分をはね飛ばした運転手と目が合った。

驚愕に染まった顔。見開かれた瞳。

まだ、少年のような男だった。

もちろんおかしな  
師岡葉月、享年二十八。

それが、彼女が見た、生まれた世界の最後の光景となった。

葉月は、誰かに呼ばれて意識が浮上した。

そこは荘厳な神殿のようなところだった。

太く白い柱が何本も並びたっており、それがどこまでも続いていた。距離感覚が狂いそうな広い部屋だった。

目の前にいるのは、白銀の髪を床につくまで伸ばした少女。

白磁の肌に薄灰青の瞳が印象的な美しさがあった。

可愛らしいのではなく、あくまで美しい少女というのは、なかなか想像がつきにくい存在だ。

今、自分の名を呼んだのは、この少女だろうか？

小首をかしげようとして、その首自体がないことに気付いた。

それどころか、葉月は体すら持たなかった。

何やら、きらきら光る“もや”のようなものが、自分であるらしい。その“もや”は葉月の他にもう一つ、幼女の前に浮いている。

肉体を持たないことで、自分は死んだのだな、と人ごとのように悟った。

普通ならもつと慌てるのだろうが、どこか麻痺しているのか、それとも意外と自分の運命に納得がいくのか、落ち着いたものである。それよりも目も脳もないのに、よく見えるものだと思議に思う。

葉月の意識がはつきりしたことを知ったのか、幼女が口を開いた。

「よく来てくれた。葉月、ジーク。＜世界の落とし子＞たちよ。吾はエルフイム。＜混沌なき箱庭＞の創造主の一柱。＜ゼルディア国＞の副神にして、砂と荒野を司る女神である」

幼女はその外見年齢に反し、臍<sup>へうた</sup>長けた声音で自らの名乗りをあげる。「そなたらに説明せねばならぬことは山ほどあるが、まず認識してもらいたいことは、そなたらはそなたらの生まれた世界では死んだ、ということだ。そして、この世界で新しい命を得ることになる。それ以上の説明は、この世界での肉体を与えてからにしよう。肉体がなければ話すことが出来ぬし、魂だけの状態で長く世界にさらすのはよくない」

幼女はそう言つて二つの“もや”に両手を差し出した。するときらきらした“もや”は更に輝きを増し、光に包まれる。

かなりの眩しさに、葉月の意識は白く染まった。

そして突然、ぎゅっと目をつむっている感覚を覚える。

おそろおそろ目を開くと、光はおさまっていた。

目線を下に動かし、手の平を見つめる。体だ。

わきわきと指を動かし、己の意思で動くことを確認した。

しかし、葉月の記憶にある自分の体とは、少し違う。

肌の色はたいして変わらない。爪の形もだ。

が、何かが違う。

今度はきちんと首をかしげると、隣から少年の悲鳴のような声が聞

こえた。

「毛、毛がない!？」

浅黒い肌をした少年だ。

呆然と腕を見つめているが、彼の頭には焦げ茶色をした髪があつて、  
けつしてハゲてはいない。

少年は十歳前後に見えるので、腕毛がないのは特におかしいことではないだろう。

だが、少年はかなりの衝撃を受けているようで、あちこち体を触つては、

「つるつるしている。気持ち悪い……」

と嘆いていた。

白い貫頭衣の中まで覗き、「毛が……。密かに自慢だった毛皮が……」とつぶやいている。

その様子を見てエルフイムが「ふむ」とうなづいた。

「＜混沌なき箱庭＞の住人に合わせてそなたらの姿かたちを創り変えたが、特にジークは元の姿とは大きく違っている。受け入れがたいかも知れぬが、受け入れてもらわねば困るな。鏡を出そう。現実を直視するといい」

エルフイムがそう言うと、二人の前にそれぞれ姿見が表れた。そこに映った己の姿を見て、葉月は目を見開いた。

1・<世界の落とし子> 1・2

十二、三歳ほどの少女である。

一つにまとめられた髪は、よく見ると黒ではなく、濃い灰色のようだった。

思わず姿見に手をつき覗きこむと、瞳の色が灰青であることに気付く。

顔立ちも微妙に違う。

たれ目気味であることは変わらないが、何故か十五歳ほど若返っていることを差し引いても、以前とは異なっている。

共通点がないこともないし、印象もそう違わない。

これは確かに“自分”だ。

だが、“日本人”ではない。

地球の、日本の首都で生まれ育った自分は、もういないのだ。

二十八の歳まで泣き、笑い、苦しみ、喜び、生きてきた自分は、もう……。

葉月は自分が死んだと悟った時よりも、遥かに衝撃を受け動揺していた。

かじりつくように姿見にすがりつき、己の面影を探し見つめる。

高ぶった気持ちのまま、姿見に爪を立てた。

甲高い、耳障りな音が響く。

動揺は怒りに変わっていた。

葉月は姿見を乱暴に退け、エルフィムと名乗った幼女をにらみつける。

たれ目気味の目がつり上がり、冷たい空気をまき散らしていた。

「説明を……して下さるのでしょうか？」

怨念のこもった声で葉月が問いかけると、エルフィムは超然たる態度でうなづいた。

「もちろんだとも。葉月。だが、出来ればジークにも一緒に聞いて

もらいたい」

そう言つて、エルフィムは呆然と鏡を見つめている少年に目をやる。「葉月の方は年齢、髪や瞳の色、そして多少顔立ちを変えたくらいだが、彼はかなり姿を変えねばならなかった。その衝撃たるや、あなたの比ではないだろう。少し、待つてやつてはくれぬか？」

葉月は高ぶつた気持ちを抑えるため、深く息を吐いた。

正直、今すぐに問いたしたい。

襟首掴んでも、だ。

だが、確かに自分よりも遥かに衝撃を受けている少年の姿を見てしまつては、待たないわけにもいかないだろう。

葉月はもう一度深く息を吐いて、うなづいた。

「分かりました。待ちます」

「すまぬ」

葉月はゆるゆると首を振る。

信じられないようなことが連続して起こっている。

これから聞かされることも、きっと受け入れがたいことばかりだろう。

けれど、信じ、受け入れなければならないことは、本能的に分かつていた。

エルフィムは、嘘を言わないだろうということ。

葉月は“師岡葉月”という存在の消失を悼み、静かに目を閉じた。

何とか現実を、今の己の姿を受け入れたらしい少年は、その歳に似つかわしくない精悍な顔つきをしていた。

己の痴態を恥じているのか、その視線はうつむき気味だったが、焦げ茶の瞳は落ち着きを取り戻している。

鞘に納められてはいるが、その本質は刀剣の類だろうと、葉月は少年の印象を修正した。

彼女も少々特殊な家に生まれ育ったので、人を見る目にはそれなりに自信がある。

葉月の視線に気づいたのか、少年と目が合った。

葉月はおつとりと微笑んだ。

元々、顔立ち自体が柔和なため、見る者を安心させるような笑顔だ。少年は驚いたように目を瞬いたが、やがてにこりと笑ってうなづいた。

二人が自分を取り戻したことを確認し、エルフィムが口を開いた。

「長い話になる。立ち話も何だ。茶でも飲みながら聞いて欲しい」  
エルフィムがそう言った瞬間、二面の姿見は姿を消し、代わりに三脚のイスと一卓のテーブルが現れ、テーブルの上にはティーセット一式と皿に盛られた焼き菓子が出現した。

誰の手も触れていないのに、こぼこぼとティーカップに茶が注がれる様子は奇妙の一言だったが、エルフィムは何でもないような顔をして二人に席につくようにうながした。

何とも言えないような顔をしつつ、二人は席につく。

そして、うながすようにエルフィムの顔を見つめる。

二人の目には、事態を受け入れようとする、強い光があった。

その目にこの人選は間違いではなかったと、エルフィムは珍しく安堵した。

そしてエルフィムはゆっくりと語り出す。

ここがどこなのか、葉月たちは何であるのか、そして何をなして欲しいのかを。

それをまとめると、おおそは次のような話だった。

世界は一つではない。

それはいかなる世界の住人の間でも一度は語られ、しかし実証されていないことだった。

しかし、それは真実である。

世界は“神”と呼ばれるモノたちが創造する。

幾多もの世界があり、通常はそれぞれ干渉せず、交わることもない。だが、中には偶発的に、もしくは意図して交流が行われることがある。あった。

前者では葉月の生まれた場所では“神隠し”と呼ばれる現象により、他の世界へと迷い込んでしまうことが挙げられる。

その場合、“神”と呼ばれるモノは干渉しない。

葉月たちが該当するのは、後者だった。

ごくごく稀にだが、それぞれの世界を創造した神々は交流するのだという。

特に創造した世界が安定せず、歪みが現れるような未熟な世界の創造主は、他の神々に助言や手助けを求めることがある。

エルフイムが創造主の支柱である世界も、そのような不安定な世界の一つだった。

世界は神々によって、便宜上名がつけられており、この世界は<混沌なき箱庭>と呼ばれている。

不安定であるのに“混沌なき”とはいかにも皮肉が効いているようだが、その理由をエルフイムは説明しなかった。

また、葉月が生まれた世界は<神話の向こう側>、ジークが生まれた世界は<猛る牙>と呼ぶのだそう。

ところで、神という存在は、一般的に親切ではないし、勝手なものである。

＜混沌なき箱庭＞の創造主たちが安定した世界の神々に助言を乞うたが、有用な助言を与えてくれたのは、ほんの一部の神だけだった。その一部の神々にしても、多くは語らない。

ただ、「他の世界から住人を移し、混ぜてみたらどうか」と言った神がいた。

そんなに多くはいらない。

数十年か数百年に一人か二人で十分だろう。

あまりに小さな一滴。

大海に混ぜたところで劇的な変化はないだろうが、長く続ければ面白いことになるう、と。

エルフイムたちはその提案を受け入れた。

そして、協力してくれる神々の世界から死んだ者の魂を譲り受け、＜混沌なき箱庭＞の住人に創り変えて下ろしてきた。

いつしか、そのような者たちのことを＜世界の落とし子＞と呼ぶようになっていた。

その試みは、長く長く続けてきた。

気の長い神々が長く、と思うほどに。

しかし、目に見えた効果は現れない。

それでもずっと続けてきて、これからも続けていくつもりだとエルフイムは言う。

1・<世界の落とし子> 2・2

「それで、私たちに何をしろというのですか？」

エルフィムが一息ついたところで、葉月が問いかけた。

自分たちが呼ばれた経緯はなんとなく掴めたが、肝心のこれからのことが分らない。

一番知りたいことはそれだというのに。

焦れる葉月に目を細め、エルフィムは冷めかけた茶を一口飲んで、その問いに答える。

「思うがままに生きて欲しい」

「え？」

ジークがいぶかしげな顔で尋ねる。

「何かをしる、というのではないのですか？」

「だから、思うがままに生きる、と言っている」

今度はサクサクと焼き菓子をはおばって、やや投げやりな様子でエルフィムは言った。

「正直なところ、そなたらが具体的に何をすれば世界が安定するか、吾にも分らぬ」

「そんな無責任な」

「仕方なかるう。分つておればこのように苦勞はせぬわ」

開き直った態度で言われては、二の句が継げない。

本当は責任を追及したいところだが、見た目が幼女だけに、首を絞めるのもためらわれる。

葉月とジークは顔を見合わせた。

お互いの顔には、呆れの表情が浮かんでいる。

それを見たエルフィムは、むっとした顔で言った。

「しかし、吾とて今まで何も学ばなかったわけではない。一人で世界に送り込むと、えらく苦勞したり精神的に病んだりする者もいたのでな、ここ二、三百年は二人一組で送り込むことにしている。そ

の際、相性も重要だということも学んだ。分けてもらう魂も、ちゃんと考えて発注しているのだ。あと人の寿命は短いからな。元の世界で死んだ時の年齢がどうであれ、体は健康な十代半ばから後半に創り変えることにしている」

エルフィムの言葉に困惑の表情を浮かべたのは、ジークだった。

ちらりと葉月の方を見てから口を開いた。

「こちらの方は十二、三に見えますから、その条件に該当しなくもないですが、俺はどう見ても十かそこらなのですが……」

「うむ。それについては二人に謝らなければ、と思っていたところだ。正直に言う。久しぶりのことで加減を間違えた。すまぬ」

まったく謝る態度ではなく堂々と言い放ったエルフィムに、葉月が半眼でにらみつけた。

「つまり……手違いだと？」

「その通りだ。本当ならジークは十五くらいにしようと思っていた。葉月は十八くらいだ。あまりに小さい子では、生き抜くのに苦労するからな。だが、まあ、なってしまったものは仕方あるまい。そのままでも、そなたたちなら何とかなるだろう、たぶん」

適当なことを言うエルフィムに、葉月の肩がぐくつと落ちた。

ジークも苦笑いを浮かべている。

神は一般的に親切ではなく、勝手な存在である。

エルフィムも、その一般から逸脱することはない神の石柱だった。

## 1・＜世界の落とし子＞ 3・1

自分ではあるが、自分ではない体。

一度死して、別の体に生まれたのだから、これも一種の生まれ変わりというのだろうか。

この世界で赤子から育ったわけではないので、エルフィムが言うように、創り変えられたとする方が相応しい気もする。

荒唐無稽な話ではあったが、こうして自分の身に起こってしまったては信じる他ない。

たとえ、それが適当なことを言う異世界の神の仕業だったとしても……。

慰めと言え、そんな一見ややっこしそうで、その実投げやりな運命が降りかかったのは自分だけではなかった、ということくらいだろう。

同病相哀れむ、というヤツかも知れない。

葉月としては、もう一度生きるチャンスを得たと喜ばしいのか、不安定で未熟な異世界でまた子供からやり直さねばならないことを憂えばいいのか、微妙なところだった。

葉月がどう思おうと、事態は変わらないのであるが、そこは心意気の問題である。

「それはまあ、さておき、＜混沌なき箱庭＞に降りるにあたって、注意しておきたいことがある」

さきほどまでと打って変わって真剣な面持ちで、エルフィムが言う。脱力していた二人は、背筋を伸ばし次の言葉を待つ。

「そなたたちにはこの世界に良い影響を与えてもらいたい、それは、あくまで＜混沌なき箱庭＞の住人として、だ。むやみやたらに自分たちが＜世界の落とし子＞だと吹聴せぬことだ。それではせっかく体を創り変えた意味がない」

その忠告にジークと葉月がうなづく。

「ご安心ください。言うつもりはありません。いきなり前世は異世界人などと言えば、怪しまれることくらい分ります」

「ええ。その通りです。頭がおかしいと思われるのはごめんですから」

二人の言葉にエルフィムの顔が微かに歪む。

しかし、それが何かを読み取る前に、エルフィムは先ほどと同じように真面目くさった顔で続けた。

「一応、設定も考えて手は打ってある。そなたらは義姉弟だ」

「「ぎ、義姉弟……？」」

「うむ。葉月の父はくガヴィトラ>という都市で成功した商人であった。だが早くに妻を亡くし、忘れ形見の一人娘を育てていたが、運命的な出会いをした女性を後妻にめとることにした。それがジークの母だ。育った境遇が違うとはいえ、四人は本当の家族となり穏やかな毎日を過ごしていた。だが、幸せな日々は長くは続かなかった。両親がそろって落石事故に巻き込まれて死亡したのだ。悲しみに暮れる姉弟。しかし、悲劇はそれだけではなかった。後見人となった葉月の叔父が、遺産を独り占めするために二人を屋敷から追い出したのだ。一人娘として箱入りで育てられた姉と、強くたくましく生きてはきたがまだ幼い弟。ああ、なにゆえ運命とはかくも残酷なものであるのか。さア、助け合いながら荒野をさすらう二人の運命はいかに」

だんだん興が乗ってきたのか、なぜか最後は講談調に締めくくられた。

見台を叩く張扇はりせんの音まで聞こえそうだった。

どうだと言わんばかりに堂々としているエルフィムに、葉月は頭を抱えた。

「な、なんてベタな……」

ベタだ。

ベタ過ぎる……。

ベタ過ぎて怪し過ぎる。

神に対する敬意など、それこそ異世界へ吹き飛ばされる勢いだ。もともと信仰心が厚いわけではなかったが、彼岸や盆には墓参りに行き、正月には初詣へ厄年には厄払いと、生家が古い家であることもあってそれなりに信心は持っていたのに、何か大事なものを台無しにされた気分で葉月は脱力した。

同じく呆れているだろうジークの方を見ると、

「なるほど、それなら似てない二人が一緒にいても怪しまれないですね」

「うむ」

しきりに感心している様子のジークに、尊大にうなづくエルフィム「ちよつと待って、ジークさん。本当にそう思います？」

まるでいちご大福だと思って買った栗饅頭だったような気持ちで葉月が問いかけると、ジークはいい笑顔で答えた。

「はい。さすが神様ですよ。よい設定だと思います」

「こら、葉月、ジーク、二人は義理のとはいえ、姉弟なのだ。そのような他人行儀な話し方でなんとする」

エルフィムの言葉に浅黒い頬をかすかに朱に染めるジーク。

「はい。ええと、何と呼べば良いのでしょうか？」

「ちよつとジークさん。本気ですか？」

エルフィムが余計なことを言う前に慌てて割って入った葉月に、ジークは照れたような、それでいて寂しそうな笑みを浮かべる。

「すみません。でもちよつと嬉しくて」

「嬉しい？」

「はい。俺は戦災孤児だったんです。養父に拾われましたが、きよ

うだいというものには縁がなくて……憧れていました。だから義理とはいえ、姉が出来ると思ったたらつい嬉しくて……。すみません、葉月さんのお気持ちも考えないで。そうですね、俺なんかが弟では、ご迷惑になりますね……」

その自嘲的な笑みが痛々しかった。

冗談や自虐趣味で言っているのではなく、本当に自分にはその資格がないと思っている笑み。

子供の顔に浮かべるには、相応しくない表情だ。かお

そんな顔をさせてしまった自分に、葉月は唇を噛んだ。

「……ごめんなさい。ジークさんが嫌いとかダメとか、そういうわけではないんです。ただ……」

言葉がそこで止まった。

何と言って良いのか分からない。

それなりに社会人経験も積んできたが、相手にこんな表情をさせてしまったことなどなかった。

相応しい言葉が出てこない。

誤魔化して、笑いにして良いものではなく、さらりと大人の対応をしてみっけてはいけないとは分かっているのに……。

重苦しい空気が漂う中、口を開いたのはエルフィムだった。

「ふむ。出会って間もないのだ。お互いを理解する時間が必要であったな。吾が先走った。すまぬ」

きつちりと頭を下げた後、顔をあげたエルフィムは、真剣な眼差しで葉月たちを見つめる。

「だが、覚えておいて欲しい。この世界でいくら信の置ける者が出来たとしても、そなたたちは異質だ。本当の意味で支え合い、分かり合うことが出来るのは、お互いのみだということを。他人を信じるといっているのではない。信じ、信じられ、裏切り、裏切られ、愛し、愛され、憎み、憎まれ、笑い、泣き、不幸を嘆き、幸せを噛みしめて欲しい。無様に気高く、潔く意地汚く、賢くも愚かに一生懸命に

生き抜いて欲しい。そなたたちの体は＜混沌なき箱庭＞のもの。だが、心までそうなる必要はない。むしろ、なつてもらつては困るのだ。そなたたちは＜世界の落とし子＞。異質にして異端。それゆえに価値がある」

葉月もジークも、エルフィムに圧倒されていた。

ふざけて適当なことを言つても、相手は神だった。

その視線に射抜かれて、二人は目をそらせない。

そんな二人にエルフィムは、幼女の姿に似つかわしくない艶然とした笑みで言い放った。

「吾を、失望させてくれるな」

次の瞬間、葉月とジークの姿は消えていた。

イスやテーブルの姿もなく、どこまでも続く柱の神殿に、幼き姿の女神がただ一柱、たたずんでいる。

広く、空虚な空間に、ぽつりと小さな声が響いて消えた。

「葉月、ジーク。この世界を……頼む……」

＜世界の落とし子＞たちは、こうして＜混沌なき箱庭＞に落とされたのだった。

気が付くと、葉月とジークは夕焼けに染まる荒野の真ん中で立ち尽くしていた。

つい一瞬前まで白い神殿にいたはずなのに、地平線に消えゆく赤い太陽に照らされて呆然とする。

自分たちの姿を見回すと、着ているものは白い貫頭衣から、フードのついた外套がいうをまとった旅装に変わっており、背中には背囊はいのうを担いでいる。

腰の水袋にはたっぷりとした量の水が入っていた。

それは葉月もジークも同じだったが、その他に葉月は胸までの長さの杖を持ち、ジークの腰には二振りの短刀が挿さっていた。

それらの装備を確認した後、葉月は周りをぐるりと見回した。

「360°。見渡す限りの荒野……ね。あの女神様、相当なドSじゃない」

「ええ。ですがまったくの非情というわけでもないでしょう。野たれ死んでしまつてはそれこそ意味がありません。よく見ると轍わだちが微かにですが残っています。一応、街道なのでしょう。これをたどれば街につくはずですよ。それに食料は節約すれば十日は持ちそうです。水袋に浄化石も入っているようですし」

背囊の中身をのぞいてジークが答える。

「浄化石？」

聞きなれない単語に、葉月は水袋の中身をのぞきこんで尋ねた。

「浄化石って何ですか？ いえ、なんとなく言葉の意味から推測は出来そうです」

「ええ、言葉の意味そのままの石です。生水はお腹を壊しますから、普通はこうした浄化石を入れて浄化するんです。旅の必需品なんですけど、旅されたご経験はないですか？」

「旅の経験はありますけど、こうした旅をしたことはないですね。」

それに浄化石というのは、私の住んでいた世界にはないものだと思います。もしかしたら私の住んでいた世界より、ジークさんが住んでいた世界の方が、文明的にこの世界に近いのかも知れませんか」「ああ、そうかも知れませんが、住民の姿はだいぶ違うようです。毛がなくて肌がつるつるするのもそうですが、牙も爪もないとなると落ち着きません」

やはり慣れないのか、ジークは自分の頬をさすりながら苦笑する。

「失礼ですけど、毛皮・牙・爪と言いますと……」

葉月が聞きにくそうに水を向けると、ジークはあっさりうなづいた。「はい。獣人です。俺は黒豹の一族の出身らしいです。が、お話はちよつと置いておいて、野宿の準備をした方がよさそうです。日が沈みます」

ジークが目を細めて地平線の彼方を見やった。

葉月がそれにつられて地平線の方を見ると、確かに太陽は半分以上沈んでいるようだった。

「分かりました。とはいえ、申し訳ないのですが、私は野宿の経験もないんです。どうしたら良いか教えてもらってもいいですか？」

「ええ。とりあえずは俺がやるので、やり方を見ておいってください。とりあえず、火をおこしましょう」

1・＜世界の落とし子＞ 4・2

そう言つてジークは倒れた灌木かんぼくの、細く枯れた枝をいくつか拾い集める。

ジークの背囊の中には鉋なたがあつたらしく、それを取り出して太い枝を伐り始めた。

「葉月さんはその枯れ草を集めてください。いきなり枝には燃えないので火種にします」

手際よく太い枝を伐りながら、ジークが指示を出す。

「はい」

そういえば中学生の頃キャンプでたき火をする時、新聞紙なんか火を付けてから薪に移したんだっけ？ と遠い記憶を思い起こしながら、葉月の背囊の中に入っていた小型の鎌で枯れ草を刈っていく。勢いあまって足を切らないようにだと、枯れ草で手を切らないようにだとか考えながら作業したため無駄に時間がかかったが、なんとか必要そうな量を集めることが出来た。

ジークが集めた薪を組んでいるところへ持つていく。

「これくらいで大丈夫ですか？」

「はい。十分ですよ」

につこり笑つてジークは火口箱ほくちばこから火打石と火打金ひうちがねを取り出して、カチツカチツと打ち合わせた。

火花が散り、火花が枯れ草に落ちる。

それに息を吹きかけると、火がおこった。

手慣れた様子で火をおこす姿に、葉月は一緒に落とされたのがジークで良かったとエルフイムの選択に感謝した。

相性も考えて選んだというが、性格だけではなくスキルの相性も考慮したのだろうか。

いきなり荒野に放り出されて落ち着いていられるのは、ジークがまとう旅慣れた雰囲気があるからだ。

これがもし自分と同じ日本人だったとしたら、たとえアウトドアに精通している人間でも火打石で火を起こせる人間はどのくらいいるのだろうか。

きつとあまり多くはないだろう。

ライターやマッチがあれば十分だからだ。

葉月にしても、火打石というのは石同士を打ち合わせて火花を出す  
と  
思  
っ  
て  
い  
た  
く  
ら  
い  
だ。

ジークによると火打石同士を打ち合わせても火花は出るらしいが、  
火打金と呼ばれる木片に金属片を組み込んだものに火打石を打ちつ  
け  
た  
方  
が  
よ  
く  
火  
花  
が  
出  
る  
ら  
し  
い。

この世界で生きるには、必要となる知識だ。

葉月があれこれ尋ねても、ジークは嫌な顔をせず答えてくれる。

足手まといな上に面倒をかけて申し訳ないが、早く覚えるには仕方が  
な  
い  
こ  
と  
だ  
っ  
た。

せめて次からは出来るように手順を頭に叩き込んだ。

太い薪に火が移る頃には、辺りはすっかりと闇に染まっていた。ばちばちと薪がはぜる音がする中、干し肉を枝に挿してあぶる。

干し肉というとRPGなどでもお馴染みの保存食だ。

少しわくわくする。

あぶる前の干し肉はかちこちで、そのままかじったら歯が悪くなりそうだった。

保存食は他に堅く焼いたパンのようなビスケットのようなものや、木の実、チーズのような、でもちよつと違うようなものなどだ。

あと意外にも漬物なんていうものもあった。

「これが荒野ではなくて山や森だったら、あと鍋があったらもつとちゃんとした食事が出来たんですけど。堅焼きパンはスープに浸して食べると美味しいんですよ」

ジークは少し残念そうだった。

「果物や野菜を食べないと、壊血病や脚気になるんでしたっけ？」

本か何かで読んだ知識を思い出す。

両方とも死につながる病だ。

大航海時代の壊血病は有名だが、白米中心でおかずを食べない食事をしていて江戸では脚気で死亡する者も多かったという。

あの皇女和宮の死因も脚気によるものだったか。

葉月の眉間にしわがよる。

ジークも難しい顔をする。

「そこは漬物があるので大丈夫だと思いますけど、それよりも食料が尽きる前に街へ着けるかの方が問題です」

「節約すれば十日分ということは、だいたいそれくらいか、もしかしたら十二、三日くらいかかるかも知れませんか。轍が残っているとはいえ、どちらの方向の方が近いかは分かりませんし」

「そうですね……あ、葉月さん、干し肉はそろそろ食べても良さそ

うですよ」

「ああ、ありがとうございます」

手渡されたあぶった干し肉は熱そうだが、美味しそうだ。火傷に気をつけながらかぶりつく。

肉の味が凝縮している上、塩以外にも香辛料がついているのか、なかなか美味しい。

ジークも顔をほころばせてかぶりついている。

「これは良い干し肉ですね」

「ええ、美味しいです」

葉月とジークはしばし無言で咀嚼そしゃくを続けた。

薪のはぜる音だけがぱちぱちと響く。

太陽が沈んだ夜の荒野は冷える。

暖かいたき火の火が二人の体を温めていた。

その火を見つめながら、葉月がぽつりとつぶやく。

「不思議なものですね」

「え？」

「私もジークさんも、別々の世界で生まれたのに、今はこうして一緒にご飯を食べているなんて」

葉月がおつとりと笑いかけると、ジークも微笑んでうなづいた。

「はい。不思議です」

「あの女神様が言うことも一理あると思い直したんですけど……やっぱり敬語はやめにしません？ 私たち、運命共同体でしょう？」

葉月の提案に、ジークがちよつと困ったような顔をする。

「葉月さんが俺に敬語を使わなくても、もちろん構わないんですが、俺の敬語はくせなんです。養父が誰に対しても敬語を崩さない人で、真似している内に染みついてしまいました」

「そうなの。私だけ敬語を使わないのも、何か違和感があるんだけど」

「すみません。その代わりと言っては何ですが、ねえさんと呼んでも良いですか？」

ジークはいたずらっぽい笑みを浮かべた。

葉月は面食らったような顔をして、目をぱちくりする。

が、次の瞬間には、笑みを浮かべて、右手を差し出した。

「いいよ。出来の悪い姉だけど、よろしくね」

ジークがその差し出された手に戸惑っていると、

「ああ、握手っていうの。挨拶みたいなものだよ。右手を出して」  
葉月がぎゅっとジークの右手を握る。

「改めて。これからよろしくね、ジーク」

「はい。こちらこそよろしくお願いします。……ねえさん」

ぎゅっと握り返して、ジークが照れたように微笑む。

その手はとても温かった。

七日が過ぎた。

ジークはちらちらと斜め後ろを歩く葉月に目をやる。

葉月はたれ目気味の目を細め、げっそりしている。

杖にすぎるようにして歩く姿は、亡者のようだった。

「ねえさん……休憩しましょうか？」

心配げに振り返るジークに、葉月は首を横に振った。

「大丈夫。さつき、休んだ、ばっかり、じゃない」

息は途切れ途切れだが、声は案外しっかりしている。

しかし、ジークは適当な灌木の下に葉月を引っ張っていき、無理やり座らせた。

葉月はむっとした顔でジークを見上げる。

「大丈夫って言ったじゃない。私のせいでたくさん休憩しているから、全然進んでないんだよ。大丈夫だから、先に進もう」

「大丈夫そうに見えないです。旅慣れてないのは仕方ないでしょう。無理して倒れる方が大変ですよ」

葉月は反論しかけようとして、止めた。

あまりに子供っぽ過ぎるからだ。

どうも調子が狂う。

精神年齢が肉体年齢につられていようだ。

疲労がたまっている所為だろう。

よく考えなくてもジークの方が正論なので、大人しく体力の回復につとめることにする。

颜色が悪いのは、固い地面の上で寝ることに慣れていないので寝不足気味な上、一日中歩き通しの旅で出来たママが痛いせいだった。

最初の頃は歩くのが速いジークに無理をして合わせていたせいもあるかも知れない。

意地など張らず、最初はゆっくり歩いてもらえば良かったのだろう

が、自身の能力を過信していた葉月のミスだ。

ぐったりと木に寄りかかって目を閉じる葉月の横に、ジークが腰を下ろす。

その気配を悟って、葉月が目を閉じたままつぶやく。

「情けない姉でごめんね。ジークはもっと早く歩けるのにね。体力には自信があつただけだなあ」

「謝らないでください。俺は慣れているだけです。徒歩で旅するには、それなりにコツがあるんです」

「……ありがとうね」

「姉を気遣うのは、弟として当然のことですよ」

本当に当然だと思っている調子で、ジークが言う。

ありがたいと同時にやはり申し訳なくなるが、謝るなど言われているので話題を変える。

「それにしても、徒歩の旅って大変なのね。こういう荒野は四輪駆動車で気持ちよく駆け抜けていきたいわあ」

本当は黙って休んでいれば良いのだろうが、ここでの娯楽は話すことくらいしかないのだ。

歩いている間は無言なので休憩中くらいお喋りしたい。

ジークもお喋りな方ではないが、話すことが嫌いなわけでもないの  
で普通に会話が始まった。

「ああ、この間聞いた自動車とかいう乗り物の一種ですか？」

「そう。あれは速いよ。多少道が悪くても大丈夫だし。なにしろ楽」

「俺は騎竜がいいです。あれは足が速いですし、泳ぎも上手いので旅に重宝する生き物なんです。気性が荒いのが玉に傷ですが」

「へえ。竜かー、すごいなあ。ちょっと乗ってみたい」

「竜と立派な名はついていますが、大きなトカゲですよ。俺はその自動車というのがどういう仕組みで動いているのか興味ありますね」

「えー、確かガソリン……燃える水みたいなのを燃やす勢いで、エンジン……エンジンを……説明したら良いんだろ……。ごめん、私も仕組みはよく分からない。あれって専門家が作るもので、

一般の人は使い方を知っただけなの」

「そうなんですか……」

葉月も運転免許はとっていたし、普通に運転していたのだが、その仕組みを説明しろと言われると難しい。

そう考えると、今まで自分が便利だと思って使ってきた機械の数々は、なんとなくこういうものか知ってはいたけれど、ほとんど仕組みを知らないのだ。

それでも普通に暮らしてしまうので、知る必要なんてなかった。

しかし、ジークの残念そうな声を聞いてしまうと、もうちょっと興味を持っておけば良かったと後悔する。

それからもしばらくお互いの世界のことなど、たわいもない話を続けて、そろそろ先に進もうかと立ち上がりかけたその時、とてつもない悪寒に襲われて葉月とジークははじかれたように嫌な気配がする方へ顔を向けた。

最初は何も見えなかったが、先に“それ”に気が付いたのはジークの方だった。

「なんですか……あれは……」

ジークが呆然とつぶやく。

葉月もじつと目をこらし、見えた。

“それ”は黒い半球だった。

地平線に、なにやら黒い半球が出現していた。

突然に、何の前触れもなく。

しかも、それはゆっくりと音もなく拡大しているようだった。

少しずつ半球が大きくなっている。

“それ”が何であるかは分からない。

あんな自然現象は、葉月は見たことがない。

それはジークも同じだった。

ただ、とてつもなく嫌なものだということは、本能的に悟っていた。全身の肌が粟立っている。

「ねえさん、急いで離れましょう。まだ距離があるとはいえ拡大しています。しかも歩く速さよりも早く」

厳しい顔をしながら、ジークが手早く自分の分と葉月の分の背囊をそれぞれの肩にかけた。

速く歩くには、葉月が身軽である必要があつた。

「ごめん」

と短く謝って、葉月は杖をとって歩き出した。

二人は休憩前よりも早足気味に進む。

ジークは二人分の荷物を持っているし、葉月も疲れが完全にとれたわけではなかったが、そんなことを気にしている場合ではない。背中にぞくつとする気配を感じながら、二人は無言で歩き続けた。追いつかれたら、終わりだ。

確証はなかったが、葉月もジークも、こういう時は本能の声に従うことにしている。

時間も惜しいし、あまり見たくもなかったので、振り返らずにもくもくと歩き続けていたのだが、随分歩いたところで、ふっと嫌な気配が消えた。

二人同時に振り返ると、黒い半球が広がっていたのだろう場所が、えぐれていた。

いや正確には、地上部分に見えたのが半球の上半分だとすれば、半球の下半分の大地が消えていたのだ。

それが先ほど休憩していた灌木の辺りまできていたのを見て、背筋が凍る。

「何だったの……あれ……」

呆然とつぶやいた葉月は、腰が抜けたのかへなへなとその場にへたり込んだ。

「わかりません」

ジークは厳しい顔のまま、消えた大地をにらんでいる。

座り込みながらも、ジークと同じく大きな穴のあいた荒野を眺めていた葉月は、エルフィムの言葉を思い出した。

「もしかして、“あれ”はこの世界が不安定で未熟だというのに、何か関係があるのかな」

「だとしたら厄介ですね。俺たちは“あれ”をどうにかしなくてはならないんですか……」

「直接なんとかしろってわけでもないでしょう。“あれ”は人がどうこう出来るもんじゃないよ」

難しい顔で考え込んだジークに、葉月は苦笑する。  
そして遠い目をしてつぶやいた。

「それに“あれ”があるから不安定なんじゃなくて、世界が不安定だから“あれ”がある気がする。これは勘だけど」

荒野に強い風が吹き抜けた。

それでも二人は瞬きもせず、無言で大地を見つめていた。

あの得体の知れない現象は、二人にここが確かに異世界なのだと強く印象づけられた最初のものとなった。

二人が目指した街が見えてきたのは、それから二日後のことである。

## 2・街道での出会い 1 - 1

荒野が終わりかけていた。

不毛の大地から、ぽつぽつとはあるが緑が増えてきている。しばらく歩くと、草原と言って良いほどになった。

そうすると、途端に草の下に轍が消え、道が分からなくなってしまった。

「どうやら、今は使われていない街道のようですね」

地面に膝をつき、道を確かめていたジークが難しい顔をする。

葉月も困ったわね、というように頬に手を当てて、風に波打つ草原を見やる。

「荒野は雨が降らないから、古い轍が残っていたみたいね。道理ですれ違う人もなかったわけだわ」

「向こうに見える山々と太陽の位置で方角は分かりますから、今まで向かっていた方向にそのまま進みましょう」

膝についた草を払いながら、ジークが立ち上がる。

「それしかないでしょうね」

葉月が同意すると、「では」とジークが先に歩き出す。

二、三步遅れて葉月がその後を追う。

何とか調子を取り戻し、既に杖にすがったような亡者ではなくなっていた。

疲れた足を補う杖の使い方が分かってきたし、足の運び方も自然と舗装された道を歩く時とは変わってきている。

ただ、赤茶けた荒野から緑の草原に入ったことにより、草に足を取られたり草に隠れた穴にはまりそうになったりもしたが、ジークの歩いた後をなぞることによって、それらを回避することが出来た。

本当によく出来た“弟”である。

いや、どちらかというと、お姫様を守る騎士のようだろうか。

葉月としては守られて当然と思えるほど神経が太くも鈍くも卑屈で

もなかったので、野宿の準備など積極的に自分ができることをした。ジークは旅慣れた者が慣れない者に気を使うのは当然と言うが、そんなわけがないことを知らないほど葉月は世間知らずではない。

“姉”としての矜持の問題もある。

ジークも一見おっとりとして見える葉月に、頑固で苛烈な一面があることは知っていた。

なので、必要以上に気を使ったりはしない。

エルフィムの設定ではないが、葉月は良家の子女に見えた。運つ葉な話し方をしてはいるが、所作に品があるのだ。

実際、葉月の生家は四百年以上続く旧家なのだという。

葉月曰く、古いだけで荒々しい家柄とのことだが、孤児上がりの傭兵だったジークと比べればそれこそお姫様のような身分だ。

葉月もジークの生まれと生業は知っていたが、態度は変わらない。それが何よりも嬉しい。

生まれを知って、それまで普通に話していた女の顔に嫌悪の表情が浮かぶことなど、数えきれないほど経験してきたジークにとって、葉月は理想の“姉”だった。

## 2・街道での出会い 1・2

お昼に休憩をとり再び歩き出すと、今度は背が高い木が増えてきた。

立派な森である。

そうすると今度は細くはあるが、踏み固められた道に出た。

獣道にしてはやや幅がある。

その道には、新しい蹄の跡が残っていた。

ジークの顔に嬉しそうな笑みが浮かぶ。

「ねえさん、この道をたどれば街につけそうですよ」

「本当。良かった」

葉月もほつとしたように微笑んだ。

やはり道があると歩くのも楽だし、心理的にも安心する。

二人の足取りも自然と軽くなった。

その道をしばらく進むと、今たどってきた道よりも大きな道に出た。どうやらあの細い道は支道だったようだ。

こちらが現在の街道なのだろう。

支道と街道が合流した地点には、立て札が立っていた。

そこに書いてある文字は読めなかったが、大きな矢印が道の西へと伸びる方を指していることから、おそらくそちらが街なのだろう。

二人が手を叩いて喜んでいると、東の方からガラガラという音が聞こえてきた。

何の音だろうと、しばらく待っていると、山羊と羊の中間のような姿をした牛ほどの大きさの生き物が二頭、幌馬車を引いてくる姿が見えた。

いや、引いている生き物が馬ではないので、馬車というのは不適切だろうが、あいにく葉月にはその生き物の名前がわからない。

御者台に座っている中年男性の他に、幌馬車の周りに二人の男たちが足早に歩いていった。

二人の男たちの腰には、剣があつた。

御者台の中年男性の身なりはそれなりに良さそうだったが、剣をはいた徒歩の二人はどう見ても堅気の人間には見えない。

目つきが鋭すぎる。

おそらく、中年男性は商人で、男たちは商人が雇った用心棒か何かだろう。

この世界に来て初めて会う住人だったが、それが善人であるとは限らない。

が、やはり情報は欲しい。話す価値があつた。

ジークはさりげなく、葉月の前に移動する。

幌馬車の男たちは、葉月たちの姿に道行く速度を落としていた。

おそらく、旅姿をした二人の年齢が若過ぎるからだろう。

周りに保護者らしき姿はないのだ。

いぶかしがつて当然だった。

## 2・街道での出会い 1 - 3

葉月たちの前で馬車を止めて、商人がにこやかな笑顔で話しかけてくる。

「こんにちは、お嬢さん方。よいお天気ですね」

「こんにちは。ええ、本当によいお天気で。旅日和ですね」

葉月がおつとりと笑って答える。

ジークは警戒しているのが丸わかりのように、ちらちらと用心棒たちの方を気にしており、用心棒たちも胡散臭そうに二人をじろじろと見ていた。

異様な雰囲気だったが、商人は笑顔を崩さずに続ける。

それを受ける葉月も笑みを浮かべたままだ。

「失礼ですが、どなたか大人の方は一緒ではないのですか？　こんなに可愛らしいお嬢さんとお坊ちゃんだけにするとはい不用心ですね」「ご心配頂きありがとうございます。ですがお気になさらないでください。少し休んでいるだけです」

問いかけに微妙にずれた答えを返す葉月に、商人は心配気な表情を浮かべる。

「おや、そうなのですか。この辺りは賊が出ますよ。お嬢さん方も<ウクジエナ>へ向かっているのでしょうか？　よろしければ一緒にしませんか？」

<ウクジエナ>という名は初めて聞いたが、おそらく街の名なのだろう。

葉月はあたかも最初から街の名を知っていたかのように尋ねる。

まだまだ遠かったらどうしよう、というように不安げな顔で、だ。

「はい。<ウクジエナ>はまだ遠いのでしょうか？」

「いやいや。お嬢さん方の足でも日暮れ前までには着けるでしょう。森の木々が鬱蒼うつそうとしているので城壁も見えませんが、もう少しですよ」

商人の言葉に、葉月はほつとしたような表情を浮かべる。

「それを聞いて安心しました。ご厚意を無下にするのも申し訳ありませんが、私たちなら大丈夫です。どうぞお進みになってください」

葉月は微笑みながら、手の平で西を示す。

商人は良心がとがめるのだろう。

複雑な顔をしていたが、有無を言わせない葉月の微笑みにしづしづと「そうですか」とうなづき、幌馬車を進めようとした。

しかし、そのわずかなやり取りが、商人たちと葉月たちの運命を決定づけた。

最初に異変に気付いたのは、ジークだった。

「ちっ、囲まりました！」

鋭く叫び、二振りの短刀を抜き放つ。

それで道の両脇から殺気が沸き立った。

用心棒の二人もそれに反応して剣を抜刀する。

商人が慌てて幌馬車を進めようとするが、木々の間からわらわらと男たちが飛び出し、行く手をふさぐ。

あっという間に退路もふさがれ、五人は袋の鼠となった。

## 2・街道での出会い 2-1

葉月たちを包囲したのは、むさくるしい髭面の男たちだ。

各々、違った武器を手に行っているが、それなりに統制はとれている。全部で二十人以上はいるだろうか。

どこからどう見ても、盗賊である。

「ねえさん、すみません。用心棒たちに氣をとられて、気づくのが遅れました」

ジークが苦々しい顔で、盗賊たちをにらみつけた。

葉月も固い顔をして、杖を握っている。

「どちらかといえば、幌馬車が標的でしょうね。私たちが足止めしてしまっただから、格好の餌食になってしまったみたい。悪いことをしたわ」

油断なく辺りをうかがってジークが小声で言う。

「突破口を開きます。そこから逃げてください」

「無理ね。人数が多過ぎる。すぐに追いつかれるのが落ちよ。森の中は？」

「伏兵がいるようです。俺たちには土地勘がありません。しかし、あちらにしたら庭のようなものでしょう」

葉月の眉間にしわがよる。

「万事休す、か」

「いえ。ねえさんは俺が守ります。必ず逃がしてみせます」

覚悟を決めた顔で言うジークに、葉月はきっぱりと言い切った。

「馬鹿言わないで。ジークを置いては逃げられるわけないでしょ」

「おおっと、麗しき姉弟愛だなあ。泣かせるぜ」

下卑た笑みを浮かべ、一人の盗賊が前へ出る。

その男だけが皮の胸当てではなく、皮のよろいを着ている。

おそらく、盗賊の頭だろう。

盗賊の頭はにやにやと笑ったまま、手下たちを振り返る。

「野郎ども。商人と用心棒は殺して構わねえが、ガキ共は殺すなよ。売っ払うからな」

その声と同時に、盗賊たちが葉月たちに襲いかかる。

そこにあえて踏み込んだのは、ジークだった。

小さい体を跳躍させ、短剣を振る。

先頭にいた盗賊の首から血しぶきがあがり、崩れ落ちた。

その結果に目をやることなく、次の盗賊の腹に短剣をねじ込み、えぐる。

そのまま右から来た盗賊からの盾にするように、腹を刺した盗賊をそちらに蹴飛ばし、短剣を引き抜いた。

勢い余って、右から来た盗賊の剣が、腹を刺された盗賊の肩に食い込む。

その隙に、右から来た盗賊の喉をかき切って、大きく後ろへと下がる。

その直後、ちょうどジークが先ほどまでいたところに、鉈が飛んできた。

後続の盗賊が投げたものだ。

## 2・街道での出会い 2・2

盗賊たちの間に動揺が広がった。

どこからどう見ても十歳前後にしか見えない子供が、あつという間に自分たちの仲間を三人も殺したのだから、混乱するのも当たり前だ。

商人の用心棒たちもそれなりの手練れなのだろう。

その動揺の隙に、それぞれ一人ずつ仕留めていた。

それでも、十五人は残っている。

しかも、敵は四方にいるのだ。

いくらジークが獣染みた動きで倒そうにも、全ての敵を一边に相手出来るわけではない。

威嚇のため、先ほどとは逆の方向へ駆け出し、また一人倒したところで、背後から盗賊の頭のだみ声が響く。

「用心棒共は囲みやあ何とかなる！ あのボウズは後回しにしろつ。姉の方を人質にとれ！」

「ねえさん！」

ジークは葉月の方へ駆け寄ろうとしたが、斜め後ろからの攻撃を避けて転がる。

そのままの勢いで足払いをかけ、すかさず止めを刺したが、遅かった。

二人の盗賊がにやにや笑いながら、葉月に近づく。

葉月は幌馬車を背に立っていた。

盗賊たちが近づくにつれ、御者台の商人の顔色がどんどん青くなる。しかし、葉月の顔には何も浮かんでいない。

たれ目気味な目は、無表情でも怯えたように見えた。

盗賊たちは勝利を確信していた。

弟の方は獣染みた強さだが、こちらを抑えれば簡単に片がつくと。

その油断が仇となった。

盗賊たちがあと数歩というところまで来た時、葉月が動いた。流れるように杖を構え、盗賊の右肩を突く。

まさか攻撃されるとは思っていなかった盗賊が、驚愕の表情を浮かべてひっくり返った。

葉月はそのままもう一人の盗賊の手を杖で打ち、蹴りを食らわした。右肩を突かれた盗賊は、肩を押さえてうずくまっている。

関節が外れたのだろう。

蹴りを食らわされた盗賊もたたみ掛けるように足払いを受け、無様に転がる。

葉月はその右腕に容赦なく足を踏み下ろした。

骨が碎ける嫌な音と悲鳴は、怒号と剣戟けんげきの響きにかき消された。

手下の二人が無力そうな少女にやられたのをみて、盗賊の頭の顔が怒りでどす黒く染まる。

## 2・街道での出会い 2・3

ジークは更に一人を倒して、葉月の側に寄り、短剣を構えたが、その肩は激しく上下していた。

ジークは確かに獣染みた強さを見せたが、その動きに体が付いていけないのだ。

それは致し方がないことだった。

まだその体に創り変えられて、十日も経っていない。

その前は、今の体とはかなり異なった構造をしていたのである。

背が縮んだせいで視界はまったく違っており、間合いが狭くなった。筋力も落ち、自由に操れるのは短剣のみであったから、その装備に異論はないが、そもそも短剣での戦いなど経験したことがない。

食料よりも水がなくなる方が心配だったので、激しい運動は避けており、短剣を手に馴染ませるまで至っていないかった。

背丈も筋力もそう大して変わっていない葉月とは違うのだ。

爪も牙もない小さな体……。

それがこんなにも無力だとは知らなかった。

ジークの顔が悔しさで歪む。

葉月の心はくじけそうになっていた。

稽古でも多対一の試合は多く行ってきた。

だが、これは試合ではない。

殺し合いだ。

むせ変えるような血の臭い。

吐き気がする。

先ほどだって、敵がやってくるまで動かなかったのではない。

動けなかったのだ。

分かってはいたが、どれだけ甘っころい世界で生きてきたのだろう。

本音を言ってしまうば、今だって逃げ出したい。

泣きわめいて、目も耳もふさいでしまいたい。

杖を持つ手が震える。

盗賊の腕を碎いた足には、その感触が生々しく残っていた。

盗賊を二人も無力化したことに一番驚いているのは、葉月自身だった。

体が勝手に動いたのだ。

二十年以上、体に叩き込んできた結果だった。

だが、心はそこまで強くない。

ジークが側にいることで、かろうじて意識を保っているのだ。

用心棒たちにしても、囲まれて切り結んでいるが、多勢に無勢。

かろうじて致命傷は避けているが、怪我ばかりが増え劣勢だ。

商人は泡を吹かんばかりに震えている。

ジークが五人、葉月が二人、用心棒たちが一人ずつ。

計九人を倒した計算になるが、盗賊はまだ十人以上残っている。

しかも、仲間を倒され、怒り狂っていると同時に、修羅場慣れした盗賊たちからは油断が消えていた。

## 2・街道での出会い 2・4

ジークには三人、葉月にも二人の男たちが襲いかかる。しかも、先ほどとは違い、盗賊たちの連携がとれていた。

ジークは太ももを斬られて転び、短剣の一振りを落としてしまった。困んでいた盗賊がすかさず、その短剣を遠くへ蹴り飛ばす。

なんとか立ち上がり、攻撃を避けて応戦するが、先ほどの動きに比べると明らかに精彩を欠いていた。

葉月も怯える心を叱咤し目まぐるしい攻防を繰り広げるが、袈裟がけの一撃を思わず杖で受けてしまった。

木製の杖が、真つ二つになる。

その隙を盗賊は見逃さなかった。

葉月の腕から血しぶきが飛ぶ。

使えなくなった杖を捨て、半身の構えをとるが、左腕は下がり気味だ。

用心棒たちも、明らかに限界だった。

葉月たちの心を絶望が支配していく。

その時だった。

ぎゃあああああああ。

森の中から複数の悲鳴が聞こえてきた。

明らかに野太い悲鳴は、伏兵の盗賊たちだろう。

しかも、それは一方からだけではない。

右からも左からも、悲鳴が聞こえ、しかもそれらは近づいてきているようだった。

困惑と動揺がその場に広がる。

「何なの……」

呆然とつぶやいた葉月の言葉に、返答があった。

「分かりません。盗賊たちにとっては敵のようですが、俺たちの味

方か、それとも俺たちにとっても敵なのか……」

盗賊たちの注意が左右の森へと向いている隙に葉月の側までやって来たジークは、手慣れた様子で外套の裾を裂き、葉月の左腕に巻きつけ止血する。

「動きますか？」

「ありがとう。神経は大丈夫みたい。ジークは？」

「大丈夫です。動けます」

力強く受け合いながら、自身の太ももにも外套の切れ端を巻きつけ止血した。

その間も辺りを油断なくうかがっている様は、さすがだった。

葉月もジークが落ち着いているのを見て、自分を取り戻した。

まだ体は震えていたが、周りを見る余裕が少し出てきている。

だが、葉月とジーク以外のものは、浮足立ったままだ。

場を支配する、まるで得体の知れない化け物が迫りくるような奇妙な緊張感。

その均衡を破ったのは、森の中から突如飛び出してきた黒い獣……ではなく、浅黒い肌をした長身の女性だった。

## 2・街道での出会い 3 - 1

葉月が獣と見間違えた女性は、血の滴る長剣を手に不遜な笑みを浮かべていた。

ぐるりと周りを見回すと、用心棒たちに向かって陽気な声をかける。  
「おう、キーファン、ロレン。生きてつか？」

「「親分！」」

用心棒たちの顔に喜色が浮かぶ。

親分と呼ばれた女性は、にやつと笑いながら言い放つ。

「お前ら、ひでえ姿だな。もともと男前とは言い難い面だつてのに」  
「ひでえのは親分の方じゃねえですか。こちらら命張って仕事してるつつのに、ねぎらいの一言もねえんですかい？」

「そうですよ、親分。兄<sup>あに</sup>の言う通りだ」

満身創痍でさきほどまで死闘をくりひろげていた用心棒たちが、ぶうぶうと文句の声をあげる。

この場に相応しくない軽口の応酬をしながら、女性は手をひらひらさせる。

「わりいわりい。ご苦労さん。あとは俺にまかせとけ」

そう言うや否や、女性が盗賊の頭目がけて走り出す。呑気なやりとりにばかんと呆けていた盗賊の頭だったが、自分の方へ女性が走ってくるのを見て、慌てて剣を構える。

女性は大雑把に見える動きで、剣を振るう。

盗賊の頭はそれを剣で受けようとして、弾き飛ばされた。

驚愕に見開かれる瞳。

長身とはいえ、女に出せる力ではなかった。

その事実と、長身で浅黒い肌の女性という点、用心棒が女性を「親分」と呼んでいたことから、盗賊の頭は遅まきながら女性の正体に思い当たる。

「てめえ、<テール>の」

しかし、盗賊の頭はその言葉を最後まで言うことは出来なかった。女性の剣が、皮鎧におおわれていない首を斬り裂いた。

血しぶきをあげながら倒れる盗賊の頭の体。

それを見て、盗賊の手下たちが悲鳴を上げながら蜘蛛の子を散らしたように逃げ出す。

が、それを阻むように、森からわらわらと男たちが飛び出してきた。先頭を切って飛び出してきた若い男が、「親分！」と叫びながら女性のもとに駆け寄る。

「勝手に先に行かんで下さい！」

「わりいわりい。でも頭は倒しておいたぞ」

「そういう問題じゃありません！」

「そう固いこと言うな、ヴィリ！。ブノワだって俺の好きにやっていいと言うぞ？」

「ここに副長がいるのなら俺だって文句は言いません！ 副長なら親分の勝手さに臨機応変に対処出来ますからね！ しかし自分で言うのもなんですが、俺はそこまで融通が利かないんです！ 自重して下さい！」

若い男が女性にぎゃんぎゃん言い立てている間に、他の男たちが盗賊たちを倒していく。

中には素直に降伏してきた盗賊もあり、後ろ手に縄をかけられている。

若い男は器用なことに、女性に文句を言いながらも、時折男たちに正確な指示を与えていた。

二十歳前後にしか見えない若者だが、どうやら女性の側近のようだ。十近くも年上の男たちも、若者の指示に素直に従っている。

あらかたの盗賊たちが倒され、捕らえられ、二人の用心棒たちも傷の手当てを受けていた。

## 2・街道での出会い 3・2

葉月とジークのもとにも、やや猫背気味の三十前後の男が寄って来た。

葉月の前に立ち警戒を解かないジークに、男が苦笑する。

「そんなに警戒しないでくれよ。傷の手当てをしようってだけだ」  
ぴりぴりしているジークの肩に手を置き、やや固い顔で葉月が尋ねる。

「申し訳ありませんが、あなた方はどちら様ですか？」

「ん？ ああ。＜ウクジェナ＞の男前軍団、＜テーラン＞と言えば分かるかい？」

男はそれでも通じるだろうというように胸を張ったが、生憎その名は葉月にもジークにも通じなかった。

葉月は少し困ったように首をかしげる。

「申し訳ありません。私たちは＜ウクジェナ＞の人間ではないので……」

「あー、そつか。じゃあ分かんねえかな。俺らは、まあ、簡単に言やあ自警団みたいなモンかね。用心棒の派遣もやつたりするし、めごと収めたりする。こうして盗賊どもふん縛ったりもな」

「そうですか。今回はあの商人さんのご依頼ですか？」

葉月はちらりと、御者台でぐったりしている商人を見やる。

男も同じように商人に視線を向けてから、首を横に振った。

「あの商人の依頼は仕入れの護衛として二人雇っただけさ。＜ウクジェナ＞には十一、公の警備隊があるんだが、広い都市なもんでね。外までには手が回らんのだ。それで我々が市長の依頼を受けて、外の盗賊退治なんかをやったりするんだ」

男はそこで一旦言葉を切って、葉月たちになっこりと笑いかけた。

「納得したかい？ 納得したら傷口を見せてくん。きちんと傷口を洗わんと腐るぞ？」

葉月はちらりとジークの顔を見る。

ジークは先ほどよりは警戒を薄めているようだった。  
どうする？ とは尋ねなかった。

傷の手当ては早い方がよい。

ジークもそれを分かっているの、小さくうなづく。

葉月はおつとりと笑って見せ、頭を下げた。

「では、お願いします」

「おう。じゃあ……」

「俺は後でいいので、ねえさんからお願いします」

今まで黙っていたジークが口を開いた。

口調ははつきりしていたが、顔色は良くない。

血が足りていないのだ。

葉月がそんなジークを見て、「いいえ」と首を横に振る。

「ジークからお願いします。明らかに弟の方が重傷です」

「俺は怪我には慣れています。ねえさんを先に」

「青い顔して何言ってるの。ジークが先です」

お互いが先だと言い争いを始めた姉弟に、男がはあとため息をつく。

「分かった分かった。二人いっぺんに手当てする。それで文句はねえな？」

そう言つて二人を木陰に敷いた布まで連れて行き、座らせた。

近くにいた小男を呼び、傷の手当てを手伝うように言う。

男は「失礼」と言つて、葉月の左腕の袖をざくざくと大鋏で切り開いた。おおはさみ

隣で小男が同じようにジークの右脚の裾を切り開いている。

傷を露わにすると、水袋の栓を抜きながら、

「よく洗わんと腐るからな」

と言つて、たつぷりの水でじゃぶじゃぶと傷口を洗う。

傷口を見た男は、ほっとしたように笑った。

「お嬢ちゃん、良かったな。傷は浅いぞ。これなら縫う必要はねえな」

男はそう言つて、大きい葉を水洗いし、そのまま傷に巻きつけた。大きい葉を止めるために包帯を巻いて、小さな袋から丸薬のようなもの取り出して葉月に手渡す。

「痛み止めと造血効果がある薬だ。飲んでおきな」

「はい。ありがとうございます」

小さな碗に入つた水も渡されて、丸薬を口に入れ水を含んだ。途端に口の中に苦みと青臭さが広がる。

思わず吐き出したくなるのを堪えて飲み込む。

痛み止めというが、成分よりも苦みで痛みが飛びそうだ。

ものすごく濃く煮詰めた緑茶のような……。

涙目になりながら、隣をみる。

ジークの方は、まだ手当てが終わっていないかった。

## 2・街道での出会い 3・3

葉月と違ってジークの傷は深いらしく、絹糸で傷口を縫合している。

小男は手慣れているようでさくさくと縫っているが、麻酔もなく縫われるジークは渡された布を噛みしめて堪えていた。

葉月は終わるまで見守るしかない。

と同時に、この世界の文明について考えを巡らせていた。

自分の傷は水洗いしただけで、消毒していなかった。

葉月は元の世界の職業柄、治療方法にはちよつと詳しい。

これはいわゆる、うるおい療法に近い。

実は消毒しない方が怪我の治りが早いというあれだ。

しかし、幌馬車や武器を見るに、科学的な根拠からではなく、経験則からと考える方が妥当だろうか。

科学は何でも測れる万能のものさしではないことは分かっているが、どうにもその考え方から逃れられない。

あれこれ考えている内に、ジークの手当ても終わっていた。

葉月と同じように丸薬を飲み込む顔は苦しげだ。

しかしその額に浮かんでいる脂汗は、苦みのせいだけではないだろう。

呼吸も荒い。

戦闘で高ぶっていた気持ちが収まってきたので、痛めつけられた体が悲鳴を上げて主張し出したのだ。

葉月が横たわったジークの額の汗を拭いていると、手当てを受ける用心棒二人に声をかけ、商人と話していた親分と呼ばれた女性が、ヴィリーという若者と一緒にこちらへやってくるのが見えた。

女性は近くまで寄ると、猫背気味の男に話しかけた。

「この二人の怪我はどの程度だ？」

「お嬢ちゃんの方は浅いが、ボウズの方は結構深えみたいですぜ。しばらくは安静にしてなきゃなんねえでしょうな」

猫背気味の男の言葉に、女性はふうんと相槌を打つ。

近くで見ると、やはり女性は背が高かった。

筋肉質な身体は澁刺<sup>はっさつ</sup>としていたが、歳は三十前後だろう。

いわゆる美人ではないが、不思議な魅力がある。

女性はにやっと笑うとしゃがみこんで、葉月の目線に合わせた。

「俺はカーサという。お前らは？」

体を起こそうとしたジークを押しとどめながら、葉月が答えた。

「葉月と申します。こちらは弟のジークです」

「葉月にジーク、ね。お前ら、何でこんなところに居たんだ？」

「諸事情で故郷を追われまして……旅をしている途中でした」

「へえ。諸事情ね。＜ウクジェナ＞には伝手でもあんのか？」

「いえ、行く宛はありません」

尋問のようだ、と思いながら葉月はちょっと困ったような笑みを浮かべた。

もちろん意図的に、だ。

実は思ったような表情を作るのは、今の葉月には結構しんどいのだが、鎧のようなものだ。

ジークの手が気遣うように葉月の膝にのばされる。

葉月は安心させるように、その手をぎゅっと握って微笑んだ。

それはどこからどう見ても、お互いに支え合って生きる姉弟の姿だった。

まさかこの二人が十日ほど前に出会ったばかりとは思えない。

その様子を見て、カーサが「ふうん」とうなづいた。

「じゃあ、ウチに来るか？」

「はい？」

「親分！？」

カーサの言葉に葉月が目を丸くし、ヴィリーが「何を言っているんですか！？」と非難の声を上げる。

しかしカーサは意に介さず、まるで良いことを思いついたとでもいうように、笑って言ったのだった。

「行く宛がないんならウチに来ればいい。泣く子も黙り笑っている子も泣き出す、天下無敵の自警集団、戦列の<テーラン>にな」

### 3・獅子と狼 1-1

泣く子も黙り笑っている子も泣き出す悪名高き戦列の<テーラン>の副長であるブノワは、三十代半ばの伊達男である。

甘い顔立ちに無精ひげが野性味を加え、大人の男の色香を漂わせている。

そんな伊達男が荒くれ者が多い<テーラン>で副長をやっているのは、親分たるカーサと<テーラン>が出来る前から知り合いだったということもあるが、その組織運営力が秀でていたからに他ならない。

カーサは確かに親分足るに相応しく、この人の為に働きたいと思わせるだけの魅力があったが、いささか、いや、だいぶ大雑把である。その命令自体も大雑把なので、その命令をかみ砕き、適切な指示に変換する者が必要になる。

それを最も上手く行える者がブノワだった。

その分、一番カーサの気まぐれと勘に振り回されるのも彼である。

今も来客用のソファにふんぞり返って首尾を適当にはしりながら話すカーサに、執務机に肘をついてこめかみを押さえている。

その顔には『どうしようもないな』という諦めの表情が浮かんでいた。

「で、子供を二人拾ったと」

「おう」

得意げな顔で堂々と答えるカーサに、ブノワはわざとらしくため息をつく。

「どう考えても胡散臭いだろう、その二人は」

「胡散臭いっついたら、俺もお前も一緒だろうがよ」

事も無げに笑うカーサ。

確かに<テーラン>に所属する者は上から下まで胡散臭い、というのが世間での評判である。

その胡散臭さの代表が、ここにいる二人だった。

ブノワも「まあな」と自身が胡散臭いことを否定しない。

「二人とも面白いぜ。特に弟の方が面白い」

「キーファンたちの報告によれば、一人で五人も片づけたらしいな」

「ああ、まるで獣のようだったらしい。俺もこの目で見たかった。」

確かに姉を守ろうと立ち塞がっている姿は黒豹って印象だったな」

カーサ自身は何気なく語ったのだろうが、それは正鵠せいこくを射ていた。

ジークは元の世界く猛る牙くでは黒豹の獣人だったのだ。

その侮れない勘でもって、続けて葉月についても言及する。

「姉の方はあれだな。蛇。弟が黒豹だから、白蛇か」

「黒豹と白蛇の姉弟、ねえ。似てないらしいね。本当にきょうだいなのか？」

ブノワの疑問に、カーサも首をかしげる。

「さあ？ どうだろうな。見た感じ血の繋がりはなさそうだが、普通にきょうだいに見えたぞ？」

相反するようなことを平気で言うカーサに、ブノワは苦笑する。

「どっちなんだ？」

「別に血の繋がりだけが絆じゃねえだろ」

「そうだな」

カーサがさらりと言ったことに、うなづくブノワ。

が、そこで話の本筋を思い出し、軌道修正を図る。

「いや、聞きたいのはそこじゃなかったな。カーサ、どうして拾ったりしたんだ？ 確かにその子たちは強いのかも知れないが、まだ子供だ。しかも弟の方の怪我は結構ひどいそうじゃないか。治つてもその獣染みた強さを発揮出来るとは限らんぞ？」

「大丈夫だろ」

「根拠は？」

「勘」

臆面もなく言い放ったカーサに、「分かっていたけどね」とブノワは苦笑する。

「お前の勘は女の勘に野生の勘まで足されているからな。よく当たる」

「まあな。俺の勘があゝの二人を側に置いておけって言ってるのさ。そうしたら、きつと“面白いこと”になるぜ？」

「お前の言う“面白いこと”は、大抵たいへんなことだからな。収拾をつけるのはどうせ俺だろ？」

「頼りにしてるよ。副長」

「へいへい。せいぜい頑張らせて頂きますよ、親分」

にっとう笑うカーサと、やれやれというように小さく両手をあげて笑うブノワ。

確かに葉月とジークを拾ったことにより、“たいへんなこと”になるのだが、二人はまだそれを知らない。

カーサなどは、たとえそれを知っていたとしても二人を拾っただろう。

カーサにとつて、それはとても“面白いこと”だからだ。

ブノワがそれを知っていたのなら、二人を拾うことに反対しただろう。

だが、最終的には受け入れたに違いない。

何故なら、ブノワも結局は“たいへんなこと”を面白がれる人間だからだ。

副長としてのポーズとして、組織の益にならないことには反対して見せねばならないが、結局はカーサに“説得される”に違いなかった。

「とりあえず、その二人に会ってみたいな」  
ブノワがにやつと笑う。

なんだかんだ言いながら、興味津津なのだ。

カーサもにやにや笑いながら、盃の酒をあおる。

「きつとお前も気に入るよ。だが、会いに行くのは明日にしとけ。

弟の方は明日も熱にうなされているかも知れんから話を聞くな姉

の方だ。あつちの怪我はたいしたことねえが精神的に参つてる」

「旅の疲れか？」

「それもあるだろうが、血にあたつたようだぜ。何せ辺り一面血の海になつたからな。弟はともかく姉の方はああいうのに慣れてねえみたいだぜ。姉が倒したヤツは肩を外されたのと腕を折られたのだ。やろうと思えば首の骨もへし折れただろうにな」

くつくつくと愉快そうに笑うカーサに、ジークは器用に片眉をあげてみせた。

「ちぐはぐな姉弟だな。なるほど、明日会えるのが楽しみだ」

そう言つて、ブノワは本当に明日が楽しみで仕方ないというように笑みを浮かべたのだつた。

### 3・獅子と狼 2 - 1

葉月が生まれた家は、いわゆる旧家と呼ばれる類の家柄だった。

その発祥は戦国時代後期。天下分け目の大合戦よりも少々前辺りだ。どちらの陣営につくべきか迷い、はたまた自らの天下統一という野望を捨て切れず、虎視眈眈と覇権を狙う者もいる中で、諜報活動や破壊工作が出来る者が重宝された。

素破すっぱや乱破らんぱと呼ばれる者たち、いわゆる忍者だ。

忍術と呼ばれるものには体術も含まれるが、葉月の家の先祖はどちらかというと体術に秀でていたらしく、徳川幕府が太平の世を築くと武術を教えることを生業なりわいとし、現代では古武術の道場を開いている。

発祥以来、他の武術も積極的に取り入れ、太平の世もなんのそのと実戦的な武術として昇華していった道場の門弟には、財界や政界の息子も多かった。

一般的にはあまり有名ではないが、師岡流宗家もろおかといえはヤクザさえ避けて通るとまで言われている。

葉月はそんな家系の宗家の長女として生まれた。

長女とはいえ、兄も弟も妹もあり、跡取りとして期待されたわけではない。

だが師岡の家に生まれた者は男女問わず、厳しく稽古をつけられる。今でこそ、そこそこ強くはなったが、二十年以上やっていればこれくらいにはなるだろう。むしろ、二十年以上やっていてこれだけしか強くなれなかったのは、才能がないとしか言いようがないと葉月は思っている。

師岡流は無手（武器を持たない体術）の他に、剣術、薙刀術、杖術、弓術を教えるのだが、葉月は苦手なものがなかった代わりに突出して得意なものもなかった。

宗家の人間はそれぞれをある程度やって、向き不向きを見極めて得

意な道を究めるというのに、いわゆる器用貧乏であった葉月はどれも中途半端だった。

しかしそんな葉月にも活路はあったもので、武術においては覇氣がないだのと見られがちだったたれ目も、駆け引きや交流には役に立った。

おっとりとしたお嬢さんに見える外見に、ぴりつとした辛さを混ぜた話術は、意外性を持って興味を引き出しやすかったのだ。

葉月は師岡家の外交担当としての地位を固め、次期当主である兄を補佐する道を選んだ。

外交担当としての地位を目指してからは、茶道や華道、書道に日本舞踊に英会話と、他のお稽古ごとに精を出してきたせいで、師岡本来の武術に関しては疎かになりがちだった。

もちろん毎朝早朝稽古に参加し、時には師範代として稽古をつけることもあったが、強さを追及することはなくなっていた。

その結果が、これだ。

寝台に横たわるジークの浅黒い肌が赤みを帯び、息は荒くて浅い。熱が高いのだ。

太ももの傷が深いのもそうだが、無理な動きをしたせいで体中の筋肉に過負荷がかかったせいだった。

簡単に言ってしまうえば筋肉痛がひどい状態だが、全身の筋肉が炎症を起こしているのだ。

自分がかつと強ければ、ジークにこのような負担をかけることはなかったはずだ。

あそこで震えて動けなかった自分が情けなくて仕方がない。

ぬるくなった布を水に浸してしぼり、またジークの額に置く。

カーサという女親分について来たことが正解かは分からない。

けれど、こうしてジークを休ませることが出来る場所を確保することが最優先だったのだ。

この決断に対しては、葉月は後悔していない。

それでも、自分がかつとしっかりしていれば、という思いが消えな

い。

### 3・獅子と狼 2・2

自責の念に苛<sup>さいな</sup>まれていると、ゴンツガンツという乱暴なノックが響いた。

あまり丈夫ではなさそうな扉が壊れるのではないかと思いながら、葉月は寝台の側に置いた椅子から立ち上がる。

「はい」

「よう、邪魔するよ」

陽気な声をかけながら入ってきたのは、件のカーサ<sup>くだん</sup>だった。

その後ろから、甘い顔立ちをした三十代半ばと見える男が続いて入ってくる。

「腕の調子はどうだ？」

「はい。おかげさまで調子は良いです。痛み止めと化膿止めも頂きましたし、今朝も傷口を洗いましたので」

葉月はそう言って包帯の巻かれた腕を軽く上下させてみせた。するとカーサはにやっと笑って後ろを振り返った。

「それは良かった。ああ、紹介しよう。葉月、こいつはウチの副長のブノワだ。無類の女好きだから気をつけろよ」

「ブノワだ。よろしく。カーサがひどい紹介の仕方をしてくれたが、安心してくれ。葉月は俺にとっては若過ぎる。あと五年経ったらぜひお相手願いたいけどね」

笑顔で片目をつむってみせる仕草は気障過ぎるが、不思議と似合っている。

葉月は気圧されながらも、おっとりとした笑みを浮かべてみせた。

「葉月と申します。副長さんはおモテになるようですから、五年経つても私などでは不釣り合いですよ」

「いやいや、そんなことはないよ。君は今でもとても可愛いから、五年後にはもっと可愛くなっているよ。それに可愛いだけじゃなくて、とても聡明な目をしている。その目で見つめられたら、どんな

男だつて跪ひざまずかすにはいられないだろう」

と、実際に葉月の手をとつて跪いてみせたブノワを、カーサが笑いながらからかう。

「お前、七十過ぎのババアにも似たようなこと言うだろ」

「無論、どの年代の女性にもその人の良さがある。女性というのは愛という水を吸つて美しく咲く花だよ。男には女性を褒め、口説く義務がある。ま、そうは言つても実際にお相手したい年頃はあるがね」

カーサにしれつと答えた後、葉月ににつこりと笑いかけて、ブノワが立ち上がる。

葉月は向こうでここまで熱烈に褒められたことはないなあ、と内心苦笑する。

立ち話も何なので椅子を勧めたい所だが、あいにくこの部屋には丸椅子が一脚しかない。

そう広い部屋でもないのだ。何脚もあつたら邪魔だろう。

葉月の迷いに気づいたのはカーサだった。

「俺たちは立つてるから、お前が座んな。調子は良くても怪我人だろ」

「しかし親分さんも副長さんも立つてらっしゃるのに私が座るわけにも……」

「カーサの言う通りだ。俺たちは大丈夫だから座るといい」

二人にそう言われては、座らない方が失礼だ。

「ではお言葉に甘えまして」

座つてしまうとカーサもブノワも長身なので、嫌でも威圧感を感じる。

それが狙いなのだろうと思いつつ、顔には出さない。

カーサやブノワもそんなことはおくびにも出さず、寝台のジークを覗きこんでいる。

「ジークの熱は下がらねえのか？」

「はい。まだ高くて……」

ジークはカーサたちの来訪にも気付かずに眠り続けている。

「こうして見ると、とてもじゃないけど盗賊を五人もやつつけたようには見えないな。どこからどう見てもまだ子供だ」

ブノワが腕組みしながらつぶやく。

来た、と思いながら葉月は小さく息を吸った。

「葉月も二人の盗賊を倒せるようには見えねえしな。お前たち何者だ？」

カーサの目がずっと細められる。

その目で見下ろされて、葉月の背中にぞくつとしたものが這い上がった。

膝の上に置いた手を思わずぎゅっと握りしめる。

正念場だ。

毅然と顔を上げて、受け答えしないといけない。  
きぜん

真剣な顔で二人の顔を順に見つめて、口を開いた。

「信じて頂けないかも知れませんが、聞いて下さいますか？」

「ああ」

「聞こう」

二人の返事に、葉月は小さく息を吐いて話し始めた。

### 3・獅子と狼 3 - 1

「何から話して良いのか分かりませんので、とりあえず皆様が思っ  
てらっしゃるだろうことの事実からお話します。お察しの通り、  
私とジークに血の繋がりはありません。私の母とジークの養父が再  
婚したので、私たちは姉弟となりました」

エルフィムの作り話を採用するのはどうかと思っていたが、こうな  
ってしまつてはベタだろうがなんだろうが関係はない。

既に普通の子供としては見られていないのだから、多少怪しくても  
構わない。

自分たちを信じてもらうのに、話自体を信じてもらう必要はないの  
だ。

矛盾しているようだが、いかに得難い人物であるかを知らしめれば  
良い。

「母は夫を早くに亡くしましたが、幸いにも商才があり、私を含め  
四人の子を立派に育ててくれました。そんな母から再婚したい相手  
がいると聞かされた時は驚きましたが、母が決めた人なら良い人だ  
ろうと思いました。それがジークの養父だったのです。新しい家族  
に最初は戸惑いましたが、やがて本当の家族としてうちとけること  
が出来ました。しかし、その幸せも長くは続きませんでした……」  
そつと目を伏せ、一呼吸置く。

「外出先で落石事故に巻き込まれたのです。助かったのは風邪を引  
いて家で寝ていた私と私に風邪をうつされたジークだけでした。そ  
して、母と跡取りと目されていた兄も亡くなったことにより叔父が  
欲を出しまして、私たちは家を追い出されてしまったのです」

多少改変したが、おおよそはエルフィムの講談と同じだ。

これで信じてもらおうとは思わない。

重要なのは、自分の価値を示すこと。

葉月は神妙な面持ちで伏せていた顔を上げ、にっこりと笑う。

「……と、いうことにしておいて頂けますか？」

あまりの落差に、カーサとブノワがぼかんとした顔をしている。

葉月はしてやったりと思いつながら、笑みを深くする。

カーサがくつくくと笑いながら、前髪をかき上げた。

次の瞬間、葉月の喉元に剣の切っ先が突き付けられる。

いつ剣を抜いたのか、どう動いたのか見えなかった。

葉月が気づいた時には、既にこの体勢だった。

カーサは嗜虐的しきやくな笑みを浮かべながら、葉月を見下ろしている。

あと少し、その腕に力を込めれば葉月の喉から血が噴き出すだろう。

「再婚、落石うんぬんはともかく、叔父に家を追い出された？ お前たちが？ そんな可愛いタマじゃねえだろ？」

切っ先がくいつと喉に当てられる。

それでも葉月は笑みを浮かべ、視線を揺らすこともなかった。

手の平はじつとりしているし、背中からなど滝のように汗が流れ出ている。

しかし、見えるところの反応は気合で押しとどめた。

試されている。

ここで揺らぐわけにはいかない。

その意思の力で、口から出た言葉は平静そのものだった。

「私たちは世間知らずで非力な子供ですよ？ 悪辣な大人に対抗出来るわけないじゃないですか」

口を開いたと同時に切っ先が緩められたので、葉月はちょっと困ったような顔を浮かべて首をかしげてみせた。

もちろん、剣を突き付けられて平然としている世間知らずで非力な子供などいない。

葉月は自分の価値が弁舌と度胸にあると思っている。

ジークは既にその強さでもって、価値を示している。

今は葉月の番だ。

果たして、<テーラン>に厄介になることが良いことかどうか、それは分からない。

ジークを安静にさせられる場所は欲しいが、回復後には更に危険になる可能性がある。

いや、どちらかといえば、危険の方が大きいだろう。

だが、葉月には分かっていた。

ここで<テラン>から抜け出しても、ジークも自分も、平穏な生活など出来ないことを。

それは己の性分と能力と外見年齢がそうさせるだろうし、自分たちがこの世界に落とされた経緯を考えれば、そのような生活は望んでも得られないだろう。

ならば<テラン>の方がジークの強さを活かせるし、葉月は組織の中で力を発揮する。

だが、ただ属すれば良いというものではない。

子供であるという点だけで、どれだけ行動が制限され信用されないかはよく知っていた。

<テラン>で上手く生き残るには、親分であるカーサと副長であるブノワに気に入られた方が有利だ。

カーサはどうやらジークを気に入ったようだ。

ただ、葉月のことはジークのおまけのように見られている。それでは面白くない。

葉月には葉月の価値がある。

ジークの影に隠れて、守られるだけの存在になどなりたくない。

人を殺すことにまだ抵抗があるし、化け物染みた強さも際立った美貌もないが、あちらの世界の海千山千のじじい共に揉まれてきた経験がある。

無力を嘆くだけの小娘ではないのだ。

「今は世間知らずで無力な子供ですが、きっとお役に立ってみせますよ」

葉月はおっとりとした笑みを浮かべ、じっとカーサの目を見つめた。

### 3・獅子と狼 3・2

沈黙は一瞬だった。

「ふうん。面白いのは弟だけじゃねえってか。というか、性格的にはお前の方が数段面白いな、葉月」

にやつと笑って、カーサが剣を引く。

腕を組んだまま成り行きを見守っていたブノワが、可笑しそうに笑った。

「なるほど。やはりカーサはたとえばが上手いな。蛇とはよく言ったものだ」

「蛇……ですか？」

微かに眉間にしわを寄せる葉月。

蛇にたとえられて気分の良い女性などいないだろう。

だがカーサは意に介することなく、さりと肯定する。

「なんかしつこそうだし、ずる賢いし、ぴったりだろ？」

「ひどい言われようですね。ではジークは何にたとえられますか？」

葉月が何気なく尋ねると、カーサは間髪を入れず答えた。

「黒豹」

「え？」

ジークの正体を知っている葉月は、驚いて目を丸くする。

その反応にカーサが首をかしげ、寝台のジークを見下ろした。

「何かおかしいか？　なんかそんな感じがしねえ？　こいつ」

カーサがまったくの勘で言っていることに気付き、葉月は胸をなで下ろすと共にカーサの勘の鋭さに感心した。

苦笑を浮かべながら、首を横に振る。

「いえ。私もそう思っていたので驚いただけです」

女離れた<sup>じつじやく</sup>贅力<sup>じつじやく</sup>といい、この勘の鋭さといい、この女親分は相当に侮れない存在だと確信する。

副長の方はまだよく分からないが、こちらは一筋縄でいく相手では

なさそうだ。

「ちなみに、こいつは赤獅子あかししっていうこっぱずかしいあだ名がついてる」

ブノワがにやにや笑いながら、カーサを指さす。

指さされたカーサは、むっとした顔で指さし返した。

「お前だつて青狼せいろうとか呼ばれてるそうじゃねえか」

「は？ 何だそれ？ 初耳だぞ？ どこで呼ばれてるんだ？」

驚いた顔をしたブノワに、カーサが追い打ちをかける。

「お前の部下が吹聴してたぜ？ 部下の教育と情報収集がなつちやいねえなあ」

「本当かよ。最悪だ……」

本気で嫌なようで、ブノワは頭を抱えてしまった。

葉月がそれを見て小首をかしげる。

「青狼なんてかつこいと思いますけど、そんなにお嫌ですか？」

「じゃあ、君は白蛇の葉月とか呼ばれたいと思うのか？」

「死んでもごめんですね」

恨めしげな声で尋ねるブノワに、葉月は即行で否定の言葉を返した。  
「だろう」

ブノワが葉月の言葉に深くうなづいてみると、カーサが唐突に口を挟んだ。

「そうだ、ブノワ。葉月はお前の娘ってことにしろよ」

「は？」

「ちよつと待て、カーサ。今の話の流れからどうしてそうなる？」

カーサの爆弾発言に、ブノワと葉月は同時に戸惑いの声をあげた。

### 3・獅子と狼 4-1

葉月をブノワの娘に。

そのとんでもないカーサの発言に、本気で理解不能という顔をして額に手を当てるブノワ。

葉月もぽかんとカーサを見つめている。

カーサー人がいいことを思いついた、という顔で笑っていた。

「いや、こいつらを<テーラン>に入れるのに、適当な口実はねえかなと考えてたんだ。なにせ、こいつらまだガキだろ？ ヴィリーだって十五になるまで入れさせなかったんだ。それなりの口実がいるだろ？」

「それは分かるが……」

分かるが、何故唐突に、何故に娘？ とカーサから親子認定された二人は同時に顔をひきつらせた。

ブノワと葉月（の外見年齢）は、だいたい二回りほど違う。

親子といっても無理はない年齢差だ。

しかし、いきなりそんなことを言われれば誰だって戸惑うだろう。ジークと姉弟になれ、とエルフイムに言われた時も葉月はたいへん戸惑った。

葉月には元の世界に妹弟がいたし、ジークがきょうだいに強い憧れを持ち、なおかつまっすぐな人柄であったので受け入れられたが、ブノワはどこからどう見ても父親には思えない。

年齢などではなく、雰囲気だ。

葉月から見たブノワの印象は、“色男”である。

あちこちで浮名を流しているだろうが、妻もしくは特定の女はいなさそうだし、子もないだろう。

いきなりこの人を“父”と呼ぶには、抵抗があり過ぎる。

ブノワの方もいきなり葉月を“娘”と思えと言われても出来るものではない。

カーサのぶっ飛んだ思いつきにはいつも苦勞しているが、とつさに言葉が出ない思いつきは久しぶりだった。

ブノワは今年で三十五になるが、妻や子はいない。

恋人ならたくさんいるのだが、自身がまっとうな夫や父親になれるわけではないし、何よりまっとうな死に方はしないだろうと思っている。この年まで独り身だ。

自身が一人に縛られるような性質ではないことも知っている。

それなのに、いきなりこんな大きなコブつきになるとは考えたこともない。

ともかく、二人ともいきなり親子にと言われても、納得出来るわけはなかった。

それは<テーラン>の者たちも同じだろう。

カーサの思いつきがどう正当性を持っているのか、どうにも理解が出来ない。

「すみません、親分さん。もう少し説明をして下さいませんか？いきなり親子と言われても、それで<テーラン>の皆さんは納得されるんですか？」

葉月の疑問にブノワが付け足した。

「娘といつても俺と葉月は似てないぞ。それにジークの方はどうするんだ？」

ブノワの疑問ももつともなので、葉月は深くうなづいた。

そんな二人にカーサは「なんで分かねえかなあ」とつぶやきながら、面倒くさそうに自論を展開する。

「だってお前の隠し子って言えば、みんな納得するだろ。葉月はお前の隠し子。ジークは葉月の種違いの弟。これで納得するヤツは多いと思うぜ。似てない？ 葉月は母親似ってことでいいじゃねえか。ジークは父親似ってことにしとけばよ。両親が落石事故で死んじまったが、葉月の父親は実は別に居たってことを知って探していた。それがブノワだった。これでいいだろ」

はい決定と言わんばかりのカーサに、葉月は慌てて口を挟む。

「副長さんに隠し子がいたというのは、いかにも信憑性があつて納得出来ますけど、証拠はどうするおつもりですか？　どうして副長さんが父親だと分かったのか、聞かれたら答えられませんか。しかも私の話と落石事故しか合っていないんですけど」

『いかにも信憑性がある』と言われたブノワは微妙な顔をしたが、では否定出来るかというところこそ信憑性がないので賢明にも口をつぐんだ。

<テール>を結成したのは九年前だ。それまではふらふらと<ゼルドディア>の各地を渡り歩いていたので、あり得ない話ではなかったのだ。

心当たりがあり過ぎるといっても過言ではない。

今回はそういうことにしておこうという話だが、実際に名乗り出られる可能性に思い当たりブノワは一人おののいていた。

### 3・獅子と狼 4・2

そんなブノワを放っておいて、女二人のやりとりは進む。

「お前の話はどうせ作り話だろ。いいじゃねえか。証拠？ あー、ブローチとか指輪とか何か持ってねえのか？」

「えーと、ありますね。換金用の装飾品がいくつか」

懐の中身を思い出すと、この世界の通貨だろうと思われる銀貨や銅貨が入った小袋の他に、いくつかの小さな装飾品が入った袋があった。

その通貨が使えない場所で換金出来るように持たせてくれたのだろう、とはジークの談だ。

葉月は懐からその袋を取り出し、中身を膝に開けた。

ころころと出てきたいくつかの装飾品の中から、葉月はカメオのブローチをつまみ上げる。

瑪瑙に草花を組み合わせた意匠を彫ったもので、いかにも若い男が恋人に贈りそうな可愛らしいブローチだ。

「これなんかどうでしょう？ 豪奢ではなく、石の質もそこそこですから、若い男性にも贈れそうな品だと思いますが」

「いいんじゃないか。いかにも女つたらしが贈りそうな品だ」

葉月とカーサは微妙に異なる評価をそのブローチに与えたが、結論は同じだ。

これが葉月の母の形見ということになる。

ジークと葉月の強さやしたたかさが欲しいという思惑に、副長の隠し子という口実を与えるものだ。

実の母のことを思い出すと、自分の方が先立つ親不孝をしたのに“母の形見”とは不謹慎ではあるが、葉月は背に腹は変られないと思ひ直す。

何かぶつぶつとつぶやいているブノワをちらりと見て、葉月は小首を傾げた。

「証拠はこれでいいとして、やっぱり副長さんのことは“お父様”とお呼びした方がよろしいでしょうか？」

“お父様”など、実の父相手にも呼んだことはないが、逆に使ったことがない呼称の方が気が楽だ。

それになんとなくではあるが、ブノワをもし“父”と呼ぶなら“お父様”という呼称が合っているような気がする。

“父ちゃん”では絶対じゃないし、“お父さん”も違和感がある。“親父様”と呼ぶにはブノワは艶っぽ過ぎ、また“親分”のように聞こえるので却下だ。

消去法ではあるが、“お父様”という呼称は艶っぽくてかつこいブノワにぴったりではなからうか。

葉月は乗りかけた船ということであっさり口にしたのだが、呼ばれた本人はというと一瞬驚いたような顔をして、苦笑を浮かべた。

「そうか、君が娘になるということはそう呼ばれるってことか。なんだか一気に歳をとったような気がするな」

ブノワの言葉に、カーサが笑った。

「実際、子供の一人や二人どころか五人六人いてもおかしくない歳だろ」

「お前もたいして変わらんだろうが」

カーサの揶揄に、ブノワがやり返す。

そのやりとりに苦笑しつつ、葉月が問いかけた。

「そう呼ばれるのはお嫌ですか？」

ブノワはちよつと考えてから、首を横に振った。

「嫌、ではないな。不思議なことに。そう呼ばれることなどないと思っていたが……案外良いものかも知れない。方便だとは分かっている、な」

少し照れたような苦笑いを浮かべるブノワ。

カーサはやつと決まったというように、肩をすくめている。

葉月はおつとりと笑って、頭を下げた。

「親分さん、お父様。これからお世話になります。よろしくお願い

致します」

他にもいくつかのことを決めてから、二人は部屋を出て行った。

葉月は扉が閉まるのを見届け、先ほどのやりとりも知らずに眠り続けるジークに目を向けた。

相談もなく勝手に決めてしまったが、この話を聞いてジークはどう感じるだろうか。

勝手だと怒るか、軽率だと詰るか……。 なじ

彼が目覚ましたら、まずは謝らなければならないだろう。

ジークは相談出来るような状態ではなかったが、これからのことを考えれば身の振り方は早急に決めてしまわねばならなかった。

葉月はこれが最善の道だと考えた。

運命などという言葉で葉月は信じていなかったが、この世界に落とされて考え方が変わった。

何せ、実際に神という存在があるのだ。

運命がないとは限らない。

あの街道での出会いは、血と死臭にまみれたものではあるが、きつと運命だったのだろう。

カーサがああタイミングで出てこなければ、葉月もジークも死んでいたはずだ。

エルフィムは具体的にどうしろとは言わなかった。

ならば流されてみるのも手だろう。

この世界について何も知らない自分たちには、庇護者が必要だ。

いくら中身が大人とはいえ、それだけで生きられるほど人生は甘くない。

まずはこの世界のことを知り、この世界で生きていく為の知恵を身につけなくてはならない。

「だからジーク。早く元気になって」

葉月は汗で湿ったジークの髪をなでて、その快癒かいゆを願った。

#### 4・手痛い洗礼 1 - 1

葉月とジークがカーサに拾われてから、二ヶ月が経った。

葉月の傷は少し痕<sup>あと</sup>が残ってしまっただが完治し、ジークの傷は完治まではまだいかなないものの、日常生活には不都合がないくらいには治った。

葉月はこの二ヶ月、<テールラン>で下働きをしていた。

ブノワの娘、としてではなく、名前も知らない実の父を異父弟と一緒に探している娘、としてである。

盗賊退治に巻き込まれてしまった哀れな姉弟ということで、弟が完治するまで<テールラン>で下働きをして治療費を稼ぎ、その合間に実の父のことを調べていると、実はブノワが実の父だった、という筋書きである。

いきなりブノワの隠し子であったと名乗り出るのは、さすがに不自然であるというのが理由ということになっていたが、仮にジークが完治せずに使い物にならなかった場合を考慮し、様子見の期間を設けたというのが本当のところだった。

カーサはとにかく大丈夫だと言っていたが、いけいけどんどの親分の案に保険をかけ策を巡らすのがブノワの仕事だ。

葉月としても、この様子見の期間はありがたかった。

ブノワの娘として注目を集める前に、最低限の知識は仕入れておきたかった。

なにしろ、葉月はこの世界のことを何も知らない。

しかも、電化製品のない生活など経験したことがなかった。

旅なら非日常なのでこんなものだろうと思えたが、日常生活は辛かった。

床を掃除するのに掃除機ではなく箒<sup>おけしほ</sup>で掃いて、ブラシでわしゃわしゃ擦った後に、拭きとるのはクイツ・ルワイパーなどないので雑巾しかも水道はないので外の井戸から桶で水を汲んでこなければなら

ない。

<テール>の本拠地は没落した豪商から譲り受けたというお屋敷で、二階建ての母屋に、渡り廊下でつながった北の離れ、敷地の端に建っている西の離れがあり、ついでに納屋が三つもある。

葉月の生活範囲は母屋と北の離れだけだが無駄に広く、下働きは葉月を含めて五人だけなので朝から晩まで忙しい。

掃除は道場や庭の掃除と似たようなものでまだマシだし、繕い物もミシンがないこと以外はたいして変わらないのでなんとかあったが、買い物と料理と洗濯は鬼門だった。

まず、通貨と物価が分らない。

<テール>の団員は約五十名ほどなので、食材は配達してもらっているのだが、買い出しがないわけではない。

一緒に行って店を教えてくれるという中年女性に恥を忍んで通貨の種類を教えてもらい、だいたいの物価を教えてもらった。

料理では竈で煮炊き出来ないことに驚かれ、調味料の名前や料理名を知らないことに呆れられ、洗濯では腰が入っていないと叱られた。文明の利器が使えないとこんなにも家事が大変なのかと涙目になりながら葉月は頑張ったが、どうにもお荷物になってしまう。

下働き仲間にはどんだけお嬢様だったのかと笑われたが、言い返せなかった。

足手まといになって彼女たちに負担をかけているのは葉月だ。

言い返すようなことはせずに、失敗したら謝り、手伝ってくれることに感謝し、失敗を繰り返さないこと。働く時の基本だ。

葉月は人当たりが良かったし、その本質は負けず嫌いだだったので、彼女たちも葉月のことを、とろくさそうに見えるが意外に根性がある、と認め始めていた。

ジークの怪我也順調に回復して来ていた。

ジークは一カ月は寝台から降りることも禁止されていたが、その後は少しずつ弱った足腰を慣らす歩行訓練を始めた。

激しい運動は医者と葉月からきつく止められていたので、屋敷の中や庭を歩き回るだけだ。

元の世界では幼い頃から養父に剣を叩きこまれ、傭兵として生きていたジークにとって、こんなにも長く剣を握っていない期間は初めてだった。

しかも葉月は下働きとして働いているのだ。

何もしていない自分が齒がゆく、情けなかった。

元の体なら、これくらいの怪我は半月ほど治っただろう。

それどころか、あれくらいの戦闘で大怪我などするはずがなかった。ましてや、葉月に怪我をさせることもなかったはずだ。

ジークは己の手の平を見つめた。

小さな手だ。

毛はなく、爪は短くて丸い。

無力の象徴のような手だ。

その手からつながる腕も細い。

細いだけではなく、力も弱い。

なんと貧弱な体だろう。

エルフィムの元で姿見を見た時、そのあまりの外見の違いに愕然<sup>がくぜん</sup>としたが、あの戦闘で体の動きの悪さを思い知った時に比べれば、見た目の違いなど些細なことだ。

十の子供になったというのだから、背の小ささや間合いの狭さは仕方がない。

だが、あの跳躍力のなさ、腕力のなさはどうということだ？

当たり前だと思っていた動きが出来ない。

まるで重りでも背負っているかのよう、動きが遅かった。

葉月たちは人間離れた動きをしていた、すごい動きだったと称賛したが、ジークにしてみればあの程度の動きだ。

盗賊たちの肌が元の世界の住人たちよりも柔らかかったので切り裂くことは容易だったが、数で囲まれると対処に遅れる。分断されると、葉月の元に駆けつけるのに手間取った。

元の体なら、一足で駆けつけられただろうに……。

葉月は寝台にとどめ置かれたジークの世話を甲斐甲斐しくしてくれた。

下働きで忙しいのに、水仕事で荒れた手で背中を拭き、下働き中に得たこの世界の知識を教えてくれた。

いつもおつとりと笑ってはいたが、慣れない生活に疲れているのは、荒れた手と少しこけた頬で分かった。

「ねえさん、大丈夫ですか？」

と尋ねても、葉月は笑って、

「大丈夫。あなたは私の心配なんてしてないで、自分の体を治すことだけ考えてなさい」

とジークの頭を撫でるだけで、弱音を吐かなかった。

葉月は旅の途中も弱音を吐くことは少なかったが、それなりにジークのことを頼ってくれた。

けれど、今は完全に被保護者として見られている。

自分の外見が幼いことは理解しているが、中身はれっきとした成人男子である。

子供扱いはやめて欲しいと思うが、葉月の腕の傷を見ると何も言えない。

葉月は気にしていないというが、痕が残ってしまうのだという。ジークにとって、その傷は戒めだ。

葉月を守り切れなかった自分。

カーサが現れなければ、あの街道で二人とも死んでいただろう。

このような弱い体で、何が葉月を守るだ。

強くなりたい。

そう心から思うのは、いくつ以来だろうか。

幼い頃、養父にして剣の師匠である人から厳しい稽古をつけられ、まったく歯が立たず悔しい思いをしたあの日。

今はその時以上に力が欲しい。

強く、強く、強く。

強くなりたかった。

#### 4・手痛い洗礼 1-2

カーサとブノワが頃合いだと思ったのは、葉月が仕事に慣れ、ジークが不自由なく動き回れるようになった頃だった。

母屋の広間に団員たちが集められた。

カーサが葉月がブノワの隠し子であり、ジークは葉月の異父弟であることが分かったと発表すると、数人の者たちは訝<sup>いぶか</sup>しんだが大体の者は「なるほど」とうなづいた。

いかにもありそうな話だったからだ。

葉月たちが葉月の実の父を捜していると知っていた者たちは、葉月たちには祝福の、副長に対してはからかいの言葉を投げかけ、はやし立てた。

団員以外の屋敷で働く者たちも、口ぐちに「良かったね」と笑顔でうなづき合った。

しかし、二人をくテールン>に見習いとして入れるという話になると、空気は一変した。

それはいくらなんでも、と大半の者は戸惑いの表情を浮かべている。ある程度は予想していたものの、祝福してもらった後なので余計に突きささる視線が痛い。

葉月はちらりと隣に立つジークの方を見ると、困ったような顔をしたらジークと目が合った。

これは予想以上にたいへんなことのようにだ。

全体に困惑が広がる中、親分と副長だけが今後の反発を予想し、愉快そうな笑みを浮かべていた。

「やっぱりね。口実は口実でしかないってことか」

葉月がうつすら笑いながらつぶやいた。

ここはジークの部屋だ。

元々医務室に近い部屋ということで母屋に部屋があつたジークとは違い、葉月は下働き仲間と北の離れの大部屋で寝起きしていた。

葉月がブノワの隠し子だったと発表されたことにより、葉月も母屋に部屋を与えられたのだが幹部たちの部屋に近く、こういった話をするには落ち着かないのでジークの部屋を使っているのだ。

ちなみにジークの怪我が完治していないことや、葉月の弟とはいえジークの父はブノワとは違うということで、葉月のように幹部の部屋の近くに部屋を与えられることはなく、医務室の近くの部屋のままだ。

この部屋には椅子が一つしかないので、椅子は葉月に譲り、ジークは寝台に腰かけて幼い顔に似合わない眉間のしわを刻んでいた。

「居場所は自力で作れ、ということですね」

「でしょうね。それにしてもある程度の反発は予想していたとはいえ、思っていたよりも受け入れられないみたいね。下働き中に結構愛想を振りまいておいたんだけど」

ブノワの娘だったと発表された時の団員たちの様子から、葉月の愛想振りまき作戦は成功していたと考えても良いだろう。

ただ葉月たちが思っていた以上に、戦列の<テーラン>という組織に入るということは大変なことらしい。

葉月が買い出し等で外に出た時の街の人々の反応をみるに、<テーラン>は忌避と羨望の両方の目で見られているようだ。

<ウクジエナ>という街は役所が集まる中央区とその周りを囲む一番街から十番街までに分けられているのだが、人口が増えたことによりつけたされた新興地区にはまだ番号が振られていない。

正式な街とは認められていないのだ。

そこを根城というか縄張りになっているのが<テーラン>で、自警集団と名乗ってはいるが実態はヤクザに近い。

縄張り内でもめ事があれば仲裁するが、みかじめ料をとる。

用心棒の斡旋もするし、公の警備隊がやらないようなことを市長から依頼されてこなすこともあるようだ。

新興地区は新しいだけあって店も多く活気がある。

活気があるということは、それだけでもめ事も多いということだ。

ヤクザに近いとはいえ、それほど無体な金額を絞り取るわけでもなく、また新興地区では警備隊の取り締まりを期待出来ないこともあって、それなりに頼りにされている。

<テーラン>がしつかりと縄張りになっているから、他のあくどい組織が入って来られない、という見方もあるくらいだ。

そう見られていることを<テーラン>の団員たちも知っているが、そこで調子に乗って威張ることをカーサもブノワも許さなかった。逆に誇りを持って、堅気に手を出すようなことはするなと徹底した。みかじめ料を取られるのは癪だし、胡散臭い連中であるが、強くてかつこいいという評価も否定出来ない。

<テーラン>に入りたいと思う連中も多いが、そうはいはいと入れるものでもなく、<テーラン>の団員は憧れの対象なのだ。

その<テーラン>に副長の隠し子だかなんだか知らないが女子供が入るということは、彼らからすると許容出来ないことになる。

<テーラン>に入る者は“いっぱしの男”でなくてはならない、という不文律があるのだ。

葉月としては、親分が女性であるのに、と思わなくもないが、どうやら<ウクジェナ>の人々はカーサのことを女性として区分してはいらないらしい。

女性であることは認識しているのだろうが、女性扱いされていない。緩く波打つ黒髪は無造作に束ねられており、化粧つ気はないが、胸だって普通にある。

外見的特徴から言えば、長身ではあるがどこからどう見ても女性だ。だがその女とは思えない<sup>りょりょく</sup>膂力から繰り広げられる豪剣と、口調や雰囲気<sup>きふき</sup>が男前なので、憧れの“兄貴”のように思われているのだ。ともかく、葉月とジークが<テーラン>の一員として認められるには、並みではない力を示すしかない。

「俺は親分さんの下に着くことになりました。使いっぱいからで

すが、なんとかやってみます」

「私は副長……お父様の所で雑用だつて。こき使われてくるよ。お互い頑張ろう」

「はい」

葉月とジークはそれぞれの思いを胸に、＜テーラン＞で生き抜くことを誓い合つた。

平穏と安穩に背を向けて、混沌と激動の渦へと自ら踏み出す。

この世界の歪みを、二人はまだ知らない。

#### 4・手痛い洗礼 2 - 1

<テーラン>に拾われてからというもの、葉月の朝は早い。元の世界でも朝稽古は欠かさなかったので、早起きは別に苦ではない。

ただ、朝から命がけの稽古をするとなると、話は別だ。

元の世界でも味わったことのない緊張感の連続に、神経も体力も削られるので大分しんどい。

葉月は稽古場と呼ばれている庭の一角で、思いつき派手に転んだ。ただし受け身はきちんととれたので、見た目ほどのダメージはない。擦り傷が出来ることや服が汚れることに構わずに、そのままの勢いを利用して転がり立ち上がった。

その瞬間、ぶんつという風を切り裂く音が聞こえ、一瞬前まで葉月が居たところを拳が通る。

「逃げつてばつかだたらちがあかねえ、ぜー！」

拳を振るった男は楽しそうに笑いながら蹴りを繰り返した。

葉月はその挑発には乗らず、するりと蹴りを避け、男の斜め後ろの方へ移動する。

「せつ」

短い発声と共に脇腹に掌底を打ち込もうとしたが、男が肘打ちを繰り返してきたので後ろに下る。

避けたにも関わらず、風圧で葉月の前髪が舞い上がった。

明らかにあんな肘打ちが頭に決まったら死ぬと思えるような威力だ。額からどつと汗が吹き出し、頬を伝った。

「オラオラオラオラア！」

男は攻撃の手を緩めない。

葉月はそれらをするりと避けて行く。

まるで打ち合わせをしているかのようにすると避けているが、もちろん打ち合わせなどしていない。

相手は手加減しているつもりのようなのだが、はつきり言って当たった  
ら洒落にならないので、避ける方は必死だ。

が、いくつかの連続攻撃を避けきったが、長い脚から繰り出される  
蹴りを避けるのが間に合わなかった。

後ろに跳び下がりがながらその蹴りを両腕で受ける。

蹴りに合わせて跳び下がったのでいくらか衝撃を和らげたはずだが、  
腕の骨が折れるようなしびれを感じながら、葉月はまたもや派手に  
吹っ飛んだ。

ごろんごろんと庭を転がって、立とうとした所で顔面に拳を突き付  
けられた。

何度も派手に転がったせいではどけかけていた髪が、風圧のせいで  
巻き上がる。

葉月は息を荒げながら「降参です」と両手を挙げた。

葉月に拳を突き付けた男は、にっと太陽のように笑い、へたり込ん  
でいる葉月をひよいと立ちあがらせた。

「お嬢は軽過ぎるんだ。もっと食べよ」

男は葉月のくしゃくしゃになった髪をもっとくしゃくしゃにするよ  
うにかき混ぜる。

本人は髪を整えてやっているつもりなのだろうが、その勢いではま  
ったく整いそうにない。

鳥の巣のような頭になるのは勘弁願いたかった。

葉月は苦笑しながら、さりげなく、しかしはつきりとその手を退け  
る。

「タイロンさんが大食いなだけでしょ？ 私は適量を食べてます  
よ」

「だからタイロンでいいって。そんなんだから筋肉がつかねえんだ  
よ」

タイロンと呼ばれた男は口を尖らせて腰に手を当てた。

二十代前半だろうが、その少年めいた表情のせいでいくらか若く見  
える。

葉月はちよつと困つたような表情を浮かべた。

「ただ筋肉をつければいいってもんでもないんですよ。どちらかと言えは骨格に沿つた無理のない動きをする方が重要です」

「いや、筋肉は重要だろ。もちろん無駄な筋肉をつけるって言つてんじゃねえぜ？ 必要な筋肉をつけるって言つてんだ」

言っている張本人は確かに均整のとれた体をしていた。

腕は葉月の太ももくらいの太さがあるが、長身であるので不格好ではない。

決して筋肉ダルマではないのだが、脳味噌は筋肉で占められているのではないか、と葉月はこっそりひどいことを考えていた。

面倒見も気も良い人なのだが、筋肉馬鹿なのが玉に傷だ。

あと手加減が苦手なところと不器用なところと掛け算も間違えるし……と、タイロンに出来なことを思い出し、傷なのは筋肉馬鹿なところだけではなかったな、と葉月は更に失礼なことを考えていた。

それでもタイロンはくテーラン>の副長直属の部下で、葉月の戦闘面での指導役だ。

欠点は確かに多いが、侮つてよい相手ではない。

それは葉月もよく分かつていた。

それにタイロンが嫌いなわけでもない。

微妙な立場の葉月のことを“お嬢”と呼び、屈託なく接してくれる相手だ。

いくら直属の上司であるブノワから面倒をみるように言われたからといって、嫌な顔一つせず毎朝稽古をつけてくれている。

嫌えるはずがない。

しきりに筋肉をつけることを勧めてこななければ、本当にいい人なのだ。

「必要な筋肉はついてますよ。これだけ稽古していれば必要な分は自然とつきます」

「いや、ついてねえって。ほら見ろ、こんな細えじゃねえか」

タイロンはひょいと葉月の腕を持ち上げると、自分の腕と比べて見

せた。

確かにタイロンの腕と比べれば、葉月の腕は細い。

しかし、それは比べる対象が間違っているのである。

鍛えている二十代前半の男の腕と同じくらい太い十代前半の女の腕など、そうはお目にかかれない。

かかれたとしてもその腕についているのは筋肉ではなく脂肪だろう。

葉月は深いため息を隠すこともせず吐き出した。

「タイロン、ほらじゃないです、ほらじゃ。私の腕が細いんじゃない、  
くて、タイロンの腕が太いんですよ」

「えー、細いだろ？」

「細くありません」

どちらが年上だか分からないような会話だ。

確かに中身は葉月の方が歳上なので間違っではないが、はたで見ている目にはちぐはぐに映るだろう。

ある意味、微笑ましい光景かも知れない。

#### 4・手痛い洗礼 2・2

無益な言い争いをしている二人に、むっとりとした厳つい男が近づいて来た。

三十代後半だろうか。

厳つい顔には立派な揉み上げというか頬髭が生えている。

大柄で、熊のような男だ。

熊のような男は無言で濡らした布を葉月に差し出した。

「ありがとうございます。トリスさん」

葉月は笑顔で礼を言い、受け取った布で顔の汚れを拭った。

乾いているとはいえ地面を派手に転がったせいで、かなり汚れている。

動きやすいように男物の服を着ているが、土埃で真っ黒だ。

しかしトリスと呼ばれた男は微かに眉間にしわを寄せ、唸るような声で言った。

「違う。腕を冷やせ」

「え？ ああ……腕ですね」

トリスの言葉に葉月は自身の腕を見下ろした。

確かに葉月の腕は真っ赤になっていた。

太い、細いとそこにばかり気をとられていたせいで気付かなかったが、勢いを殺したとはいえタイロンの蹴りを受けたのだ。

今は真っ赤だが、今に紫色に染まるのは目に見えていた。

葉月が両腕を布で包むようにして冷やす様子を見てうなづいたトリスは、タイロンの頭に拳骨を落とした。

「いってえ！」

タイロンが頭を抱えてうずくまる。

トリスはそんなタイロンを見下ろしながら、裏庭の方を指さした。

「井戸。あと気付け」

トリスはそれだけ言つと、来た時と同じようにむっとりと母屋へ

戻って行った。

熊のような容貌の上無愛想で無口なトリスだが、細かい所にも気が利き面倒見も良い。

副長補佐という地位にある彼は多忙だ。

それなのに毎日とまではいかないが二、三日に一度は朝稽古が終る頃にやってきて濡れた布を渡してくれる。

むさ苦しい男どもばかりの<テラン>にいきなり放りこまれた（ように見える）葉月を何かと気にかけてくれているのだ。

そのトリスから拳骨をくらったタイロンは、頭を擦りながら立ち上がるとトリスの後ろ姿をにらみつけた。

「ったく、殴ることねえだろ、殴ることだよお」

「ごめんなさい、タイロン」

葉月のせいで彼は殴られたのだ。

自分自身も無頓着だったのに、指導役とはいえ彼だけが怒られると罪悪感がわく。

うなだれる葉月に、タイロンはぱつと渋面を解いた。

「ん？ ああ、お嬢が謝ることあねえよ。それより腕冷やしに行こうぜ」

タイロンに背中を押されて、井戸のある裏庭へと向かう。

井戸には先客がいた。

先客は細身だがしっかり筋肉のついた上半身をさらし、頭に水をかぶっていた。

二人の気配に気づき、濡れた髪をかきあげながら振り返る。

「よお、タイロンにお嬢様じゃねーの。どうしたんだ？」

にやっと笑った男は、少し軽薄な雰囲気があったが、女性が見れば十人中九人はかっこいいと振り返るような容姿をしていた。

葉月は心の中で密かにチャラ男とあだ名をつけていたが、これでも<テラン>の中でも戦闘を主任務とする実行部隊の第四隊長だ。

タイロンは「よう、ケヴィン」と気軽に手をあげて男の問いかけに答えた。

「お嬢の腕を冷やしに来たんだ。俺の蹴りが当たっちゃまってさあ」  
「お前の蹴りが？ それって折れてんじゃねーの？」

ケヴィンはひよいひよいと葉月に近づいてきて、腕の布をはぎ取り  
真っ赤な腕を無遠慮に握った。

「っ  
っ」

痛みに顔をしかめる葉月。

だがケヴィンはにやにや笑いながら、引っ込めようとする葉月の腕  
をぐいぐいと握る。

「ははは、タイロンの蹴りを受けた割にやあ、折れてねーみたいだ  
な。すげーじゃん、お嬢様」

なおもぐいぐいと腕を握るケヴィンに、葉月は心の中で『このチャ  
ラ男が！』と罵った。

この軽薄な男はタイロンとは違い、からかうように“お嬢様”と呼  
ぶ。

しかもこのようにさりげなく、いじめ紛いのことを仕掛けてくるの  
だ。

あからさまな悪意は向けられたことがないが、ひまつぶしの道具く  
らいには思われているかも知れない。

非常に腹立たしいし、今も出来れば蹴り飛ばしてやりたいが、相手  
は腐っても隊長様である。

勝てる気がしないし、報復が怖いので耐えるしかない。

副長に言いつけるのも、負けを認めるようで嫌だ。

今に覚えておけよ、と恨みを飲み込む。

「もういいだろ、離せよ」

タイロンがケヴィンの腕を引き剥がし、水を汲んだ釣瓶つるべに葉月の腕  
を突っ込んだ。

ひんやりと冷たい水が、火照った腕を冷やしてくれる。

葉月は小さく息を吐いた。

ケヴィンはそんな葉月の様子をにやにや笑って見た後、「お大事に  
ー」と言って去って行った。

「大丈夫か？」

タイロンが心配気な顔をしながらしゃがみこむ。

葉月は笑顔を浮かべてうなづいた。

「ありがとう」

「また何かされたら言えよ？　なんとかすつから」

「頼りにしてます」

「任せとけ」

タイロンがにゅと笑う。

ブノワが葉月にタイロンを付けたのは、こういった理由もあった。

直接的で分かりやすい危害を加えてくる者はさすがにいないが、葉月たちのことを快く思っていない者が何をしでかすか分からない。

<テーラン>は荒くれ者の集まりなのだ。

居場所は自力で作り出せと言うが、何の手も打たずに潰されるのも困るという配慮だった。

ジークにも葉月と同じようにカーサ直属の配下が指導役としてついている。

葉月もジークも指導役の威を借ろうとは思わないが、決して頼らないと思うほど頭が固くもない。

利用しろというのだから、利用するべきだ。

嫌み程度なら慣れているし聞き流せば良いのだが、暴力で来られると葉月では少し荷が重い。

風当たりが強いことは分かっていたが、実際にやられるとたまったものではなかった。

もちろんタイロンとて四六時中守ってくれるわけではないが、直接にらみをきかせてくれる者がいるのといないのとはだいぶ違う。

ブノワの配慮に、葉月はしみじみと感謝していた。

#### 4・手痛い洗礼 3 - 1

釣瓶つるべの水は冷たくて気持ちいいが、そう長々と冷やしておく必要もない。

適度な時間は冷やしたはずだ。

葉月は釣瓶の水を桶に移して、トリスに渡された布をゆすぎ、改めて顔や手足の土埃ちちほこを拭っていく。

タイロンも散々動き回っていたので、汗を流すべく先ほどのケヴィンと同様、上半身裸になつて頭から水をかぶつた。

ぶるぶると頭を振るい、前髪を両手でかき上げる姿は均整のとれた体に水が滴り、まさしく絵になっている。

葉月は育つた家が家なだけあり、兄弟子やら弟子やらのそうした姿は見慣れているので照れるようなことはないが、やっぱり目の保養になるなあ、とおばさんのようなことを考えていた。

ケヴィンも中身はともかく見た目はいい男だ。

本当に、二人とも黙っていればとてもかっこいいのに、残念極まりない。

この世界でのロマンスとやらはまったくもって期待していない葉月だったが、日本の男たちとは違ういい男にはそれなりに興味がある。葉月とて女なのだ。

「そつえばさあ」

釣瓶を井戸に落としながらタイロンが口を開いた。

「学問所つて今日からだっけか？」

「そうですね。今日からです」

葉月は髪についた土を拭い落しながら答える。

<テーラン>に見習いとして入つて三日。

朝はタイロンと稽古をして、昼間はブノワの下で雑用をしていたの

だが、いかんせん文字が読み書き出来ない。

どのような組織でもそうだが、首領や副長などの上層部になると、仕事といえばデスクワークの比率が高くなる。

その配下も読み書き計算くらい出来なければ、戦力にはならない。

その辺りの事情はジークも一緒なので、二人とも午前中は学問所で勉強し、雑用は午後だけということになったのだ。

「なんつーか、意外だよな。お嬢が文字読めねえってのも」

「そうですか？」

「おう。きょーよーがありそうっていうか、頭良さげじゃん？」

「そう良くもないですよ。世間知らずですしね」

タイロンの言葉に、葉月は苦笑する。

教養はあったが、この世界の教養ではないので大して役には立たない。

こちらの世界に関して、本当に子供以下の知識しかないというか、常識を知らないのだ。

落ち着きと常識のなさがちぐはぐ過ぎて、怪しまれるのではないかと気が気ではない。

多少怪しまれるくらいなら良いが、それで排斥されては面白くないかと言って知ったかぶりするのも具合が悪く、馬鹿に見られても困る。

その辺りの兼ね合いが難しかった。

自分をどう見せるか、難しいが重要なことだ。

「あー、じゃあ」

タイロンはなんとか葉月にぴったりの言葉をひねり出そうとうんうん唸り、何か思いついたのかぼんと手を打った。

「ずる賢そう？」

これでどうだと言わんばかりの顔をするタイロンに、葉月はふうつとため息をついた。

「……褒めたいんですか？ 貶けなしたいんですか？」

「え？ 賢いって褒め言葉じゃねえの？」

きよとした顔をするタイロンに、葉月は微妙そうな表情を浮かべる。

「賢い単体なら褒め言葉にもなりますけど、その前に“ずる”がつくと貶すだけになります。悪知恵が働くってことですよ」

「え？ マジで？ 俺、すげえ賢いって意味かと思ってた……」

「……………」

「お嬢？」

「良かったですね、タイロン。今日、一つ言葉の意味を正しく理解することが出来ましたよ」

「お嬢さ、今、俺のことすげえ馬鹿だと思っただろ？」

「そんなことないですよ」

さらっと笑って否定する葉月に、タイロンがむくれる。

「どうせ俺は頭がわりいよ」

「だからそんなこと思っていないですってば」

苦笑しながらも手を動かし、足首まで拭ってさっぱりしたところで、葉月はあることを思い出して布をゆすぐ手を止めた。

「あ」

「どうした？」

タイロンが小さく声をもらした葉月の方を見る。

葉月はしまったなあという顔をして、ぎゅっと布を絞った。

「木剣を片づけ忘れてました。ちよっ之行ってきますね」

「ああ、忘れるとトーリスのおやじやジェイルに怒られるもんな。急げよ。朝飯食いっぱくれるぞ」

「はい」

葉月は急いで桶を片づけると、稽古場に向かって走り出した。

#### 4・手痛い洗礼 3 - 2

葉月たちは素手で組手をしていたが、何も最初から最後まで組手をやっていたわけではない。

朝稽古の主は剣術である。

しかし、剣術の稽古と言っても剣対剣ではない。

葉月は木剣を振るっていたが、それに対するタイロンは素手だった。タイロンに木剣を持たせたら、おそらく葉月では切り結ぶまでもなく骨を折っている。

最悪即死だ。

本来なら剣対剣の戦いに慣れなければならぬのだろうが、素手のタイロン相手に互角に渡り合えるようになれば、武器を持つていようがなんだろうが大抵の相手に勝てるようになるだろう。

だがその域まで行くには、まだ時間が掛かりそうだった。

葉月の剣は日本の刀を想定した剣術なので、こちらの剣を振るうには剣に合わせて動きを多少変えなければならないのだ。

日本刀は湾曲した片刃の“刀”だ。

ここの剣は真っ直ぐで両刃の“剣”。

両手で振るう者もいれば片手で扱う者もいる。

形はいわゆるバスタードソードに近い。

ただしあれほど長くはないので、背中ではなく普通に腰に佩く剣である。

ともかく、まだ慣れていない葉月としては、木剣とはいえ武器を持ったタイロンと稽古する勇氣はない。

また得意不得意は特になかった葉月だが、好き嫌いで言えば杖と無手が好きだった。

なのでタイロンに頼んで、剣の稽古の後にどちらかの稽古に付き合ってもらっているのだ。

杖や素手での組手をする時は木剣を稽古場の端に置いておくのだが、

こうして時々うつかりと片づけ忘れてしまつこともある。

トリスは葉月に甘いが、勘定部長のジェイルは怒るとねちねちとうるさい。

勘定部はくテーラン>の財務を司るが、総務としての側面も持つのだ。

つい昨日、葉月が振るつた木剣をタイロンが二本もへし折ってしまい、タイロンと二人揃ってくどくどとジェイルの説教をくらったばかりである。

失くしたと言えば、またあのねちっこい説教を聞く破目になる。

それははつきり言つて御免蒙りたい。

ジェイルは童顔で大人しそうな外見とは裏腹に、吝い屋で毒舌家なので団員たちから恐れられているのだ。

駆け足で辿りついた稽古場は、もうすぐ朝食が始まる時間なので誰もいなかった。

庭木に立てかけておいた木剣がそのままあったことに胸をなで下ろし、用具庫として使われている納屋の一つに片づける。

納屋から出ようとしたところで、外から二、三人の男たちの話声が聞こえた。

「あの嬢ちゃん坊ちゃんはどれだけでもつかねえ」

「すぐに根をあげて逃げ出すに決まってるあな」

「あんな子供たちをくテーラン>に入れようだなんて、親分の気まぐれにも困ったもんだよな」

「だよな」

「おめえはどれくらい持つと思う?」

「あと十日ってトコだろ」

「じゃあ俺はあと三日」

「ほんなら、俺は五日にしとくぜ」

笑いながら通り過ぎる声に、葉月はたったの二、三日で評価が変わるはずもないか、と嘆息する。

一緒に働く副長の直属の部下ですら、まだ馴染みきれていないのだ。

あまり顔を合わせる機会のない実行部の者の間では、あのような笑いと賭けの対象にしかない。

いや、“親分の気まぐれ”で済ませてくれているならマシな方だろう。

相手が子供だからと侮る者は、相手が子供ゆえに積極的に危害を加えようとはしないからだ。

本当に恐ろしいのは……。

そこで葉月はこんなところで悩んでいる場合ではないことを思い出した。

ここでもうつとしていっていると朝食を食いつぶされる可能性がある。

あれだけ動いたのだ。

朝食を抜くことなど考えられない。

葉月は慌てて納屋を飛び出した。

なんとか朝食にありつけた葉月は、自室に戻って女物の服に着替えた。

手櫛で整えただけだった髪にも櫛を入れ、丁寧に梳<sup>す</sup>いていく。

卓上には手の平ほどの大きさの鏡がある。

歪みの少ない質の良いものだ。

鏡は庶民でも普通に買える品だという。

あちらの世界では、確かこうした鏡が普及するのは近代になってからではなかっただろうか。

いまいちこの世界の文明の基準が分からないと思いながら、葉月は髪を結いあげた。

鏡を覗き込んで、ほつれがないかチェックする。

この顔を見るのもだいぶ慣れた。

エルフイムの神殿でこの姿を初めて見た時は、とてもショックを受けたのだが、人とは慣れる生き物らしい。

ふにふにと自分の頬をつついて、「はぁ」と息を吐く。

「若さつてすごいなあ」

化粧水も乳液もつけていないのにハリのある瑞々しい肌には感心してしまう。

子供の頃はそんなことは気にしていなかったのだが、一度大人になつてしまうと子供の肌のハリが羨ましくなるものだ。だからといって子供に戻りたかつたわけではないが。

そんなことを考えながらも手早く机の上を片づけ、手提げの中身を確認する。

インク壺につけペン、こちらの文字が並ぶ冊子、紐で綴じたノート。まさか今さら学校に行く破目になるとは思わなかった。

脳味噌は若返っているのだろうが、きちんと覚えられるか心配だ。パラパラと文字が印刷された冊子をめくってみても、まったく分からない。

この文は横書きで右から左に読むのだそうだ。左利きが多いとは気付いていたが、こういうところにも文化が表れている。

ちらつと聞いた話によると、表意文字と表音文字を組み合わせる使用するらしい。

その辺りは日本語と似たようなものだが、つまりそれだけ覚えるべき文字が多いということだ。

話し言葉は分かるのが、せめてもの救いだらう。

どうせなら文字も読めるようにしてくれば良かったのにと、ここにはいないエルフムに文句をつける。

もう一度手提げの中身を確認したところで、扉をノックする音が響いた。

「ねえさん、仕度出来ましたか？」

聞こえてきたジークの声に、葉月は手提げを掴んで部屋を出た。

「ごめん。遅くなった？」

「いえ、でもライナスさんより早く門まで行つて待つていないといけませんから」

学問所は新興地区内だが、＜テーラン＞の本拠地からは少し歩いたところにある。

初日だけは、ジークの指導役であるライナスが、学問所まで連れて行ってくれるのだそうだ。

早く行つて待つてゐるのが礼儀だろう。

「うん。そうだね。迎えに来てくれてありがとう」

葉月が笑顔で礼を言うと、ジークは照れたように笑う。

「実を言うと気がせいじまつて……。まともに教育を受けるのは初めてなんです。しかも子供が大勢集まつて勉強するんですね。ちよつとどういう感じなのか楽しみにしてるんです」

わくわくしている様子のジークに、葉月は微笑ましいものを見るように目を細めた。

葉月など、今さら学校なんて（正確には学問所だが）、という気持ちが強いが、ジークの前向きさは見習わなければならぬだろう。どうせやるのなら、嫌々やるより楽しんでやった方が覚えがいに決まっている。

何か知らないものを知ろうとする時、学ぶことの楽しさを知らないわけではないのだ。

ただ子供の素直さと容赦のなさは、集団になると手に負えないこともある。

学校の類は決して良いことばかりの場所ではないことも、葉月はよく知っていた。

ジークのように期待に胸を膨らませてばかりはられない。

水を差すのも悪いので、口に出しては言わないけれど。

だから代わりに願望を口にする。

「いいところだといいね」

「はい」

はにかむように笑うジークに、葉月もつられて笑顔になった。

#### 4・手痛い洗礼 4-1

多くの街道が通る都市、〈ウクジェナ〉の識字率が高い。

現市長が教育に力を入れていることもあり、市立の学校は一番街から十番街までに一校ずつあった。

この学校は日本でいうと小学校と中学校を足したような学校だ。

義務教育というものはないが、一番街から十番街の中流階級以上の家庭の子はこの市立校に通うのが普通である。

中流階級以上の家庭と言っても、その数は現代日本よりずっと少ない。

子供を働かせなくても余裕のある家を中流階級というのだ。

子供も立派な労働力である農家や個人商店、収入が不安定な職人などの人口は多いが、それらはどちらかといえば下流に属する。

かといって、そうした人々の識字率が低いかというとそうでもない。それは市中に数多くある学問所のおかげだ。

学問所では一人から二、三人の教師が読み書き計算、簡単な歴史などを教えてくれる。

謝礼は必要だが、市からある程度の補助金も出ているので、実際に払う金額はかなり少なくて済む。

時間の拘束も緩く、午前だけや午後だけ、週に二日三日だけ、といった通い方も出来るので、家の手伝いや奉公に出ている子供たちも通うことが出来るのだ。

ちなみに〈ウクジェナ〉の周りにある農村にも学問所があり、農閑期や雨の日には授業が開かれないものの、農民の識字率もそれなりに高かったりする。

新興地区は正式に〈ウクジェナ〉の街として認められていないので、市立校はない。

その代わりに新興地区で成功した商家が出資者となった大きな学問所も存在する。

葉月たちが通うことになったのは、その大きな学問所ではなく、個人商店の子や職人の子が通う小さな学問所だった。常時通っている子供は二十人前後で、教師も二人しかない学問所だ。

その小さな学問所は、今日からあの<テーラン>の副長の隠し子とその異父弟が入ってくるということで、ちょっとした騒ぎになっていた。

ルーシーは新興地区に店を構える総菜屋の娘である。

家の手伝いの傍ら、学問所に通っている。

学問所に通っているのは、だいたい六歳くらいから十四歳くらいの子供たちだ。

今年十四になるルーシーは最年長組に入る。

ルーシーは真面目でしっかり者な性分なので、女子のまとめ役を務めていた。

そのルーシーが小さな平屋建ての学問所に入ると、浮ついた空気が充満していた。

いつも賑やかで静かな時など人のいない夜だけというありさまだが、今日はいつも以上にうるさい。

不思議に思いながら教室の扉をあけると、更に賑やかな声が響いていた。

「何？ どうしたの？」

ルーシーの疑問は、ルーシーの姿を見て興奮気味に駆け寄って来た女の子によって解消される。

「ルーシー、おはよう！ ね？ 聞いた？」

「おはよう、ラナ。聞いたって何が？」

「あ、まだ聞いてないんだ」

ラナが嬉しそうに笑う。

女の子とは噂をまだ知らない子に教えるのが大好きな生き物なのだ。

「ちょっと、もったいぶらずに教えてよ」

ルーシーがラナの脇腹をつつついた。

ラナは体をよじってルーシーの手から逃げようとする。

「ちよっ、くすぐったっ。分かった、教えるからやめてえ」

「ホントくすぐったがりだね、ラナって。で？ 何なの？」

「うん。あのさ、<テーラン>の副長さんの隠し子が見つかったって話は知ってるよね？」

ラナがぴつと人差し指を立てて尋ねる。

ルーシーは三日前に飛び込んできた噂を思い出してうなづいた。

「そりゃあね。すごい噂になってるもん。あの人すごい色男だから隠し子の一人や二人いそうだけど、実際に見つかるなんてすごいよねえ。確か、ラナと同じ年の女の子じゃなかったっけ？」

「そうそう。その子。その子とその子の弟が、ウチの学問所に入るんだって！ しかも今日から！」

「ええっ」

驚きのあまり、ルーシーは大きな声をあげてしまった。

「え？ なんでウチ？ もっと大きな学問所があるじゃない」

この学問所は<テーラン>の本拠地の屋敷から特別近いわけでもない。

それに番号付街の市立校のようなしっかりした教育が受けられる大きな学問所もあるのだ。

<テーラン>の副長の娘ともなれば、そうした大きな学問所に行くものではないのだろうか。

「んー、それがね。ほら、<テーラン>ってさ、マイヤーさんトコとあんまり仲良くないじゃない？ マイヤーさんの息がかかってない学問所って、この辺りじゃここくらいだからじゃないかって」

ラナの説明に、ルーシーは納得顔でうなづいた。

「ああ、そうかも。ウチの先生って変わり者だから」

ラナの言うマイヤーさんとは、新興地区の中で最も成功している商家の主だ。

商売にはがめついが、慈善家としての顔も持つ。

<ウクジェナ>の街として認められていない新興地区であるから、新興地区にある学問所は当然市の補助金を受けられない。

その市の変わりに新興地区の学問所に寄付をしているのが、件のマイヤー氏だった。

マイヤー氏は裕福なので、個人的に警護の人間を何人も雇っている。つまり<テーラン>に頼る必要がないのだ。

おまけにその警護人たちの職業意識も高いものだから、あまりガラの良くない<テーラン>の者とのいざこざが何度かあった。

そういうわけで徹底的に敵対しているわけではないが、戦列の<テーラン>とマイヤー氏は仲がよろしいとはいえない関係にある。

<テーラン>の副長の娘を学問所にと考えた時に、そのマイヤー氏に関わりがない学問所を選ぶのは当然かも知れない。

「<テーラン>の副長の娘とその弟かあ。どんな子たちなんだろう」ルーシーはまだ噂の人物たちを直接見たことがなかった。

姉の方は副長の隠し子だと発覚するまでの二ヶ月、<テーラン>の下働きをしていたらしい。

おっとりしたちよつと世間知らずのお嬢さんという噂が流れている。弟の方は怪我がひどくてずっと療養していたとかで、あまり情報がなかった。

「いい子だといいよね。お姉ちゃんの方はあたしとは同い年だっていうから、仲良くしたいな」

ラナがわくわくした様子で言う。

ルーシーも噂の子たちに会うのが楽しみになっていた。

ラナが言うように、出来れば仲良くなりたい。

この学問所には女の子が少なく、ルーシーやラナ以外の女の子はまだ小さい子しかいないのだ。

同じ年頃の女の子が入るといっなのは、それだけで嬉しい。

嫌な子じゃなければ、もっと嬉しい。

学問所の女の子二人は、わくわくしながら新入りたちを待っていた。

#### 4・手痛い洗礼 4-2

ヒューゴは石工<sup>いしく</sup>の親方の三男坊である。

家は新興地区にあり、近くの学問所に通っている。

今年で十四になるヒューゴは、年の割に体が大きく喧嘩も強かったので、この辺りの子供たちのガキ大将のような存在だ。

そのヒューゴが学問所に入ると、なんだか騒がしい。

騒がしいのはいつものことだが、今日はその倍は騒がしかった。

「どうしたんだ？」

そのヒューゴの疑問に答えたのは、教室の扉を開けたヒューゴに寄って来た二人の男子だった。

「おはよ、ヒューゴ」

「ヒューゴさん、おはようございます」

「おはよ」

気の抜けたような顔をした男子がロイで、興奮しているのか頬を赤く染めた男子がジム。

ロイはヒューゴの友達で、ジムはヒューゴを慕っている子分的存在だ。

そのジムがきらきらした顔で、ヒューゴに尋ねてくる。

「ヒューゴさん、聞きました？」

「何が？」

主語のない問いかけに、ヒューゴの眉間にしわが寄った。

本人に悪気はないのだろうが、ジムはもったいぶるクセがある。

それを補足したのはロイだった。

「<テーラン>の副長の隠し子とその弟がウチの学問所に入らって話だよ」

「は？ 何で？」

ヒューゴは目を丸くした。

<テーラン>の副長の隠し子がいたという噂は、ヒューゴもちろ

ん知っていた。

良くも悪くも<テラン>は目立つ存在だ。

新興地区に住む男の子の憧れの的と言ってもいい。

知らないはずがない。

「なんでも二人とも世間知らずで文字も読めないらしいんですよ」

「で、マイヤーさんの息がかかってないこの学問所についてことらしい」

「ああ、なるほどな」

ヒューゴが納得したようにうなづいた。

あり得る話だ。

「でも、二人つてそんなに強いんですかね？」

ジムが首をかしげる。

戦列の<テラン>は、荒っぽいことを引きつけている組織だ。

組織に入るには、すごく腕っ節が強いとか、すごく頭がいいとか、何か特技があるとか、とにかく何かしらの才能がなくてはいけないと言われている。

そこに見習いとはいえ、女子供が入るとはただ事ではない。

それがいかに<テラン>の副長の隠し子とその弟であっても、だ。読み書きも出来ない世間知らずだというなら、すごく強いはずだとジムは言いたいのである。

「あ、俺、ちよつと聞いたことがある」

ロイが思い出したように言う。

「その姉弟が拾われたのつて野盗狩りの時らしいけど、そこに巻き込まれた弟の方が五人くらい倒しちゃったんだつて。すげえ強かつたつてキーファンのおっちゃんかウチの店で言つてた」

ちなみにキーファンは盗賊に襲われた商人の用心棒をしていた男で、ロイの家は酒場である。

ヒューゴはロイの話に「どうだかな」と懐疑的だ。

「キーファンのおっちゃん、酒飲むと話がでかくなるだろ。ホントかよ」

「ん、まあ、そうなんだけどさ、五人てのが微妙にホントっぽくねえ？」

「まあな。おっちゃんが話ふくらますと二十人とか三十人とか百人とか言うからなあ」

「いくつだっけか？ その弟って」

ロイが思い出そうと視線を宙にさまよわせていると、ジムがすかさず答える。

「十かそこらだったはずですよ。僕より二つも年下です」

「十か……」

ヒューゴとロイが、どうするよと視線で会話する。

男の子とは、互いの序列を気にする生き物なのである。

ヒューゴは学問所だけでなく、この辺り一帯の子供のガキ大将みたいなものだ。

それが十かそこらの子供に負けたとなると、面目まるつぶれである。

「あ、でも大怪我したとかで、まだ治りきってないみたいですよ！ 人数揃えればなんとか！」

そう言ったジムの頭に、ヒューゴとロイの拳骨が同時に落ちる。

「痛っ」

頭を抱えてうずくまるジム。

そのジムをヒューゴが怒鳴りつける。

「馬鹿か！ んな恥ずかしいこと出来つかよ。相手は俺より四つも年下なんだぞ！」

「ヒューゴの言う通り。そんなことしたら負けるより恥ずかしいだろ」

「す、すみません」

二人に怒られて、ジムが涙目で落ち込む。

ヒューゴもロイもそれには取り合わず、苦い顔でうなっている。

「どうする？」

「どうするも何も、とりあえずは様子見じゃない？」

「だよなあ」

学問所の男の子三人は、複雑な表情を浮かべながら新入りたちを待っていた。

その新入りたちが学問所の教師の後について教室に入ってきたのは、それから少しだけ後のことである。

#### 4・手痛い洗礼 5 - 1

その学問所は、葉月の感覚でいうと<テーラン>の屋敷から二十分ほど歩いたところにあつた。

<ウクジェナ>の北東に位置する新興地区は、大通りと細い路地が交錯した一種迷路のような土地だ。

大通りには商店が立ち並び、露天も出ていた。

その大通りから一步路地に入ってしまったえば、民家が並んで建っている。

道行く人も多いが、薄橙の肌に灰色の髪、灰青の瞳の者が大半だ。

<ウクジェナ>が属する<ゼルディア国>の住人は、この配色が普通のようなだった。

カーサやジークのような色を持つ者もいなくはないが、やはり少数派になる。

すいすい歩いて行くライナスの背中を追いながら、葉月たちは辺りの景色を覚えていく。

葉月も方向音痴ではないが、中世ヨーロッパのような中東の国のような、よく分からない様式の建物に馴染みがないせいもあって、覚えるので精いっぱいになる。

とても景色を楽しむ余裕はない。

ジークの方はというと、物珍しさに目を輝かせながらも、さりげなく辺りをうかがっていた。

怪我のせいでカーサに拾われてから、屋敷の敷地から出るのは今日が初めてである。

今日のことは楽しみにしていたのだが、元の稼業の性で辺りを見る目は普通の子供よりも鋭く油断がない。

そんな二人をちらりと振り返って、ライナスが口を開いた。

「入り組んでいるだろ？ 番号付は区画整理されているし石畳で舗装されているんだが、たんこぶの方はこの通り迷路みたいな上に舗

装もされていない。一応、それなりに秩序はあるんだけどな。これでも」

「すみません、たんこぶ……って何ですか？」

葉月が尋ねると、ライナスは「ああ」と笑う。

「嬢の方は聞いたことなかったか。坊には話したな？」

「はい。新興地区の別名ですね」

「そう。ここを新興地区なんて呼ぶヤツは、番号付に住んでいるヤツらだ。ここではたんこぶの方が通りがいい。＜ウクジエナ＞は中央区の周りに番号付がぐるりとあつて円を描いているんだが、七番街と八番街にまたがった部分が外側に大きくふくらんでいる。まるで“たんこぶ”みたいにな。それがここなんだ」

ライナスがにやつと笑う。

たんこぶという別名は揶揄する響きがあるが、外からそう呼ばれているのではなく、中の人間が自らそう呼ぶのは、自嘲とはまた違う。ライナスは笑っているし、道行く人の顔も明るい。

ここには活気がある。

地元に対する愛着をざつくばらんに言いあらわした呼称が、たんこぶなのである。

葉月もジークも、まだ番号付と呼ばれる市街地は見たことがない。

＜ウクジエナ＞には各番号付の街に一つずつ門があるが、新興地区から直接街の外へと出入りすることは出来ない。

通常は新興地区に接する七番街か八番街の門から出入りする。

七番街や八番街と新興地区の境は、通称“朱河”<sup>あけがわ</sup>と呼ばれる大通りである。

その名は大通りが通常の地面よりも赤茶けた土であることに由来する。

葉月たちが＜ウクジエナ＞へ入ったのは七番街の門からだが、怪我人は幌馬車に乗せられていたので、門も朱河も街の様子も見ることが出来なかったのだ。

ライナスは一見無愛想に見えるが、話が上手くしかも話題が豊富だ

った。

それに聞き入っている内に、学問所に着いてしまった。外から見るに、平屋の建物はそう広くもない。

教室が二部屋あるかないか、といったところだ。

中からは賑やかな声が聞こえてきている。

外からでも聞こえるくらいなので、中は相当うるさいのだろう。

「なんか賑やかだな。まあ、入るぞ」

ライナスが首をかしげながらも、さつさと中に入っていく。

「元気な子たちが集まってるんですね」

「二十人くらいだったっけ？　それだけ子供が集まればうるさいものでしょ」

ジークも葉月もそれぞれ感想を述べながら、ライナスの後についていく。

#### 4・手痛い洗礼 5・2

建物の中は短い廊下に、二つの扉があった。

賑やかな声が聞こえてくるのは手前の扉がある方で、扉の位置から考えるに奥の部屋よりも広く、建物面積の三分の二を占めているようだ。

ライナスは手前の扉を通り過ぎ、奥の扉をノックする。

普通の強さで扉を叩いたのだが、隣の音にかき消されてしまった。

ライナスは軽いため息について、もう一度今度は強めにノックする。

「ジャニス、坊と嬢を連れて来たぞ！」

すると、扉が内側に開き、ひよいと赤茶の髪がのぞいた。

「ああ、遅かったじゃない。待つてたのよ」

部屋から出てきた女性は小柄ではあるが、歳は二十代半ばだろう。

愛嬌のある顔にはそばかすが浮いており、丸眼鏡をかけていた。

一目見たら、ちょっと忘れそうにない存在感がある。

ジャニスは葉月とジークの顔を順に見て、にっこりと笑った。

「初めまして。私はジャニス。ここの教師をしてるの。本当はもう

一人教師がいるんだけど、今日は午後からの予定なのよ」

「初めまして、葉月と申します。よろしくお願い致します」

「初めまして、ジークです。よろしくお願いします」

二人も笑顔で挨拶を済ます。

「ええ。よろしくね」

ひとしきりの挨拶が済むと、その光景を満足げな顔で見ていたライナスが口を開いた。

「坊、嬢、俺はもう帰るが、帰りは二人で帰れるよな？」

ライナスの言葉に二人がうなづくと、

「ジャニス、二人を頼むぞ」

「はいはい。頼まれたわ」

「お前ら、ちゃんと勉強しろよ」

と言ってジークと葉月の肩を叩いて、ライナスは帰って行った。

「さて」

と、ライナスを見送ったジャニスが振り返る。

「じゃあ、教室に入りましょうか。さつきから皆あなたたちが来るのを待ってたのよ。うるさいでしょ？ 皆、興味津々だから何かとわずらわしいかも知れないけど、上手く相手をしてやってちょうだい」

そう言って、ジャニスがさつさと教室に入っていく。

経歴が曖昧な二人にとって、突っ込んだことを聞かれると何かとまづい。

一応、辻褄を合わせるために大雑把なところは打ち合わせてあるが、あとはそれぞれの機転とはぐらかす力に頼る他なかった。

葉月もジークも、それなりに経験を積んでいるので、そう悲観はしていなかったが油断も出来ない。

相手が子供だと思って油断していると痛い目に合うことは、よく分かっていた。

葉月がちらりとジークの方を見ると、ジークも葉月の方を見ていた。その顔にはこれからへの期待と葉月を気遣う色が浮かんでいた。

そんなジークに葉月はおつとりと笑って見せて言う。

「さて、頑張りますか」

「はい」

二人はお互いの拳を軽く合わせて、ジャニスの後について教室へと入って行った。

#### 4・手痛い洗礼 6-1

教室に入ると、好奇に満ちた目が二人に集中する。

皆、くテールランの副長の隠し子の話は知っているのだ。

「あれが」「へえ」「結構普通?」「でもすげー強えって」「えー」と、ほとんどの生徒たちが好奇心を抑えきれない様子である。

「はいはい。お喋りはそこまで! 今日から一緒に勉強する子たちを紹介するから黙んなさい!」

ざわめく生徒たちを一喝し、ジャニスが葉月たちの方を振り返る。

「挨拶と簡単な自己紹介をお願いね。この子たちの下世話な好奇心を完璧に満たす必要はないけど、痛くもない腹を探られるのは嫌でしょ? 一通りでいいから話してやって」

歯に衣着せぬ言い方に、葉月とジークは苦笑し、生徒たちはきまり悪そうな表情を浮かべる。

面白い先生だと思いつながら、葉月が口を開いた。

「初めまして、葉月といます。皆さんご存じだと思いましたが、現在には戦列のくテールランでお世話になっています。母と義父が亡くなったので、弟と一緒に私の実の父を捜す旅をしていました。いろいろあつて、しばらくくテールランで下働きをしていましたが、母の形見によってくテールランの副長が実の父だったと知り、私も驚いています。まさかあんなにかっこいい人だったとは思わなかったのです」

くすくすと女の子たち数人が葉月の言葉に笑った。

葉月もおつとりと笑って、話を続ける。

「父親似だったなら美人だったんでしょうけど、残念ながら母親似なので私自身はすこぶる普通です。この都市には来ただけで分からないことも多いので、いろいろと教えてもらえると助かります。よろしく願います」

葉月の挨拶が終わると、ぱちぱちと拍手が巻き起こる。

その拍手が鎮まるのを待つて、ジークが口を開いた。

「こんにちは。初めまして、ジークです。俺も<テールン>にお世話になっていて、先に挨拶した姉とは異父姉弟になります。なので俺の父は副長ではありません。あと一部では俺は親分の隠し子じゃないかという噂もあるそうですが、残念ながら違います」

「えー！？ 違うの！？」

前の方に座っていた八歳くらいの女の子が、素っ頓狂な声を上げる。その子ほどではないが、一部の生徒はざわざわと「違うの？」と言いつつ合っていた。

ジークの肌の色がカーサと同じであることと、首領直属になったことでそういう噂が出ているとライナスから聞いていたジークだが、ここまで広まっていたのかと苦笑する。

「はい。違います。親分が母親だという説は面白いですが、そうするとねえさんと血が繋がってないことになってしまいますし」

実際はつながってなどいないどころか、同じ世界の生まれでもないのだが、いけしゃあしゃあとジークは言い切った。

真面目でまっすぐな気性なジークではあるが、意外とその面の皮は厚い。

につこりと笑って、生徒たちの顔を見回す。

「俺にもねえさんにもいろいろな噂が付きまとうと思いますが、本人を見て判断してもらいたいと思います。よろしく願います」ジークの挨拶が終わると、またわつと拍手が起こった。

生徒たちは先ほどよりも好意的な目で葉月たちを見ていた。

第一印象というのはとても大事だ。

<テールン>の身内だからと威張るのではなく、隠し子とその弟だからと卑屈になるわけでもない。

自然な態度だった。

しかも、ぶつちやけ訊きたかったこともさら々と話されてしまったのだ。

<テールン>の団員はそれぞれの矜持があるので簡単には認めない

が、そうした利害関係のない生徒たちは、この境遇でさら々と自然体  
に振舞ってしまう二人を無意識にでも認めてしまっていた。  
少し普通ではないが、面白いヤツらだ、と。

#### 4・手痛い洗礼 6-2

ジャニスはそんな生徒たちと新たな生徒となった二人を見て、軽く眉を上げた。

確かに子供というのは、大人たちが思うほど愚かではない。

ただ、それを整理して折り合いをつける方法と表現する方法が未熟なだけだ。

しかし今のこの二人の挨拶はどうだろう。

こましゃくれた子というには、そつのない挨拶だった。

大人びた子というよりは、まるつきり大人のような……。

（まあ、＜テールラン＞に入れるような子たちだし、普通じゃないか。あそこに入るヤツで普通のヤツなんかいないものねえ）

ジャニスは妙な納得の仕方をして、思考を保留した。

二十一人になった生徒たちの相手をしなくてはならないからだ。

「ヒューゴ、ルーシー。ちょっと立ってくれる？」

名前を呼ばれた男女二人の生徒が立ち上がる。

男子生徒はがたがたと、女子生徒はすくつと立ち上がり、それがそれぞれの性格を表しているようだった。

「葉月、ジーク。男の子の方がヒューゴ、女の子の方がルーシーよ。この二人がウチの子たちのまとめ役なの。何かあったら二人に相談するといいわ」

そこでジャニスは一旦言葉を切り、ヒューゴたちの方を向いて続けた。

「あなたたち、面倒みてあげてね。……ヒューゴ」

「あんだよ」

名指しされたヒューゴが不機嫌そうに眉をひそめる。

ジャニスは腰に手をあてて、ぴしゃつと言いつつ放った。

「示しつきたいのは分かるけど、もめごとは教室外で解決してちょうだいよ。教室内に持ち込んだら叩きだすからね」

「うつせえ！　それが教師のせりふかよ！」

「目上を敬えないガキが何を言うんだか。それに教師は副業でやってるんだからいいのよ」

「自分だって敬われるような人格者じゃねえくせに。副業だろうがなんだろうが教師やってんのは違いねえだろ」

教師と生徒がいきなり軽口を叩き合い出した状況に、葉月とジークは目を丸くした。

険悪な雰囲気はないので本当に“軽口”なのだろうが、いきなりだと驚く。

他の生徒たちが『またか』という目で二人のやりとりを見ているところを見ると、どうやらこの光景は日常茶飯事のようにうだ。

ルーシーは呆れたように額に手をやり、口を開いた。

「先生、二人が困ってます。いつまでも立たせておくのは可哀想です。私も含めて」

生徒にぴしやりと怒られて、ジャニスがぴたっと止まる。

そして、どうでもよさそうな顔をして、ひらひらと手を振った。

「あー、それもそうね。あなたたち座っていいわ。葉月はそっち、ジークはそこね」

教室には二人掛けの机と椅子が四台ずつ三列、合計十二台並んでいる。

窓際の一番後ろの机は誰も座っていない。

あと空いているのは、廊下側の三番目に一席と真ん中の二番目に一席だ。

ジャニスが指さしたのは、葉月が廊下側で真ん中がジークである。人数からするともう一席空きがあると思われるが、窓側の三番目の机は一人の男子生徒が占領していた。

縦にも横にも大きい彼と一緒に座るには、針金のように細くないと無理だろう。

ジャニスは二人が席に着くのを待って、紙束を配り出した。

「新入りたち以外の今日の課題を配るわよ。こらっ、そこ、ぶーた

れない。課題増やすよ」

じやかじやか一人ずつに課題を渡しながら、ジャニスが机を巡っていく。

どうやら個人個人違う課題のようだ。

二十人ちよつとはいえ、年も進度も違う生徒たちに合わせて課題を作成するのは面倒だろう。

口で言うほど、彼女は教師に向いていないわけではないらしい。

だが大量の課題を出される生徒の方は、その熱心さにうんざりしているようだ。

葉月の隣に座るラナも、渡された課題にため息をついている。

葉月が「いい先生みたいね」と言うと、「ええっ」と小声ではあるが驚いた声をあげた。

「えー、どうして？ 葉月もあの先生の態度は見てたでしょ？ そりゃあ悪い先生とまでは言わないけど」

眉間にしわを寄せて小声で抗議するラナに、葉月は少し困ったように笑って答える。

「だって、生徒一人一人に課題を作ってるんでしょう？ それに変に偉ぶってもないし、私たちに変に気を遣わないしね。いい先生だと思うよ」

「ええー」

納得出来ない様子のラナが抗議の声をあげると、その頭をジャニスが丸めた冊子でばかりと叩いた。

「うるさい。課題に対するおしゃべりならいいけど、教師批判は本人がいないトコでやって」

ぶくうつとほつぺたをふくらませるラナに、葉月が「ごめんね」と謝った。

「私が話しかけたせいで叱られちゃって」

「むう。そうさっさと謝られちゃうと怒れないじゃん」

「うん、ごめんね。許して」

笑顔で謝る葉月に、ラナはぷつと吹き出して小さく笑った。

「うん。いいよ。許してあげる。葉月って面白いね」

「許してくれてありがとう。でも面白いつて言われるとちょっと複雑かな」

葉月が苦笑いを浮かべる。

面白くないと敬遠されたり嫌われたりするよりはいいが、“面白い人”というレッテルを貼られるとなると、少し複雑な気分だ。相手は意識の上では一回り以上年下の女の子なのだ。

中身だけとはいえ、大人としてどうだろうという話になる。

だが、それを知っているのは自分とジークのみなので、まあ、いいか、と葉月は納得することにした。

#### 4・手痛い洗礼 6-3

教壇まで戻って来たジャニスは、教卓に両手をつき、葉月とジークの名を呼んだ。

「二人は読み書きと計算を最優先ってライナスには言われたけど、それよりもこのくウクジェナ>という街のことを先に知ってもらった方がいいと思うのよね。あなたたちはどのくらいこの街のことを知ってる？ 葉月。あ、座ったままでいいわ」

指名を受けた葉月は、今までに聞いた話を思い出しながら口を開いた。

「そう多くのことは知りません。くゼルディア国>の都市であること。中央区と一から十までの番号付街、そしてこの新興地区……ええと、たんこぶから成り立つこと。貿易で栄えていること。大雑把に言ってしまうば、そのくらいですね」

「うん。葉月の言ったことはだいたい合ってる。じゃあ、ジーク。この街はどちらの神様が造った街でしょう？」

指名されたジークは、目をまたたかせてその質問を繰り返した。

「どちらの神様がこの街を造ったか、ですか……？」

「そうよ。どちらか知らない？ 葉月は？」

質問を振られた葉月も困ったように首を傾げた。

「ええ、ちよつと分かりません」

二人が答えられないと知っても、ジャニスは落胆した素振りもなくうなづいた。

「まあ、そんなに意識しないところだからね。くゼルディア国>は主神がゼルダで、副神がエルフイムなわけだけど、くウクジェナ>を造ったのはエルフイムの方ね」

ジャニスがさらつと言ったことの意味が理解出来ず、葉月は手をあげた。

「すみません。ちよつと意味がよく分からなかったんですけど、そ

ういう伝説があるんですか？」

葉月の質問に、ジャンスが目を見開き、驚愕の表情を浮かべる。それどころか、ぺちやくちゃとうるさかった教室内がシーンと静まり返っていた。

皆、信じられないといった表情で葉月のことを見つめていた。

何かまずい質問をしたことを悟り、葉月は冷や汗をかいた。

ジークもこの沈黙の意味がわからず、困った顔で葉月と周りを見回している。

ジャンスはおそろおそろと言った様子で、口を開いた。

「ごめん、葉月。それ、本気で言ってるの？」

どうやら知っていないと馬鹿を通り越して、正気を疑われる類の常識らしい。

葉月はおつとりと笑って答えた。

「嫌だ。もちろん冗談ですよ」

途端に張りつめていた空気が一斉に弛ゆるんだ。

ジャンスは、はあっと深いため息をつく。

「そうよね。国や街は神様が造るものだって、どんな小さな子だって知ってるわよね。ちよつと葉月、教師をからかうもんじゃないわよ」

「すみません、先生」

申し訳なさそうに謝りながら、葉月はこの世界の常識の一つを頭に叩き込む。

まさかこの常識がこの世界の闇を構成するものの一つだとは、この時の葉月とジークは、露ほども気付かなかった。

#### 4・手痛い洗礼 7-1

その後はひやりとすることもなく、葉月たちは学問所の初日を無事に乗り切った。

とはいえ、葉月たちが学問所で学ぶのは午前中だけなので、そうたいたことはしていない。

葉月とジークはまったく文字が読めないどころか、この文字を初めて見たのが二ヶ月ちよつと前だ。

まずは文字の種類を覚えることから始まった。

<ゼルディア国>で公用されている文字は表意文字と表音文字があるが、とりあえず表音文字からだ。

この表音文字は副神のエルフイムから名を取って、エレイムという。このひらがなよりはやや少ない四十三文字の書きとりをして、いくつかの単語を読んだり書いたりした。

まだ覚えられた文字は十程度だが、このエレイムは規則性があるので、全て覚えるのもそう難しくないだろう。

意外と面白かったのは、午前が終わる間際の音読の時間だ。

基本的には個別に課題をこなし、ジャニスがそれを見て回る方式で授業は成り立っていたのだが、この音読の時間だけは全員参加だった。

一人一節ずつ順番に当てられ、冊子の話を読みあげていく。

葉月とジークはまだ文字が読めないで今のところ免除されているが、六歳から十四歳までの子全員が同じ話を順番に音読するのを聞いていると、年齢や男女差にもよって声の大きさや調子が皆違ふことに気付く。

葉月は懐かしく、ジークは物珍しく思いながら、音読の時間を終えた。

もちろん、目では冊子の文字を追いつながらである。

葉月は横書きであれば左から右へ読むのが染みついているので、右

から左に読むのは少々混乱する。

初日から読みこなせるわけではないが、今までの常識と違った常識を身につけるのは、意外と骨が折れそうだった。

<テーラン>の屋敷に帰る道すがら、葉月はジークに学問所の印象を尋ねてみた。

「どう？ 初めての集団教育の感想は？」

「面白いですね」

につこり笑って、ジークが答える。

「小さい子から割と大きい子まで、並んで座っている光景というのは初めてみました」

「ああ、それは私もあんまり見たことなかったかな。私の生まれたところはだいたい同じ年代で分けてるから。余程の田舎で子供の数が少ないとかなら別なんだけど」

大通りは人通りが多く、賑やかだ。

他人の会話をわざわざ訊いている者などいないのだが、用心のため相手に聞こえる音量ぎりぎりで会話する。

「授業中に教室内を駆け回っている子がいないのが驚きです」

「教室内で暴れると先生が怖いってのもあるでしょうけど、上の子たちが面倒をよくみてるからかもね。すぐく賑やかだけど」

「元気があって良いと思いますよ。子供は元気があるのが一番でしょう」

「確かにね」

自分たちも今は子供になっていることも忘れ、妙に年寄りくさい感想を述べ合っていた二人だったが、あることに気がつき口をつぐむ。しばしの沈黙の後、先に口を開いたのは葉月だった。

「ねえ、ジーク」

「はい」

「何人？」

葉月は後ろを振り返らずに、短く問うた。

ジークも前を向いたまま、その問いに答える。

「子犬が三。野良犬が五ですね」

葉月の眉間に薄くしわが寄る。

「子犬と野良犬……ね。私はなんとなくしか分からなかったんだけど、当たりか。ジークはさすがだね。こんなに人通りが多いのに」

「人通りが多いからこそ、不自然なところが分かるんですよ。元の商売柄、そうした不自然を放っておけないんです。命に関わりますから」

ジークは苦笑しながらもさりとて言う。

「で、どうしましょうか、ねえさん」

その短い問いかけに、多分に物騒な意味合いが込められていることが分からない葉月ではない。

子犬の方とはかく、野良犬の方は放っておくよりさつさと片付けておいた方がいい気がする。

ただし、その“片づける”の度合いが葉月とジークではかなり差があるのだろうか。

「位置関係はどうなってるの？」

「野良犬はバラバラですけど、それなりに距離を置いて俺たちを囲んでいます。前方にもいますよ。子犬はまとまって後ろに」

「子犬だけまけると思う？」

「そうですね……。どうやらやる気があるのは一人だけで、他の二人はあまりやる気がないようですからなんとか。……子犬を巻き込むのは気が引けます」

「そうね。問題は私たちに土地勘がないってところか」

新興地区は何しろ入り組んでいる迷路みたいな土地である。

路地でまこうにも、新入りの自分たちの方が迷子になるのが落ちだろう。

「あんまり時間かけると、お昼食べ損ねるし、午後の仕事にも間に合わないしね」

「そうですね。では、この大通りで子犬をまきましよう。あそこの人だかりを利用します」

ジークの視線の先には露天が並んでいる一角がある。

なにやらもめごとがあつたらしく、大勢の人が取り囲んでいた。

「いけいけいけ」だの「やっちまえ！」だの、無責任な野次が飛びかっている。

あそこに紛れば、子犬たちは諦めるだろう。

野良犬もまく可能性もあるが、それならそれで構わない。

全員まいてしまつたら、その程度の輩だつたということが分かる。

葉月もジークもこの世界で個別に恨みを買つた覚えも時間もないので、どうせ目的はだいたい絞られているのだ。

「それじゃあ、行こうか」

おつとりと笑つて、葉月が左手を差し出した。

葉月はジークほど気配が読めないし、体さばきも上手くない。

あの人ごみでは子犬をまくより先に、ばらばらになつてしまつたろう。

少し気恥かしいが、手をつないだ方がいい。

ジークもそれが分かつてるので、照れながらその手をとる。

「はい」

葉月はジークに手を引かれるように、人だかりへと入って行つた。

#### 4・手痛い洗礼 7-2

「なあ、止めとこうぜ」

うんざり顔で、ロイが隣の二人に話しかけた。

そう言われた内の一人、ヒューゴも微妙そうな顔で、

「そうだな」

と答えたのだが、残りの一人であるジムは、先輩たちのやる気のなさにはポコポコ怒っている。

「何言ってるんです、ロイさん。ヒューゴさんまで……。あの生意気な新入りをのさばらしておくつもりなんですか！」

噂の新入りたちは、あっと言う間に皆に受け入れられてしまった。だが、ジムはそれが気に入らない。

特に弟の方はクセだかなんだか知らないが、子供のくせに敬語で話すのである。

妙に余裕があるのもむかつく。

おまけにあいつはよりにもよって、ジムがちょっと可愛いな、と思っているミサの隣の席に座りがやったのだ。

指定したのは先生だが、羨まし……。いや、生意気だ。

それなのにヒューゴもロイも、あの新入りをシメようとは思わないらしい。

それがジムにとっては不思議で不満で仕方がない。

こうしてあの二人の後をつけていて、適当なところでシメてやろうというジムの案に、二人は難色を示している。

確かに十歳相手に少し情けないかもしれないが、“ちつじょ”とやらを守るためだ。

それなのに……。

「なんでヒューゴさんもロイさんも、そんなにノンキなんですか！  
？ 見失っちゃいますよ！」

露天で串焼を買おうとしていた二人の服を引っ張って止めようとす

るジム。

うんざりした顔でヒューゴとロイが振り返った。

「やるんなら一人でやれよ」

「そうそう。俺たちを巻き込まないでさ」

「お二人はあいつが生意気だと思わないんですか！」

必死に言いつのるジムの頭をぼんぼんと撫でて、ロイが言う。

「落ち着きなつて。俺は生意気とは思わなかったよ。というか、そういう次元じゃない。ね、ヒューゴ」

話を振られたヒューゴも、深くうなづいてロイに同意する。

「ああ、あれはヤバイ。こんなことを言うのもなんだが、勝てる気がしねえよ」

ヒューゴは何も腕っ節だけでガキ大将をやっているわけではない。今でこそ体も大きくなつたが、小さな頃から自分より大きく強い子供と喧嘩してきたのだ。

それなりに頭を使うし、勘もいい。

その相棒であるロイにしても、家が酒場ということもあり、人を見る目がある。

ヒューゴはなんとなく、あの姉弟には手を出さない方がいい、と感じていたし、ロイは二人の言動から侮つてはいけない相手だということを感じていた。

だが、ジムにはそれが分からない。

ジムにしてみれば、ジークは年下の生意気なガキなのである。

そんなガキをのさばらせているヒューゴもロイも、腑抜けにしか思えない。

「もういいです！ 俺一人でもシメシつけてきますから！」

真っ赤な顔で走り出そうとしたジムの、ロイが羽交い締めして止める。

「落ち着けって言ってんだろ、ばか」

「あれはヤバイつつつてんだろが。人の話を聞け」

ヒューゴにデコピンされて目の端に涙を浮かべながらも、ジムはじ

たばたと暴れている。

「放して下さい！ 見失っちゃいます！」

ちょうど、姉弟が手をつないで、人だかりの中へ走っていくところだった。

それを見て焦ったジムは、思いっきり飛び跳ね、ロイに頭突きを食らわす。

「痛ったあ」

ロイが思わず緩めた手を振り切って、ジムは走り出した。

「待て！ おい！ ジム！」

ヒューゴの声が追ってくるのを背中であきながら、ジムは人だかりの中へと突っ込んでいった。

#### 4・手痛い洗礼 8 - 1

人ごみを抜けた葉月とジークは、大通りから路地へと入って行った。

その路地裏は、少し行くと人の気配はまったくなくなっている。そこでぴたりと足を止めると、ばたばたと四人の男たちが追ってきた。

どうやら一人だけ脱落したらしい。

四人ともゴロツキといった言葉が相応しい男たちだ。

ただし、全員剣は佩<sup>は</sup>いていない。

懐に短剣くらいはあるかも知れないが、少なくとも見た目は丸腰である。

葉月はそんな男たちを一瞥<sup>いちべつ</sup>し、ひそかに安堵した。

この男たちはくテールラン>の一員ではない。

葉月もジークも二ヶ月の間にだいたいの団員たちの顔は覚えている。くテールラン>の団員たちのだいたいは、見た目がチンピラっぽかったりゴロツキっぽかったりするが、この男たちとは格が違う。

団員でないならば遠慮はいらないが、一応その目的を最初に聞いただしておきたい。

先走りそうになっているジークの手を引き、葉月は男たちに問いかけた。

「私たちに何の御用ですか？」

一歩踏み出たのは、派手な服を着崩した男だった。

身を持ち崩した、ヒモでもやっていそうな退廃的な雰囲気がある。大きく分類すればブノワと同じような人種なのだろうが、お父様の足元にも及ばないな、と葉月は決めつけた。

派手な服の男は葉月たちをじろじろと見回し、鼻で嗤<sup>わら</sup>って言った。

「お前たちがくテールラン>の副長の隠し子とその弟だな？」

その態度と問いかけに問いで答えられ、葉月の眉間にしわが寄る。

「ええ、そうです。それで？　<テーラン>の副長の隠し子である私とその弟に何の御用ですか？」

だが、派手な服の男は葉月の問いに直接答えず、笑いながら後ろの男たちを振り返る。

「聞いたか？　何の御用ですかだってよ。こんなガキ共の方が俺らよりいいなんて、<テーラン>も落ちぶれたもんだぜ」

男の言葉に、葉月はやっぱり、とため息をついた。

葉月たちを狙う理由があるとしたら、それは二つしかない。

あの盗賊たちの生き残りか、葉月たちが<テーラン>に入ることの快く思わない者が、そのどちらかだ。

丸腰な時点で後者だろうとは思っていたが、その通りだった。

おそらく、<テーラン>に入団しようとして、門前払いを食った口なのだろう。

入団許可の権限は首領と副長が持つが、二人が会うほどもない輩は、配下たちによって追い返されるのだ。

最近は団員の数も増えたので、そう簡単には入れなくなっているらしい。

首領と副長に会える条件が“タイロンを倒すこと”だということから、余程の猛者でなければ難しい。

それなのに葉月やジークが<テーラン>に入ってしまったのだから、気持ちは分らないではない。

ただし、身に降りかかる火の粉は払わねばならないだろう。

今後の予防も兼ねて、だ。

「ジーク。あなた、武器持つてる？」

葉月はわざと相手方に聞こえる声量でジークに尋ねる。

ジークは葉月の意図が分からないまでも、同じような声量で答えた。

「はい。短剣を」

「じゃあ、それは使わなくていいよ。素手で。出来る？」

「はい」

「殺しちゃダメよ。痛めつける程度に。腕の一本くらいはいいけど、

内臓は止めてあげられる？」

重ねての注文に、ジークは困ったように葉月を見る。

「殺さないで、痛めつける程度、ですか？」

ジークの常識からすれば、こうした輩を生かしておく意味が分からない。

葉月が血や殺生に慣れていないことは分かっているが、禍根は断っておく方がいいと思っている。

納得がいかない様子のジークに、葉月は諭すように言う。

「ジーク。殺してしまったら始末が大変でしょ。私たちは流れ者じゃない。ここに住もうとしてるんだから、必要以上に目立つもんじやないんだよ」

実際、男たちにしても、葉月たちを殺そうとかいう気はないだろう。ただ痛めつけて、自分たちの鬱憤<sup>うっぷん</sup>を晴らしたいのだ。

<テーラン>の副長の娘に手を出そうとしているところで、頭は良くなさそうだが、その程度で殺そうなどは考えていない。丸腰なのがその証拠である。

葉月からしてみると、これは単なる喧嘩だ。

喧嘩で殺すの殺さないのというのは馬鹿馬鹿しい。

それに路地裏とはいえ、街中で惨劇になると住民の心象に関わってくる。

<テーラン>は自警集団だ。

その一員が自ら秩序を乱すとなると、風当たりは強いだろう。

この辺りのことは、あとできちんとジークに話しておかないといけない、と葉月は心に留める。

平然と物騒な会話をしている葉月とジークに馬鹿にされたと思った男たちは、カンカンに怒っていた。

「んだと、コルア！ ガキ共がなめるのも大概にしとけよ！」

が、葉月はそんな男たちを無視して、ジークに再度問いかけた。

「ジーク、出来る？」

重ねて言われたジークは、しびしびといった様子でうなづいた。

「ねえさんがそう言うのなら……」

「うん。じゃあ、さっさと片づけよっか」

食後の食器でも片付けるかのように、気楽に葉月が言う。殺し合いは苦手だが、喧嘩なら慣れたものだ。

しかも丸腰の雑魚が四人。

ジークと二人なら、朝飯前ならぬ昼飯前である。

葉月の心配は自分たちがやられることなく、ジークがやり過ぎないか、という点だけだった。

そして、勝負はあつと言う間に決まった。

挑発的な葉月の言葉に頭に血が上った男たちは、連携も何もなく突っ込んできた。

先頭の派手な服の男の拳をかわした葉月は、その勢いを利用し男の腕を取って投げ飛ばす。

そして振り返ると、既に残りの三人は地に伏してうめいていた。

その速さに、街道での獣のような戦いっぷりを知っている葉月も驚く。

「ジーク。体は大丈夫？」

また無理に体を動かしたのではないかと危惧する葉月に、ジークは笑って答えた。

「この程度なら大丈夫ですよ。この体の動かし方もだいぶ分かってきました」

「ならいいんだけど」

汗ひとつかいていないジークに、葉月はそつと安堵の笑みを浮かべた。

#### 4・手痛い洗礼 8-2

「あー、もう終わっちゃったのか。つまんねーな」

聞き覚えがある声に顔を向けると、<テーラン>実行部第四隊長のケヴィンが何やら引きずりながらこちらへと歩いてきていた。

それを見てジークがさりげなく、葉月の斜め前へ移る。

ケヴィンがどさつと投げ出したものを見て、葉月が眉をひそめた。

「大通りの喧嘩の仲裁なんてくだらねー仕事だと思ってたなら、何やら怪しいヤツがいるだろ。問い詰めてみたらウチのお嬢様と坊ちゃんをシメ上げる算段だったっていうじゃねーか。面白そうだから探してたんだが、ちと遅かったみてーだな。お前がさっさと吐かねーからだぞ」

口とは逆に、にやにや笑いながら投げ出したものを蹴り飛ばすケヴィン。

うめいているので死んではないようだが、顔面はぐちゃぐちゃにつぶれている。

おそらく、男たちの仲間のはぐれた一人だろう。

はぐれた上に遭遇した相手がケヴィンだ。

相当に運がない。

そんな哀れな男を踏み越えて、ケヴィンが一步、葉月たちに近づいた。

その顔には好戦的な笑みが浮かんでいる。

「こんな雑魚相手じゃ、物足りねーだろ？ 坊ちゃん。俺と遊ぶか？」

葉月はケヴィンが苦手だし嫌いだったが、ジークもケヴィンに対してかなりの警戒心を抱いている。

ライナスからもケヴィンは滅法強く頭も切れるが、その分頭のねじが何本かぶっ飛んでいる男だから注意しろと言われていた。

何が面白いのか、この男は自分たちによく絡んでくる。

元の世界にも頭のねじが何本かぶっ飛んでいる輩など掃いて捨てるほどいたが、葉月に害を成すというのなら放つてはおけない。

葉月からはあからさまに被害がひどくない限り相手にするな、と言われていたが、それで収まるジークではなかった。

先ほどのゴロツキとの喧嘩よりも余程ぴりぴりした殺気に満ちた空気を感じ、葉月はわざと大げさなため息をつく。

「ケヴィン隊長。弟を挑発するのは止めて下さいませんか？」

「お嬢様は黙ってな。俺は坊ちゃんと遊ぼうってんだぜ」

「ねえさん、危ないです。下がっていてください」

ケヴィンに睨まれ、ジークに後ろに押され、葉月はたたらを踏んだ。まだ殺気を向けられるのは慣れない。

脂汗がにじみ、喉がひゅつと鳴った。

息が苦しい。

無意識の内に両手で胸を押さえていた。

意識して呼吸しないとたちまち息が止まる。

ジークが懷から二振りの短刀を取り出し、ケヴィンが腰の剣に手をかけた。

既に葉月に止められる雰囲気ではない。

葉月からしてみれば、無益という他ない戦いがまさに始まるうとしていたその時、路地裏に無駄にでかいだみ声が響いた。

「ああっ、やっと見つけた。まったく何遊んでるんでやすか、隊長。いきなり居なくなんでえでくって何度言やあわかるんですかい」

現れたのは額に傷がある三十をいくつか過ぎた辺りの男。

葉月にも見覚えがあるケヴィンの部下だ。

「邪魔すんじゃないよ、カロール。俺は坊ちゃんと遊んでんだ」

物騒な気配をまき散らしたまま、ケヴィンが応じる。

ジークも無言のままケヴィンをにらみつけており、構えを解こうとはしない。

カロールは殺気立つ二人に、はあっと大きなため息をつく。

先ほどの葉月と同じ動作だが、わざとだった葉月とは違い、カロール

は心底めんどくさいというようにぼりぼりと頭をかいた。

「隊長。アンタ自らめんどくさくしてどうしやすか。遊び足なくてイライラしてんのはわかりやすが、やることやってからにしてくださいよ。第三のオズワルド隊長が例の件で呼びでやんす」

オズワルドの名を聞いた途端、うんざりした様子でケヴィンが殺気を引つ込めた。

「えー、あの熱血石頭が？ お前代わりに聞いとけよ」

「駄目に決まってるでしょう。我儘言わんでください」

ぴしゃつと言い切ったカロルに、ケヴィンはぶつぶつ文句を言う。

「何の為の副隊長だっつーの」

「我儘言う隊長を引つ張ってく為でしょう。ウチの隊の場合。さ、お早く」

ケヴィンに負けずうんざりした様子のカロルが腰に手を当てて、上司を追い立てる。

そこでカロルは思い出したように、構えを解いたジークと二人が衝突せずほっとしている葉月を振り返った。

「ああ、お坊ちゃんにお嬢様。ウチの隊長が大人げなくてすいやせんね。ついでにきゃんきゃんと元気のいい子犬と、それよかはちと落ち着いた子犬を二匹保護してるんでやすが、心当たりはおありですかい？」

カロルの問いかけに、葉月がうなづく。

「はい。おそらく私たちの級友です」

カロルが言うのは、先ほどまいた子犬たちだろう。

まいたはいいが、どうやら乱闘に巻き込まれたらしい。

こちらに巻き込むよりはいいが、少し責任を感じてしまう。

子犬たちの正体は、やたらとジークをにらんでいたあの少年とその先輩たちだろうと推測がつく。

こちらを穩便になだめるのも、少々面倒くさそうだ。

「あ、そーだ」

カロルに追い立てられ、大通りに向かっていたケヴィンが振り返った。

また何か因縁をつけてくるのかと思わず身構えた葉月たちに、軽い調子で問いかける。

「お前ら、<ゼルダの使徒>って知ってるか？」

「<ゼルダの使徒>……ですか？ ゼルダってこの国の主神ですよ  
ね？ すみません、それは一般常識ですか？」

葉月が知ってる？ というように隣を見る。

その視線を受けて、ジークが首を横に振った。

揃って首をかしげる姉弟に、ケヴィンは肩をすくめて踵きびすを返した。

「知らねーならいいや。じゃあな、坊ちゃん、お嬢様。また遊ぼうぜ」

そう言い残して、ケヴィンはカロルにせつつかれながら去って行った。

それを見送る形になったジークは、困った顔で葉月を見上げる。

「<ゼルダの使徒>って、結局何なんでしょうか？」

「さあ？ あの反応だと一般常識ではなさそうだったけど……」

もやもやとすっきりしない気持ちを抱え、葉月も困ったように頬に手を当てる。

姉弟は揃ってため息をつき、やはりケヴィンはろくでもない、という意見で一致した。

## 5・切り裂きし者 1 - 1

今日もまた、陽が沈もうとしている。

黄昏時だ。

辺りが薄暗くなり、「誰<sup>た</sup>そ彼<sup>かれ</sup>」と問いかける時。

家路を急ぐ人々が道々を行き、家々や宿、食堂から幸せの象徴でもある飯の匂いが漂う。

昼と夜が混じり合う時。

それは、逢う魔が時でもある時。

ぬるい風が吹き抜ける。

飯の匂いに微かに混じる血の臭い。

大通りのざわめきにかき消された路地裏の悲鳴。

助けと慈悲を求める手に振り下ろされるは冷たい鉄の刃。

死にゆく者は何故自分が殺されねばならぬのか理解することもなく息絶えた。

それを知る者はただ冷たい目で骸<sup>むくろ</sup>を見下ろすのみ。

カラスの鳴き声は何重にも重なり響く中、実行者は静かに立ち去る。序曲はとうに奏でられ始めていたのだった。

さア、今日も狩りを始めよう。

世界と神に害なす者を狩りに行こう。

この世界は生まれ変わらねばならぬ。

失敗作を葬り去って、完璧な世界を創るのだ。

さア、異端者をあぶり出そう。

我らの世界は我らで紡ごう。

他人の手など借りぬ。

さア、皆の者、立ち上げれ。

我らは神の使徒。

悪を正すことを知る者。

さア、愚かな民よ、目を覺ませ。

我らは神の子。

正常な世界を望む者。

さア、さア、さア。

我らの世界は、我らが手で  
偉大なる神の望むまにまに。

## 5・切り裂きし者 2 - 1

夕暮れ時の路地を一人の少女が歩いている。

お使いにでも出ていたのか、その腕には籠を抱えていた。

その歩みは早く、軽く駆け足になっている。

少女は時折、不安げな顔で後ろを振り返る。

まるで、何かに怯えているかのように。

自分の長い影が伸びる路地を振り返り、誰もいないことに安堵と不安の両方を覚えた少女は、前を向いて足を止めた。

曲がり角から、怪しい男が現れたからだ。

目深に外套のフードをかぶった男は、にたにたと笑いながら少女に近づいてくる。

少女は籠を抱きしめ、後ずさった。

怪しい男は怯える少女に嗜虐的な喜びを感じ、ゆつくりと、だが確実に少女との距離を詰めていった。

そして、ことに及ぼうとしたその時、路地裏に野太い声が響いた。

「おらっ、取り押さえる！」

その声と同時に、辺りからわらわらと男たちが飛び出してきて、怪しい男を取り押さえた。

「お嬢、大丈夫か？」

飛び出してきた中でもひと際大柄な男が、少女に駆け寄る。

少女は先ほどまでの怯えた顔ではなく、おっとりとして笑ってうなづいた。

「はい、タイロン。大丈夫ですよ」

何が起こったのか呆然とする男は、ぐいっとフードを取り去られ、両膝について顔をあげさせられる。

その拍子に、外套の前がはだけた。

あり大抵に言うと、男は外套の他に何も身につけていなかった。下半身も丸出しである。

路地裏の 때가、一瞬止まった。

そして、男を取り押さえていた内の一人が、がっかりしたようにつぶやく。

「なんだ、変態か……」

「変態だな」

「ちつ、紛らわしいことしやがつて」

取り押さえていた男たちは、口々に不満を言い、あまつさえ取り押さえていた男の腕を放した。

こんなのにつ構っている暇はねえ、とでも言うようだ。

露出狂は何故自分が解放されたのか分からなかったが、好機とばかりに目的であった少女の前に踊り出て、外套の前をがばつと開いた。羞恥に染まる顔や、悲鳴を期待していた露出狂であったが、少女が浮かべたのは薄ら笑いであり、その口から出たのは「で？」という言葉だけであった。

露出狂は少女の予想外の反応に戸惑い、一旦外套の前を閉じてから、もう一度ばつと広げて見せた。

少女はちらりと男のモノを見て、「だから？」と冷たい声で言い放った。

その反応に戸惑ったのは少女の傍らに立つ大柄の男も同様なようで、「お、お嬢？」

と、薄ら笑いを浮かべている少女の顔を伺う。

少女の目は、とても冷ややかだった。

「その汚らしくて粗末なモノを見せつけて、どうしようって言うの？」

「え……あの……」

自分より絶対的に弱者であるはずの少女の口から飛び出す侮蔑ぶべつの言葉に、露出狂は外套の前を開いたまま固まる。

「その貧相な体を見せつけて優越感に浸るの？ 幼気いたいけな乙女に一生残る心の傷を負わせて？」

「そ、その……」

蛇ににらまれた蛙の心境というのは、こういうことをいうのだろう  
か。

露出狂は冷や汗をかきながら、自分の不運を嘆いた。

「こういうのを社会のゴミとか害虫って言うのよね。いえ、人にと  
っては害虫でも自然としては必要な存在なんだもの。こんなクズと  
一緒にしたら、虫が可哀想か。こういう底辺の存在自体が害悪で何  
の役にも立たないカスを表す言葉が見つからないなんて、自分の語  
彙のなさが情けないわ。ああ、しかも、こういうヘドロみたいなの  
に限って、再犯するのよね」

「あ、あ、あ」

露出狂の目にはうつすらと涙が浮かんでいたが、少女は冷たい目で  
男のモノを見下ろして、容赦なく言い放った。

「いつそのこと、切り落としてしまえばいいんじゃないかしら」

その言葉に込められた本気と冷たさに、露出狂だけでなく周りの男  
たち全員がさつと内股になった。

タイロンと呼ばれた男も内股になりながら少女の肩に手を置き、

「お、お嬢。もうその辺にしろといてあげてくれ」

と、同情に満ちた言葉で懇願する。

しかし、少女は冷やかな目でタイロンを見上げた。

「タイロンはこのワラジ虫以下の矮小な存在の味方なんですか？」

「も、も、もちろん、こんな変態の味方なんかじゃねえよ！」

ぶんぶん両手と首を横に振るタイロンの言葉にうなづいた少女は、  
周りの男たちを見回して口を開いた。

「皆さんも、このウジ虫以下の下劣な犯罪者を許したりはしません  
よね？」

「も、もちろんだぜ。なあ？」

「ああ、許せねえよ」

「おう。絶対に許せねえよな」

許したりしたらお前たちも同罪で同列だと言わんばかりの冷たい目  
で見られ、男たちは慌てて露出狂を取り押え、縄で後ろ手を縛り上

げる。

その様子を見て、少女——葉月は大きくため息をついた。

葉月とタイロンが作戦に加わってから三日が経つが、捕まえられたのが変態一匹では、ため息も出ようというものだ。

戦列の<テーラン>が血眼ちまなこになって探している犯人は、今もこの黄昏の中、犯行に及んでいるかも知れないのだ。

## 5・切り裂きし者 2・2

戦列の<テーラン>は自警集団である。

新興地区の治安を担う、とても簡単に言ってしまうえば、ヤクザのような警察、いや、警察のようなヤクザの方が実態に近いだろうか。

基本的には、四つの部隊からなる実行部が実際の調査や取り締まりなどを行う。

諜報部もあるが、こちらは普通の犯罪を調査するというよりは、他の地区の情報を収集する役割の方が強い。

ただし、<テーラン>の組織というのは、それほど厳密な役割の住み分けをしているわけではない。

手柄の取り合いがまったくないといえば嘘になるが、部署同士が手を組むことは普通で、人手や人材が足りない時は、他の部署から応援を頼むことも良くあることだ。

特におとりになるような人材は、とても少ない。

何せ、“戦列の”という語が頭につく組織である。

戦いのために作られた組織であることは疑いようがなく、団員はむくつけき男どもばかりなのだ。

だから、葉月はタイロンと共にブノワに呼び出され事情を聞いた時、自分が選ばれるのは当然の成り行きだろうと思った。

副長執務室に居るのは、部屋の主である戦列の<テーラン>副長のブノワ、その補佐であるトーリスと、呼び出された葉月とタイロンの四人。

呼び出された、と言っても、隣の部屋からである。

副長執務室の隣が、副長直属の配下の仕事部屋なのだ。

以前は同じ部屋だったのだが、配下の内の二人があまりにうるさい為、ブノワがキレて部屋を別にしたという経緯がある。

その原因の内の一人は、もちろんタイロンだ。

現在時刻はお昼もとくに過ぎ、そろそろ西日が差し始める頃。

陽が射し込む窓を背に執務机に座るブノワの顔は険しい。

組織の運営はもちろん、他の組織や市との交渉も担当するブノワはかなりの多忙だ。

それでもこのような顔をしているのは珍しい。

どんなに忙しくとも、余裕綽々といった顔をしているのがブノワなのである。

傍らに立つトリスが難しい顔なのはいつものことだが、いつもよりも眉間のしわが深い気がする。

葉月は上長たちを観察し、厄介事が起こっていることを悟った。

二人が並ぶのを待つて、ブノワが重々しく口を開いた。

「実行部から協力要請が来ている。葉月に、だ」

「私に、ですか？」

葉月は何故自分が指名されたのか分からず、首を傾げる。

<テール>に見習いとして入ってから数週間が経っているが、やっていることは鍛錬と学業と雑用ばかりだ。

何かしらの成果をあげたわけではない。

それなのに他の部署から協力要請とはどういうことだろう。

疑問に思ったのはタイロンも同様のようで、ちらりと葉月を見下ろしてブノワに問いかける。

「お嬢に実行部から協力要請って、何の件で？」

「最近発生している連続誘拐殺人事件のおとりとして、だそうだ。

あの事件の被害者は十代、特に女性が多く狙われている。諜報部のアンジェリカも出ているらしいが、おとりが一人だけでは効率が悪いからな」

その事件は、葉月も聞いていた。

もう三週間以上前から発生している事件だ。

被害者の多くは十代の若者で、特に女性の数が多い。

数日間行方不明になった拳句、人通りの少ない路地裏で滅多刺しの惨殺死体が発見されるという。

中には行方不明のままの者もいるようだが、その残忍な手口と行方

不明になる時間帯の多くが夕方ということで、ちまたでは<黄昏の怪人>と呼ばれているらしい。

<テール>が見回りを強化しているにも関わらず、この短期間に遺体は発見されているだけで七人。

行方不明者を含めれば二十人以上と言われている。

コケにされた形の<テール>実行部はかなりピリピリしていて、犯人検挙に全力をあげていた。

「むやみやたらなおとり作戦にはあまり乗り気はしないが、あの事件のせいで<テール>に対する風当たりが強くなってきているからな。やってくれるか、葉月」

ブノワがひたと葉月の目を見つめて言う。

文体としては問いかけだが、実際には命令だ。

葉月はそれを承知で、うなづいてみせた。

「ええ、もちろんです。お父様」

葉月の返答に、ブノワは満足げにうなづく。

「で、俺は何で呼び出されたんだ？」

いまいち分かかっていない様子のタイロンを、ブノワが半眼でにらみつけた。

「話の流れで解れ、馬鹿。実行部は人手不足なんだ。どうせお前は書類書きには向いてないんだから、体を動かせ。葉月と一緒に実行部に協力しろ」

「……おっさん、俺とお嬢じゃ態度が違わねえか？」

「上司をおっさん呼ばわりする馬鹿に対するのと一緒に態度で娘に接する父親がどこにいる」

ブノワがきつぱりと言い切った。

なんだかんだ言って、ブノワは父親役を楽しんでいた。

葉月の着ている服や小物の大半は、ブノワが選んで買ってきたものだ。

女つたらしなだけはあるって、その趣味は良く、葉月の雰囲気は合った、華美ではないが少し大人っぽいものが多い。

女性に服を贈る場合、受け取るにも普段着るにも困る高価な服を買い与えるという話は良くあるが、ブノワの場合はその辺りもよく分かっている、この年頃の少女がよく着ている服を選んでい。だからといってブノワが葉月を溺愛しているかというところでもない。

やはり父親役を楽しんでいる、と言っているのが適切だろう。

必要とあれば、危険な任務を割り振ることもためらうことはない。ブノワというのは、そういう男だった。

そんなわけで葉月とタイロンは、実行部に協力しておとり作戦を実行しているわけだが、その成果は芳しくない。

聞くところによると、もう一組の諜報部のアンジェリカをおとりにした方も、似たような状況らしい。

せめて目撃情報でも得られれば手がかりになるのだが、そちらも有力な情報がなかった。

まさしく怪人のごとく、誰にも見られることなく、犯行が行われているとしか考えられない。

被害者の共通点といえば、十代の若者である、というくらいしかないのだが、もしかしたら何か見落としがあるのだろうか。

葉月やアンジェリカがおとりではいけない理由が。

そこで、葉月はたと気づいた。

葉月はアンジェリカに会ったことがない。

いったい、どういう人物なのだろうか。

諜報部の人間は、部長であるチェスターを含めて、屋敷どころか新興地区にいないこと自体が少ない。

他の地区や都市への潜入調査が主な任務なのだ。

実はアンジェリカの名を聞いたのも、今回の作戦が初めてだった。

「タイロン、アンジェリカさんって、どういう方なんですか？」

葉月が傍らのタイロンに尋ねると、タイロンは困ったように目を泳

がせた。

「あー、あいつか。あいつはなんていうか……あれとは違った意味で……変態だな」

「は？ 変態……なんですか？」

目をぱちくりして、葉月はタイロンを見上げる。

変態とは、予想だにしていなかった人物像だ。

「おう。確かに顔は可愛い。可愛いが……変態だ。俺、あいつは苦手なんだよなあ」

「はあ」

遠い目をするタイロンに、葉月は首を傾げざるを得なかったが、タイロンの言葉の意味を知るのは、このすぐ後のことだった。

とりあえず、捕縛した露出狂を本拠地に連れていくことになった。本拠地の西の離れの地下には牢がある。

<テーラン>が本拠地とした時に増設したのではなく、もともとあったものだ。

前の持ち主の商人がその牢をなんの為に使用していたのか誰も知らないが、どうせろくなものではないだろう。

世の中には知らなくてよいことがごまんとある。

それはそれでおいでいくとして、地下牢を本拠地に持つ<テーラン>だが、罪人を捕縛する権利はあれど罪人を裁く権利を有さない。番号付街ならば警備隊が捕まえた罪人は、裁判所で専任の裁判官によつて裁かれる。

だが、この新興地区は公には“存在しない街”。

街でも街外でもない空白地帯。

そこで行われた犯罪は、“そのような土地はない”ので“起こらなかった”と解釈される。

少なくとも<ゼルディア国>の法ではそうなるのだという。

そうなると犯罪者の温床とでもなりそうなものだが、実際はそう治安が悪いわけではない。

もちろん葉月が知っている日本の治安の良さとは比べようもないが、歌舞伎町の裏路地や、ましてや一時のヨハネスブルグのダウンタウンほど危険なわけでもなかった。

戦列の<テーラン>がいることもそうだが、新興地区の住民は独立心が強い者が多く、自治組織がしっかりしているし、富める者は慈善事業に熱心だ。

裁判所のような部署もあり、基本的には<ゼルディア国>の法に則つて審判が下されていた。

裁かれた罪人の大半は<ウクジェナ>との裏取引によつて、市管理

の矯正施設や強制労働場へと送られる。

つまり<テーラン>の役割は新興地区の裁判部に罪人を引き渡すこと、ということになる。

ただ、その裁判部の受付が日のある間に限定されるため、夕刻から夜に捕縛した罪人は一時的に本拠地の地下牢にぶち込んでいるのだ。こうした治安維持に貢献していることから、中には<テーラン>が自治組織の下部組織だと勘違いしている者もいるようだが、この二つはまったく別の組織だ。

しかも“組織”が持つ意味さえ裏と表ほどの差がある。

戦列の<テーラン>は決して正義の味方などではなかった。

それは悪人面揃いの団員達の雰囲気からも推し量れようというもの。中にはブノワやケヴィンのように容姿の整った男もいるが、大抵の団員は見るからに堅気ではないチンピラ風の容貌をしている。

人を見た目で判断すると痛い目に合うが、視覚に訴える形で威嚇するのは何も毒を持つ昆虫だけではない。

人間の男も往々にして見た目で突っ張るものだ。

ただ<テーラン>の中でもそれぞれの部署で特色があり、首領直属や副長直属はどちらかといえば堅気っぽい服装をしている。

タイロンでさえ、羽織の裾は短いものの、腰の剣さえなければ気のよい兄ちゃん風である。

勘定部や医療部も服装は大人しい。

諜報部はその任務上、庶民に紛れる必要がある。

<テーラン>の印象で最も強く住民に映るのは、住民と接する機会も多い実行部だ。

この実行部が曲者揃いなのである。

中でも第四隊は隊長の性格の影響もあり、派手な服装の者が多い。葉月とタイロンが行動を共にしているのは、第四隊の者たちだ。

後ろ手に縛り上げた露出狂を囲む派手な柄物の羽織をまとった柄の悪いチンピラ風の男たちの三人の後に、気のいい兄ちゃん風の大柄な男とおっとりしたたれ目の小柄な少女が続く様子は一種異様な光

景に映る。

まず、普通の人間なら近寄らない。

おそらく、これも原因の一つだろう、と葉月は考えた。

怪しそうな裏路地でとりあえずおとりが往来する。

怪しそうなヤツが出てきたらとりあえず三、四人で取り押さえる。

おとり捜査としては稚拙な部類だ。

そもそも、戦闘バカの集まるくテールン>でおとり捜査というのは、方向性が間違っているのではないだろうか。

ブノワもそれが分かっていたので、この作戦に乗り気ではなかったのだ。

他に方法があるのかと言われたら答えがないので、葉月たちを貸し出しただけで。

このままむやみにおとり捜査をするよりも、これまでの事件を洗い直した方がよいのではないだろうか。

5・切り裂きし者 3・2

葉月がかすかに眉間にしわを寄せ、今後の行動の算段をしていた時、隣を歩くタイロンが突然足を止めた。

「タイロン？　どうかしましたか？」

葉月が同じく足を止め振り返ると、タイロンは厳しい顔つきで薄闇の向こうを見つめていた。

「おい。どうしたんだ？」

「なんかあるのか？」

第四隊の男たちもタイロンの様子を不審に思い、足を止めている。タイロンは「しっ」と男たちを黙らせると、「聞こえねえか？」とつぶやいた。

男たちと葉月はタイロンの言葉に耳をすませる。

すると虫の声に混じり、微かではあるが甲高い女性の悲鳴が聞こえてきた。

はっと喜色を浮かべる第四隊の男たち。

女性の悲鳴を聞いて笑みを浮かべるといつと悪趣味な性格破綻者のようだが、空振りばかりのおとり捜査で鬱憤<sup>うつぶん</sup>がたまっているのだ。

＜黄昏の怪人＞の手がかりになることならば言うことないが、ただの喧嘩でも憂さを晴らせるならそれでいい。

「声の方向がどちらか分かるか？」

気がはやるのか、早くも腰の剣に手をかけながら男が問う。

それにタイロンはうなづき、北を指さした。

「あっちだな。おそらく、雨月通りの近くだ」

「よしや！　行くぞ！」

「おうよ！」

「うおおお！」

第四隊の男たちが奇声を発しながら北へと走り出す。

よほど向いていないおとり捜査でストレスが溜まっていたようだ。

葉月もその後を追おうと、長い裾を膝までたくし上げた。

葉月にしたら走りやすいように、という合理的な理由による行動だが、慌てたのはタイロンだ。

「ばっ、お嬢！？ 何やってんだ？」

葉月は裾をつかんだまま、首を傾げながらタイロンを見上げる。

「何って、走りやすいように裾をまくってます」

ごく平然と言い放った葉月に、タイロンは葉月の手を裾から放させた。

裾がふくらはぎの中間に戻る。

「はしたねえ！ 堂々と足見せる女がいるか！」

葉月の感覚で言えば、膝丈では短い部類には入らない。

別に太ももまで見せるわけでもないのに抵抗はないのだが、タイロンにしてみれば、というよりこの国の常識に照らし合わせれば、膝を出すというのは大変にはしたくないことになる。

葉月は内心、タイロンに『はしたない』と指摘を受けたことにへこみ、『こんな細くて色気のない子供の足を見せたところで——』と思ったが、殊勝にうなづいておいた。

ロリータ・コンプレックス

今、ここで羞恥心や少女偏愛について問答している暇はない。

長い裾は走りにくい、元々袴や着物での動きに慣れているので、転ぶことはないだろう。

こっそり嘆息した葉月の体が、急に宙に浮いた。

「ちよっ」

気が付けば、タイロンに俵のように肩に担ぎあげられていた。

葉月が抗議の声をあげる前に、タイロンがものすごい速さで走り出す。

「こつすりゃあ、お嬢が裾まくらねえでも早えだろ？」

葉月の顔を見上げてにかつと笑うタイロンの頭を叩きたい衝動を抑えて、葉月は額に手を当てた。

なんというか、もう、頭痛がする。

「確かに早いですけどね。ですけど、タイロン。これは裾をまくり

あげるのと同じくらい恥ずかしいですよ」

「そおか？」

「そうです」

ぴしゃつと葉月は言い放ったが、その後は言いたいことをぐつと呑み込む。

あのやりとりで時間を無駄にしたことは確かだ。

葉月が自力で走るより、この方が断然早いことは認めないわけにはいかない。

タイロンの羽織の襟を掴んで、高速で流れる路地裏の道を覚えることに集中する。

元の場所に独りぼつんと残された露出狂は、事態についていけず後ろ手に縛られたまま、ぼかんと立ち尽くしていた。

「俺はいつたい、どうしたらいいんだ？」

## 5・切り裂きし者 3 - 3

女性の悲鳴は既に止んでいたが、北に行くに従い代わりに血の臭いと、がやがやという複数の人の声が聞こえてきたので、その場所を特定するのはそう難しくはなかった。

現場に到着し、タイロンに下ろしてもらった葉月は、その惨状を見て胃からこみあげてくるものを根性で嘔<sup>えんか</sup>下した。

被害者は服装からして女性だろうということしか分らなかった。それほど遺体の損傷がひどい。

五体はつながってはいたが、傷がないところが見当たらないというほど切り刻まれ、顔もつぶされていた。

特に喉が大きく切り裂かれており、これが致命傷となったとみて間違いないだろう。

殺害現場はここだ。

壁にまでおびただしい量の血痕が残っている。

八人目の犠牲者。

また止められなかった。

犯人を確保した様子はない。

四十代とみられる女性が真っ青な顔で座りこんで震えている。

どうやら、不幸な第一発見者のようだ。

彼女は何か目撃しただろうか。

葉月は遺体検分に合流しているタイロンから離れ、中年女性の方へと足を向けた。

正直、あまりじっくりと遺体を見ていられなかったのだ。

すっかり暗くなった中、いくつもの灯りに照らし出された惨殺死体は、こういつては犠牲者に失礼だが悪夢に出てきそうだ。

葉月が中年女性のところへ着く前に、またバタバタと足音が聞こえた。

葉月たちが来たのとはまた別の路地から現れた四人の男たちは第三

隊の者たちだろう。

葉月にも見覚えがあった。

が、その後についてきた十六、七歳ほどの少女には見覚えがない。灯り越しにも大層な可愛らしさだ。

これだけの可愛らしい少女なら、一度でも見たら忘れられないだろう。

左右の耳の上で一部を結んだ、いわゆるツーサイドアップにした髪がその可愛らしさを強調している。

はつきり言って、殺人現場にはまったく似つかわしくない人物だ。

少女は遺体を目の当たりにして微かに眉をしかめたが、とり乱した様子はない。

しばらく現場の状況を見回していた少女だったが、葉月の視線に気が付いてこちらへとやってきた。

「また出遅れちゃったみたいね」

「はい。そのようです」

苦い顔で葉月がうなづく。

「あなた、副長の娘さん？」

少女がちよこんと小首を傾げながら尋ねる。

その可愛らしさに、葉月は今後の参考にしようと思にとどめ置きながらうなづく。

「はい。葉月と申します」

すると少女の表情がぱつと明るくなる。

「あ、やっぱりそうなんだ。わたしはアンジェリカ。諜報部の所属なの」

「あなたがアンジェリカさんでしたか」

「アンジェリカでいいわ。＜テーラン＞はむさ苦しい男ばかりで女の子がいらないんだもの。わたし、葉月とは仲良くしたいわ」

につこり笑うアンジェリカに、葉月も笑顔を返す。

「ええ。アンジェリカ。私でよろしければ」

ふふふふ、とここが陰惨な殺人現場であることも忘れ、笑い合う少

女たち。

そこに割って入ったのはタイロンだった。

タイロンは葉月の肩を掴むと、アンジェリカから引き離れた。

「出たな、変態」

「やだ、タイロン。変態だなんてひどい」

悲しげな顔でタイロンを見つめるアンジェリカ。

そんな顔で見つめられれば、女の葉月でさえ反射的に謝ってしまいそうだった。

だがタイロンは苦虫を噛み潰したような顔でアンジェリカを無視し、葉月の両肩をぐっと掴んだ。

「タイロン？」

様子のおかしいタイロンに、葉月はいぶかしげにタイロンの名を呼ぶ。

タイロンはいつになく複雑そうな表情だ。

「お嬢。この変態に騙されんなよ。コイツ……」

そこでタイロンは言葉を切り、深いため息と共に絞りだすようにつぶやいた。

「コイツ、男なんだ」

## 5・切り裂きし者 4 - 1

葉月はタイロンの言葉に目を瞬かせ、またたむくれるアンジェリカの方を見やる。

この可愛らしい少女が男なのかと自分の目と耳の両方を疑いながら、全身をざっと見回した。

街灯はないが、現場には大量の灯りが灯されていたし、今夜は月も出ている。

葉月は鳥目ではなかったので、アンジェリカの顔や体つきもだいたい把握出来た。

しかし、どこからどう見ても可憐な少女にしか見えない。

こちらの女性の服は体の線が出ないものとはいえ、ただ女の服を着ているだけでは一目で女装だとバレる。

よくテレビで見た、いわゆるニューハーフタレントのような、女を意識し過ぎた過剰な女らしさとも違う。

とてつもなく可愛いという点では普通の少女とはいえないが、アンジェリカは女の目で見ても普通に『同性』と認識してしまうレベルだ。

葉月にまじまじと見られ、アンジェリカは「はあ」と大きいため息をついた。

億劫そうに、その長い髪のかつらをとる。

その下から現れた自毛は肩につくつかないか、といったくらいの長さだった。

「なんで早々にバラしちゃうかなあ、タイロンは。こんなに早くバラしちゃったらつまらないじゃん」

ぶうぶう文句を言うアンジェリカは、かつらをとっても可愛かった。ただ、先ほどまでとはがらりと印象が変わっている。

さっきまでのアンジェリカは『可愛い』という記号が具現化した存在だった。

すこぶる可愛いが、純粹に『可愛い』ものだけ集めた、現実味の無い偶像のようなものだ。

どこかお人形めいた人工的な可愛さを感じたのは、アンジェリカが『可愛い』を演じていたからに他ならない。

それでも、男だとは露ほども思わせないのは流石というべきだろうか。

今のアンジェリカは確かに変わらず可愛いが、もっと人間味にあふれた、おちゃめというか、やんちゃというか、大変親しみやすい雰囲気だ。

アンジェリカはわくわくした顔で、じつと自分を見ている葉月に笑いかける。

「ね？ 葉月、驚いた？ オレが男で」

「まあ、多少は驚きましたけど……」

いたずらっ子のように尋ねるアンジェリカに、葉月は苦笑した。

ここまで印象が違つと、信じられないと驚いたり騙されたと怒ったりするよりも、すごいものを見たという変な感動がある。

まさか異世界でリアル男の娘に遭遇するとは思わなかった。

「まさに、こんなに可愛い子が女の子のはずがないってことでしょ  
うか」

「へ？」

葉月の言葉に、アンジェリカがきよとした顔をする。

「あー。って、あれ？ 可愛いから女の子じゃない？ 男の子じゃない？ んー」

タイロンが言葉の意味が分からずに頭を抱えてうなる。

そんな二人の様子を見て、葉月は己のセリフのチョイスを間違えたことを悟った。

「ごめんなさい。タイロン、アンジェリカ。調子に乗りました。言葉遊びみたいなものです。忘れてくださいね」

うずくまって頭を抱えているタイロンを立ち上げるように促し、葉月は謝った。

異世界人に日本のネットスラングが通用するとは思わなかったが、ここまで悩まれるとも思っていなかった。

これは『かわいいは正義』と言える雰囲気ではない。

おちゃめにはおちゃめで返そうと思い、しかしこちらのエスプリが利いたジョークを習得出来ない状況で、あまりにぴったりなネットスラングを思い出して口にしてみたが、どうやら失敗だったようだ。

まだまだ修行が必要だなあ、と葉月は小声で独り言<sup>こ</sup>ちたが、気持ちを入れ替えておっとりとした笑みを浮かべる。

「それにしても、私よりアンジェリカの方が断然可愛いですね。なんというか、こう、女としては悔しがるべきなんでしょうけど、嫉妬を超越して可愛いと思う感覚を久しぶりに感じました」

ごくごく自然にアンジェリカを受け入れている葉月に、アンジェリカは目を丸くし、タイロンは顔を引きつらせ気味に尋ねる。

「なあ、お嬢。気持ち悪くねえのか？」

「はい？ 気持ち悪いって、何がですか？」

「何って、男が女の格好してるんだぞ？ 名前まで女の名前を名乗って女の振りしてるんだぞ？」

「え？ そりゃあ、タイロンみたいな体格の良い男性が女装していたら似合わなくて気持ち悪いと思ってしまいますけど、アンジェリカは可愛いですよ？」

「いや、確かに可愛いのは認めるけどよ。……男だぞ？」

畳みかけるように尋ねるタイロンに、この世界ではよっぽど女装は異質なのかと葉月の方が面食らった。

あくまでも世間知らずという風を装って、葉月は首を傾げる。

「ええと、女装って、そこまで非難されることでしたっけ？」

「んー、まあ、一般的ではないよね」

葉月の問いに答えたのは、苦笑気味のアンジェリカだ。

「葉月ほどあっさり受け入れる人は少ないけど、タイロンほど拒否反応するのも珍しいかな。まあ、タイロンはオレが男だとは知らず

に惚れかけてたらしいから、その反動だろうけど」

「ばっ、馬鹿！ 何バラしてんだよ！？ おめえのそついうところが大嫌いなんだ！」

顔を真っ赤にしてタイロンが怒鳴る。

葉月はその光景を見て、「ああ」と納得した。

「それはシヨックでしょうね」

## 5・切り裂きし者 4 - 2

事実を知った時のタイロンの心境は想像に難くない。

葉月が男だと仮定して、好きになった相手が実は男でした、と言われたら多分ショックでひきこもる。

恋だの愛だのに性別なんて関係ない！ という所まで達観出来れば違ふのだろうが、その域まで達せられる人はどのくらいいるのだろう。

少なくとも、タイロンはそこまで行けなかったようだ。

葉月に同情めいた視線で見つめられたタイロンは、不貞腐れたようにしゃがみ込み、地面に向かってぶつぶつ呟いている。

どうやら当時の恥ずかしい思い出がフラッシュバックしているようだ。

タイロンの周りだけ、夜の闇が一段と濃くなり、じめじめとした重苦しい空気が漂っているように見える。

可哀想だけど、ちょっと可愛いなあ、と葉月がひどいことを考えていると、かつらをかぶり直したアンジェリカと目が合った。

お互いの顔に浮かんでいるのは苦笑だ。

二人してタイロンをいじめ過ぎたと反省する。

怒らせると怖いタイロンだが、いじると楽しいのだ。

何せ反応がいい。

タイロンは葉月の指導役ではあるが、中身の年齢は葉月の方が上だし、アンジェリカにしてもタイロンは先輩格にあたるのだが、『男である自分に惚れた過去』という弱みを握っている。

戦闘の時は鬼神のごとしと恐れられ、人を動物に例えるくせのあるカーサにして“虎”と言わしめるタイロンであるが、普段はその外見通り気のいい兄ちゃんなのである。

本人も堅苦しく接せられるより、砕けた付き合いの方が楽だという。もちろん、ものには限度というものがあるが、葉月にしてもアンジ

エリカにしても、その辺りは心得ている。

二人とも、平時の虎にじゃれつく勇氣こそあれ、そのしつぽを思いきり踏んづけて怒らせる勇氣はない。

そもそもそれは勇氣などではなく、無謀というものであるが。

「ごめんね、タイロン。ちょっと調子に乗り過ぎちゃった」

しゃがみ込んでいじけるタイロンの右横にアンジェリカが膝をつき、殊勝な顔をして謝る。

「私も。ごめんなさい、タイロン。口が過ぎました」

葉月もアンジェリカとは反対側にしゃがんで頭を下げる。

が、タイロンはぶつぶつと呟き、顔をあげようとせず、膝をかかえている。

「どうせ、俺は男と女の見分けもつかない間抜けですよーだ」

「いやいや、タイロン。間抜けとまでは言っていないって。タイロンは間抜けなんかじゃないって」

「そうですね、タイロン。それにアンジェリカを男性と見抜くのは難しいですよ。声だつてちょっと低めかな、と思いますけど、声の低めの女性なんてたくさんいますし、女の私だつて言われなければ気付きませんでしたもの。仕草や歩き方も違和感やわざとらしさがありませんでしたし、アンジェリカの女装技術は完璧です。それを見抜けというのはかなり難しいことですよ」

「そうそう。オレつてばマジで可愛いから、オレに惚れた男はタイロンだけじゃないしさ」

「うおおおおおおおおおお、惚れたつて言うなあ！」

また恥ずかしい過去を思い出し、それを振り切るようにタイロンが地面に頭を打ち付け始めた。

「アンジェリカ……」

「うつ、ごめん。禁句だった……」

じとりとした目で葉月ににらまれ、アンジェリカがうなだれる。ますますよく分からない状態になった三人の場違いな喜劇を終わらせたのは、頭上から降って来たひどく冷たい一言だった。

「なあ、お前ら。殺人現場で何遊んじゃってんの？」

ぴたりと動きを止めた葉月、タイロン、アンジェリカの三人は、聞き覚えのある声におそろおそろ顔を上げる。

果たして、そこには氷よりもなお冷たい目をしたく戦列のテーラン  
> 実行部第四隊隊長であるケヴィンが立っていた。

## 5・切り裂きし者 5 - 1

じろりと冷たい視線に射抜かれて、三人は飛び上がるようにして立ちあがった。

皆一様にばつが悪い顔をしてうなだれている。

先生にいたずらを叱られた生徒のようだが、ケヴィンの言うことはもつともだった。

なにせ、ここは連続殺人の犠牲者と思われる女性の遺体発見現場である。

ふざけて良い場所ではない。

「申し訳ございませんでした」

葉月は腕を組んで見下げたと目で雄弁に語るケヴィンに頭を下げ、布の掛けられた遺体にも深く頭を下げた。

タイロンとアンジェリカも同じように頭を下げる。

頭を上げた葉月の顔は、灯りに照らされている分を差し引いても真っ赤になっていた。

タイロンは言つては何だがこういう性格で、アンジェリカはまだ若い。

三人の中で立場は一番下である葉月だが、中身はタイロンやアンジェリカよりだいぶ上だ。

本来なら二人をさりげなく諫めるべきだったのに、一緒になって騒いでしまうとは何という失態だろうか。

葉月はどこか浮かれていた自分を戒めた。

実際、葉月は『子供』という立場に酔っていたのだ。

元の世界では政界や経済界にも顔が利く師岡流宗家の次期当主補佐として、重圧に耐える生活をしていた。

次期当主である兄は結婚し子供も居たので、家族からは葉月に対して結婚や出産に対してのプレッシャーはなかったが、親族や道場関係者からは二十八で独身、しかも次期当主補佐という地位にある葉

月はお節介な忠告をされることもしばしばだった。

この世界でも陰口を叩く者はいるが、実際にブノワの娘だというのは嘘っぱちなのだからたいしたダメージはない。

これが一人きりならば堪えたかも知れないが、ジークという『弟』が一緒なのだ。

それにジークは子供扱いされることに内心焦れているようだが、葉月は意外にも子供扱いがそんなには嫌ではない。

面倒なことも多いが、何かと気を配ってもらえて人に頼れるというのは、実に甘美なことだった。

甘えなど、元の世界では久しく忘れていた感情だ。もちろん、この世界だって甘くはない。

けれど、この世界にも『子供は守るもの』という概念がある。例外も山のようにあるし、当の本人にしたら疎外や差別とを感じるものかも知れないが、確かにそれは子供の特権なのだ。

葉月はその心地よさに酔っていた。

子供扱いされて、本当の『子供』のような気分になりかけていた。環境への適合ともいえるかも知れないが、甘えるだけでは駄目だということを知っていたはずなのに……。

だからこそ、この失態が心の底から恥ずかしい。

子供扱いを逆手にとるのは構わない。だが、本当の『子供』になってしまつては、己の価値を自ら捨てるようなもの。

自分に対する裏切りに他ならない。

それは『師岡葉月』としての二十八年をなかったことにするということだ。

あの二十八年がなければ、今の葉月はいなかった。

それだけは、決して忘れたくはない。

『どのような状況であれ、己を見失うようなことはあってはならない。師岡の教えを忘れるな』

厳しさでは親族内でも随一だった曾祖父の鋭い叱責が聞こえた気が

した。

まったく、その通りだ。

簡単に墮落するような『姉』では、ジークにも申し訳がないし、拾ってくれたカーサにも、『娘』にしてくれたブノワにも顔向けが出来ない。

『魂にも脂肪がつくものだ』とは何で知った言葉だっただろうか。今の自分はまさにそれだ。

余分で無駄な脂肪はそぎ落とす。

それに気付かせてくれたのがこの軽薄な男であるというのは少々癪だが、感謝しなければならぬだろう。

葉月は目礼でもって、ケヴィンに感謝の意を示した。

## 5・切り裂きし者 5・2

ケヴィンは葉月と目が合うと、軽く驚いたように目を見張った。葉月の変化に気付いたからだ。

最初は面白そうなお嬢様だと思っていたが、最近は見た目だけではなく中身まで平和ボケしているように見えた。

弟の方はずっとギラギラしていて面白さを失わないというのに、姉でなんという違いだろうか。

拳句の果てに現場で馬鹿とオカマと一緒にこの体たらくだ。

ケヴィンの中で葉月の価値がぼろなくなりかけていたが、この目を見て少し意見を保留することにした。

いい目だった。

底の見えない静かな水面のように、恐ろしさと一緒に惹き込まれるような魅力が同居する、そんな目だ。

その底知れなさが浮かんだのは一瞬で、今はまたぼやんとしたたれ目にしか見えないが、先ほどまでの情弱でゆるみ切った顔とは、少し違う。

一見、同じように見えるが……これはまた、面白いヤツになるかも知れない。

楽しみだ。

ケヴィンはその端正な顔にぞくりとするような薄ら笑いを浮かべ、口を開いた。

「まあ、分かればいいさ。お遊びが終わったらお仕事の時間だ。…

…アンジェリカ」

「は、はあい」

ケヴィンに名を呼ばれたアンジェリカは、恐る恐るという様子で返事をした。

どうやら先ほど怒られたのが相当こたえているようだ。

しかしケヴィンはそのようなことは歯牙にもかけず、指示を出す。

諜報部所属のアンジェリカであるが、今は葉月やタイロンと同様に実行部に貸し出され、ケヴィンの指揮下にあった。

「お前は第一発見者から情報を聞き出せ。聞き取りは諜報部の得意技だろ。それにむさくるしいのよりはお前の方が話しやすいだろうさ」

「はい。了解です」

さすがというか何というか、アンジェリカは指示を聞いて気持ちを切り替え、いつもの調子を取り戻していた。

しかも先ほどの葉月の声が低いという指摘を受けてか、1オクターブ高い声だ。

葉月は声まで変えられると本当に女の子にしか思えないと感心したが、ケヴィンはうんざりしたようにしつしつと手を振る。

「気色わりい声だしてねーでさっさと行け」

「はあい」

アンジェリカは怒られない内にと、第一発見者がいるという民家へ小走りで向かって行った。

「さあて、残るお前らの仕事だが……」

そこで言葉を止め、ケヴィンにしては珍しく考えあぐねたように大量の血を吸いこんだ地面へと目を向けた。

つまらなそうな顔をしているが、何を考えているか判らない。

「……お嬢様、一連の事件をどう思う？」

「この短期間に少々犠牲者が多過ぎるような気がします」

地面に目を向けたまま尋ねるケヴィンに、葉月は即答した。

約四週間の間に遺体が発見された犠牲者がこれで八人目。行方不明者は推定で二十人以上。

犠牲者は遺体の損傷が激しい為、科学捜査の発達していないこの世界では身元の特定すら困難な状態だ。

しかし手口が滅多刺しという点で共通している為、同一犯の犯行と考えられているが、確証はない。

そして行方不明者の人数も、ただ単に家出しただけの者も入ってい

る可能性がある。

「あー、つと、犯人は一人じゃねえってことか？」

タイロンが首を傾げながら問う。

「それも考えなければならぬことですけど、それとは別に同一ではなく複数の事件が同一犯の犯行に見えている可能性があるのでは、と」

葉月はタイロンの言葉に補足しつつ、ケヴィンの方を伺った。

ケヴィンは満足げにいつと笑う。

「その可能性は十分あるだろーな。お嬢様、今までの事件情報を洗うから手伝え。脳味噌まで筋肉で出来てる輩が多くて分析の手が足りねーんだ」

「はい。承知致しました。ですが、私はまだ文字が完璧に読めるわけではないので……」

葉月は困ったように語尾を濁す。

学問所での学習の他、ブノワに買ってもらった絵本等で表音文字はほぼマスターしていたが、表意文字の方は種類も多くてまだまだ覚ええない。

「その辺りはタイロンが補えばいいだろ。どうせホシの確保ン時くらいしか出番ねーし。なあ、タイロン」

首を巡らしケヴィンが話を振ると、タイロンはにかつと笑い胸を叩いた。

「おう。任せとけよ、お嬢」

「え、ええ、お願いします」

葉月は内心、そこは怒るところではないのかと思っただが、本人が気にしていなさそうなので流すことにした。

細かいことを気にしない男、タイロン。

それが彼の短所であり、長所でもあったりする。

## 5・切り裂きし者 6・1

葉月たちがケヴィンと合流した時から、時間は少し巻き戻る。

沈む夕日に照らされて赤く染まったくテーラン>の本拠地の窓から、街を見つめるひとつの影があつた。

ジークである。

毎日学問所から帰ってきた後は、首領直属の他の団員と剣の稽古をするか、仕事場で雑用に追われているかだったが、まれにぽっかりと暇になる時がある。

そんな時は文字の書き取りをすることになっているのだが、ここ三日はその手が止まりがちだった。

首領直属の団員たちの仕事場の中でジークの席は比較的窓側にある。窓の外を見つめるジークの目には、不満と焦燥が渦巻いていた。

「ジーク。手が止まってるぞ」

向かいの席に座っているジークの指導役であるライナスが、手元の書類から目を離さずに言う。

「……すみません」

答えるジークの声は暗い。

分かりやすいヤツだなあ、と思いながら、ライナスは顔を上げた。

「そんなに姉さんが心配か？」

「はい」

あまりにきつぱりした返答に、ライナスの顔に苦笑が浮かぶ。

「心配しなくてもタイロンや実行部の連中が一緒だ。それに嬢だって弱くはないだろ」

それはジークも分かつてはいたが、納得出来ているかという話は別だ。

葉月が実行部からおとり捜査の協力依頼があつたと聞いた時、ジークは自分も参加すると訴えた。

しかし、ジークの訴えは、おとり捜査を指揮するケヴィンにあえな

く却下されてしまっている。

『お前くらいのガキは被害にあってない』『むさくるしい野郎ばかりの中にガキが混じっていると余計に目立つ』『目の前でお嬢様が襲われたら、生け捕りにしないで殺すだろ』と言われ、ジークも反論出来なかったのだ。

ケヴィンがジークの参加を拒んだのは、特に最後の理由が大きい。

＜黄昏の怪人＞と呼ばれる犯人は、殺害だけではなく誘拐の容疑もかかっている。

行方不明者の居場所を吐かさずに殺すことは出来ない相談だった。葉月自身にも諭され一応は引いたものの、心配は毎日に大きくなるばかりだ。

「相手は殺人鬼です。あちらは殺すことに抵抗がないのに、ねえさんたちは生かして取り押さえないければならないでしょう？ 心配するなと言われても無理です」

「まあな。けど、よつぽど」

ライナスの『姉さんが大事なんだな』という言葉は、勢いよく開いた扉の音にかき消された。

首領直属の仕事部屋の扉をこれだけ乱暴に開けてくる者は一人しかない。

彼らの上司。戦列の＜テーラン＞の女首領、カーサである。

ライナスは、もつと静かに開けてください、という文句を寸でこのころで飲み込んだ。

首領補佐のゾルが口を酸っぱくして言い続けても聞かない相手だ。平のライナスが言っても詮のないことだろう。

＜テーラン＞の中では割とまともな部類に入るライナスは、その分苦勞性であった。

カーサはそんな部下の心情を知る由もなく、殺風景な部屋を見回し、落胆の声をあげる。

「なんだ。お前ら二人しかいないのか……」

「皆それぞれの用事で出払ってますよ。もうすぐ都市間会合の時期ですし、例の事件の件もあって市との調整やら苦情処理やらなんやらで忙しいんです」

「ふうん。で、お前暇？」

のんきにもほどがあるカーサの言葉に、ライナスの眉間がひくつく。理性を総動員しているが、答える声は低かった。

「見ての通り、始末書の確認中です。あとこちらの山は親分の承認が必要な書類ですからね」

たんまりとした書類の山を示され、カーサの顔にはありありと『うんざりだ』という表情が浮かぶ。

「そういう面倒なのはブノワかヴィリーの仕事だろ？」

「面倒なところはおっしゃる通り、副長や参謀が処理されてますよ。あとは親分の確認と承認だけです」

「なのになんにあんの？」

恨めしげな視線を書類の山に向けるカーサに、ライナスはぴしゃつと言いつ切る。

「貯めてる親分が悪いんです。コツコツやっていればこんなには貯まりません！」

「だってさあ、面倒だろ」

毎度同じようなことをゾルに言われているカーサだったが、改善された試しがなかった。

今回もまるで懲りた様子はなく、本当に面倒で仕方なさそうだ。

＜テーラン＞の中では常識人のライナスだったが、事務仕事の分野で上司に遠慮すると自分に余計な火の粉が降りかかってくることをよく承知していた。

むしろ、これは首領直属の中では常識に近い。

「おーやーぶーんー」

ドスの利いた声と座った目の部下に、カーサは肩をすくめてみせた。「わあったよ。体動かした後でな」

全ッ然わかってない、と頭を抱えるライナスを尻目に、カーサは黙って二人のやりとりを見ていたジークへと目を向ける。

「ジーク。お前は暇だろ？」

「出来る仕事がないと言えばその通りですが……。やらなければならぬことという意味なら書き取りがあります」

そう答えたジークは、ちらりとライナスに視線を向ける。

視線を受けたライナスは、盛大なため息をついた。

## 5・切り裂きし者 6・2

彼の中で目まぐるしく計算が働いたが、結局はジークを人身御供に差し出すことにしたようだ。

「もうすぐ暗くなります。手短に。あとジークは怪我が治ったばかりですので、お忘れなく」

それでも指導役として、釘を刺すことは忘れなかった。

その親心を知ってか知らずか、カーサはにんまりと笑う。

「真剣じゃなくて、刃あ漬したのにすつから心配すんなよ」

「刃を漬していたって、親分の馬鹿力で振るわれた剣を受ければ死にます。ジーク、気をつけろよ」

真剣な眼差しのライナスに、ジークは深くうなづいた。

「はい。親分の剣は一度となく見ています。あれを見て油断出来る者がいるとは思えません」

カーサの剣はまさしく豪剣だ。

元の体でもあれを正面から受けると言われたら、少々ためらう。

ましてや非力で軽いこの体では、正面からどころか、カーサがどんな体勢でも一太刀受ければ吹っ飛ぶに違いない。

首領直属の団員たちとの稽古で、この体での戦い方を掴みかけていたジークではあったが、カーサ相手では稽古といえども命がけだ。

副長直属のタイロンは手加減が苦手であるが、カーサは手加減をする気がない。

戦列の<テーラン>の団員には戦闘狂が多い。

ケヴィンなどもその手合いだ。

しかし、<テーラン>の中で一番戦いに飢えていて、一番危険なのは、間違いなく首領であるカーサだった。

西日が差す庭の一角にある稽古場は、いつもなら何羽かの鳥がねぐ

らとして戻って来ている頃だったが、今は一羽たりとも姿がなかった。

ピリピリした殺気に満ちた稽古場に、好き好んで近づく野生生物はいない。

風で揺れる木々の他に、動く影は二つだけだ。

なぎ払うように振るわれたカーサの剣を、ジークはあえて相手の懐に入るようにして避けた。

ジークの武器は二振りの短剣だ。

身長差なども相まって、ジークの間合いは狭い。

それを補うのは、機動力と度胸だ。

脚の腱を狙うように低い体勢でカーサへと突っ込む。

カーサは剣を戻すより蹴りを選んだが、ジークはそれも読んでいた。カーサの利き手の左とは逆に転がり、全身をバネのようにして飛び上がる。

狙いは首だ。

カーサは小さく舌打ちし、あえて右へと体を捻った。

ジークの短剣を避けながら、刃ではなく柄の先でジークのこめかみを打つ。

手ごたえは浅かったが、金具が引つ掛かったのか、小さな血飛沫が舞う。

ジークは後ろに飛びすさり、袖口でぐいっとこめかみを拭った。

頭は怪我自体が大したことがなくても、血がよく出る。

額でないのが幸いだ。

額が切れると、血が目に入る可能性がある。

ジークは荒い息を整えながら、攻めあぐねていた。

カーサは強かった。

今も息ひとつ乱さず、にやにやとジークを見て笑っている。

あの街道での戦い以外にも、何度か他の団員たちを相手に戦うカーサを見たことはあったが、実際に戦ってみるとよく判る。

元の世界でもここまで強い者はいなかった。

カーサは確かに女性としては長身な方だろう。

だが、ブノワのように背が高いわけでも、タイロンのように厚い筋肉をまとっているわけでもない。

体格で言えば、ケヴィンにも劣るだろう。

それでも、カーサが最強だ。

荒くれ者たちが女性であるカーサを親分と慕うのは、この圧倒的な強さが彼らを惹きつけてやまないからだ。

強い者に惹かれるのは、本能だろう。

ジークにもそれはよく解る。

しかし、カーサにこうも遊ばれているようでは、ねえさんを守ることも出来ない。

ジークは焦る気持ちを抑えようと歯を食いしばった。

奥歯がぎりつと音を立てる。

その途端、面白がるように笑っていたカーサが、さあつとつまらない物を見るような目になった。

ジークがその落差に驚くと同時に、突風が稽古場に吹き込んだ。

土埃が舞い上がり、ジークは思わず目を細める。

土埃に紛れ、カーサの姿が消えたことに気付いたジークは、ぞくりとした悪寒を感じてその場から逃れようとした。

が、遅かった。

後頭部を後ろから掴まれ、勢いよく地面へと叩きつけられる。

背中を踏まれ、後頭部の髪を掴まれて顔を上げさせられたジークの顔が苦痛と混乱で歪む。

何がカーサの気に障ったのか解らない。

ジークは混乱したまま、傍らにしゃがみ己を踏みつけているカーサへと視線を向けた。

カーサが心底つまらなそうな顔で口を開く。

「お前さ、今、くつだらねえこと考えてただろ」

疑問ではなく断定で突き付けられた言葉にジークが反駁する間を与えず、カーサは言葉を重ねる。

「どうせ葉月のこつたるうが、今のままじゃ、お前、葉月のお荷物にしかならねえぞ」

ジークの瞳が見開かれる。

その言葉はどんな刃より鋭く、ジークの心をえぐりとっていた。

5・切り裂きし者 7・1

『お前は、葉月のお荷物にしかない』

その言葉は他のどんな言葉よりも、ジークに強い動揺を与えた。常には揺るぎない眼差しが嘘のように揺れる。

まるで迷子の子供のようだ。

このように動揺したことなど、二十五年生きてきて初めてだった。自分が動揺したことそのものに、ジークは動揺していた。

「俺が……弱いから……ですか……？」

やつのことで絞り出した言葉もどこか頼りない。

カーサはジークの言葉にあっさりと首を横に振る。

「いいや？ お前は強いぞ。実行部連中とやりあっても平相手なら勝てるだろうさ。隊長格は……少し難しいか」

お前、チビだしなあ、とカーサがジークを見下ろしながらつぶやく。「意志が弱いわけでも、覇気がないわけでもない。誰かを守ることも知っている」

カーサの言葉はジークを更に混乱させる。

様々な可能性を考えるも、答えにはたどり着けない。

「なら、何がいけないんですか？」

ジークの問いに、カーサはにいつと悪魔のように微笑んだ。

「お前の弱点が葉月だと分かりやすいからさ」

「え？」

ジークが目を瞬かせた。

口に笑みを浮かべたまま、滔々（とうとう）とカーサは語る。

「葉月は見た目はあんなだが、お前よりよっぽどしたたかで怖い女だよ。いまいち温い<sup>ぬる</sup>けどな。上に立つことの意味を知っている。“お嬢様”というのは、あながち嘘じゃないんだろ。あと、腕っ節の方もまあまあだ。女だってことを勘定に入れりゃあ、上等な部類だろうさ。何せ、あのタイロンと毎朝稽古していて、まだ五体満足で

生きてんだ。葉月は強い。だろ？」

「はい」

ジークはきっぱりと同意する。

葉月は確かに修羅場慣れしていないが喧嘩慣れはしているし、何を考えているか分かりやすいように底が見えない。

しかし、カーサの言う通り、葉月は温いと思う。

それでも強いことから、ジークにとって葉月は眩しい存在だった。

自分とは違い、陽の光の下、何事にも恥じることなく健やか<sup>すこ</sup>に生きてきたひと。

だからこそ、温いまままでいて欲しい。

汚れて、闇に落ちてしまわないで欲しい。

ずっと綺麗なまままでいて欲しいから、守りたいと思う。

温いまま、強く、綺麗で。

それは姉に対する思いというより、何かを崇拜するのに似ている。

葉月は美化し過ぎだと笑うだろうが、ジークは本気だ。

元の世界では生きる意味などつくに忘れ、惰性で生きていた。

人生の大半の記憶は、血と何かが焼け落ちる臭いと結びついている。

人の肌の温かさより、血飛沫の生温かさの方が身近な日々。

向上するのは人を殺す技術だけ。

そんな人生に、何の意味を見出せるというのだろう。

金も女も武名も、何一つ、ジークの胸を熱くさせることはなかった。

自ら死を選ばなかったのは、遠い日の約束が頭の片隅に残っていたからだ。

『死ぬまで生きなさい』

そんな当たり前のことを言った人は、自分より先に死んでしまったけれど。

その言葉を忘れることはなくても、生きているというよりは死んでいないだけで、本当に死んでしまった時でさえ、ただ終わったと思っただけだったけれど。

それが何の因果か、こうして二度目の生を与えられ、姿を変えられ、

違う世界に落とされた。

ここで手に入れた、ただ一つの絆。

おっとりと笑いながら、たわいない話をしてくれるひと。  
血に塗れた自分と手をつないでくれるひと。

こんな自分を“弟”と言ってくれるひと。

ジークにとって、葉月は暖かい光そのものだった。

## 5・切り裂きし者 7・2

ジークは誓いを新たにする。

初めて手に入れた守りたいものだ。

誰が何と言おうと、守り抜く。

ジークの顔つきが変わった。

それを見たカーサは更に笑みを深くして続ける。

「そう、葉月は強い。そして賢い。周りを使うことを知っている。だが……無敵でも不死身でもない」

カーサはそこで一旦言葉を切り、ジークの髪をぐいっと引っ張り顔を上げさせた。

横からジークの顔を覗き込む。

カーサの薄茶色の瞳を、ジークはまっすぐに見返した。

西日に照らされ、二人の影が長く赤く染まった地面に伸びる。

そして何もかも見透かしたように、悪魔がささやいた。

「お前のその誓いが、葉月を殺すんだ」

「なっ……」

ジークの目が大きく見開かれる。

頭を鈍器で殴られたような衝撃を受け、カーサの声もどこか遠くから聞こえてくるようだった。

しかし、あまりにもはつきりと、ジークの脳髓を揺さぶる。

「お前は強い。面白いくらいに強い。これからまだまだ強くなる。

並みの輩じゃ倒せなくなる。じゃあ、お前を殺したいヤツはどうするか。簡単だ。葉月を狙う。お前が葉月を大事に思えば思うほど、守りたいと思えば思うほど、敵は葉月を狙う。葉月を狙えば、お前は自分よりも葉月を守ることを優先するだろう。その結果、お前は傷つき、葉月を危険にさらし……そして、お前も葉月も死ぬ」

再び、稽古場に風が吹き込んだ。

先ほどよりは弱い風だが、木々はざわざわと音を立てて揺れる。

その音にかき消されそうなほど、弱々しい声がジークの口からこぼれ落ちた。

「ねえさんを……守るな……と言つのですか……」

「いいや。いいんじゃないの」

カーサはあつさりと否定する。

それどころか組み敷いていたジークの背から足を下ろし、さつさと立ちあがった。

ジークは混乱したまま、ぼんやりとカーサを見上げる。

逆光でその表情まではよく読みとれないが、物騒な気配はなりを潜めている。

蔑むのではなく、嘲笑うのでもなく、強いていえば何かを懐かしむような気配をまとったカーサは、地べたに這いつくばったままのジークを見下ろして言う。

「ただ、その矛盾と危険だけは知つとけてこつた。あと、お前の姉ちゃんは一方向的に守られているような軟弱な女じゃねえよ。言つたろ？　したたかだつて」

「はい。それは……わかっていますが……」

「じゃあ頼つてやれ。弟は姉に迷惑かけてナンボなんだよ。お前が葉月を守りたいと思うなら、貫き通してみる。その結果、葉月に迷惑がかかったつて揺らぐなよ。お前に足りない分は葉月が補うだろ。葉月に足りないものをお前が補つてやればいい」

そう言つて、カーサは母屋へと戻って行つた。

もう暗くなるし、ちゃんと医務室行つとけよ、という言葉を残して。

ジークはその後ろ姿を、狐につままれたような気分で見送つた。

唐突で乱暴な方法だったが、自分は諭されたのだろうか。

ねえさんを守るといふのは、直接的な意味だけじゃないということに気付かせようと、わざと残酷な言葉を選んだと？

一筋縄ではいかないと聞いていたが、本当によくわからない人だ。

よくわからないといえば、今の自分の状態もそうだ。

あれほど動揺したのが嘘のように落ち着いている。

余計な憑きものが落ちたというか、覚悟を決めさせられたというか

……。

ぼんやりとしているのに感覚が研ぎ澄まされている。

この体になって、忘れてしまっていた感覚だ。

この世界に来て、親分に拾われて、元の世界に比べればずっと平穩で、ぬるま湯のような生活に慣れかけていたところに、冷水を思いっきり浴びせかけられて目が覚めた、というところだろうか。

思いつきついた土埃を払いながら、ジークは立ちあがる。

陽は完全に落ちた。

黄昏の時間は終わりだ。

もう少ししたら、おとり捜査の面々はこの屋敷に戻って来るだろう。

ねえさんは、きっと無事だ。

根拠はないが、なんとなく確信はある。

今だって心配には違いないが、先ほどまでの焦燥感はなりを潜めている。

なんとなく、無性に、ねえさんの顔が見たくなった。

ジークは小さな笑みを浮かべると、こめかみの傷の手当てをしてもらう為、医務室へと足を向けた。

5・切り裂きし者 8 - 1

ひたつ。

どこかで液体の滴る音が響いた。  
時は深夜。

闇の中、窓から注ぐ月明かりが祭壇を照らしていた。

祭壇に向かい平伏する人物は、狂ったように一途に問いかける。

どれだけ熱心に祈っても、相手が応えを返してくるのは稀であった。

それでも、祈る。

祈る、祈る、祈る。

問いかけ、訴える。

神よ。

偉大なる我らが主神よ。

まだ……。

まだなのですか？

この醜く愚かな世界の破滅は。

素晴らしき理想郷の創造は。

神よ。

神よ。神よ。神よ。神よ。神よ。神よ。神よ。神よ。神よ。

神よ。神よ。神よ。神よ。

神よ！！

果たして、短い応えがあった。

…………… ああ。

邪魔者をまだ排せていないということなのですね。

ああ、申し訳ございませぬ。

わたくしの早とちりでございました。

ええ、お任せ下さいませ。

必ずや、必ずや、ご期待に沿ってご覧にいきます。

忌子<sup>いみこ</sup>らの命を捧げ、神と新しき世界への供物と致しましょう。  
すべては神の御心がままに。

平伏した状態から、更に頭を下げる。

床に擦りつけんばかりに頭を下げ、やがて上げた顔には恍惚<sup>じふふ</sup>とした表情が浮かんでいた。

どのような言葉であっても、主から言葉を賜るのは至上の幸福であった。

月明かりはその姿かたちも照らし出す。

うつとりとした表情<sup>かお</sup>の中で、その双眸<sup>そつぱう</sup>だけがギラギラと輝いていた。

「ジーク!? どうしたの、その顔!？」

ケヴィンやタイロンと一緒に本拠地へと戻ってきた葉月は、医務室から出てきた弟の顔を見て血相を変えて駆け寄った。

ジークは額と左のこめかみにガーゼ、鼻には絆創膏が貼られていた。  
おまけに服の前面は土で汚れている。

葉月はジークの強さをよく知っていた。

首領直属の他の団員との稽古ならば、このような怪我をするジークではない。

ジークに土をつけられる相手は、余程の手練<sup>てだれ</sup>に違いないだろう。

自分が連続殺人事件の捜査に関わっていることを棚に上げ、何か危険な任務に関わったのではないかと本気で心配する。

額や鼻の他、頬にも浅い擦り傷があること見て、葉月は傷を避けてそつと頬に触れた。

ジークはくすぐったいのか照れくさいのか、少しはにかんだように笑って言った。

「ねえさん、お帰りなさい」

「ただいま。って、挨拶は確かに大事だけど、でも、それどころじゃないでしょう。その顔の傷はどうしたの？ 他は？ 大丈夫なの？」

矢継ぎ早に質問を投げかけた葉月だったが、ケヴィンがにやにやと笑いながらこちらを見ていることに気付き、はっとジークの頬から手を放した。

内心とり乱したことに舌打ちし、表面上は平静をとり繕う。

「ケヴィン隊長、タイロン。申し訳ございませんが、先に行っていて頂けますか。私もすぐに行きますから」

「ああ、とり乱すお嬢様なんて珍しいもんを一日に二度も見せてもらったから、そのくらいいいーぜ？」

余計なことを、と思いながら、葉月は礼を言う。

「ありがとうございます」

にやにや笑いを崩さぬまま、ケヴィンが尋ねる。

「場所はわかるよな？」

「例の事件の捜査本部に使っている部屋でしたら分かります」

「ああ、その部屋だ。じゃあ、あんま遅くなんなよ」

「先行ってっからな」

ケヴィンは最後までにやにやと笑いながら、タイロンは最後ににかつと笑って捜査本部に使っている部屋へと向かって行った。

いつもならもつと執拗にからんでくるケヴィンがいやにあっさりしていたので、葉月は拍子抜けした気分でその背中を見送った。

葉月の醜態を見て愉快だった、という腹立たしい要素を除いても不気味である。

気を利かせたのだろうか。

と、思いかけて、葉月はその考えを即座に却下した。

あの男がそのような人格者だとは到底思えない。

やはり、それほど時間が惜しい、というのが本当のところだろうか。にやにやと軽薄な笑みを浮かべていることで忘れがちだが、あの男は実行部の第四隊長で一連の事件捜査の副責任者なのだ。今日、八

人目の犠牲者が出てしまった。

これ以上の失態は<テーラン>の信頼を失墜させ、面子を潰すだろう。

見習いの自分にまで声をかけてきたのは、そのせいだと思う。

あの男のことは嫌いだが、<テーラン>が力を失うのはつまらない。そしてこれは葉月にとってチャンスでもある。

つわもの揃いの<テーラン>において戦闘で手柄をとることは、葉月にとって難しい。

しかし、その分、謀<sup>はかりごと</sup>や頭脳労働ならば活躍の余地がある。

新参者の出しゃばり過ぎは反感をかうが、今回は第四隊長の指示という名目があるのだ。

が、その前に心がかかりは取り除いておかねば。

「で、ジーク、どうしたの？」

ジークを廊下の死角へと引つ張って行つた葉月が振り変える。

ケヴィンへ向けたおっとり泰然とした笑みから、再び眉毛が八の字に下がっていた。

その表情にジークは困つたように笑いながら口を開く。

「親分と稽古をしました。でも怪我といつてもたいしたことはないんですよ。こんなものはかすり傷です」

「怪我したのは頭でしょう。自覚症状がないだけかも知れないじゃない」

「医療部長も心配ないと言っていました」

「オーマさんだって、頭の中まで見られるわけじゃないもの。頭の中の血管が切れていたりしていたら、後からたいへんなことになるのよ」

葉月がこれほど心配するのは、ひとえにこの世界の医療水準が元の世界よりも劣るからだつた。

薬と言えば生薬で、ペニシリン等の抗生物質は発見されていないようだった。

診察にしてもCTも、レントゲンすらないのだ。

麻酔はあるようで、簡単な外科手術くらいなら出来るそうだが、二十一世紀の日本並など望むべくもない。

葉月とて医療部長のオーマが藪医者だとは思っていない。

むしろ文化はごちゃまぜだが時代的に言えば中世から近世程度だろうと推測するこの世界では、腕がよい方なのではないだろうかと思っ

っている。  
常に怪我人が出やすい<テーラン>だから、経験を積みやすいだろう。

それにこの近隣の住民から頼まれて往診も行っているという。

だが、この世界では輸血が一般的ではない。

大怪我をしたり大病を患ったりすれば、死に直結する。

交通事故で即死だった葉月はその恩恵に与れなかつたわけではあるが、医学が発達しインフラの整った日本では助かるような怪我や病気で、ここでは助からない。

エルフィムは言及しなかったが、おそらく二度目のチャンスはないだろう。

ここで死んだら、本当に終わりだ。

葉月は、それを恐れている。

「頭の怪我を甘く見ないで」

ジークは強い語調の葉月に首を傾げた。

戦場では自分で適当な治療をしていたし、町や村でもきちんとした医者にかかるには金がかかった。

この世界の住人よりもだいたい丈夫な体をしていたとはいえ、稼業が稼業だ。

怪我をするのも日常茶飯事だった。

そのジークからすれば、こんな怪我など本当にかすり傷に過ぎない。ガーゼや絆創膏など大げさでもつたいたいと思つたし、葉月が何故ここまで心配するのか、理解出来ずに困惑する。

葉月はまったく危機感がないジークに眉をひそめた。

いつもより幾分低い声でジークの名を呼ぶ。

「ジーク」

「はい」

「耳を貸しなさい」

そう言つて、葉月はさつと辺りの気配を探り、盗み聞き出来る範囲に人がいないことを確かめてから、ジークの耳に唇を寄せた。

「いい加減に今の体に慣れなさい。元の体はどうだったか知らないけれど、今の体はやわだつていうことを忘れちゃ駄目でしょう。絶対に無茶するな、とまでは言わないけれど、あなたは無頓着過ぎるのよ」

「……はい。気をつけます」

ジークが悔しげな顔でうつむく。

元の体だったら……などと考えているのだろっ、と葉月はこっそりとため息をついた。

そして、自分より頭半分小さい体を抱きしめる。

「ねっ、ねえさん！」

珍しく慌てた声を出すジークに、葉月は口元だけで笑う。

しかし、そこからこぼれた声は、当の葉月でさえ驚くぐらい真摯な響きを持っていた。

「あなたは自分を大切にしなさ過ぎる。あなたが私を心配してくれるように、私もあなたが心配なのよ」

ジークの肩に顎を寄せ、ぎゅっと抱きしめる。

細い、子供の体だ。

それでも強い。

強くて、脆い、アンバランスな体。

元が強過ぎたせいか、ジークがこの体を厭いとっているのはなんとなく分かる。

そして自分を軽視して、葉月のことばかり心配していることも知っている。

これくらいやって、これくらい言ってやらないと、きっと自愛などしないだろう。

ジークの強さとはつまり、自己の顧みなさなのだ。

肉を切らせて骨を断つどころではない。

肉が切られるとも思わずに、一切の躊躇ちゅうしよもなく突っ込んで行ける潔さ。

それは無謀とは紙一重で違っが、本当に紙一重でしかない危うさだった。

繋ぎとめる為の、枷かせが必要だ。

その枷がジークの強さを削ぎ、逆に死に至らしめてしまっかも知れない。

それでも……………。

「お願い……私より先に死んだりしないで」

ジークの体がびくりと強張る。

そろそろと上げかけられた手は途中で止まった。

いくらかの逡巡しゅんじゆんの後、ジークが答える。

「じゃあ、ねえさんは俺の知らないところで死なないで下さい」

「うん。分かった。約束ね」

葉月は不自然ではない程度の間を置いて答えた。

ジークに見えない顔に、自嘲的な笑みを浮かべながら。

ジークと別れた葉月は、早歩きで廊下を進んでいた。

ゆらゆらと手に持つ灯りが揺れる。

思っていたよりも時間を食ってしまった。

捜査本部に使用している部屋は母屋の一階にあったが、入口に近い医務室からはやや遠い。

この屋敷は前の持ち主の趣味だか自己顕示欲だかで無駄に広く、やたらと入り組んでいる。

部屋数もそれなりに多いのだが、団員も多くなり埋まっている部屋も多い。

そもそも捜査本部を立てるほどの事件など、かなり稀なことであるらしい。

急ごしらえで空いている部屋を探したら、こんな遠くしかなかったということだ。

物置になっているような部屋ばかりの一带で、扉の下の際間から光が漏れているのが見えた。

ここだ。

呼吸を整え、扉をノックする。

すぐに「誰だ」と低い声が返って来た。

「葉月です」と答えると、

「ああ、入れよ」

「いらん。帰れ」

と、相反する声が聞こえた。

どうしようか、と葉月は自身の顎に触れ小首を傾げた。

呼ばれて来たのに、ここで帰るわけにもいくまい。

「失礼します」

とりあえず、後者の声は無視して扉を開けると、一人の男が立ちふさがるように立っていた。

ぎろりと葉月を見下ろす目は鋭い。

葉月はちよつと困ったように笑いながら、男を見上げる。

先ほどの後者の声の主は、この戦列の<テール>実行部第三隊隊長オズワルド、その人だった。

戦列の<テーラン>は、六つの部署から成り立つ組織である。

首領のカーサを補佐する首領直属部隊、副長のブノワの手足たる副長直属部隊、会計および総務を担当する勘定部、団員や周囲の住人の診察・治療を担う医療部、番号付き街や他都市の情報収集を行う諜報部、そして治安維持や護衛などを請け負う実行部がある。

中でも実行部はもっとも人数が多く、更に四つの部隊に分けられていた。

実行部には部長はおらず、それぞれの隊長が采配をふるうが、番号が若い方の隊長が偉いという序列が存在する。

首領、副長、各部の部長、実行部の四人の隊長に参謀を加えた十人がいわゆる幹部と呼ばれる人々だった。

今、葉月の目の前にいるのは、そのうちの二人だ。

実行部第三隊長のオズワルドと、同じく第四隊長のケヴィン。

葉月をここへ呼んだのはケヴィンであるが、オズワルドは帰れという。

立場でいえば、オズワルドの方が上だ。

しかし、それで大人しく帰るような葉月ではない。

オズワルドは少々小柄な葉月よりもかなり背が高く、体もがっちりしている。

体格が良いだけならばタイロンとてそうだが、身にまとう空気はまったくの正反対だった。

気のいい兄ちゃん風のタイロンに対して、オズワルドはマッチョ思考の堅物という印象を葉月は持っている。

見た目の威圧感ではトリスを抜いて<テーラン>と言われ、目が合っただけで泣き出した子供もいるという噂だ。

一言で言えば、見た目が怖いのである。

鋭すぎる眼光に、短く刈り込んだ黒に近い灰の髪や鷲鼻が特にそれ

を増大させているとの見方もあるが、やはり性格もかなりの割合を占める要因だろう。

可愛らしいものは軟弱とこき下ろし、強さこそ男の証と公言するよ  
うな男だ。

その強さや判断力は本物なので、割と男性には憧れられるようだが、  
女子供受けはまったくもってしない。

葉月やジークの入団を快く思っていない人々の筆頭であり、おとな  
しく見える見た目も女であることも武器の一つと考える葉月とは、  
ケヴィン以上に相性が悪かった。

「帰れ、と言ったのが聞こえなかったのか？」

不機嫌丸だして見下ろすオズワルド。

そのひと睨みで屈強な盗賊も震え上がるというが、葉月は困ったよ  
うに笑ってその目を見返した。

「呼ばれて参りましたのに、来て早々に帰るわけにもいきません」

「俺は呼んでない」

「はい。ケヴィン隊長に呼ばれましたので」

そう答えながら、葉月はおっとり笑う。

もちろん、ワザとだ。

オズワルドのこめかみがピクピクしているが、葉月は笑みを崩さな  
かった。

世の中には読むべき空気と、読まなくていい空気と、読んだ上で丸  
めてゴミ箱に投げ捨ててしまえな空気があるが、今はその三番目だ。  
オズワルドの後ろでハラハラしているオズワルドの部下たちには悪  
いが、引く気はない。

「お父様からも実行部から要請が来ているので協力するようと言  
いつかっております。若輩かつ非力な身ですが、精いっぱい頑張ら  
せて頂きますので、どうぞよろしくお願い致します」

葉月はそう言って、すっと頭を下げた。

そして上げた顔には相手の警戒心を解くような笑みを浮かべている。オズワルドはその如才ない所作に口の中で舌打ちし、ぎりっとケヴィンを睨みつけた。

「どういづつもりだ」

どうかつ 恫喝に近い問いかけに、ケヴィンはにたにた笑いながら答える。

「どうゆーもこうゆーも、お嬢様だつてこの事件の捜査に一役かつてんだぜ？ ついでに知恵も絞ってもらおうつてんじゃねーか」

「そもそも、そこからおかしい！ なぜ女子供が、しかもその両方に当てはまるヤツが捜査に加わつてゐるんだ！」

見下され、おまけに指までさされて面白くないが、葉月は口を挟まずに二人の隊長のやりとりを眺める。

「しゃーねーだろ。おとりやれるようなのは、諜報部のオカマかお嬢様くれーだし。他はむさくるしいのばっかだろ。特にあんたのトコとか」

「むさくるしいとはなんだ。むさくるしいとは！ それを言うならお前の所はチャラチャラした輩ばかりだろうが！」

「むさくるしいくて暑苦しいのよりはマシだと思つぜ？」

口論はどんどんヒートアップしていた。

いや、ヒートアップしていたのは主にオズワルドで、ケヴィンはのりくらりとかわす、というよりも火に油を注いでいる。

責任者と副責任者がこんなのでよいのだろうか、と思ひながら周りを見回すが、二人の部下の顔に浮かんでいるのは『あー、またやつてら』という見守るような生温かい笑みだった。

どうやらいつものことらしい。

第三隊長と第四隊長は見た目から考え方まで正反対で、あまり相性がよくないと聞いていたが、そこまで最悪でもないようだ。

そもそも、幹部同士の反目の度が過ぎれば上手くいくはずがなく、そんな状態を放っておくようなブノワではないだろう。

うがった見方をすれば、ケヴィンがやつ辺りと誤魔化しついでに、オズワルドのガス抜きをしている、といったところだろうか。

当事者であつた葉月はおいてけぼりだ。

オズワルドとしては葉月と話しても埒があかないと思つたのだろう。しかしその矛先をケヴィンに向けたところで、埒があくわけがない。口論をしながらも、オズワルドに見えないところで、ケヴィンがちょいちょいと奥を指さす。

なし崩しの内に混ざつておけ、ということだろう。

葉月としてもその提案に異論はない。

ケヴィンとて気に食わない男ではあるが、正攻法以外を使いこなす外道っぷりは、頑固で融通の利かない石頭よりも断然葉月好みである。

顔も良いし、これで自分やジークに突っかかつてこなければ、と葉月は胸中で嘆息しながら部屋の奥へと足を向けた。

捜査本部に使用している部屋は、ほぼ小中学校の教室と同じくらいの広さだった。

入口の側には六脚の長机が二列で等間隔に配置されており、奥にはダイニングテーブルのような八人掛けほどの大きな机が置いてある。部屋ににいるのは十人程だ。

出払っている者もいるが、ほとんどの面々は第三隊と第四隊の男たちだった。

葉月は「お疲れ様です」と会釈しながら、奥の机まで進む。

反応は様々だが、やはり上の影響か、第三より第四の者たちの方が気軽に応じてくれる。

微妙な立場にある葉月とジークだが、相手がどういう態度であろうと愛想の良い対応を心掛けている結果、あからさまな悪感情をぶつけてくる相手は少なくなってきた。

ただ、その少数派を懐柔するには、だいぶ骨が折れそうではある。

奥の机まで近づくと、椅子に座ったタイロンが片手をあげて葉月を迎えた。

「よう。お嬢、災難だったな」

タイロンがにかつと笑いながら労いの言葉をかけると、葉月は苦笑で応じた。

「まあ、オズワルド隊長のお気持ちも分かりますよ」

葉月とて、子供が殺人事件に積極的に関わりを持つのには感心しないだろう。

いくら葉月たちの中身がとうに二十歳を越しているとはいえ、それは相手に知られてはいけないことだ。

葉月は苦笑を引っ込めて、タイロンの隣に座る人物に顔を向ける。

「お疲れ様です。ヴィリーさん」

「お疲れ。お嬢は本当、見た目と違って神経太いよね。あのオズワ

ルドさんに睨まれて笑ってられるって相当だよ」

言葉は辛辣だが、ヴィリーの顔に浮かんでいるのは毒のない笑みだ。これで本人は褒めているつもりなのだ。

そして葉月も怒ったりはしない。

<テーラン>の中では無害でおっとりしたお嬢様を“分かりやすく”装っている。

嫌みにならないさじ加減というのは難しいが、したたかさを滲にじませなければ、本当に“ただのお嬢様”になってしまう。

ヴィリーの言葉は、葉月にとっても正しく褒め言葉なのである。

だから葉月は若き参謀の言葉に笑って答えた。

「本気で殺されそうになったら怖いですけど、殺気とかありませんでしたから」

「ああ、そうになったら俺も全力で逃げるね」

ヴィリーが肩をすくめると、タイロンも笑って言う。

「俺もそれは微妙に遠慮してえな」

タイロンの発言に、葉月とヴィリーはそのような事態を想像し、顔をひきつらせた。

「タイロンとオズワルド隊長が本気でぶつかるのなら、少なくとも見える範囲からは離れますね」

「俺なら隣街まで行くね。可及的速やかに」

「辺り一帯廃墟になるんじゃないですか」

「人災だよな。まさしく」

二人にじと目で見られたタイロンは慌てて口を開いた。

「遠慮してえって言うってんじゃないか！　つーか想像だろ？　それ！

んな化けモンじゃねえだろ、俺もオズワルドの兄貴も！」

椅子から腰を浮かして抗議するタイロンに、ヴィリーが笑ってたしなめる。

「冗談じゃん。本気にすんなよ」

「まあまあ、落ち着いてください。タイロン」

いけないと分かりつつ、ついタイロンはからかいたくなる。

それに誇張はしたが、あながち間違いでもない。

武力だけで言えば、タイロンは間違いなく隊長クラスだ。

<テール>の実行部の隊長クラスというと、他の団員よりも圧倒的に強い。

盗賊十人程度なら、一人であっさり片付けられるくらいに強い。

平団員からすれば、それこそ化け物みたいな強さなのだ。

そんな実力を持つ二人が本気で殺し合ったら……。

しかも共に静よりも動を旨とする戦い方をする二人だ。

想像するだけで恐ろしい。

「ところで、ヴィリーさんも実行部から協力要請があつたんですか？」

未だ納得していない様子のタイロンを放置し、葉月が問いかける。

ヴィリーは参謀という役職についているが、どちらかといえば首領付きのようなものだった。

首領補佐は自由奔放過ぎる首領の補佐はすれど、歯止めにはならない。

なる気もないようだ。

ブノワも当人が忙し過ぎてカーサにばかり構っているわけにもいかない。

そこで白羽の矢が立ったのが、ヴィリーというわけだ。

「参謀とか偉そうな肩書きだけど、実際は遊軍みたいなもんだから腕っ節にはあんまり自信ないんだけどね、とヴィリーはうそぶく。

実際、つわもの揃いの<テール>の中では、ヴィリーは線が細い方だ。

が、頭の回転が速く、弁も立つ。

武力に偏りがちな<テール>では貴重な頭脳派だった。

「まあ、何にせよ、この事件は速やかに解決しなきゃね」

ヴィリーが大机に広げられた地図に目をやる。

模造紙ほどの大きさの新興地区の地図だ。

地図上には点々と赤と黒の印が記されている。

その内の赤の一点の場所に合点がいった葉月はヴィリーに尋ねる。

「赤は遺体発見現場ですか？」

「そうだよ。黒は誘拐現場と思われる場所。目撃証言があったトコとかね」

「目撃者はいないという話でしたけれど、あるんですか？」

葉月は軽く驚いたように地図から顔をあげる。

ヴィリーはうんざりした顔で机に頬杖をつきながら答えた。

「あるよ。真偽問わずに結構ね。裏取るのが大変なくらい。噂は相当尾ひれがついてるようだけど」

「へえ、やはりそういうものなんですね」

葉月はそう言いながら、地図に目を戻す。

そして、脳内で赤の点だけを線で結んでみた。

新しい赤の印を含めて八つを、いくつかのパターンで。

一見バラバラ、無造作に見える点だが……。

あれこれ考えている内に、何故か三週間ほど前に聞いた単語がふと浮かんできた。

その言葉と地図上の赤い点が結びつき、唐突に理解した。

途端に背筋に悪寒が走る。

そして即座にこの動揺の理由を知られてはならないと悟った。

だから葉月は笑みを浮かべた。

いつものおっとりとした邪気のない笑みとは違う、十三の少女には似つかわしくない凄みのある笑みを。

そしてじゃれ合いを止めて近づいて来る二人の隊長を振り返り、言い放った。

「犯人の目星はとづくについていたのですね」と。

葉月は己が打った一手が悪手だと気がついてた。

どうやら自分で思っていたよりも、動揺してしまったこと自体に動揺していたようだ。

唐突に理解してしまった事實は、葉月に強い動揺を与えた。

それでも表に出たのは、本当に微かな細波さざなみのような動揺だったはずだ。

これが並の相手ならば、葉月とて焦らずに誤魔化すことが出来ただろう。

しかし、相手は百戦錬磨の<テール>の幹部たち。

特にケヴィンは人の弱った所や突かれて嫌な所を正確にえぐってくる。

その認識が葉月を追い込んだのだ。

だいぶ面の皮が厚くなってきたと思っていたのだが、まだまだ未熟者だったというわけだ。

とにかく、一度打ってしまった手はもう戻せない。

反省は後回し、後悔などするだけ無駄なこと。

今はこの一手を利用し、どこまで自分に有利なように事を運ぶか、それを考えるべきだ。

引き際を誤れば、今までの努力が水泡に帰すだろう。

自分だけではなく、ジークまでそのとばっちりを食うことになる。今、人知れず、崖っぷちに立っている。

そのギリギリ感に、心臓の鼓動はいつもより速くなっていた。その反面、頭はどんどんクリアになっていくようだ。

背中を走るぞくぞくとした快感に、口角がにいと上がる。考える。考える。

多少の怪しさを補ってなお、自身の立場を確立するにはどうしたら良いのか。

そもそも、自分はこうしてここに呼ばれた？

頭脳労働？ 参謀のヴィリーが参加しているのに？

自分はそこまで賢さを買われているのか？

葉月はその考えを即座に打ち消す。

まさか。あんなアピールでそこまでの評価を得ることはない。

では何故？

求められていることは何か、現在の捜査方針と葉月が確信する犯人を考えた時、カチリとはまった。

なんてことはない。

これはお膳立てされた茶番劇なのだ。

多少、前倒しでシナリオを演じているようだが、大筋では間違いないだろう。

ならば、そのシナリオに乗ってしまえばいい。

もちろん、ただ乗っているだけでは面白くない。

帰結させるべきは犯人の捕縛。

だが、ついでに出来ることはある。

葉月はそれらをわずか数瞬の間に練り上げ、再び口を開いた。

「多少、おかしいとは思っていたんですよ」

浮かべる表情の形こそはにこやかだったが、静かに伝わってくる気迫とも呼べるものは冷え冷えとしており、歴戦の猛者である隊長たちも目を見張った。

「お嬢」

タイロンが引き留めようと葉月の肩に手を伸ばす。

新参者が幹部に盾つくなど、もっての他。

副長の娘という立場を傘に着れば、反発を招くことは必至だからだ。指導役として止めるのは当然だった。

しかし、葉月は振り返ることなく、ゆらりと半歩斜め前に足を踏み出した。

タイロンの手が空を切る。

かわされたことにタイロンは驚き、目を瞬かせた。

葉月の動きに反応出来なかったからだ。

まるで屋気楼をつかもうとしたかのようにだった。

「お嬢……」

タイロンの位置からは葉月の表情は見えない。

静かな底冷えするような気配が伝わってくるだけだ。

タイロンには何故葉月がこのような行動をとったのか解らなかった。人前で幹部に楯突くような、己の不利になるようなことは絶対にしない類の人間だ。

それが制止を振り切ってまで、何をしようというのだろうか。

何にせよ、自分の役目は葉月を止めることだ。

そう思い、席を立とうとしたが、羽織の裾を掴まれた。

隣を振り返ると、ヴィリーは興味深そうな顔をして笑っていた。

目配せで『止めるな』と言う。

「おいっ」

タイロンはその手を振り払おうとしたが、すねを蹴られて椅子に座り直した。

抗議の声をあげようとしたが、ヴィリーは既にタイロンの方を見ていなかった。

その瞳はか細い少女の背だけを映している。

おそらく、その頭の中でいろいろな計算が目まぐるしく踊っているのだろう。

この参謀にとって、葉月の行動は望むところのようだ。

それは<テール>の為になることだろう。

しかし、葉月の為になることとは限らない。

「まったく、知らねえぞ」

タイロンは小さく毒づき、腕を組んで事態を見守ることにした。

葉月は凶悪で壮絶な笑みを引つ込め、邪氣の欠片もない笑みを浮かべる。

その身にまとう気配が極寒の吹雪だとしたら、春の花園のような笑みだ。

灰青の瞳さえ、底は見えないが柔らかい。

つまり、総合してみるとかなりちぐはぐだった。

己でも相当に器用なことをしていると思いつつ、葉月は続けた。

「おとり捜査というのは、だいたいの犯人像が浮かんでいて、証拠がない場合に実施するものなんですよ。まったく的外れなところをやっても意味がありませんから。稀にそうした闇雲なやり方をする所もあるでしょうけれど、参謀と隊長たちが揃っていてやるとは思えません」

「お褒めに与り光栄、とでも言つときやいーのか、お嬢様？」

言葉尻をとらえ、ケヴィンが皮肉で混ぜっ返す。

オズワルドは難しい顔をして黙ったままだ。

葉月はそんな隊長たちを見据えたまま、少し待ったように首を傾げた。

「まさか。私の正直な気持ちですよ。だから、既に目星がついていた、と考える方が自然なんです。それに、実はその手掛かりは三週間ほど前に聞いていたことを思い出しましたから」

葉月はそこで一旦言葉を区切った。

じつと隊長たちを見つめる。

言外にここで言ってしまったても良いのか、という意味をこめて。

すると責任者であるオズワルドが盛大な舌打ちをした。

苦虫を噛み潰したよう、という表現がぴったりの顔だ。

オズワルドはつかつかと葉月との距離を詰め、鋭い目で見下ろした。葉月が口を開こうとする前に、羽織の襟首を掴み、子猫のように吊

るし上げる。

これには葉月も驚き、目を瞬かせた。

しかしオズワルドはそんな葉月に構うことなく、そのまま扉へと向かう。

ドアノブに手をかけたところで啞然としている者たちを振り返った。  
「ケヴィンと……………タイロン、ついてこい。ヴィリー、後は任せた」

そう言い置いて、葉月を吊るし上げたまま、さっさと出て行ってしまう。

指名を受けたケヴィンとタイロンが後を追うと、捜査本部内は騒然とした。

犯人像が分かっているのでは？ ということうんぬんよりも、“世間知らずのお嬢様”だと思っていた少女が見せた気迫に戸惑っているのだ。

特に葉月の表情がよく見える位置にいた者たちは、表情と気配の落差に得体の知れない恐怖を感じていた。

後姿しか見ていないヴィリーはそんな団員たちをまとめながら、ちらりと四人が出ていった扉を見やる。

タイロンを連れていく辺り、オズワルドにしては配慮をしたな、と思った。

少女のあれがハツタリかどうかは分からないが、どちらにしろ、オズワルドは耳を傾ける気になっただけらしい。

それが重要だ。

葉月がこちらの筋書きを読んだ上であのような態度に出たのなら、未恐ろしいというべきか……………。

姉弟揃って普通ではないな、と思いながら、ヴィリーは今後打つべき手に備え、手早く指示を出し始めた。

ぽいつ。

手頃な空き部屋に足を踏み入れたオズワルドは、羽織の襟首を掴んでいた葉月を無造作に放り投げた。

葉月はほこりの積もった床を転がる趣味などないので、体をひねり、ブーツのつま先で小さく床を蹴って体勢を整え、着地した。

軽やかにやってみせたが、相当体幹を鍛えていなければ出来ない技だ。

さりげなく羽織を整えながら、辺りを見回す。

明かりはケヴィンが持ってきた小さな燭台しかないが、壁の三面にうず高く積まれた荷物を見れば、ここが物置の他なんでもないことがわかる。

この場を選んだのはオズワルドだが、選ばせたのは葉月のようなものだ。

ここでは先ほどまでのように尖る必要はない。

あれはオズワルドを挑発すると共に、他の団員たちに葉月を印象づける為にやったことだ。

あそこまでやる必要はないし、主導権を渡しながら流れを自分の有利な方向へ持つていくのは面倒なことだが、場を支配してしまう方が今の自分の立場ではより面倒だ。

それでも楽な方へ流れてしまうと、這い上がるチャンス逃してしまふのだから仕方ない。

葉月はこっそり気合いを入れて、自身を放り投げたオズワルドと続いて物置に入ってきた二人に向かい合う。

冷たい気配はオズワルドに釣り上げられた時に引っ込めてしまっているの、葉月はいつも通りおっとりと笑いかけた。

「内緒話にはふさわしいお部屋ですね」

オズワルドはそんな葉月の言葉を、不機嫌さを隠そうともせず切っ

て捨てた。

「下らん前置きは必要ない。手掛かりを聞いていた、と言ったな？」  
葉月も予想していた反応なので、笑みを崩さずに「はい」とうなづく。

「三週間ほど前に、ケヴィン隊長からお聞きしました」

それを聞いたオズワルドは、盛大な舌打ちをして後ろを振り返った。葉月にはその顔が見えないが、おそらく子供が見たらトラウマになるような怖い顔をしているに違いない。

「おい。どういことだ」

地を這うような低い声で問いかけるオズワルドに、ケヴィンは肩をすくめて見せ、

「さあ？ 忘れちまつたけど、なんか言っただけな」  
いけしゃあしゃあと白を切る。

忘れてなどいないのは明白だった。

高みの見物を気取るつもりのようだ。

オズワルドは目に見えるほどの怒気が混じった威圧感を放っているが、ケヴィンは痛くも痒くもないようで、にやにや笑いながら葉月へと水を向ける。

「お嬢様はすっかり覚えてんだろ？ 俺にも教えてくれよ」

そのケヴィンの言い方に、葉月も内心イラッとした。

こてんぱんに伸して良い相手なら「呆けるにはまだ早いんじゃないですか？ それとも、もとの容量が少ないんですか？」くらいの嫌みをジャブとして言い放ってやりたいくらいだ。

やはりこの男も気に食わないと思うながら、根性で表には出さない。

「そうですね。すっかり覚えておりますよ」

と笑顔でうなずき、さらりと、その単語を舌にのせる。

「くセルダの使徒」を知っているか、とケヴィン隊長は仰いました」

その瞬間、ピキンと、部屋の空気が凍る。

灯りが揺れ、少し暗くなつた気さえする。

その単語を聞いたオズワルドの眉間のしわは、それ以上は無理だろ  
うというほど深く刻まれ、タイロンの顔には驚きと嫌悪の表情が浮  
かんだ。

予想以上の反応に、葉月はより慎重にならねばならないと気を引き  
締める。

どうしても葉月はここの住人と感覚が異なるのだ。

その違いを記憶に留めておく必要性をひしひしと感じる。

決して臆したわけではないが、数瞬の間が空いた。

ケヴィンが人の神経を逆撫するような笑みを浮かべながら、「で  
？」と先を促す。

無性に癪に触るのは、葉月が過敏になっている所為だけではない。

それでも葉月は何事もないかのように話を続けた。

「手掛かりと言いますか…… ほぼ犯人像そのものなのでしょう。尋  
ねられたのは、オズワルド隊長に呼ばれてらした時ですし、他にも  
根拠はあります」

そう言つて、葉月は右手の指を三本立てて見せた。

「一つ目、殺害された被害者の多くが十代の半ばであると推測され  
ること。二つ目、過剰で過激な殺害方法であること。三つ目、殺害  
現場の位置関係が主神ゼルダの紋章を形作っていること」

指折り数えて、自身の考えを披露する。

「ケヴィン隊長の問いかけの日付の関係を考えれば、最初から犯人  
がわかつていた…… 殺害予告があつたと考える方が自然でしょう。

そうすれば、おとり捜査が実施されたことにも納得が出来ます。犯  
人はくゼルダの使徒>、もしくはくゼルダの使徒>を犯人にしたい  
誰か、違いますか？」

## 5・切り裂きし者 11-2

葉月は確信を持って問いかけた。

「……<ゼルダの使徒>の詳細は誰に聞いた？」

オズワルドが逆に問うたのが、その確信を肯定する証拠だった。

<ゼルダの使徒>は、確かに子供が知っているような類の集団ではない。

オズワルドが訝しむのも当然だ。

別に情報源について疚しい所はないので、葉月は素直に答えた。

「学問所のジャニス先生です。馬鹿正直にケヴィン隊長からお聞きしたとは言いませんでしたのでご安心ください。通りで耳に残った言葉ということで質問しましたから」

ジャニスの名を聞いた途端、オズワルドは妙に納得してうなづいた。

「ジャニス女史か……。あの女史なら知っていても不思議はないか」  
その反応を意外に思った葉月だったが、続いてケヴィンに尋ねられて思考を伸ばすことはなかった。

「だろーな。で？ どこまで聴いたんだ？」

「ジャニス先生も子供に聴かせる内容ではないと細部は濁されましたので、概要だけです。主に発祥の経緯と目的ですね」

あとは元の世界のカルト的集団のあれやこれやからの推測だ。

人は生きている限り他者を犠牲にするものだが、宗教はそれを脳みそも良心の呵責も使わずに正当化してしまう。

多寡の違いはあれど、それはどの世界も同じなのだろう。

しかし、今の葉月には文化の考察などしている暇はない。

最優先は“犯人の捕縛”なのだから。

「それらを踏まえて、より効果的に犯人を誘き出す餌があるのですが、聴いて頂けますか？」

葉月はよいお茶の入れ方があるのだとも言うように、微かな上目遣いとおっとりとした笑みで、自らの案を語りだした。

<ゼルダの使徒>。

それは<ゼルディア国>の主神であるゼルダを崇める宗教集団である。

ただし、狂信的で偏狭的な、という但し書きがつく。

<ゼルディア国>の人間は、基本的にはそこまで信心深い方ではない。

文化的に溶け込んでいる宗教行事は多いが、週一で礼拝堂に行く者は少数派だ。

新年の挨拶やら結婚式やら願い事がある時など、節目や困った時の神頼みが主で、年に三、四度という頻度だろう。

神の存在を確信していること以外の宗教観は、日本と少し似ているかも知れない。

この世界や国、都市、街、村、そうした枠組みを創り給うた神ではあるが、そこに生きるは人の責と過度の干渉はしていないという。もちろん、例外は存在する。

葉月やジークはその最たるものだ。

この世界は他の世界に比べて不安定で未熟であるとは、<ゼルディア国>の副神であり、葉月たちをこの<混沌なき箱庭>に落とした張本人であるエルフイムの弁である。

つまりエルフイムはこの世界を正常な世界にしたいと願っているのだ。

だが、<ゼルダの使徒>の主張は異なる。

『失敗作である世界を一度滅ぼし、完全なる世界を創り直す』  
それが主神ゼルダの真の願いだという。

この過激な思想は一般には受け入れられていない。

人々は、まだこの世界に絶望などしていないのだ。

余所は分らないが、少なくとも<ウクジェナ>の大多数の人々は、この世界が滅ぶことなど望んでいない。

それを不信心者として弾劾するのが、くゼルダの使徒>である。狂信者はくゼルディア国>全土で地下活動を行っているという。その活動の内容をジャニスは“おぞましい”という言葉で表現した。子供に聴かせられる内容ではない。普通に生きていれば関係ない話だから、と。

しかし、葉月やジークは“普通”ではない。

この世界の安定の為、異世界から連れてこられたく世界の落とし子>である。

ジャニスに話を聞いた時は、その集団とは絶対的に相容れないようだから用心しようということと、ケヴィンがその言葉を葉月とジークに問いかけてきたのは、自分たちのことを疑っているからであるうという推測から言動には注意しなければならないということをも二人で確認したのみだった。

しかし、一連の事件が続き、遺体発見現場の位置を地図上で確認した葉月は、悟ってしまった。

犯人がくゼルダの使徒>であること。

そして、今までの被害者は、自分たちの身代わりであることを。

## 5・切り裂きし者 12-1

葉月が提案した作戦は、上層部にすんなりと承認された。

やはりヴィリーやケヴィンが想定していた作戦と重なっていたからだろう。

だいたいの根回しは済んでいたのだ。

この作戦自体は、普通のおとり捜査と劇的に違うわけではない。

ターゲットを絞り、より効果的な“餌場”を作り、おとりをより“食いつきやすい餌”に見せるといっただけだ。

それでも今までの消極的なおとり捜査とは規模が違う。

戦列の<テーラン>の威信をかけた大掛かりな捜査となる予定だ。

実はこの作戦承認の最大の難関は、捜査責任者であるオズワルドの説得だった。

女子供を軽視するオズワルドだが、何も女子供の抹殺を願うような思想の持主ではない。

逆に女子供はか弱いだから守られている、という考えなのだ。

しかし、<ゼルダの使徒>が狙うのは<世界の落し子>、つまり通常は十代の半ばくらいの少年少女である。

もうすぐ三十路になるうかとしているオズワルドからすれば、十分に女子供の範疇だ。

そのような女子供をおとりにするなど、許せるものではない。

だから消極的なおとり捜査にならざるを得なかったし、葉月のおとり捜査への参加も渋っていたのだ。

しかし、状況はそのような信念など許されなくなっている。

これ以上の被害者が出る前に事件を食い止めることが求められている。

この状況で微妙な立場にあるのは<テーラン>だけではない。

この世界に於いて、新興地区自体がイレギュラーな存在なのだ。

諸々の事情で自治が認められているが、これ以上の治安の悪化は他

からの干渉を避けられない。

そうした背景と共に、おとり役の葉月がか弱い存在ではないことをオズワルドに認識させること、それがヴィリーの考えていた計画の序だった。

「というわけで、次のおとり捜査にはジークにも参加してもらいたい。もちろん、おとりには若過ぎるから捕縛部隊で。正式な協力要請の話は明日にでも首領補佐のゾルさんからあると思うんだけど」

葉月がジークの部屋をこっそり訪れたのは、作戦の大枠が決まった日の翌晩だった。

掻い摘んだ事情と協力要請の話を葉月から聞かされたジークは、首を傾げた。

葉月は本日から学問所を休んでおり、何かしらの進展があったのだろつとは思っていたし、より大掛かりな作戦で人手が足りないことは理解出来たが、自分は一度おとり作戦に参加することを拒否されている。

たった数日でそれらの事情が変わるとは思えない。

「本当に俺が参加してもいいんですか？」

少々疑り深い声で尋ねるジークに、葉月はころころと笑った。

「もちろん。危なっかしい感じがだいぶマシになったもの。それに親分の鶴の一声があつたからね」

ジークを推薦したのは葉月だったが、これにはオズワルドだけではなくケヴィンも難色を示した。

理由は以前ジークのおとり作戦参加を拒否した時と同じだ。

いくら腕が立つとはいえ、葉月の危機に逆上して犯人を殺してしまう恐れがある人物を捕縛部隊に入れるわけにはいかない。

葉月はジークの意識が変わったことを説明したが、感覚的なことな

ので説得力はあまりなかった。

それこそたった数日で変わるわけがない、と思うのは当然だった。しかし、その話を伝え聞いたカーサが「いいんじゃない？」と言ったことで、ジークの参加はあっさりと決まった。

カーサはその根拠を「実際に闘<sup>や</sup>つてみた感じと勘」と言い放ったが、<テール>の団員にとってそれらの根拠は十分に信用するに足るものだった。

ヴィリーやケヴィン、そしてオズワルドもそれで納得してしまうのだから、凄まじい。

女子供を軽視する傾向のあるオズワルドだったが、カーサのことは特別のようだ。

「アレを女子供の範疇に入れるほど、あの石頭だって脳みそ腐ってねーだろ」

とはケヴィンの談だ。

かなり失礼な話ではないのかとタイロンにこっそりとこぼした葉月だったが、返ってきた言葉は、

「いや、一緒にする方が親分にも女子供にも失礼じゃねえか？」

であり、葉月もそれにはうまく反論が出来なかった。

カーサを婦女子の範疇に入れるには心理的抵抗があると自身で気づいてしまったからだ。

とにかく、ジークがおとり作戦に参加することは決定したのである。

「作戦の詳しい段取りは後日、きちんと説明があるからね。いつでも、初期段階で大変なのは諜報部だから、捕縛部隊は気付かれな  
いことの方が大事なな。犯人にも住人にも、ね」

と、葉月はそこで言葉を区切った。

いつも癖のように浮かべているおっとりとした笑みも消してしまう。  
滅多にすることのない真剣な顔で自身の唇を指差し、声を出さずにはっきりと唇を動かした。

## 5・切り裂きし者 12・2

『ここからが本題なんだけど、唇読める？』

ジークの部屋にあるのは粗末な蠟燭の燭台のみである。

光量としては少々心許ない。

それにジークは読唇術を習得しているか、という質問だ。

葉月たちがこの世界で普段話している言葉は<ゼルディア語>であつて、自動翻訳とは少々異なる。

きちんと<ゼルディア語>で話しながら、意味がネイティブ並みに分かる仕様だ。

ただし、元の世界になかったモノについては、確認せずには意味が分からない。

葉月もジークもそれぞれの母語を意識して話すことが出来た。

無意識の内に発する言葉は<ゼルディア語>に“設定”されているようだったが、<ゼルディア語>を<ゼルディア語>として認識出来ることは、葉月たちにとってかなりの利点である。

話す言葉と聞こえる言葉が異なる自動翻訳では、読唇術を行うことは限りなく不可能だ。

葉月が読唇術を習得したのは、曾祖父の指導によるものだった。

読唇術はかなりセンスに左右される技術で、相当の修練が必要である。

唇の動きだけでは同じになつてしまふ言葉が多々あるからだ。

唇だけではなく、舌や顎あごの動き、顔の表情など総合的な読み取り能力が要求されるし、文脈から候補の単語を選びとる判断能力も問われる。

葉月の曾祖父という人は四百年以上の師岡流の歴史の中でも傑出した天才で、先の大戦では特殊部隊に所属し、決して表沙汰にはならない戦果を上げたという兵つわものであつた。

葉月はこの曾祖父からいわゆる忍術と呼ばれる技術を仕込まれてい

た。

その内の一つが読唇術だったのだ。

兄や弟を差し置いて何故葉月だったかと言えば、偏に葉月の器用貧乏な質たちによる。

習得が難しい技術でも、七割から八割程度はなんとか出来た。

兄や弟はどうも武術に才能が偏りがちであり、妹は致命的なまでにセンスがない。

葉月の祖父や父もあまり向いておらず、兄の長男（葉月にとっては甥）が生まれるまでは葉月が唯一の伝承者だったのだ。

このように読唇術はセンスによるし、傭兵をしていたというジークが読唇術を習得している可能性はあまり高くないだろうと、葉月は予測していた。

案の定、ジークは少し困ったように首を傾げた。

『えーと、少しだけなら、なんとか』

ジークの返答に葉月は頷き、持ってきた手提げから帳面を取り出した。

筆談混じりで意志の疎通をはかろうというのである。

葉月は何故、このような面倒なことをしようと考えたのか。

それは、葉月とジークがく世界の落とし子であることを絶対に知られないようにという用心からであった。

葉月は己の推測をジークに伝えたかったが、伝えるにも周囲にかなり気を配る必要がある。

壁に耳あり障子に目ありとはよく言ったもので、どこで誰が聞いているか分かったものではない。

筆談で使った紙も後で燃やしてしまうつもりだった。それほど、デリケートな話題なのだ。

葉月が大体の推測を説明し終わると、ジークは難しい顔で唇を動かした。

『つまり、一連の事件は俺たち、＜世界の落とし子＞を狙った事件なんですね』

ジークは帳面に書かれた“ねらいはせかいのおとしご”という文を指差し、確認の眼差しで葉月の顔を見た。

それを受けた葉月はこくりと頷き、帳面に“はんこうせいめい、かくにんずみ。たぶん”と書き入れる。

『ヴイリーさんに犯行声明を見せてもらったんだけど、多分そうだと思う』

続いて、犯行声明に書かれていたことの要約を書いていく。

まだマスターしたのは表音文字のエレイムだけで、表意文字のゼダンはいくつかしか読めない。

表音文字のみでは読みにくいので、なるべく簡潔にしてしまう。

元の文章はヴイリーに読み上げてもらったが、かなりの修飾が加えられた文章で回りくどく、暗喩も多用されていた。

あれを大真面目に考えたのなら、やはり頭がイカレているのだろう。要約してしまえば、たったの一言なのだから。

“しんこうちくにいみがいる。だからころす”

『元の文章風に言えば“許されざる地に忌子あり。誅滅こそ正道なり”ね』

“いみご ↓ せかいのおとしご？”と補足をかき入れながら、葉月は皮肉げに笑う。

被害者の身元確認は人員を割いて行われている。

しかし、身内であると名乗り出るものは少なかった。

娼館の女将がウチから逃げた妓ではないか、としぶしぶ確認したくらいだ。

身寄りのない、周りとの付き合いも薄い者が狙われたと見て間違いないだろう。

犯行声明という裏付けもある。

＜世界の落とし子＞がターゲットとなっているのは明白だった。

葉月たちにはブノワという身寄りがいることになっている。

それに通常の＜世界の落とし子＞よりも歳が若い。

それらの要素が、葉月たちを守っていたのだ。

幸運だと言いたいようがない。

葉月は今までの被害者たちが自分たちの身代わりとなったことに罪悪感を覚えてはいない。

自分でも薄情だとは思うが、自分たちが命を狙われているという危機感と、やられる前に相手のことが分かったという安堵感があるだけだ。

被害者が顔も知らない者たちであることが、その一因かも知れない。葉月は博愛の精神など欠片も持ち合わせていないと自覚している。

そんな柔<sup>やわ</sup>な考え方が出来る程、現代でも師岡の家はお綺麗な家ではなかった。

ジークも真実を知り傷ついた様子はない。

そのことに葉月は安堵と頼もしさを覚えた。

自分たちに降りかかる火の粉を如何にして払うか、それこそが問題なのだ。

その為に意識の共有が必要だった。

自らの命を守り、正体を気取られないようにすること。

言葉にしてしまえば簡単だが、実行は難しい。

一人では手に余るだろう。

事情を共有し、共に戦う相手がいるのは、本当に有り難かった。

葉月とジークは作戦に紛れて疑われる要素を排除する方法を打ち合わせる。

対くゼルダの使徒＞のおとり作戦が開始されたのは、それから二日後のことだった。

## 5・切り裂きし者 13-1

夕暮れ時の路地を、二人の娘が寄り添うように急いで歩いている。年上の娘は十六、七歳、年下の娘は十三、四歳といったところだろうか。

姉妹であれば、顔の造作はまったく似ていない。

似ているのは同じ亜麻色の髪くらいなものだろう。

しかし、得も言われぬ可愛らしさを体現したような娘と、下町に相応しくない所作に品がある娘。

この辺りでは少々珍しい髪の色も相まって、地味な服を着ていても人目をひく組み合わせだ。

路地に面した家の老人が、裏口に置いた椅子に座って煙管を飲みながら「今、帰りがい？」と気さくに声をかける。

娘たちは一瞬びくつとしながらも、笑顔で応じた。

「ええ、今日はちょっとお店が忙しくて」

「そうかい。気をつけなよ。……黄昏時だからねえ」

「ありがとうございます。そうします」

につこりと笑いながら会釈をして、再び家路を辿る。

二人がこの先の貸家に越してきたのは、つい最近のことだ。

どこから流れて来たのかは誰も知らない。

ただ気立ての良い娘たちで、近くの商家へそれぞれ働きに出ており、そこでの評判も上々だった。

この街は新参者にも寛容だ。

揉め事さえ起こさなければ、しつこく詮索されることもない。

だが、ふらりと現れた年の若い娘二人は、この街でも珍しいことには変りなく、それとなく注目の的だった。

赤く染まる地面に長く伸びる影、どこからか聞こえてくるカラスの

鳴き声が何故か不気味に響く。

いつもと同じようできて、どこか違う。

空気が重く、生暖かい。

嫌な風が吹いている。

路地には娘たち二人の影しかないが、間違いなく見られている。

どこからかねつとりとした気配を感じ、娘たちの足は自然と駆け足になる。

そこを右に行けばもうすぐ家だという三叉路に差し掛かった時、影に先に気づいたのは、年下の娘だった。

「フィーリア……」

怯えたように、年上の娘の名を呼ぶ。

フィーリアと呼ばれた年上の娘も、行く手に立ちふさがる怪しい人物に気づいた。

建物の影に佇む、黒い外套をまとい手に幅の広い剣を持った人物を、怪しいと言わずになんと言おう。

「エ、エゼル……後ろに」

フィーリアは年下の娘をかばう為、一步前へ進み自身の体でエゼルと呼ばれた娘を隠す。

しかし、それも無駄なことだった。

「後ろと横にも！」

エゼルが悲鳴じみた声を上げ、フィーリアの袖を引いた。

三叉路のすべてに、黒い外套をまとい剣を持った者たちがいた。

目深にかぶったフードと西日の所為で顔はよく分らない。

ただ、行く手に現れた者は線の細い体で、覗く手首も白い。

エゼルは直感で女だと断定した。

幅広の剣も重そうにだらりと下げている。

剣技に長けているようにはとても見えない。

しかし、横と後ろに現れた者たちは外套の上からでも分かる巨軀きよくで、剣をだらりと下げているのは行く手を遮る女と同様だが、隙がない。この男たちは、間違いなく強い。

エゼルはフィーリアの背中に右半身ですがりつきながら、男たちに向かって叫ぶ。

「あ、あなたたち何なの!？」

「クツクツクツクツ、何？ わたしたちが何？ わたしたちが何者かと？」

エゼルの問いに答えたのは、男たちではなく女の方だった。額に手を当て嗤いながら、妙に抑揚をつけ唄うように言う。

「知りたい？ 知りたいの？ クツクツクツクツ、へえ、知りたいのねえ……忌むべき子たち<sup>い</sup>」

女ははらりとフードを後ろへと落とす。

西日に当たり赤く輝く髪は白に近い銀なのだろう。

緩く編んだ三つ編みを背中に垂らしている。

それだけならば、この国では稀に見かける普通の女だ。

異様なのは、その瞳。

色が異様なのではない。

限界まで見開かれ、異様なほど血走っている。

愉悦に歪んだ唇もまた、毒々しい程赤く色づいていた。

## 5・切り裂きし者 13・2

女が体現するのは、まさに“狂気”。

正面から対峙するフリーリアが、その毒気に当てられて息をのむ。しかし、女はそんなことは露程も気にかけず、クッククックと嗤って続けた。

「わたしたちが何か？ 決まってるわ。神の使徒よ。忌むべき子たち」

「い、忌むべき子？ なんですか、それ。私たちはそんなものじゃありません！」

フリーリアが精一杯の気を張って言い返す。

その後ろでエゼルもこくこくとうなづいている。

娘たちの言葉に、女はにいつと口角をつりあげた。

「ふうん。でも、それこそわたしたちには関係がない。疑わしければ誅す。その中に本当に忌むべき子たちがいれば、それで良いのだもの。どうせわたしたち以外は愚かで怠惰で救いようがないのだから、無駄ではないわ。新たな世界の為の礎となるのだから、むしろ感謝してもらいたいくらい。ええ、それに他の者たちに自分たちの愚かさ気付けさせるきっかけにもなるでしょう？ ほら、無駄どころか一石三鳥くらいにはなるじゃない」

滔々（とうとう）と女は語り、自身の言葉に酔っているかのように恍惚とした表情を浮かべる。

「さあ、感謝にむせび泣きなさい。忌むべき子たち。小指の先ほども役に立たぬ小物どころか害悪でしかないお前たちを有効活用してあげるのだから」

女はクックククと笑いながら、剣を持たない右手を差し出した。

さあ、跪いて命乞いをしなさいとも言つように。

フリーリアたちにとって、実質的な驚異は屈強な男たちの方であるはずなのに、より恐怖をかきたてるのは目の前の女の方だった。

狂気を越えた禍々しさを放っている。

それは、絶対に相容れず理解すら出来ないモノに対する、原始的な畏怖<sup>いふ</sup>だった。

「あ、あなたたちが連続殺人事件の犯人なの!？」

エゼルがフィーリアの肩ごしに問いかける。

その途端、女の恍惚とした表情は怒りへと変わり、白いはずの顔がどす黒く染まった。

「犯人!? 犯人! 犯人!! なんて無粋な言い方! 我らはくゼルダの使徒>! 高尚なる伝道者! 選<sup>え</sup>び選<sup>え</sup>ばれし者! それに分からぬお前たちはやはり愚かだ! 死ね! 死ね!! 死ぬ<sup>い</sup>がいい!!!」

女は幅広の剣をフィーリアたちに差し向けた。

それを合図に、それまで微動だにしなかった後ろと横の男たちが剣を構えた。

そこに居ることすら忘れてしまうくらいに影が薄かったのに、今は目に見える程の殺気をまき散らしている。

ただでさえ大きな体が一回りは大きく見えた。

誰がどこからどう見ても、か弱い娘たちの命は風前の灯火だろう。

しかし、先程までの怯えっぷりが嘘のように、娘たちは平然とした顔をしている。

「まあ、時間も稼げたし、これは黒確定ってことで良いのかな?」

フィーリアと呼ばれていた娘が、先程までよりも幾分か低い声でつぶやく。

それを受けたエゼルと呼ばれていた娘が、おっとりとして笑って首から下げていた笛を懐から取り出した。

「良いと思いますよ。しっかり自分たちがやったと白状していますし」

そう言って、大きく息を吸い込み、三度続けて笛を吹いた。

その途端、静まり返っていた路地に、次々と鬨とぎの音が響く。

三叉路の全ての道からわらわらと現れた男たちに、黒外套の女は狼狽うしろめたえた声を上げた。

「なっ、人除けに置いておいた奴らはどうした!？」

「雑魚どもなら眠ってもらった」

そう言つて女の後ろの道から進み出たのは、眼光の鋭い鷲鼻の男。オズワルドだ。

「さーで、年貢の納め時だ。なあ、<ゼルダの使徒>」

オズワルドとは別の道から現れたケヴィンが、にやにや笑いながら抜剣する。

残る一方の道には、大剣を抜きはなつたタイロンと二振りの短剣を構えるジークの姿があつた。

三方の道にはそれぞれ六人は居るだろう。

纏う雰囲気や構えから、その全てが手錬てだれだと分かる。

完全に囲まれた黒外套の三人は、中央の娘たちの異変にも気が付いた。

それぞれ亜麻色のかつらを取り去っており、銀と濃い灰の地毛をさらして、羽織の下に隠し持っていた剣を抜き放っている。

明らかに鍛錬を積んでいると分かる構えだ。

素人ではあり得なかつた。

「お前たち、何者だ!」

黒外套の女が口から泡を飛ばしながら、やや裏返つた声で問いかける。

その答えは、頭上から降つてきた。

「俺たちが何者かだつて?」

驚いた黒外套たちが見上げると、二階建ての建物の屋根に黒い影が一つ。

「オラ、退け! 危ねえぞ!」

と言つて、その身を宙に躍らせる。

慌てたのは、着地予定地点にいる娘たちだ。

巻き添えを避けて、それぞれ後ろに跳び下がる。

飛び降りてきた影は、娘たちが避けた所へ膝のバネを使って見事に着地した。

そこに立ち上がったのは、浅黒い肌をした男物の服を着ていても分かる長身の女だった。

すらりと手に持っていた長剣を抜き放ち、物騒な笑みを浮かべる。

それは、獲物を見つけた獣の笑みだった。

「泣く子も黙る天下無敵の自警集団、戦列の<テーラン>たあ俺らのことだ。冥土の土産によく覚えておきやがれ！」

なんとも派手な登場をしてくれたカーサに、葉月はこっそりとため息をついた。

二階建ての建物の屋根から飛び降りたくらいでどうにかなるような御仁ではないと知っているので、カーサ自身の心配などする必要はないのだが、巻き添えをくらいかけた身としては一言言っただけいい気分になる。

同じく巻き添えをくらいかけたアンジェリカもそうだろう。

しかし、カーサへの小言は葉月やアンジェリカの領分ではない。ブノワがいないこの場では、参謀であるヴィリーの役目だ。

「親分！　なんて所から現れてるんですか！」

どうやらカーサが建物の屋根へと上る過程で見失ったらしいヴィリーが、オズワルドの後ろから非難めいた声をあげた。

しかし、カーサは何故か得意げな顔だ。

「一回やってみたかったんだよ。カッコいいだろ？」

反省やら後悔やらとは縁遠い人である。

何を言っても暖簾に腕押し、糠に釘、馬耳東風だと承知しているヴィリーだったが、だからと言って言わないわけにはいかない。

聞く者が同情してしまうような深いため息について口を開く。

「子供じゃないんですからアホなことやらかさないでください。それに冥土の土産はダメです。殺さずに捕縛するんですからね。分かってます？」

疑い深く尋ねるヴィリーに、カーサは獰猛な笑みを浮かべる。

「わかってんよ。口が利けりゃあいいんだろ？」

「そうですけど、せめて三日は口が利けたままじゃないとダメですからね」

「おう。気をつける。お前らも気をつけるよ」

他の団員に向かってカーサが言くと、三方から、

「親分じゃねえんですから大丈夫です！」  
と、総ツツコミが入った。

戦闘狂ぞろいの戦列の<テーラン>の中で、最も強く最も手加減が不得手なのが首領のカーサだった。

というよりも、端から手加減などするつもりがない。

女どころか人間離れた<sup>じやうりやく</sup>した脅力で繰り出される豪剣は、実行部の隊長たちでさえ真正面から受けることを避ける程だ。

葉月もその強さは出会った時から知っている。

首領カーサ、実行部第三隊隊長オズワールド、同じく第四隊隊長ケヴィン、副長直属タイロン、そして首領直属ジーク。

<テーラン>の中でも指折りの猛者<sup>もさ</sup>たちが、この場に勢ぞろいしていた。

他の団員にしても並以上の強さを持っているし、おとり役である葉月やアンジェリカでさえ、そこらのチンピラ程度なら軽く撃退出来る程度の鍛錬を積んでいる。

この場にはいない団員も含めれば、実に<テーラン>の半数以上がこの作戦に参加していることになる。

それほど、この作戦が重要視されているという証だった。

葉月が提案した作戦とは、おとり捜査にリアリティを付し、餌が疑似餌だとは分からなくするというものだ。

それまでやっていたおとり捜査は、葉月やアンジェリカが事件の発生しそうな路地を歩くだけという、なんともお粗末なものだった。

該当区域は広範囲であるし、<ゼルダの使徒>が狙う十代半ばから後半の若者が夕暮れ時に路地を一人でうろつろしているのは、罠だと見え見え過ぎる。

遺体の損傷が激しいとはいえ被害者の身元がここまで調査をしても分からないとなると、<ゼルダの使徒>はいきあたりばったりに犯行を行っているのではなく、ある程度の調査をして対象を絞ってい

るのだろう。

ヴィリーと共に葉月が考えた被害者像は、次のようなものだ。

- 1・十代の半ばから後半の若者であること
- 2・二人組であること
- 3・最近この街に流れてきた者たちであること
- 4・縁者が片割れ以外にいないこと

唯一、身元が特定出来そうな娼館の遊妓にしても、女衞せむしの所に自ら売られに来たということだし、一緒に居た妹も娼館で下働きをしていたらしいが、姉が被害にあった時を前後して行方不明となっている。

女将は姉が殺された為に飛び出したと考えたようだったが、おそらくはくゼルダの使徒>に殺害されたのだろう。

妹の行方不明が<テールン>に伝えられたのが女将の判断により大分遅かった為、妹らしき遺体を確認してもらうことは出来なかった。冷蔵・冷凍技術が発達していないのだから、腐敗する前に埋葬してしまうのは仕方がないことだ。

放っておけば、伝染病の発生源になる可能性がある。

ただ、身につけていた遺品は保管されているので、後日女将や遣手やじりてに確認してもらった所、おそらくは下働きをしていた妹だろうという証言がとれた。

この証言は葉月の提案した作戦の後押しとなった。

<ゼルダの使徒>は<世界の落とし子>の特徴をよく把握していることが分かったからだ。

それを逆手にとる作戦の概要は簡単だ。

実際に<世界の落とし子>を装い、二人組で新興地区に家を借りて生活すること。

その間はもちろん、<テールン>の本拠地には近づかないし、他の団員にも諜報部を除いては接触しない。

つなぎ役の諜報部員にしても、潜入を得意としている者たちだ。働きに出る店の客を装うなど、不自然さを気取られるような真似はしない。

肝心のおとり役は他に適当な候補がいらないこともあって、葉月とアンジェリカにすんなりと決まった。

アンジェリカは元々諜報部で潜入捜査をしているだけあって適役であるし、葉月の方も今までのおとり捜査での実績や見かけによらぬ肝の据わり具合からこの作戦にも耐えられるだろうと判断された。ただ、二人とも今までのおとり捜査で<テーラン>の団員だと感づかれた恐れがある。

その為、印象を変えるように変装することになった。

人の印象とは意外に曖昧なもので、特に女性は髪の色や髪型、化粧、服装のタイプを変えてしまうと、余程親しくないと気づかないものだ。

名前はもちろん偽名を使用する。

アンジェリカの場合、既に“アンジェリカ”という名前自体が偽名であるのだが、今回の作戦の為に別の偽名を名乗ることになった。後は一旦<ウクジエナ>の外に出てから流れ者を装って新興地区に入り、諜報部が事前にピックアップした被害に遭いやすいルートを通る借家の付近に“たまたま”たどり着いて、家や職を探して生活するだけだ。

その辺りは潜入捜査に慣れたアンジェリカに任せておけばいい。

アンジェリカはごく自然にその借家に住めるようにし、大通りにある商家に通いで勤められるように算段をつけたのだった。

もちろん、借家の大家や商家の主はこの作戦のことを何も知らない。アンジェリカはあくまでも新参の流れ者として、家と職を探したのである。

それは戸惑いやいくつか門前払いを食らうなどの、世慣れしていない流れ者という難しい設定を踏まえた上での演技込みで、実に見事だった。

住処と職さえ得られれば、二人がしなくてはならないことは普通に生活することだけだ。

後はさりげなく、諜報部が噂を流して標的がおとりに食いつくのを待つ。

その間に他に被害者が出ないように、大々的な見回りも実行した。陣頭指揮を首領であるカーサが取ることで、人々の不安を取り除くうというのである。

街道での護衛を請け負っている実行部第一隊や第二隊も見回りに回される程の力の入れようだった。

犯行を未然に防ぐのが見回りの目的だが、実はおとり捜査の目くらましも兼ねている。

元から外回りの多いアンジェリカはともかく、葉月が長期に渡って学問所を休むのは何かあったと噂される可能性があった。

何せ、副長の隠し子としてご近所では有名になってしまっている。そこで大々的な見回りの補佐を理由として学問所を休むということになったのだ。

もちろん、理由が理由なのでジークも学問所を休むことになった。

実際に人手が足りないので、嘘でも無駄でもない。

元々学問所に通っている生徒は家業の手伝いで休む者も多いので勘ぐられることはないし、葉月が外に姿を見せないのも忙しいということにしてしまえば何とかなる。

そうした工作を含めた結果が、今、目の前にあった。

## 5・切り裂きし者 14-2

黒外套の女は齒ぎしりしながら、カーサを睨みつけている。

「己え、おのれえ！」

という呪詛に似たうめき声を漏らし、明らかに不慣れな様子で剣を構えた。

対するカーサは余裕綽々だ。

無造作で一見隙だらけに見える構えで、獲物をいたぶるのが楽しくて仕方がないという笑みを浮かべている。

端から見たらどちらが悪人か分からないくらいだった。<sup>はた</sup>

しかし、葉月はくゼルダの使徒に同情する気など更々ない。

カーサが黒外套の女を相手するならばと、葉月が横、アンジェリカは後ろの男たちに向き合った。

後ろはケヴィンが率いる組が道をふさいでいる。

横がタイロンとジークたちだ。

葉月とアンジェリカの振り分けは、好悪は関係なく戦力差で判断したものだ。

葉月とアンジェリカでは、実は葉月の方が強かったりする。

アンジェリカもそこそこは出来るのだが、役目柄こうした正面切った戦いは不得手なのだ。

葉月の方は二十数年の経験に加えタイロンとの朝稽古で自身より体が大きい者との戦い方は心得ている。

別にケヴィンが弱いということはないが、細身に見える分、大剣を軽々構えるタイロンよりも隙があるように見えるだろう。

タイロンを相手にするよりは、とこちらに向かつて来ることは十分考えられる。

そう判断してのことだった。

三方を塞いでいて逃げ道がない中、一番まずいのは自害されること。次点が葉月やアンジェリカが人質に取られることだ。

人質を盾に逃げられるということではなく、自身たちごと切り捨てられると承知しているからこそ、気を付ける必要がある。

服は裾が長く動きにくい女物だが、袴捌きはかまはきはに慣れた身としては問題ない。

隙があるようで攻めあぐねてしまう独特の空気を醸し出しながら、葉月は剣を構える。

おっとりとした笑みが場違いであることは承知の上である。

戦いの火蓋はカーサの「さあ、さっさと片付けて晩飯食おうぜ」と言う一言で切って落とされ、あっという間に終幕した。

カーサは一足で女の目の前まで距離を詰めて剣をはじき飛ばすと、その長い足で女を蹴り倒した。

女が昏倒した所をオズワルドの命で他の団員が縄で縛り上げる。

後ろや横の男たちも、ケヴィンやタイロンの敵ではなかった。

これは黒外套の男たちが弱いというわけではない。

葉月では荷が重いし、ジークも体格差がある分、倒すのには時間がかかるだろう。

ただ、ケヴィンやタイロンが化物並みに強いだけだ。

この二人の戦い方は対照的で、ケヴィンは手数が多くフェイントが上手い。

避けたと思つた矢先に思いもよらない方から切られる。

敵を翻弄する嫌らしい戦い方だ。

少しだけ、自分の戦い方と似ていると、葉月は思う。

しかし、倒れた男の左手に剣を突き刺しえぐるようにして引き抜く姿を見て、その印象をやや修正した。

念の為、利き手を潰しておくというのは別にいいのだが、その顔が心底楽しそうなのだ。

葉月はそういう嗜虐趣味は持っていない。

正直、その表情かおにドン引きだ。

それに対してタイロンの戦い方は豪快である。

両刃の大剣を振るうと、巻き起こった風が六、七メートル以上離れ

た葉月の髪を吹き上げるのだから恐ろしい。

一見、力任せに大剣を振るってように見えるが、ただの馬鹿力だけではこの大して広くない道で大剣など振るえるハズがない。

戦闘センスの塊のような人なのだ。

ただ、剣を持たない右手で男の腹を殴って葉月の足元まで吹っ飛ばすことからして、手加減は苦手だとよく分かる。

男は白目を向いて泡を吹いているが、生きているようなのでタイロンにしては手加減している方だ。

隠し持っていた縄で足元に転がる男の腕を後ろ手に縛りながら、葉月は苦笑を浮かべる。

内蔵が無事かは分からないが、即死でないだけマシだろう。

まあ、マシなのは葉月たちの観点からであって、余計に苦しむ男にとつては不幸なのかも知れないが。

「アンジェリカ、体を起こすのに手伝ってもらえますか？」

猿轡さるべしを噛かませる為ために男の体を起こそうとして、葉月は傍らのアンジェリカに声をかけた。

舌を噛み切ってもそう簡単には死なないが、話をするのに支障が出ては困るからだ。

「了解」

アンジェリカは葉月の申し出を快く引き受け、男を起こすのを手伝う。

黒外套の三人を捕縛し、現場にはほっとした空気が流れた。

それは、ほんの僅かな隙だった。

ジークがタイロンに声をかけ、葉月の手伝いをする為に歩み寄ろうとしたその時、背中がぞわりとした。

元の体であれば、全身の毛が逆立つような悪寒。

それが何か、頭で考える前にジークは叫び、駆け出していた。

「ねえさん！ 伏せて！」

葉月は切羽詰ったジークの声に、咄嗟とっさにアンジェリカを押し倒しながら伏せる。

カキンッ。

放たれた幾本もの矢の内、葉月たちに向かっていた矢をジークが叩き落す。

が、狙われたのは葉月たちではなかった。

顔を上げた葉月が見たものは、喉と左胸に深々と矢が刺さり、物言わぬ骸となった黒外套の男の姿だった。

## 5・切り裂きし者 15・1

ギリツという奥歯が軋む音がする。

葉月は、自分自身に対する腸が煮えくり返るような憤りを、既の所で呑み込んだ。

今ここで怒りに吞まれるわけにはいかない。

怒りはよい結果を決して生まない。

その場はよくても、残るのは後悔だけだ。

気持ちを切り替えるべく、短い息を吐いて、自身の頬を張り倒す。痛い。

しかし、じんじんとした痛みと共に、胸の奥にある重く苦しいものが少しだけ薄らいだ。

今は、それでいい。

隣のアンジェリカやジークが驚いた顔をしたが、葉月はそれに構うことなく、倒れた黒外套の男の首に指を当てる。

肌はまだ生きているのと同じ温かさであるが、伝わってくるはずの脈動は感じられない。

常にはハの字に下がっている眉をひそめ、確信する。  
即死だ。

心臓は肋骨によって守られているが、矢はどうやらの確に骨の隙間に入ったらしい。

しかも左胸だけではなく、ご丁寧に喉まで狙っている。  
口封じが目的なのは明らかだった。

腹の底から再び込みあがってくる怒りを抑えながら報告の為カーサたちの方を振り向くより早く、葉月の隣を黒い風が駆け抜けた。

「オズワルド、ここは任せた！ タイロン、ジーク、ついて来い！  
カーサは一度も振り返ることなく、道を駆けて行く。

「うつす」

短い応えを返して、大剣を担いだタイロンがその背を追った。

二人ともえらく速い。

長身で筋肉もついているのにしなやかなその走りは、野生の獣を彷彿<sup>ふっ</sup>とさせる。

タイロンと共に名前を呼ばれたジークは、一瞬不安げな顔で葉月を振り返った。

その視線を受けて、葉月は珍しく鋭い声を上げる。

「私に怪我はない。早く行きなさい！」

「！はいっ」

葉月の声に弾かれたようにジークが駆け出した。

体に似合わぬ速さで、小さな背が遠ざかる。

あれならば、何とか先に行った二人とはぐれることはないだろう。

そつと息を吐いてその背を見送った葉月は、近づいて来る足音に裾<sup>はた</sup>を叩いて立ち上がった。

振り向くと同時に、低い声が降ってくる。

「報告しろ」

オズワルドが鋭い目でおとり役の二人を見下ろしている。

視線と同じく鋭い声に、自然と背筋が伸びた。

葉月とアンジェリカではアンジェリカの方が先輩格だが、黒外套の男の死を確認したのは葉月である。

短く簡潔な命令に、葉月も枝葉を落とした報告を述べた。

「この男は即死です。脈がありません」

「そうか……死体は荷車を用意するから置いておけ。残る黒外套の奴らは無事だが、団員の中に流れ矢にあたったのが何人かいる。見たところ命に別状はなさそうだが、遅効性の毒の可能性は否めん。

早々に引き上げるぞ」

「はい」

本拠地への引き上げは二手に別れるとのことで、葉月とアンジェリカの二人はケヴィン側に行くように指示された。

黒外套たちの護送中に再び襲撃されないと限らない。

市街地では人数が多過ぎると乱戦になった場合に混乱する可能性が

高い。

タイロン側に居た団員を二手に分けるにしろ、戦力として心許ないおとり役の二人は主犯格とみられる女よりも手下の男の方に付けておこうという判断だろう。

それは正しいと、葉月も思う。

踵を返して戻り行こうとしたオズワルドに、葉月は、

「申し訳ございませんでした」

と言って深く頭を下げた。

重要参考人を死なせてしまうという失態は、明らかに葉月の判断ミスのせいだ。

しかし、オズワルドは歩みも止めず、一言だけ返してきた。

「話は後で聴く」

「はい」

頭を上げた葉月の顔には、硬い表情が浮かんでいた。

アンジェリカはケヴィンの元へ向かう途中、ちらりと傍らの葉月を見下ろした。

いつものおつとりとした笑みはなく、たれ目がちな瞳には微かな苛立ちが浮かんでいる。

随分と大人びて見えるから、こういう時に感情を表に出す類の人間ではないと勝手に思っていたので少し面食らう。

一応は年下であると思っている少女の意外な一面を知って、アンジェリカは慰めの言葉を口にした。

「えーと、あれは葉月のせいじゃないよ」

すると葉月はぴたりと足を止めた。

つられてアンジェリカも足を止める。

葉月はまじまじとアンジェリカの顔を見上げた後、ふわりと微笑んだ。

人を安心させるような、優しい笑みだ。

その口から出てくる言葉の口調も優しい。

ただ、中身だけが硬く厳しいものだった。

「ありがとうございます、アンジェリカ。ですが、あの男が死んだのは私の判断違いのせいです。責任は私にあります」

「えっ、いやっ、でも……」

「アンジェリカ」

慌てて否定しようとしたアンジェリカを、葉月が名を呼んで制する。アンジェリカに向けられた灰青の瞳に先程まで見られた苛立ちはなく、一見穏やかに見えた。

しかし、アンジェリカとて市井に紛れて諜報活動をしている身だ。

心の機微には敏い方だと自負している。

葉月の穏やかな瞳は蜃気楼のようなものだ。

それ自体に実体がない。

温かみのある優しさの奥に、凍てつくような厳しさが潜んでいる。

それを感じ取ってしまったアンジェリカの首の後ろがぞわりとしたたとえ自分に向けられたものではなくても、その静かな冷たさは恐ろしい程だ。

アンジェリカが目丸くして息を呑むと、それに気づいた葉月がふつと笑い、目を細めた。

「アンジェリカだって、分かっていますよね」

何が、とは言わない葉月だったが、意味が読み取れないアンジェリカではない。

しかし内容に同意するうんぬんの前に、気がつけば勢いに押されてうなづいていた。

「……うん」

アンジェリカの答えに、葉月はにつこりと笑う。

「さあ、行きましょう。ケヴィン隊長を待たせるとまた怒られてしまいますからね」

そう言っさつさと歩き出した葉月の背を追いながら、アンジェリカはこの少女の本質に気づいた。

恐ろしく気位が高く、自身に厳しい。

相手を自分の思い通りに動かす術を知り、自身の一挙一動に意味を込められる人間。

間違いないく、人の上に立つことを要求されてきた者だ。

（蛇……か）

アンジェリカの上司である諜報部長チエスターが言っていた。

カーサが葉月のことを『蛇』と称した、と。

女の子相手に酷いなあと、その話を聞いた時は思ったが、今は違う。やはり親分は本質を掴むのが上手い。

年下の少女相手に、蛇に睨まれた蛙の気分を味わうとは思ってもみなかった。

あれで十三だというから、未恐ろし過ぎて身震いしそうだ。

アンジェリカが知っている十三の娘というのは、生意気だったり口達者だったりしても、もう少し可愛げというか甘さがあるような気がする。

（さすがは副長の娘、っていうべきかな……）

アンジェリカは若干の違和感を抱きつつ、自身の精神衛生上そのように思い込むことにした。

## 5・切り裂きし者 15・2

戦列の<テーラン>の本拠地の中で幹部が集まって会議をするのは、大抵の場合は副長の執務室と相場が決まっていた。

首領であるカーサの執務室が面積的には一番広いのだが、本人がデスクワーク嫌いの上、首領補佐のゾルも無益なことをしないタイプなのでカーサを執務室に押し込めるようなことはしていない。

その結果、首領執務室はカーサの私物や首領直属部隊の備品等で溢れかえって雑然としており、半分物置のようになっている。

副長執務室の一角を占めている楕円の卓を囲んで座っている幹部たちの表情は一樣に渋い。

「……ており、射手を確保することは出来ませんでした。なお、親分とオズワルド隊長が射手であろう影を目撃した現場から約三十リウほど離れた建物の屋上ですが、弦の切れ端が落ちていました。射手が意図的に残していたものと思われます」

幹部たちの中で一番の若手であるヴィリーが報告書を読み上げる。三十リウというと、メートル法に直せばだいたい百メートルといったところだろうか。

そこから黒外套の男の喉と心臓を射ぬいたのだ。オズワルドやケヴィンが弾いた矢も、残る黒外套たちの急所を的確に狙っていたらしい。

こちらの弓とは多少構造が異なるものの、日本の弓道の遠的とて一般的な射距離は六十メートル、一番遠いもので九十メートルだ。

建物の屋上から放ったのだから飛距離は伸びるとして、的は急所、あまりに小さい。

文字通りの矢継ぎ早の連射といい、恐るべき肩と技術を持った射手である。

「次に確保した黒外套たちの供述ですが、やはり<ゼルダの使徒>のようです。被害者たちを忌子<sup>いみこ</sup>、つまり<世界の落とし子>とみな

して殺害したと吐きました。行方不明になった日と殺害日がズレている件については、ゼルダへの供物とするのに良い日を選んだとのこと。ただ、現在行方不明になっている数名のことは知らないと言っています。アジトの場所を男の方が吐いたので、朝を待ってオズワルド隊長とケヴィン隊長が十五名ほど率いて調査に向かう予定です」

ヴィリーが「以上です」と言って座ると、諜報部長のチェスターが左手を上げた。

チェスターは三十代半ばくらいの、これと言って特徴のない男である。

強いて言えば柔和な雰囲気を持ち主であるが、後からこの男の似顔絵を書けと言われたら戸惑うことは間違いない。

どこにでも居そうで、すれ違っても氣にとめることはないだろう平々凡々な姿をしている。

一見ただの印象の薄い男であるが、優秀な諜報員で情報のプロだ。ブノワに促され立ち上がったチェスターは、ちらりと手元の資料に目を落としてから口を開いた。

「先程入った情報ですが、他の都市でも<ゼルダの使徒>の活動が活発化しているようです。ちょうど半年後の都市間会合の頃がゼルダの大祭に当たりますから……<ウクジエナ>はゼルダが造った街ではないとはいえ警戒が必要でしょう」

チェスターは淡々と報告を述べて、席に着いた。ただ一人、円卓に加わらずソファにふんぞり返ったカーサが、ぐいっと後ろに倒した顔だけをブノワの方に向ける。

「俺らだけで対応出来ると思うか」

形は問いかけたが、自分はそうだとは更々思っていない声音で尋ねる。

いつも飄々（ひょうひょう）としているカーサだったが、今日ばかりは不機嫌さを隠そうともしない。

射手に逃げられたことが余程面白くないらしい。

そんなカーサに、ブノワは肩をすくめ、

「番号付街と連携する必要があるだろうな。まあ、あちらさんがどこまで連携してくれるかは分らんが」

と前置きしつつ、まあ、それは何とかしようと請け負った。

外との交渉は、副長の職務の一つである。

カーサはその答えににやりと満足気にうなづいた。

「新興地区たんこぶは俺らの縄張りだ。上手くやれよ」

「言われるまでもないさ」

ブノワもにやりと不敵な笑みを浮かべる。

「うっし」

と、短い気合を入れて、カーサは腕の力で跳ね起きた。

腰に手を当てて居並ぶ幹部たちの顔を見回す。

「なかなか面白いことになってるが、おそらくこれからはもっと面白いことになるぞ」

ここにいる幹部の中で、カーサの言う『面白い』が『大変なこと』であることを知らない者は居ない。

ため息をつく者、愉快そうに笑う者、顔色一つ変えない者、反応は十人十色であるが、共通するのは強い意志を持った目。

多かれ少なかれ、ここには闘争本能の強い輩ばかりが集まっている。所詮は『戦列の<テール>』という名を冠する集団に属する者たちだ。

世間のはみ出し者たちの代表は、獰猛な笑みを浮かべて腕を組む。

そして、腹の底から大きな声で発破をかけた。

「デメエら、気合入れて行け！」

「……うっす」

男たちの気合の入った返答に、蠟燭ろうそくの灯りがゆらりと揺れた。

世界は停滞を止め、変化を始めた。

ある所では劇的に、ある所では粛々（しゅくしゅく）と。

もう誰もその変化を止めることは出来ない。

たとえ、神、それもこの状況を作り出したエルフィムでさえ、止めることはおるか望む形へ持つて行くことさえ出来ない。

熟した世界の行く末は創造神の手を離れ、住む者たちの手に委ねられる。

熟す前に腐り落ちようとしていた箱庭の運命は、くると回り出した。

無事に熟すのか、結局腐り落ちてしまうのか、その結果を知る者は誰一人、ただの一柱もいやしない。

誰も知らないまま、ただただ、運命は回り続けていく。

激しく、静かに。

くるくる、クルクル、と。

## 【番外編その1】女狐が死んだ

「師岡葉月が死んだそうだ」

事務所では昼食をとっていると、耀司よっじの兄貴分である高田の元に一本の電話がかかってきた。

昼時に気が利かねえと愚痴りながら電話に出た高田だったが、不機嫌丸出しの顔はやがて驚愕の表情に塗り変えられた。

冒頭の言葉は、電話が終わってからつぶやかれたものだ。

その言葉を聞いた耀司は、一瞬何を言われたのか分からなかった。

「へ？」

という間抜けな声を出して、カップラーメンをすする。

どうにも理解出来ていなさそうな弟分に、高田は複雑そうな顔で再度、同じ意味の言葉を発した。

「だから師岡葉月だよ。師岡流の師岡葉月。お前も知ってるだろ？」

あの女がくたばっちゃったってよ」

「はあ！？ あの女狐が？ 殺してもくたばりそうにねえのに、殺やったのはどこのどいつつスか？」

カップを乱暴にテーブルに置きながら、耀司が驚愕の声をあげた。

耀司が知っている師岡葉月という女は、見た目は頭のネジが緩んでそうではわわんとしているように見えるが、中身は恐ろしくしたたかで狡猾で陰險なヤツだった。

政界財界のみならず裏社会にも幅を利かす師岡流宗家の中で、もめ事などを収める部署、対外交渉室副室長の肩書きを持ち、実質的には部署のトップであった女だ。

師岡流の内外、社会の表裏を問わず、あの女に恨みを持っている人間はそれこそ両手両足を足しても足りないくらいにいるだろう。

耀司もその内の一人だった。

簡単には死にそうにないあの女が死んだというのなら、直接的な恨みか逆恨みかは置いておいても怨恨関係であろうと思ったのだ。

しかし、高田は耀司の問いかけに首を振る。

「いや、交通事故だよ。怨恨の線は薄いだろ」

そう言いながら伸び始めたカップラーメンを放置して、煙草に火をつけた。

ふうつと長い煙を吐く。

耀司は疑い深い顔で質問を重ねた。

「事故に見せかけたんじゃない？」

「相手は免許取り立てのボンボンだったつーから、本当に事故なんだろうさ」

そんなガキを鉄砲玉に使う阿呆はいないだろうとは、高田の見解だ。高田に電話をかけてきたのは情報通の千木良だというから、入ってきた情報にまず間違いはない。

縄張りが師岡流の道場に近いこともあり、組の若いのと門下生がもめることが何度かあった。

組の中でもあの女のことを知っているヤツが多いのはそのせいだ。組、師岡の双方とも血気盛んな輩が多いせいで、取り締まりも厳しくなっているご時世だというのに、あやうく警察沙汰になりかけたこともある。

実は耀司自身も二年ほど前に一悶着を起こしており、その時に師岡側で対応をしたのが師岡葉月だったのだ。

その頃はまだ副室長などという偉そうな肩書きはなかったとはいえ、屈強そうな部下を従えて話し合いに訪れた弱っちそうな女に、耀司は反発を覚えた。

下っ端同士ということもあって、大事にはせずに落としどころを見つけることになったのだが、耀司は終始ふてくされた態度で組側の対応を任された高田を困らせたものだ。

（もちろん後できつくめられたのだが）

結局、上の方で手打ちが済み、当事者はそれぞれ処分を受けた。

それが面白くなかった耀司は、性懲りもなく師岡に手を出そうとした。

恐いもの知らずというよりはただの馬鹿なのだが、馬鹿なりに考えたのは道場破りという手段だった。

実戦を旨とする師岡流は他流試合を推奨しており、時代錯誤な道場破りも歓迎していたのである。

それでも現代ではいろいろと面倒なことも多く、後腐れがないように誓約書を書かされるのであるが、耀司は堂々と本名を書いて勝負を挑み、そして負けた。

その相手が師岡葉月だった。

たまたま師範代として稽古をつけている最中に耀司が乗り込んだのであるが、相手に名乗りを上げたのは葉月の方だ。

面子めんつというものがある。

揉め事を起こして処罰を受けた者が、性懲りも無く突っかかってきたのだ。

師岡としては“舐められた”と判断せざるを得ない。

暴走を止められなかった組も問題になる。

小さな火種が大火事になる可能性を考えれば、サクっとお帰り頂いた上で釘をさした方がいい。

そう判断した葉月の一本勝ちだった。

“弱っちそうな女”にあっさり倒された上、

「立場をわきまえなさい。このどさんじん三ーが」

と、客間へ連れて行かれ罵倒と説教を受ける羽目になった耀司は、

葉月から連絡をもらった高田にも再度キツチリツられた。

葉月と高田による各所への根回しにより、全面戦争への突入は避けられたわけだが、これが耀司と師岡葉月の因縁の始まりだった。

やっと仁義というものが分かった耀司は大きな揉め事を起こすこともそうそうなくなったが、ちょいちょいと師岡葉月に絡むようにな

る。

組の人間が「お前が年上好きとは知らなかった」とからかうと、「そんなんじゃない！」と反発する。

高田などは大事にならなければいいと、呆れ半分で微笑ましく見守っていた。

耀司からすれば、それは惚れた腫れたなんぞとは違う感情だ、下種の勘ぐりは止めてくれと思うのだが、だからといってそれが何であるかは、自分自身でもよく分からなかった。

ただ、他人よりは少しだけ特別だったことは、認めざるを得ない。

耀司が知る師岡葉月という女は、黒ではなく白でもない灰色の世界で生きており、強面のジジイ相手にもおっとりとして笑いながら駆け引きの出来る度胸と、容易く手折られそうな見た目なのに、自分よりも縦にも横にもデカイ相手を屈服させられるだけの強さを持っていた。

手を伸ばすのが躊躇われる程お綺麗ではなく、忌避したくなるくらいに汚れてもいない、耀司がこれまで出会ったことない女だった。出会ってから二年が経ち、おほろけ臆気ながら自分の感情に合った言葉が見えてきた気がする。

『憧れ』

たぶん、耀司が師岡葉月に抱いていたのは、そうだったものだったのだろう。

その師岡葉月が死んだのだという。

それも、交通事故なんかで……。

「っ、ざけんなよ」

パキンッ。

耀司が手に持っていた安物のガラスのコップが、音を立てて割れた。破片が手のひらに突き刺さり、ぽたりと赤い血が滴り落ちる。

「耀司っ」

驚いた高田が、耀司の手から割れたコップを取り上げた。

耀司はそれには抵抗せず、しかし憤りをぶつけるように叫ぶ。

「なんで事故なんかで死んでんだ！ あ的女！ 車くらい避けるよ！ 勝手に死んでんじゃねえよ！」

「無茶を言つな。落ち着け」

「ちくしょう。なんだよ、なんなんだよ！ ざけんなよ！」

自分でもよく分からないことを言っていると、頭の隅では分かっていた。

高田を困らせたいわけではない。

手だって痛い。

それでも、憤りは止まない。

はね飛ばしたという男よりも、簡単にくたばってしまった師岡葉月に対して、腹が立って仕方がなかった。

「ちくしょう……」

唇を噛んでうつむいてしまった耀司に、手の手当を終えた高田はぽんつと肩を叩いて立ち上がった。

「通夜は明後日だそうだ。普通はカタギントコにや相手に迷惑かけるから出ねえモンだが、師岡だから……。俺とお前で行くことになった。準備をしておけ」

そのまま部屋を出て行こうとした高田に、耀司がうつむいたまま答える。

「嫌っス」

「耀司……」

はあつと深いため息をついて振り返った高田は、耀司の後ろ姿を見下ろしながら煙草を燻らした。

そうして一呼吸を置いた高田は、諭すように言う。

「出る。通夜や葬式は死んだヤツのためだけじゃねえ、残ったヤツに区切りをつけさせるためでもあるんだ。信じられねえ気持ちちは分かる。俺だって信じらんねえよ。だから出るさ。お前も出る。命令だ。いいな」

念を押すと、渋々といった様子で耀司がうなづいた。

それを見た高田は今度こそ部屋を出る為に踵を返した。

そしてふと、窓の外に目をやる。

薄汚れたガラス越しでもよく分かる、綺麗な青空がそこには広がっていた。

「ったく、いい天気だつてえのになあ」

ボタン。

高田が出て行った部屋に、静寂が満ちる。

時々、鳥の鳴き声や、土曜だからかはしゃいだ子供の声も聞こえた。しかし、耀司の耳には届かない。

「死んでンじゃねえよ……。最後までなんてずりいんだよ。あの女狐め……」

ぶつける相手がなくなった苛立ちを持って余したまま、耀司はそのまましばらく動かなかった。

## 6・君が望む場所 1 - 1

その日、イーリオは上機嫌で酒を呑んでいた。酒場の喧騒はいつにも増してひどい。

それもそのハズで、今日はイーリオが所属するくウクジェナ>警備隊第七区部隊の次席の結婚が決まった祝いで第七区部隊の貸切になっているのだ。

あちこちで、何度目か分からない乾杯の音頭が響き、主役の次席はべろんべろんに酔っ払って床に転がっている。

カード賭博に興じる者や、殴り合いの喧嘩になっている者もいた。一部を除いて真面目と評判の部隊とて、一皮剥けばこの程度だ。

こつした祝いの席の酒代や弁償などは（余程被害が甚大でない限り）経費として落として良いことになっているので、ここぞとばかりに暴飲し暴れる者が出るのが警備隊の常である。

第七区部隊は店の壁や机を破壊しないだけ、お上品な部類に入るだろう。

イーリオがご機嫌なものも、タダ酒を思う存分呑めるからだ。

こういう機会はたまにしかないので、高い酒を隅の席に確保しぐいぐいいつていた。

稀に呑み比べを挑んでくる命知らずな隊員もいたが、全て返り討ちにしている。

イーリオの席の周りには、死屍累々とばかりに真つ赤な顔で沈んでいる隊員たちが転がっており、もう寄ってくる者はいないだろう。そう思っていた矢先に、倒れている隊員たちをひよいひよいと跨いで、大柄で顔はイカツイが気の良さそうな男がやってきた。

角刈りの強面旦那こと、第七区部隊を預かる主席である。

「おー、イーリオー、呑んでるかあ？」

主席は酒瓶を片手にイーリオの背中をバシバシ叩く。

「いつてえなあ、もう。呑んでますよ。見りゃ判るっしょ」

乱立する酒瓶を指さしながら、ぐいつと杯を空ける。

「それは重畳。<sup>ちやうじやう</sup>良きかな良きかな」

ガハハハと笑い、主席はイーリオの隣の席にドカツと座って、イーリオの杯に酒を注ぐ。

それを一息にあおったイーリオは返杯の酒を注ぎながら、「何の用ですか？」と尋ねた。

ただ絡みに来ただけではないことは、なんとなく分かった。

根拠はと尋ねられれば勘としか答えようがないが、どうせまた口くでもないことを頼みに来たに決まっているのだ。

イーリオは第七区部隊において第三席という立場にある実力者であったが、同時に自他共に認めるこの部隊では例外の不真面目な男だった。

燃え盛る炎のような赤毛は、くすんだ灰髪が標準のこの国では特に目立つ。

悪目立ちすると言ってもいい。

その分、周囲の目も厳しいものになるが、イーリオは処罰されない程度の不真面さを補って余りある武の才を持っていた。

イーリオの適当さは、良く言えば柔軟性でもある。

業務に関しては真面目で杓子定規な隊員が多い中、通り一遍の対応では難しい事案などがイーリオに回ってくることが多いのだ。

主席はイーリオの問いかけに、にやりと笑った。

息は酒臭いが目は濁っていない。

イーリオがザルなら、主席はワクである。

さすがのイーリオも、両手の指の数に近い人数と呑み比べをした後だ。

泥酔はしていないが、常よりは判断が低下している。

このままでは主席に丸め込まれることは目に見えている。

が、上司の命令は絶対だ。

イーリオは露骨に嫌そうな顔をして、先を促した。

「で、なんすか？」

主席は素早く床に転がる男たちが本当に泥酔していることを確認してから、喧騒にかき消されないギリギリの音量で、こう言った。

「お前さ、ちよいと新の字に遊びに行かねえか？」

「はあ？」

イーリオは何言ってたんだ、コイツと言う意味を込めて主席の顔を凝視した。

無礼には違いないが、このくらいで怒る主席ではない。

もちろんやり過ぎれば鉄拳制裁となるが、イーリオはこの辺りの境界線を読むのが上手い。

それに『何言ってたんだ？』というのは、イーリオの偽らざる感想である。

新の字というのは、警備隊における新興地区の隠語だ。

新興地区は<ウクジェナ>の第七区と第八区の外郭にまたがって存在する非公式の街で、独自の自治組織と自警集団を持っている。

言わば、<ウクジェナ>という都市に寄生する別の街だ。

こういう事例は、<ウクジェナ>の新興地区以外では聞いたこともない。

都市や街は必要に応じて、美しく整然と配置されているものなのである。

非公式の街などとても無い。

犯罪者の受け渡しなど実務レベルではどうしても交流せざるを得ないが、<ウクジェナ>が新興地区を公に認めることは天地がひっくり返ってもないだろう。

実際に存在しているのに、存在しないことになっている街。

それが新興地区だ。

特にエリート意識の強い警備隊の隊員には、新興地区を丸無視するか見下すかしている連中が多かった。

その新興地区に、警備隊の一部隊を率いる主席が第三席に行けと言

う。

イーリオがキナ臭いと思うのは、当たり前のことだった。折角いい気持ちでいたのに、酔いもすっかり吹っ飛んだ。

厄介も厄介、特級の厄介の臭いがする。

が、警備隊において上司の命令は絶対なのである。

イーリオが主席の命を断るとするならば、主席よりも上の立場でなければならぬ。

しかし、悲しいかな、イーリオは同部隊の第三席。

もう、すっかりばっちり、主席の直属の部下なのである。

諸々の事情で警備隊を辞する気がないイーリオは、渋々と続きを促した。

「何でまた新の字に行かなきゃなんないんすか？」

主席は手酌で酒を注ぎながら、近所にお使いを頼むような気軽さでそれに答える。

「簡単に言やあ、つなぎを作っておきてえんだよ」

「つなぎ？」

「おう。実はな、新の字の自治組織経由で、＜テーラン＞が警備隊ウチと情報提携したいって言って来ててな。もちろん公式には出来んから、七と八の裁量に任すってよ。要は責任逃れだな。けど、裏の書類には載っけてもらえるって話はつけた。都市間会合のこともあるし、八の方は渋ってるがやっという方がいい気がしてなあ。つーわけで、お前、ハインツ連れてく＜テーラン＞に行つて、とりあえずは顔売ってこい」

「あー、なんとなく話は見えてきました。この間の事件も対岸の火事とばかりは言ってるんじゃないっすよね。しかし、つなぎを作るのは分かりましたけど、なんでまた連れてくのがハインツなんすか？

おそらくそういうの一番不向きでしょ？ アイツ」

イーリオは話題の後輩の姿を店内で探した。

他の隊員に吞まされたのだろう。

白に近い灰髪の青年はカウンターに突っ伏してピクリとも動かない。

今はあの様であるが、ハインツは部隊一融通が利かない生真面目人間として有名である。

まだ若いことも要因の一つだろう。

若いと言ってもイーリオの二つ下だから、今年で十九になったはずだ。

剣の腕は悪くはないし、事務処理能力もある。

しかし、その融通の利かなさが足を引っ張って、未だ席次なしだった。

第七区部隊は百名ほどの組織で実際は更に何組かに別れているが、部隊の上位三十名は席次が与えられる。

席次は年に一回、文武共に試されて与えられるもの。

完全な実力主義なのである。

イーリオがハインツはこの任務に向いていないと思うのは、先月行われた席次決めの際の失態が記憶に新しいからだ。

ハインツは最終面接で試験官に袖の下を要求され、激昂して部屋を出てってしまったのである。

実はこれも試験の内で、どのような問答を交わすかが評価対象だった。

正直言つて、激昂して部屋を出てしまうのは倫理的には正しいかも知れないが、対応としては下策だ。

実際、ハインツは最終面接で落ちた。

あの性格が治らない限り、席次は無理。

それが部隊内の共通認識であった。

イーリオはちびちびと酒を呑みながら、肩をすくめてみせる。

「つなぎを作るには歓待やら付け届けやら、そういったものが不可欠でしょ。それらに嫌悪感を持つハインツを連れて行くのはまずいんじゃないすかね」

「まあ、何だ、後輩指導つてヤツだよ。ハインツは能力はあるんだ。

あの杓子定規なトコが治れば使えるだろ？ 新の字に行くのも、＜テール＞とのつながぎを作るのも、あいつにはいい経験になる。お前の不真面目さを見習って、ちったあ融通ってモンを覚えてもらわんといかん。正直、人手はいくらあっても足りないんだ。使えるようになってもらわんと困るんだよ」

な、頼む、と言いながら、主席がイーリオの杯に酒を注ぐ。

「それってお願いっすか。命令っすか」

イーリオが隣の主席の顔をちらりと見る。

主席は真面目くさった顔で言い切った。

「命令に決まってんだろ」

「ですよー」

イーリオはおざなりな返事をし、杯の酒を一気に飲み干した。

主席に注がれた酒は美味いが度が高い。

いくらイーリオでもそう何杯も一気にあおれば酔いが回る。

だが、面倒くさい任務と面倒くさい後輩を押し付けられて、吞まずにはいられない気分だった。

吐くまで吞むぞ、と決意して新たな酒瓶の栓を抜く。

主席は「じゃ、よろしくな」と言っただけで裸踊りをしている集団の方へと行ってしまった。

イーリオは杯に注ぐのも面倒くさいとばかりに、瓶から直接吞み出す。

翌日、＜ウクジェナ＞警備隊第七区部隊の面々がぐったりしながら仕事をこなしている様子が各所で目撃された。

いつもならピンピンしている第三席までが二日酔いに苦しんでいるという。

ただ一人、主席だけがいつも通りガハハと笑いながら、新人をしがっているようだった。

『<ゼルディア国>は、主要十都市とその周りに点在する町村から成る国家である。』

葉月はそんな一文で始まる書籍をペラりとめくった。

久しぶりの学問所だが、特に気まずい思いはしていない。

おとり捜査の為、長期に渡って学問所を休んでいた葉月だったが、親の手伝いで繁忙期はまったく通えない子も普通にいたので、特にあれこれ言われることはなかった。

<黄昏の怪人>とちまたで呼ばれていた連続殺人鬼が捕縛されたことは皆知っていたから、「大変だったんだねー」と労われたくらいだ。

学力の方も、算学は元々小学校レベルの簡単なものだったし、文字の読み書きは任務中も学習を怠らなかった。

分からない所はアンジェリカや勤め先の者に聞いて学んだので、むしろ学問所を休む前よりも出来るようになったと自負している。

元々、暗記物が得意だった葉月は、一般的で簡単な文章ならば不由なく読めるようになっていた。

しかし、先程ジャニス女史から渡された書籍は、堅苦しい表現が多く、難しい字が羅列されている。

同時に辞書も渡されたのでまったく読めないということはないが、明らかに子供向けではない。

例えるならば、専門家が読む、とまではいかないが、大学生がレポート作成の資料として借りるくらいのレベルではあるだろう。厚みも装丁もそれなりのものだった。

庶民が普通に持っているものではないし、学問所に通う子供相手に用意しておく課題ではない。

本業は学者というジャニスの私物だろう。

葉月の隣席に座るラナも、葉月が渡された課題を覗き込んで『うへ

あ』という顔をする。

「うわあ、何それ。見てるだけで頭痛くなっちゃいそうだね」

既に頭が痛いと言いたげなしかめっ面のラナに、葉月は苦笑する。開けっぴろげで思ったことが直ぐに顔に出るラナは、葉月にとって可愛い妹のようなものだった。

<テール>は基本的に男所帯なので、大分年下とはいえ同性がいる学問所は葉月にとって癒される場所である。

「まあ、ちよつと難し過ぎるよね。辞書なかったらさっぱり分からないもの」

「あたしは辞書があつてもさっぱりだよ。ジャニス先生つて鬼だよね。あたしの課題なんて詩作だし。『典雅な表現で』つてぜえーつたい無理っ」

こそこそ愚痴を言い合っていた二人の頭に、丸めた帳面が振り下ろされる。

ばかりと叩かれたラナは恨めしげな目でジャニスを見上げる。

葉月はとっさに上半身をひねって避けてしまったので、曖昧な笑みを浮かべた。

素直に受けておけば良かったか、とちらりと思う。

どうせ大したダメージはないのだから、避ける方が心象が良くないだろうという打算だ。

しかし、ジャニスはラナの恨めしげな目も葉月の曖昧な笑みも齒牙にもかけず、

「集中しなさい！」

と一喝して行ってしまった。

葉月はラナと一緒に首をすくめて、課題に目を戻す。

辞書を片手にページをめくりながら、ペラ紙に書かれた穴埋め問題のかっこを埋めていく。

この本は<ゼルディア国>の地理や歴史が体系立って記載されているので、表現の堅苦しさを抜きにすれば良い本だろう。

葉月は雑念を振り払って本のページをめくった。

<ゼルディア国>は<ガーデニア大陸>の南西に位置する国家である。

国土の大半は人が住むには適していないので、国土の広さとは比例せず、国力は中堅程度だ。

それでも古い国には違いなく、<ゼルディア国>の主神であるゼルダも副神であるエルフイムも、創造神の中では高位の神々である。主要な都市の数は十。

それぞれの都市は地理に関係して特色がある。

海が近く漁業が盛んなくエレンティナ>。

複数の鉱山が近く装飾品の生産で有名なくトウクルド>。

豊かな草原と湖が広がり騎獣の育成に長けた<ゾディアーナ>。

などなどがある。

<ウクジェナ>は<ゼルディア国>の中央部に位置し、他都市への中継地点として交易で栄えている。

この国に王や貴族はいない。

特権階級という社会的階層がないことは、葉月にとって小さな驚きだった。

この世界では神々の名の下、人は皆平等なのだという。

つまり、この世界の国々はすべて、君主国ではなく共和国なのだ。

だが、『特権階級がない』というのは、建前に近いだろう。

いわゆる名家というものが存在していることは聞いていたし、市政を動かす議員たちの多くはそうした名家の生まれだと聞く。

市長を選ぶ選挙権を持つのは、その都市の市民権を持つ者だけだ。

周りの町村の住人には都市の選挙権はないが、市長はその都市の支配下にある町村に対して命令権を持つ。

そして<ウクジェナ>の新興地区に住まう人々には市民権がない。

新興地区は<ウクジェナ>として認められていないのだから、当然な話だった。

その代わり、新興地区は実質的な治外法権と独自の自治組織を有している。

それはもちろん、薄氷を踏むがごとく危なげなものではあるのだが、都市にあつて都市どころか正式な町村でさえない奇異な街が存在していることは事実だ。

また、〈ゼルディア国〉には王がおらず、首都というものもない。十の都市の内一都市が代表都市となり、その都市の市長が国家代表となる。

普段は代表都市の市長が議長となり、他都市の市長代理や代表議員が代表都市に送り込まれて議会を運営し国政を動かすのだ。

ちなみに代表都市の期限は一都市十年。

百年で一巡りする計算で、市長の任期は五年である。

そして、二年に一度、普段は各都市で市政を行い、国政は代理に任せている市長たちが代表都市に集まる時期がある。

それが都市間会合だ。

今現在、その代表都市はこの〈ウクジェナ〉。

来年には次の〈コーサイド〉が代表都市になる。

五度目、今生きている者たちが経験する〈ウクジェナ〉主催の最後の都市間会合は、半年後に迫っていた。

昼が近くなり、ペラ紙の課題を三分の二ほど埋めたところで、午前の授業が終了した。

昼食を自宅で食べて再び午後の授業に出る者もいるが、葉月とジークはくテーラン>で仕事の予定だ。

この学問所では、終わらせられなかった課題は宿題として次の日までにやってくるルールがある。

授業終わりの解放感が溢れた教室は、どの世界でも変わらない。

葉月はざわつく教室内を縦断し、教卓で片づけをしていたジャニスに声をかけた。

「ジャニス先生、課題は終わっていないんですけど、この本はお返しした方がよろしいですよね」

装丁や中の紙の質から考えて高価であろう書籍を生徒に持って帰らせるのはまずかろうと思いつながら、葉月が尋ねる。

声をかけられて顔を上げたジャニスは、葉月が差し出した書籍をちらりと見てあっさりと言い切った。

「ああ、持って帰っていいよ」

「え？ よろしいんですか？」

驚く葉月に、ジャニスはけらけらと笑った。

「奥付は見た？」

葉月は促されるまま、裏表紙をめくる。

そこに共同著者としてジャニスの名があった。

葉月だけではなく、葉月の後ろで待っていたジークも驚いたように目を丸くする。

「先生もお書きになったんですか？」

「そ。第六章は私が書いたの。だからその本は予備が何冊かあるのよ。葉月ならその本の内容は理解出来ると思うから、しっかり読んで頂戴ね。本は明日、課題と一緒に渡してくれればいいわ」

わざとでなければ弁償とか考えないでいいからね、と茶目つ気たつぷりに笑うジャニスに、葉月はふわりと笑って頭を下げる。

「はい。そういうことでしたら、有り難くお借りします。ありがとうございます」

この世界の情報に餓えている葉月にとって、この書籍は貴重な情報源だ。

知識は武器にも防具にもなる。

エルフィムが言った『この世界を救って欲しい』と言う言葉は、葉月やジークがこの世界の行く末を左右するような事態に巻き込まれることを示唆<sup>し</sup>していると考えるべきだ。

『思うがままに生きる』と言われたとしても、のほほんとしてられるほどおめでたくはない。

備えあれば憂いなし。

それは葉月とジークの共通認識だった。

とはいえ、差し迫ったの問題はというたいたいしたことはなく、今日の昼食はどうしようとかそのようなものだ。

いつもは<テーラン>の食堂で食べるのだが、今日の昼間は料理人のマルゴがどうしても外せない用事があるとかで、昼食は各自で調達することになっていた。

「ねえさんは何か食べたいものありますか？」

学問所からの帰り道を歩きながら、ジークが隣の葉月に尋ねる。

葉月はちょこんと首をかしげて、

「特にはないけど、どこかに入るより屋台の方がいいかな」と答えた。

「そうですね。ヒューゴたちから美味しい焼き飯の屋台を教えてもらったんですけど、その屋台の近くに食べるところもあるみたいですよ」

「いいね。そこにしようか。場所はわかる？」

「はい。こつちです」

ジークの案内で入り組んだ道を抜けて大通りに出た。

新興地区の大通りには、いくつもの屋台が出て賑わっていた。

学問所に通う生徒たちも、ここいらで時々買い食いをしている。

安くて美味しい屋台の情報交換は、おこづかいの少ない生徒たちにとって楽しみの一つだった。

学問所からそう遠くない屋台群は、そこそこ賑わっているようだ。

いくつかの屋台が共同で置いている席も九割方は埋まっているし、件の屋台の前には数人の行列が出来ていた。

「ねえさんは席をとっておいてもらえますか？ 俺が買ってきます」  
値引き交渉やら何やらは、ジークの方が得意なのでこういう時は任せるようにしている。

葉月はうなずいて、自分の分のお金を渡してジークの荷物を預かった。

「うん。探しておくね。買い出しよろしく」

「はい」

早足で行列の最後尾へと向かったジークを見送って、葉月も席を探し始める。

二人掛けの席はほとんど埋まっているので、相席出来そうな四人掛けや六人掛けが狙い目だ。

見た目は子供の二人連れなので、絡まれそうな柄が悪い連中がいるところは避けようと思うと、なかなか見つからない。

ジークが焼き飯を買い終える前に見つけないといけないので、ちょっぴり焦っていたそんな時、後ろから明るく調子の良い声がかかった。

「そのセテライの髪飾りのお嬢さん」

早足で狭い席の間をすり抜けるように歩いていた葉月は、その声に足を止める。

セテライは花弁の白い優美な花で、葉月が髪に留めているのはブノワに買ってもらったセテライを象った髪飾りである。

『そこのお嬢さん』くらいならば無視して通り過ぎる葉月であるが、ここまで特定されて呼ばれては無視しづらい。

なんとなく面倒事のおいを感じながら振り向いた葉月の目に飛び込んで来たのは、この世界で初めて見る、燃え盛る炎のように鮮やかな赤毛だった。

葉月に声をかけた赤毛の男は、見たところ二十代前半のようだった。

その向かいには、同じ年頃の、こちらは白に近い灰髪青年が眉をひそめて座っている。

二人ともこざつぱりとした格好で、粗野な雰囲気はない。

ただ、腰の剣は飾りではないだろう。

戦列の<テーラン>の団員たちと似たような“におい”がする。

すなわち、戦闘を生業にする者のにおい。

嗅覚に訴えるものではないが、人を斬ったことがある者は独特の雰囲気を持つているのだ。

葉月はそれを嗅ぎとつて、なぜ自分に話しかけて来たのか考えた。

葉月とジークは<テーラン>の本拠地の近くでは割と顔が知られているが、ここは本拠地からは離れている。

自分を<テーラン>の一員、それも副長の娘と知って話しかけてきたのか、それとも単に街娘だと思つてか、はたまた……同類というには中途半端なおいを嗅ぎつけられたか……。

それによつて想定される事態は変わってくる。

裏を勘ぐり過ぎるのは葉月の悪いくせであり、それを自覚していて、も直す気はない習性だった。

男の目的を勘ぐりながら、葉月は少し警戒心をにじませた笑みを浮かべて小首を傾げた。

「ええと、私に何か御用でしょうか？」

「うん、もし席を探して……二人連れならここ空いてるよ。良かったらここ座らない？」

赤毛の男はにつこり笑いながら、自身の隣の席をぽんと叩いた。男たちが座っている席は四人掛けで、相席者はいないので確かに空いている。

葉月と同じように席を探している者は他にもいるのに、空いていた訳は明白だろう。

灰髪の青年が目に見えるほどの不機嫌なオーラを出しているからだ。にこやかに笑う赤毛の男と、超絶に不機嫌な白に近い灰髪の青年。髪の色以上にちぐはぐで、目立つ二人組だ。

この者たちに関わると厄介なことになりそうな予感がひしひしとする。

災難に自ら飛び込むような酔狂な人間になったつもりはない。

避けられる災難は避けるべきだ。

迂闊なことをすれば自分だけではなく、ジークや<テラン>の団員も巻き込むことになる。

それは葉月の望むところではない。

葉月が断ろうと口を開こうとした瞬間、赤毛の男が灰髪の青年に話を振った。

「ハインツ、お前もいつまでもそんなツラしてないでお誘いしろよ。可愛いお嬢さんと一緒の方が飯もうまいだろ？」

葉月を無視してラセツタと呼ばれる具沢山のすいとんを食べていた青年は、男にうながされて渋々といった様子で、

「どうぞ」

と、空いている席を手で示した。

どうやら、赤毛の男の方がハインツ青年より立場が上らしい。

持っていた手提げが二つだから二人連れと推測したのだろうが、葉月をさりげなく断りにくい状況に持つていく手腕はたいしたものだが、葉月は『可愛いお嬢さん』などと平然と言える男は信用しないことにしている。

自分に向かって言うような男は、特に。

いくら断りにくい状況であろうと、空気に流されるような葉月ではない。

「いえ、お誘いはありがとうございますですが、連れは二人いるんです。他の席をあまりますね。ありがとうございます」

おっとり笑って平然と言い切る。

そのあからさまな口実に、赤毛の男はへえと言つように器用に片眉をあげて、笑った。

「それは残念。＜テーラン＞の副長の娘さんとなら飯も数倍うまく感じるだろうになあ」

ぴくり。

赤毛の男の言葉を聞いた葉月の頬が一瞬ひきつった。

自身の警戒レベルが一気に跳ね上がる。

人目が多い、などは安心材料にはならない。

相手は二人。

しかも確実に自分よりも強い。

もちろん、斬って捨てるつもりならば、このような回りくどいことも葉月のことを知っていることも言わないだろう。

それだけに男たちの目的が見えず、いくつもの可能性が脳裏をよぎる。

いつそのこと、人違いのフリでもしようかと考え、すぐに打ち消した。

この男たちが＜テーラン＞に用があるならば、どの道会つことになるだろう。

別人を装っても後で面倒になるだけだ。

葉月はさりげなく羽織の裾を押さえながら、笑顔で尋ねた。

「もしかして、どこかでお会いしましたか？」

「いや、初対面だよ。でも君たちのことは知ってたからさあ。ふわふわした灰髪のお嬢さんと浅黒い肌の少年の組み合わせはここいらでは珍しいだろ？ だからピンときたんだ」

当たりみたいで良かったよ。と笑う男からは害意を感じない。

「あ、名前までは知らないんだけど、教えてもらっていい？ 俺はイーリオ。こっちの白頭はハインツつて言うんだ。よろしく！」

なんというか、ケヴィンと違った意味で軽薄な男だ。  
するすると気安く懐に入り込んでくる。

ハインツも不機嫌な中に少しだけ驚きの混じった顔でイーリオに促されるまま、

「どうぞよろしく」

と、頭を軽く下げた。

そんな男たちの様子に、葉月は警戒を解かないまでも幾分かそのレベルを下げることにした。

こうして開けっぴろげに接触してくるような輩だ。

この男たちは敵ではないだろう。

少なくとも、今はまだ。

ならばいつまでもピリピリしているのは精神と体力の無駄でしかない。

厄介ことを避けるつもりだったが、もう巻き込まれることは確定のようだ。

それならば腹をくくるしかないではないか。

こちらに取り入るつもりなら、逆に取り入ってやろう。

何も、剣を振り回すだけが戦いではない。

葉月には葉月の武器と戦い方がある。

白頭の方はいかにも若いが、赤毛の男は齒ごたえがありそうだ。

どうも<テール>の周りにはクセの強い連中ばかりが集まってくるらしい。

自身のことは完全に棚に上げ、葉月はたれ目がちな目元を緩ませて、ふわりと笑う。

「私は葉月と申します。つい勘違いしてしまったのですが、私の連れは一人でした。そちらの席に相席させて頂いてもよろしいでしょうか？」

ジークはやつと買うことが出来た二人分の焼き飯を両手に持ち、葉月を探した。

並んでいる人数はそう多くなかったが、ジークのように他の人の分も買い込む人が多く、思ったよりも時間がかかってしまったのだ。この辺り一帯の屋台はどこも人気のようで、ジークと同じように屋台で買った食べ物を持ってうろついている者も多い。

ねえさんは無事に席を見つけられたのだろうか。変な輩に絡まれていなければいいが……。

もちろん、そのおっとりした外見とは裏腹に、性格も武術の腕も一筋縄ではいかないとは承知しているが、それでも心配なものは心配だ。

ジークはそんなことを考えながら、辺りを見回す。

居た。

机椅子が置かれている一帯の北端の四人掛けの席に葉月の姿を見つけ、眉をひそめた。

ジークは視力は良いのだが、未だに人の顔の見分けがあまりつかない。

どうもこの世界の人間は皆のつぺりした顔をしているので、老いているか若いかわか女か女くらいしか分からない。

後は髪色や服、近くに寄れば声や匂いや気配で判別している。

それでも、あの赤白の男どものように目立つ髪色の輩ならば、一度見れば記憶に残る。

あれはジークの知らない人間だ。

その知らない男たちが葉月に馴れ馴れしく話しかけているようだ。

特に葉月の隣に座る赤頭の方は距離が近い。

ただのチンピラならば相手にしないはずの葉月も、男の話に相槌を打っているように見える。

はつきり言つて、面白くない。

<テール>の人間ならまだしも、赤の他人が、しかもこの距離で判るほど“血の匂い”を纏まとった男が葉月の隣にいるのは我慢ならなかった。

「ねえさん、焼き飯買ってきました」

小走りに葉月の座る席までやって来たジークは、赤白頭たちを無視して葉月の前に焼き飯を差し出した。

「ありがとう」

につこり笑つて焼き飯を受け取った葉月に笑い返した後、ちらりと赤白頭の二人を睨む。

白頭はむっとした顔で睨み返して来たが、赤頭の方はやりと余裕をにじませた笑みで返して来た。

この男は気に食わない。

ジークはほとんど本能的に懷に手を伸ばしかける。

それを制したのは、葉月の鋭い声だった。

「ジーク。無闇矢鱈に喧嘩を売るのは止めなさい。とりあえず座つて」

「でも、」

「ジーク」

葉月がじつとジークの目を見て、その名を呼ぶ。

こういう時の葉月は、相手に有無を言わせない迫力がある。

相手がその命令に逆らうことなど微塵みじんも許さない、命令することに慣れきった者特有の傲慢さ。

葉月以外の者がこのような態度をとれば反感を覚えるが、相手が葉月だからしゅんとしてしまう。

ジークは懷から手を離し、のろのろと葉月の向かいの席に腰を下ろした。

葉月は『よく出来ました』というように満足気に笑った後、申し訳なさそうな顔をして赤白の二人に頭を下げる。

「弟が失礼を致しました。こちらが弟のジークです」

葉月に紹介され、ジークは無表情のまま頭を下げた。

本当ならば頭など下げたくはないが、しなければ葉月が困るだろう。ジークの思考は清々しいまでに葉月が中心だ。

葉月の謝罪を受けた赤白頭の内、赤い方がひらひらと手を振って「いいって、いいって」と笑う。

「葉月ちゃんが謝ることないじゃん。ハインツが怖い顔してたのが悪いんだろ。悪いね、弟くん、こいつ無愛想で」

馴れ馴れしく“葉月ちゃん”などと呼ぶな、悪いのはお前のへらへらした面だ、と反論したかったジークだが、葉月に目で制され、「いえ」とつぶやく。

赤頭は仏頂面のジークに構わず、白頭の肩をぽんつと叩きながら自己紹介を始めた。

「俺はイーリオ、で、こっちがハインツ。よろしくな」

「……よろしく」

につと笑うイーリオと、ジーク以上に仏頂面のハインツの二人に挨拶され、ジークも渋々と口を開いた。

「よろしくお願いします」

葉月はそんな様子を見ながら、おっとり笑って言う。

「イーリオさんとハインツさんは、＜テーラン＞（ウチ）に御用が  
おありなんですって。食べ終わったらご案内することになったから  
「そうそう。ここいらって入り組んでるよなあ。全ツ然分からなく  
つて。いやあ、葉月ちゃんたちに会えて良かったよ。ホント助かつた」

笑顔の葉月とイーリオ、仏頂面のジークとハインツ。

髪色も雰囲気もバラバラの四人は、周りの好奇の目を意に介せず、独特の空気を放ち続けていた。

「それにしても」

微妙に息のつまる昼食を終えた四人は、連れ立って屋台群を後にした。

連れ立ってといっても、横に並んでは他の通行人に迷惑だ。

自然と二、二に並んで歩くことになる。

道案内役の葉月が先を歩くのは当然として、その隣にはちゃっかりとイーリオが陣取った。

その後ろをジークとハインツが無愛想な顔をしてついてくる。

道中無言で歩くのも何なので、葉月は世間話でもするようにさざりと言った。

「<テーラン>にいらしたにしては、だいぶ遠くまで来られましたね。この辺はもう“中”ですよ。<テーラン>はもつと“表”の方にありますのに」

無邪気を装って尋ねる葉月に、イーリオはあはははと笑いながら後頭をかく。

「迷ってる内にどんどん奥に行つてたみたいなんだ。通りがかりの人に道を尋ねて教えてもらつても、なんか別の方に出ちゃったりさ。迷路みたいだね、ここは。……ところで、“中”とか“表”って何か聞いてもいい？」

「ええ、“中”や“表”というのは新興地区の大まかな区分です。

新興地区を三つに区切つて、番号付街に近い方から表、中、奥と呼び表しているんです。正式な区分ではないんですけど、なんとなく棲み分けている感じですね」

戦列の<テーラン>の本拠地は、新興地区の中でも七番街よりの、番号付街と新興地区の境である朱河<sup>あけがわ</sup>の近くにある。

番号付街との境の方が人通りが多く諍い<sup>いさか</sup>も多いのも理由の一つだが、<テーラン>自体が新興地区の新参者である証でもあった。

新興地区はくウクジエナ>の七番街と八番街の外郭にまたがって、都市の外にたんこぶのように突き出た地区だ。

公式には存在していないものとして扱われている関係もあって、一体いつ頃から存在しているかは判然としない。

ただ、残っている古い建物を見るに、少なくとも百数十年は前から有ったと考えると良いだろう。

新興地区の外郭を葉月自身が見たことはないが、ブノワが言うに新興地区の外郭もそれくらいの年代に出来たものだろうということだった。

梓自体は百数十年変わらないが、その中は目まぐるしく変わっている。

人の出入りも多いし、新興地区内の転居も意外と多い。持ち家という概念が希薄なのだ。

稼ぎが良くなれば良い物件に移るし、金が無くなればそれ相応の物件に移らざるを得ない。

人の動きが激しいから、商家でさえより良い立地に移ることに余念がない。

そうした中で、ちょっとした不文律が出来た。

新参者は表に、成功したり親の代から新興地区に住まう者は中に、落ちぶれた者は奥にという具合だ。

治安の良い中と治安の悪い奥が接しているというのも不思議な話ではあるが、中にはくテーラン>のような自警組織が複数ある上、金持ちは自前の警備を雇っている。

実を重視する傾向のある住人にしては、いささか経済的ではない話だったが、矜持の問題なのだろうか。

その辺りの感覚は、新参者の葉月にはまだ分からない。

「へえ、新興地区も結構広いだね」

葉月の説明を聞いて、イーリオはしみじみと感心したような声を上

げた。

「本当は来る前に調べておかなきゃならないことだけど、周りに知ってる人が皆無でさ。葉月ちゃんが説明上手で助かったよ」

とにこにこ笑いながら言う様は油断を誘ったが、

葉月は、

「ありがとうございます」

と笑って受け流した。

素直に油断して良い相手だとはとても思えない。

聞き上手で、お世辞も上手い。

乗せられて話し過ぎないように気をつけねばならない程だ。

表面上は談笑に見えても、その裏には腹のさぐり合いと情報の争奪が潜んでいる。

「いったいどれくらい広いのかな？」

「七番街と八番街の外郭にまたがって外に膨らんでますから、番号付街の一街と比べて、およそ一・五倍の面積があると言われてます」

「言われている？」

「外郭から計算して弾き出したようです。正直内側から計測するのは困難でしょうね」

「ふうん。奥があるから、かな」

イーリオがにいつと笑ってさぐるように言う。

葉月もそれを受けて、にっこりと笑う。

「それも理由の一つです」

葉月はあえて他の理由を言わなかった。

新興地区は入り組んでいる上、住人の独立精神も旺盛だ。

自治組織にはそこまでの権限と金がない。

理由はいろいろあるが、わざわざ教えることもないだろう。

こちらが言わずとも推測されるだろうが、開けっぴろげに全てを教えてやる必要はないし、そんなことをするのは馬鹿か能なしかどこぞの間諜か、まあ、それに類する者だけだ。

「地図はあるのですか？」

ふいに、イーリオの後ろを歩いていたハインツが口を挟んできた。正確な面積も分からずに、正確な地図があるのか疑問なのだろう。

「新興地区全体の、というのなら、表と中の主立った大通りを示したものがありますよ。奥は白いままですけれど」

「もつと詳細なものもあるのでしょう？」

葉月の説明に満足いかないハインツが、重ねて尋ねる。

葉月は内心苦笑しつつ、さらりと答えた。

「ありますね」

「見せて頂いても？」

無表情ながら意気込んでいるハインツに、イーリオがあちゃーと額に手をやり天を仰いだ。

若いというか、まっすぐ過ぎるというか、可愛いものだ、と思いつながら、葉月はふわりと笑う。

「申し訳ありませんが、私にはそれを決める権限はありませんので副長のブノワか参謀のヴィリーにお尋ねください」

「ごめんね、葉月ちゃん。困らせちゃって」

イーリオがハインツの頭を叩いて下げさせた。

邪気のない笑みを浮かべたまま、葉月は首を横に振る。

「いいえ。お気になさらず」

別に気を悪くした訳ではないので、これは本音だった。

直球でも甘い球は打ち返しやすい。

一見まっすぐに見えて、どう落ちるか分からない球の方が曲者だ。

赤頭の方もこれだけ単純なら丸め込むのも簡単なんだけど。

などと、さり気無くひどいことを考えているだけである。

現代日本では駅前などによく地図が立っているし、携帯でも自分の現在位置から目的地までのルートを重ねて示してくれる地図まであ

るので身近な存在だが、実は地図とは政治的にも戦略的にも、ここではお値段的にも価値が高いものなのだ。

庶民がほいほいと持つているものではないし、部外者に簡単に見せて良いものでもない。

こんな下っ端の見習いに見せる見せないを決める権限がないことくらい、少し考えれば判ることだ。

イーリオに制されたハインツも興奮が治まったからだろう。

その事実に思い至ったらしく、

「すみません」

と頭をさげてしよげ返っている。

何か、こう、叱られてしょんぼりしているクソ真面目な大型犬を彷彿とさせる姿は嗜虐心しぎゃくしんをくすぐるものがある。

一言で言えば可愛い。

ハインツを部下に持つイーリオは大変そうだが、こちらは部外者なので他人事のように愛でることが出来るというものだ。

次の角を曲がれば<テーラン>の本拠地が見えるという所で、異変に気付いたのはジークだった。

「ねえさん」

ハインツにも適度に気を使いながらイーリオと腹の探り合いを続けていた葉月の袖を、ずっと黙ってついて来ていたジークが掴んだ。

驚いて振り返った葉月ではなく、角の向こうを睨みながらジークが言う。

「本拠地の辺りが騒がしいです。何かあったのかも知れません」

言われた葉月は耳をすませてみるも、聞こえてくるのは普段と変わらない雑踏の音だけだ。

ハインツやイーリオもジークが睨む方を見て、一瞬険しい顔をするが、すぐに肩の力を抜いた。

「別に変な音は聞こえないけどなあ。お前、何か聞こえるか？」

イーリオがハインツに問いかける。

ハインツはそれに首を横に振って答えた。

「いいえ。特には」

子供の聞き間違えだろうと笑う男たちを無視して、ジークは葉月を見る。

「迂回しますか？」

「そうね……」

葉月は少し考え込んだ。

自分やイーリオたちに聞こえずとも、ジークがここまで確信を持っているのだ。

実際に騒ぎとやらが起こっているのだろう。

教えてくれたジークには申し訳ないが、正直、こんなところでジークのスペックが知られるのはよろしくない。

<テーラン>の本拠地はこの先の角を曲がって少し歩いた所にある。普通ならば聞こえる距離ではない。

それが聞こえるジークは普通ではないのだ。

会って間もない人間に手札を晒すのはどうにも躊躇ためらわれる。

ここでイーリオたちと一緒に気のせいだと笑うのは簡単だが、それも無駄だろうししたくない。

仕方がないな、と葉月は腹をくくことにした。

「騒ぎは<テーラン>の本拠地の辺りなのね？」

真剣な顔で問う葉月に、ジークが少し困ったように曖昧に頷いた。

「おそらく、ですが。聞こえてくる距離と方向は、だいたい本拠地の辺りです」

「なら迂回したって無駄でしょう。あの辺りで騒ぎや揉め事が起きるなら<テーラン>（ウチ）が関わってないわけないもの」

葉月はふうつとため息をついて肩をすくめてみせた。

そして、くるりとイーリオたちの方を向き、申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「申し訳ありませんが、少々面倒なことが起きているようです。そ

んな中にお客様をお連れするのは心苦しいので、どこかで時間をつぶしてからという訳にはいかないでしょうか？」

葉月の提案に、イーリオは苦笑でもって応えた。

「何も聞こえないのに、葉月ちゃんは弟くんの言うことを信じるんだ？」

多分に侮りが含まれている言葉に、ジークがむっとした表情を浮かべる。

葉月はそれを片手で制しながら、ふわりとした笑みを浮かべて言い切った。

「私でも他の人が言ったのなら何を言っているんだ、と思います。ですが、ジークが言うのなら本当です」

葉月はイーリオの緑がかった青い瞳をひたと見つめる。

イーリオも葉月の灰青の瞳を見つめ返した。

二人はしばし見つめ合う。

色っぽいものは欠片もない。

無言の腹のさぐり合いだ。

静かな、それでいて緊張感をはらんだ空気が流れる。

その間、わずか数瞬。

意外にも、先に舞台を降りたのはイーリオだった。

両手を小さく上げて、いかにも妥協したというような声で言う。

「了解。葉月ちゃんの言うことを信じよう。でも時間は潰さない。

荒事には慣れてるし、こちらも仕事で来てるもんだからあまり遊んで時間を喰うわけにはいかないんだよね」

「分かりました。ではご案内しますが、警戒は怠らないようお願い致します」

葉月はそう言って、ジークに目配せする。

ジークはその目配せの意味を読み取り、頷いてみせた。

葉月たちを追い越し、先を歩く。

葉月もさりげなく羽織の裾を押さえながらその後を追う。

その後に半信半疑の男たちが続いた。

その角を曲がってから<テーラン>の本拠地までは徒歩数分。

新興地区にしては珍しくまっすぐで見通しの良い道に面している。

声はまだ聞こえない。

だが、石造りの建物の角を曲がった葉月たちの目に飛び込んできたのは、<テーラン>の本拠地に詰め寄る数人とそれを押し止める<テーラン>の団員。

そしてそれを遠巻きに眺めている野次馬たちの姿だった。

いつも賑やかな通りが、賑やかを通り越して騒然としている。

灰山の人だかりは、少し離れたここからもよく見えた。

「やっぱり、騒ぎになっていますね。どうなさいますか？」

葉月は角で足を止めている男たちを振り返った。

ハインツは目を丸くし、イーリオは一瞬ぼかんとした顔をしたが、すぐにへえっという表情かおをしてみせた。

「すごいね、弟くんの言ってた通りだ。……さすがにあれば……ちよおつと厄介そうかな」

葉月はイーリオの言葉に本拠地の入り口に目を戻し、垂れ気味の眉を微かにひそめた。

まだ乱闘にはなっていないが、団員に詰め寄る数人は興奮しているようだし、野次馬の数も思ったより多かった。

二十人以上はいるだろう。

住民と諍いさかいを起こすのは、地域密着型自警集団の<テーラン>としてはだいぶまずいことで、団規でも明確に禁じられていることだ。

だからどんなに血の気が多く喧嘩っぱやい団員たちも、本拠地の近くでは揉め事を起こさない。

よって団員たちが剣を抜くことはないだろうが、住民の方が読めない。

特に野次馬がいつ詰め寄る側に回るか分からなかった。

普段から住人同士の揉め事の仲介をし、医療部は割安で住民の往診を行って好感度アップを目論んでいるが、戦列の<テーラン>を胡散臭くて邪魔だと思っている輩も少なくはないのだ。

<テーラン>は言ってしまうえば警察のようなやくざだ。

みかじめ料を取るし、一部を除いてガラはお世辞にも良いとは言えない。

憧れられもするし、忌避きひされもする。

そういう、不安定な存在だ。

<テーラン>を嫌う者たちが野次馬を煽<sup>あお</sup>れば、乗せられる者も出てくるだろう。

逆に<テーラン>側に加勢する者も現れるかも知れない。

気持ちは嬉しいが、それはそれで面倒というか、大乱闘に発展するだろう。

原因は知らないが、厄介なことが起きていることだけは分かった。

<ゼルダの使徒>といい、後ろの男たちといい、なんでこう、厄介なことが立て続けに起きるのだろう。

あちらに居た頃はこんなことは……と一瞬思ったが、よくよく考えてみるとその立場柄年柄年中厄介な案件の解決に駆り出されていた気がする。

自分はもしかして、とんでもなく運が悪いのではないだろうか。

もしかしなくても、三十にもならず交通事故で死亡し、異世界の女神に“世界の行く末”などという面倒でとてつもないモノを託されている時点で厄介事を引き寄せる性質<sup>たち</sup>なのは確定している。

その事実からわざと目を逸らし、葉月はこっそりと小さなため息をつく。

今は自分の不幸に浸っている暇なんぞないのだ。

建設的な手段を考えなければならぬ。

安全を考えて客人たちを裏門へ案内することも考えたが、瞬時に却下した。

失礼がどうのこうのという前に、この男たちに逃走経路にもなる場所を見せたくない。

「時間を惜しまれるお気持ちは分かりますが、少し待つて頂けませんか？ あそこにお客様をお連れするのは躊躇<sup>ためら</sup>われます」

葉月はイーリオたちの方に向き直り、少し困ったような顔をして提案した。

イーリオは額に手を添えて騒ぎを見ながら言う。

「まあ、実際騒ぎが起きてるし、人数も意外と多い。あそこへのこ

のこと現れるのは得策じゃないね」

潔く前言撤回したイーリオは一旦言葉を切り、葉月を流し目で見た。意地の悪い笑みを浮かべて、イーリオが問う。

「待つのは、“少し”でいいのかな？」

「ええ、もちろんです」

葉月はイーリオの視線を受け流し、ふわりと笑った。

数人が本拠地の門から出てきたことを視界の端に捉えながら、きつぱりと言い切る。

「“少し”で構いません。それほどお待たせしないことをお約束します」

葉月の言葉通り、事態が収束までにはたいして時間は掛からなかった。

新たに出てきた団員たちは詰め寄った数人を落ち着かせ、代表者の二名を本拠地内に入れた。

野次馬も手際よく散らされている。

それを見てイーリオがぴゅうと口笛を吹いた。

「手際いいねえ」

「揉め事を収めるのには慣れておりますから」

葉月は少し誇らしげに笑う。

褒められたのは自分ではないが、自分のことのように嬉しかった。だいぶ帰属意識が芽生えてきているらしい。

「ねえさん、そろそろ大丈夫そうです」

ジークが葉月の隣に並び、報告する。

「不穏な声は聞こえません」

葉月は頷いて男たちを振り返る。

やや芝居がかった動作で手のひらを本拠地の方へ向けて言った。

「大変お待たせ致しました。戦列の<テール>の本拠地へご案内致します」

葉月たちが立っていた角から<テーラン>の本拠地までは歩いて数分。

見通しの良い道だ。

事態の後始末の為に残っていた団員は、近づいてくる四人組にとつくに気づいていた。

「ミケーレさん、ただいま帰りました」

「ただいま帰りました」

「嬢はん、坊さん、お帰りやす」

輪唱するように帰宅の挨拶を述べた葉月とジークに、柔らかな笑みを浮かべた優男が応える。

この辺りとは一風違ったイントネーションで話す、顔色が悪く柔和な顔立ちをした男の名前はミケーレ。

葉月と同じ副長直属部隊に所属している団員だ。

有能ではあるが、迷惑極まりない嗜好しゅうこうを持つ男である。

そのミケーレがイーリオたちに笑いかけながら、彼らは何者なのか葉月に尋ねた。

「そちらは、お客さんですか？」

「はい。<ウクジェナ>警備隊第七区部隊第三席のイーリオさんと同じく第七区部隊に所属されているハインツさんです。<テーラン>に御用があるとのことでご案内しました」

葉月が二人を紹介し改めて二人が名乗ると、ミケーレは「ああ」と頷いて、

「伺っております。ようお越しやす。私は戦列の<テーラン>副長直属部隊のミケーレと申します。先ほどはお見苦しいところをお見せして申し訳ござりまへんでした」

と、深々と頭を下げた。

その腰の低さに面食らったのは、イーリオたちだった。

両手をぶんぶん振り、「とんでもない！」とミケーレの頭を上げさせようとする。

「一歩間違えば暴動になるところを収めた手際、とてもお見事でした。ああも鮮やかに場を収めるとはすごいと感心していたくらいです」

「ええ、そうです！ 警備隊<sup>ウチ</sup>の人間にもあれば上手く捌ける人間<sup>さば</sup>がいるかどうか！ どうか頭を上げてください！」

「そうですよ。あなたが頭を下げられることではないでしょう」

二人がかりで慰めの言葉をかけられたミケーレはやつと頭をあげ、ふにやりと人の良さそうな顔で笑って一礼する。

「ありがとうございます。そう言って頂けると助かります」

まったく毒気のない笑みと一礼に、イーリオとハインツは恐縮しお辞儀を返した。

「いえいえ、そんなお礼を言われるようなことは言っていないで」

「当然のことを言っただけですから……」

葉月とジークはそのやりとりを、『騙されてる騙されてる』と割と冷めた目で見ていた。

葉月は表面上ミケーレにならって申し訳なさそうな顔をしていたが、ジークは明らかに可哀想なものを見る目でイーリオたちを見ている。あまりにあからさまなので、葉月が肘でジークの脇をつついて注意を促したほどだ。

しかし、その葉月とて内心ではジークと同じように、二人のことを哀れに思っていた。

知らないということは幸せなことだ。

ミケーレは腰は低いが、決して“いい人”ではない。

そもそも<テラン>に“いい人”などいるはずがないが、その中でもミケーレはある一点において最大級の警戒を必要とする人である。

ミケーレの“趣味”の被害にあったことのある葉月とジークとしては、お客さんにまでその被害が及ばないようにミケーレの自重を祈

るばかりだ。

ひとしきりお辞儀合戦を繰り広げたミケーレは、はたと気付いたように困った表情を浮かべた。

「ああ、こないな道の往来でお客さんをお待たせてしてもおて、申し訳ござりまへん。ただいま中にご案内しますよって」

そう言いながら、通用門を開けてイーリオたちを中へ促す。

自身が門を通る前に、ミケーレは葉月たちの方を振り返った。

ふにやりとした柔らかな笑みを浮かべながら、二人をねぎらう。

「嬢はん、坊さん、ここからは私がご案内しますよって、ご苦労さんでしたなあ」

「葉月ちゃん、またね」

門の向こうから、にっと笑いながらイーリオが手を振っている。

イーリオの隣のハインツがぺこりと頭を下げた。

葉月はジークと一緒に頭を下げながら、出来れば“また”はありませんようにと願う。

しかし、同時にその願いが叶えられないことも分かっていた。根拠はない。

ただの勘である。

しかし、そういう勘に限ってよく当たるものだ。

「厄介ごとつてば寂しがり屋だから、一つ来ると他にもどんどん集まって来るのよねえ。これ以上集まって欲しくないんだけど」

「まったくです」

三人が門から遠ざかった所で心底面倒くさそうに独りごちた葉月に、ジークが力いっぱい同意する。

「……ほんと、そうだといい」

「はい……」

自身の言葉を微塵も信じていないような声音で葉月がつぶやくと、ジークも遠い目をして頷いた。

それがどんなに憐れ願いでも、願わずにはいられない。

厄介で奇っ怪な運命を背負わされたく世界の落とし子ゝたちは、揃

って大きなため息をついた。

6・君が望む場所 6 - 1

近所でも評判の菓子店や品揃えの良い台所用品店などが立ち並ぶ賑やかな通りがある。

その喧噪も届かない少し離れた薄暗い路地裏に、一人の少女がうずくまっていた。

濃い灰色の髪を結い上げた結び紐が緩み、何かに引つ掛けたのか左側だけがボサボサだ。

擦り切れた羽織の裾が土埃で汚れることも構わず、体育座りをした膝に顔を埋める。

嗚咽おえつを押し殺しながら、少女は己の境遇を呪っていた。

なんで、お父さんはあたしを殴るんだろう。

なんで、お母さんはあたしを無視するんだろう。

なんで、お兄ちゃんはそんなあたしを見て笑うんだろう。

なんで、なんで、なんで？

あたしが貰われっ子なら、嫌だけど分からなくはない。

お兄ちゃんだけがお父さんとお母さんの子供なら、お兄ちゃんが愛されるのは仕方がないって諦められる。

でもお父さんは「俺の子なのになんでそんなに不細工で陰気なんだ！」って怒る。

あたしはお父さんの子だ。

お母さんは「あんたなんか産むんじゃないかった……」ってため息をつく。

あたしはお母さんの子だ。

お兄ちゃんと一緒。

あたしは、お父さんとお母さんの子なのに……。

いい子でいたら、お兄ちゃんみたいに偉いねって褒めてもらえるのかな。

美人になるのは無理だけど、いつも笑顔でいたらご飯を食べさせてもらえるのかな。

そう思つて頑張ったけど、お父さんはへらへら笑いやがって殴るし、お母さんが作るご飯にあたしの分はなかった。

もう嫌だ……。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

痛いのもお腹が空くのも馬鹿にされるのも嫌だ。

何もかもが嫌だ。

髪の毛一本残さず、あつという間に消えてしまえたらいいのに……。

小さな声で「死んじやいたい……」と呟いた少女の頭上から、優しく悲しげな声が降ってきた。

「そんな悲しいこと、言わないで」

誰かが近づいてきたことに気付かなかった少女は、肩を震わせ、驚いた顔で声の主を見上げた。

声の通り、優しくそんな女性で、悲しそうな顔をしていた。

歳は若そうだが、もしかしたら印象よりもずっと上かも知れない。

年齢不詳。

そんな不思議な雰囲気を持っている。

一目で判る上物の羽織の裾が汚れるのも厭いとわず、女性は少女の前にしゃがみ込んだ。

そして、そつと腫れ上がった少女の右頬に手を伸ばす。

「可哀想に……。痛かったでしょう？ ああ、目も真っ赤。鼻水も出てるわ」

そう言いながら、女性は懷から出した手巾ハンカチで少女の顔を拭う。

香を焚きしめてあるのだろう。

ふわりとしたいい香りがする。

少女はされるがまま、ぼんやりと女性を見上げた。

突然現れた女性に、何がなんだか分からない。

ただ、涙が溢れた。

「泣かないで。せつかくの可愛い顔が台なしだわ」

女性は優しく少女の頭を撫で、手巾で少女の目尻をそっと押さえる。少女は涙が止まらなかった。

ずっと、こうしてもらいたかった。

頭を撫でて、優しい声をかけてもらいたかった。

「どうしたの？」って、気にかけてもらいたかった。愛して、もらいたかった。

少女は泣きじゃくりながら、自分の境遇を語った。

辛くて、悲しくて、死んでしまいたくなったのだと。

女性は少女の話に優しく相槌を打ち、自身が泣きそうな顔をしながら、少女を抱きしめてくれた。

温かくて、柔らかくて、いい匂いがした。

ふわりとした甘い香り。

さっきの手巾と同じ香りだ。

少女は、この人がお母さんだったらどんなに幸せだっただろう、と思った。

だから、

「私と一緒に来る？」

と、女性が尋ねた時、少女は一も二もなく頷いたのだった。

人気のない薄暗い廊下を、葉月は早歩きで進む。

この辺りは団員たちはあまり寄りつかない。

本拠地の中でも下働きや庭師などの使用人の領域だ。

「よう、お嬢様」

それなのに、この辺りで聞くはずのない声に呼び止められ、葉月はその足を止めた。

出来れば聞こえなかったことにしたい。

ただでさえ、先の騒動で遅れているのだ。

これ以上の時間のロスは避けたい所である。

しかも、この人を小馬鹿にするような声には聞き覚えがあった。

葉月が<テーラン>の中で最も苦手とし、最も会いたくない男に違いない。

葉月はうんざりしながらしぶしぶ、しかし表面上はおっとりとした笑みを浮かべて振り返る。

「何かご用ですか、ケヴィン隊長」

そこには思った通り、ケヴィンがにやにや笑いながら立っていた。

小脇に籠<sup>かこ</sup>を抱えたケヴィンは、葉月との間を詰めながら、獲物をいたぶる獣のように目を細める。

「久々の下働き生活はどうよ？ 折角お嬢様に成れたってのになー。

一月限りとはいえ、逆戻りはつらいんじゃないの？」

愉悦に満ちた灰青の瞳に見下ろされ、葉月はこめかみがひきつるのを気合いで堪えた。

この男は無駄に顔が良いだけあって、そこら辺のチンピラに馬鹿にされるよりよっぽどムカつく。

おまけに顔と声の調子と目と身振り手振りと……、つまり全てでもって人を馬鹿にしてくるのである。

精神鍛錬はそれなりに積んでしていると自負している葉月だったが、

これほど人をムカつかせる才能にあふれた男が相手であると笑顔もひきつり気味だ。

ついでに質問に質問で返してくる輩も大嫌いである。

本当にとるに足らない者であれば存在自体を無視してやりたいところだ。

しかし、この男は性格は最悪だが、顔の他に頭と剣の腕も良い。

おまけに戦列のくテールラン>実行部第四隊長、幹部である。

無視するには分の悪い相手だ。

「まあ、心配して下さってありがとうございます。でもあの失態の処分ですし、サラさんが実家に帰っている間だけ、新しい人を雇うよりは良いとお考えになったのでしょうか？　ならば肅々と勤めるだけです」

葉月は理性を総動員して、邪気のない笑みを浮かべる。

ケヴィンほど嫌みつたらしく真つ正面から言ってくる輩はいないが、葉月のこの処分に関してはくテールラン>内でちよつとした物議を醸し出した。

先のおとり捜査で判断ミスにより犯人の一人を死なせてしまった葉月は、その罰として一月の間、再び下働きに戻るようになったのだが、この処分が重過ぎるのではないか、というものだ。

学問所に通うことは許されているとはいえ、タイロンとの朝稽古以外は団員としての活動及び扱いを禁じられ、寝起きするのも母屋ではなく、他の下働きと同じ北の離れの大部屋である。

これは謹慎よりも重い処分だった。

団員とその他の本拠地の屋敷で働く人々との間にはハッキリとした線が引かれており、一時的とはいえ下働きにさせられるということは団員にとってこの上ない屈辱だった。

失態を犯したとはいえ、そんな処分を副長の娘に課すとオズワルドが提案した時は「第三隊長は副長に喧嘩を売ってるんじゃないか」と言う者も現れた程だ。

ブノワは突然現れた娘を存外可愛がっており、髪飾りなどの小物を

よく買ひ与えて娘本人から諭されることもあった。

そのような調子だったから、ブノワがこの処分を認めることはないと思われていたのである。

しかし、ブノワは大方の予想を裏切り、あっさりこの処分を認めている。

ちょうど下働きの一人であるサラが姉の出産の手伝いの為、一月だけ実家に戻らせて欲しいと申し出てきていた。

屋敷で働く団員以外の人員については勘定部の管轄なのだが、一月の間だけ新しい者を雇うには費用が掛かり過ぎると勘定部長のジェイルが渋っていたことも理由の一つだろう。

<テーラン>もそれほど裕福ではないので、謹慎で人を遊ばせておく余裕はない。

葉月は以前、二月の間だけだが下働きをしていたので、新しく人を雇って一から教えるよりは役に立つだろう。

葉月は一日中働けるわけではないので、他の者の負担が増えるがそこはサラの分の給金で埋め合わせすることで話がついた。

オズワルドの提案は、一時的な穴埋めという意味で合理的で経済的な処分だった。

「それが強がりじゃねーのが可愛くねーよな、お嬢様は。あー、下働きの方が性に合ってるとか？」

「可愛さはここぞという時に使う為に出し惜しんでるんですよ。その方が希少価値がありますでしょう？　あと私はサラさんの一時的な穴埋めですよ。サラさんの代わりになんてなれません」

下働きの方がいいならずつと下働きをしていれば？　と揶揄するケヴィンに、葉月ははぐらかすようにズレた答えを返す。

葉月にとっても謹慎よりは下働きの方がいい。

何もしないでいるのは苦痛だし、情報を得づらいのも困る。

面子も大事だが、元々見習いのみそっかす扱い。

今は惜しむものでもない。

楔みそぎになると同時に、周りの同情心を買えるのも大きい。

今は面子より実利を優先させるべきだ。

が、ずっと下働きでいるつもりはない。

自分がどういう人間かは自分が一番知っている。

自分が下働きで終わることに満足など出来ないことも、モップや縫い針よりも杖つゝや詭弁きへんを弄ろうする方が向いていることも、命令する側に立ちたいという欲求も、けれど決してトップの器ではないという事実も、嫌きらと言うほど思い知っている。

今は雌伏しふくの時というだけだ。

それらを口に出しては言わない。

葉月はただ、笑う。

たれた眉と目尻も、笑みの形に作られた唇も、表情は先ほどまでと何一つ変わらない。

ただ、目だけが少し違う。

油断しているとお前も丸飲みにしてやるぞ、というような挑発的な目だ。

その視線を受けて、ケヴィンは空いた方の手で腹を抱え、愉快そうに声を上げて笑う。

「うひゃっひゃっひゃ、やっぱりなー。お嬢様は“こっち側”の間だよ。間違はなく、な」

一頻りひとしき笑い転げると、にいと人の悪い笑みを浮かべ、小脇に抱えていた籠を押しつけながら、葉月の顔をのぞき込む。

「うちのスズメどもはピーチクパーチク喧やかましいが、その分耳が広い。面白い話を聞いたら俺のところへ持ってこい」

ケヴィンの言葉に、もはや不機嫌を隠さず、葉月は嘲り混あやけじりの声を返す。

「私はあなたの部下ではないんですけどね。おとり捜査の時は一時的にあなたの下につきましたけど、もう戻りましたし。それに私は団員としての活動を禁じられてるのですが？」

『命令すんな』という意味を穴だらけのオブラートに包んで、葉月は薄笑いを浮かべる。

いつものおっとりとした笑みとは違う、相手を小馬鹿にするような笑みだ。

ケヴィンは愉快そうに目を細めて、獰猛に笑う。

「だからだよ。お前の上司である“お父様”とも距離をおいておくんだろ？ ケジメがつかねーからな」

「タイロンとの朝稽古は続行しますから、伝<sup>つて</sup>がないわけではありま  
せんよ」

「あの脳筋は腕は立つが、そーゆー世間話から裏を読み取るなんて  
芸当にや向いてねーよ」

「……それは……そうですが……」

戦いぶりを知る者からは“猛虎”と恐れられるタイロンだったが、  
致命的なまでに頭脳活動に向いていない。

もちろん、『これこれこういう話があつて、こういう事情がありそ  
うで怪しい』とハッキリ伝えればブノワの元に情報を届けてくれる  
だろうが、タイロンと稽古するのは裏庭。

どこに耳があるか分からない。

団員としての活動を禁じられている身で、こそこそ嗅ぎ回っている  
と思われるのはよろしくないだろう。

かと言って、さりげなく『こういう話を聞いたんですよ』と世間話  
を装っても、『へー』で終わりだ。

他の団員とは下働き中は接する機会が少ない。

ケヴィンの言う通り、ケジメがつかないからだ。

もちろん、ケヴィンと接するのも厳密に言えば問題があるだろうが、  
この男のことだ。

そこは上手くやるだろう。

葉月の脳裏に、先ほどの騒<sup>よそ</sup>ぎが過る。

少し考えるように間を置いて、ケヴィンを見上げた。

「面白いお話は、もちろん私も聞かせて頂けるんですよね？」

「ああ、互いに面白そーな話を持ち寄って世間話するってこった」

葉月は精一杯譲歩したというようにわざとらしいため息をつく。

「分かりました。世間話程度ならば差し障りないでしょう」

「よろしく頼むわ」

ケヴィンはいっと笑って葉月から離れ、そのまま行こうとする。

葉月に服の入った籠を押しつけたまま。

慌てて葉月はケヴィンの背中に声をかける。

「ケヴィン隊長、この籠！」

「それ繕つくろい物。持っててくれよ」

ケヴィンはそう言って振り返ることもせず、足早に去って行った。

葉月はその背中を思いつきりにらみつける。

あの男の言動はいちいち癪にさわって仕方がない。

常なら受け流せるのに、うっかり挑発に乗ってしまった。

「気に食わない男」

葉月は小さくはき捨てるように呟いて、踵きびすを返す。

これが同族嫌悪であることは、葉月にも分かっていた。

昔の人はよく言つたものだ。

『女三人寄れば姦<sup>かしま</sup>しい』、と。

それはこの世界でも通用する、世界を問わない普遍の真理らしい。

「で、やっぱり男は顔だと思つのよね」

手元の針と布から目を話すことなく、ローザがきつぱりと言い切つた。

ここは<テーラン>の本拠地の中でも使用人たちの領域にある被服室。

そこそこ広い机の上には、色とりどりの糸や継ぎ当て用の布などが散乱している。

その机を囲んでいるのは、若い女ばかりが五人。

<テーラン>の本拠地に勤めている下働きの女性たちだ。

<テーラン>はその屋敷の規模とは比例せず、使用人の数は少ない。商家や名家などとは違い、住人の世話はその仕事の内に含まれていないこと、見栄を張る必要がないこと、もつと身も蓋もないことを言えばそんな金はないことなどがその理由である。

よつて、ここで働く使用人は必要最低限しかない。

彼女たちの他にも料理人や下男などがいるが、全員合わせても十人に満たない。

姉御肌で気風のいいローザ、薄幸の美少女風で大人しいミッシェル、ややぼつちやりでお喋りなコニー、常に無表情でズバツと言いたいことを言うリスウ、そして現在は姉の出産の為里帰り中の、ややそそっかしいながらも元気なサラ。

これが使用人の中でも屋敷内の雑用全般を担う下働きの面々である。今、彼女たちは夕食の仕込みの前の一仕事として、団員たちの服の

繕いを行っている。

団員たちはその荒っぽい仕事柄から、よく服を破る。

庶民は破れた衣服を修繕してまた着ることが普通だが、自分で破れた服を繕える器用な団員などほんの一握りしかない。

専任のお針子がいなくテーラン>では、繕い物も下働きの仕事の内なのである。

若い女性陣が五人も集まったとあらば、監督する者もないのに黙々と針仕事をするはずがない。

もちろん手は動かすが、それと同時に口もよく動く。

「そりゃあ、顔がいいことに越したことはないですけど、ちょっと極端じゃないですかあ？」

コニーが新しい系を取りながら、ローザが出した話題に乗った。

ローザがいきなり極端なことを言い出すのはいつものことだ。

皆それに慣れているので、ポンポンと言いたいことを口々に言い出す。

「コニーの言う通りだと思う。外見に中身が伴わなければただの下種<sup>す</sup>でしかない」

高速で針を動かしながら辛辣なセリフを無表情に吐くりスウに、ローザは「ちつつち」と舌を鳴らす。

「分つてないわね。顔が悪い男つてのは、卑屈になっちゃって性根まで腐つてるのが多いのよ。その点顔がいい男はそういう卑屈さとは無縁でしょ？ あたし、卑屈な男が一番タチが悪いって思うわ。」

ミッシェルはどう思う？」

話を振られたミッシェルは色の合う継ぎ当てを探しながら「そうですねぇ」と応じる。

「わたしは優しい人がいいです」

「優しければ顔が悪くても構わない？」

「優しくて顔が良ければ最高ですよ」

ローザが意地悪げに笑いながら尋ねると、ミッシェルはあっさり顔が良い方がいいと認めた。

世の中の男性が聞いたなら泣きそうなくらいのあっさり具合だった。  
ミッシェルの答えにローザは満足気に頷く。

「うんうん。やっぱりね。葉月はどう？ 顔の言い男と悪い男だったらどっちがいい？」

「それは、中身が同じだったら顔が良い方がいいですよ。見てるだけでしたら、中身が良いけど顔が残念な男より、中身が残念でも顔が良い方がいいです」

きゅっと玉止めを作りながら、葉月もあっさりと言い切った。

自身とて人の美醜を評せるような容姿ではないが、美人やカッコイイ人を見るのは好きだ。

なんとなく幸せな気分になれる。

ただ見るだけならば、中身などどうでもいい。

大事なのは外見だ。

葉月だつてもちろん、知り合いとなれば中身も考慮するが、中身が同じであれば見目が良い方がいいというミッシェルの意見には賛成である。

これはもう、好みというか本能の問題だ。

「中身が同じであるという前提条件があるのならば、ミッシェルの意見には賛成する」

「あ、あたしも。そうゆうことなら顔が良い方がいいですう」

ローザの意見に懐疑的だったリスウとコニーもあっさりと持論を翻ひるがえした。

男は顔で勝負。

葉月の脳裏にかつて一部で流行った替え歌が過よぎる。

顔の良い人が嫌いという人も中にはいるだろうが、大多数は見目が良い方を好むだろう。

こうなると、話題は自然と自分の好みの話になる。

口火を切ったのは、コニーだった。

「皆さんはくテーラン>の中だったら誰が好きですかあ？ あたしは断然、ハンフリー隊長押し。眼鏡の奥の涼しげな目がもう堪らな

いですよ。立ち姿もすつとしていてその辺の男とは空気が違いますもん」

アイドルに憧れる女子学生のごときやつきや言いながらも、手が止まらないのは流石である。

「なるほど、確かに第一隊長は整った顔立ちをしていると私も思う。立ち振る舞いも洗練されている。しかし、私が好ましいと思うのは第二隊長の方。女の私から見ても凛々しく、しかも気さくだ。笑顔もいい。憧れる」

リスウが淡々と熱弁を振るうと、コニーはうつとりしながら同意した。

「うんうん、ブライアン隊長も素敵よねえ。あたしも憧れちゃうなあ。ローザさんはどですか？」

「リスウ、ブライアン隊長は確かに素敵だけど女の人じゃない。今は男の人の話だってば。あたしはやっぱり副長かな。大人の男の色香っていうか、無精髭っぽいのにカッコいいってすごいよね。最近、ちょっとやつれ気味だけど、そこがまた色っぽいっていうか」  
繕い終えたズボンかを籠に放り込んですぐに次の上着を手に取るローザを、ミッシェルがたしなめる。

「ローザさん、葉月ちゃんの前ですよ。そんな明け透けな言い方はちょっと……」

困り顔のミッシェルに、葉月はこころ笑って「良いんですよ。ミッシェルさん」とフォローを入れた。

「貶されるならともかく、褒められたんですから。ところでミッシェルさんはどなたが好みですか？」

葉月が水を向けると、ミッシェルは困ったような笑みを浮かべながら、少し考えるように首を傾げた。

「うーん。そうね、首領直属のライナスさんかしら？ なんとなく安心出来るお顔なの。苦労人っぽくて優しいような感じがいいなあって思っわ。葉月ちゃんは？」

「私ですか？ そうですねえ」

うら若き女子学生の頃は私もこんな風に誰それがカッコいいとか言  
つてたなあ、と若干オバちゃんチックなことを考えていた葉月だっ  
たが、予想されていたはずの質問にわずかに言い淀んでしまった。  
葉月はどちらかと言えば、綺麗系やカワイイ系よりもイケメン系の  
方が好きである。

ヒョロっちいのは好きではないが、実家の道場でもここでも筋肉ダ  
ルマは見飽きているので、細身マツチョが良いと思っている。

そんな葉月の嗜好に合致した人物が<テールラン>に居ることは居る  
のだが、アレの名前を出すのはなんとなく憚<sup>はよか</sup>られた。

理由は簡単だ。

外見はかなり葉月の好みだが、最悪に相性が悪い相手だからである。  
ここは他の適当な人物を上げてしまえと思うが、何故かローザはこ  
ういうことに鼻が利く。

適当なことを言えばあつという間にバレることは確実だ。

下手に誤魔化せば邪推されてしまうだろう。

その方が百倍面倒くさい。

本当のことを言った時の面倒さと適当なことを言った時の面倒くさ  
さを天秤にかけて腹をくくった葉月は、取れかけたボタンを縫い付  
けながらさりと云った。

「純粹に外見だけの好みを言えば、ケヴィン隊長でしょうか」

その瞬間、今までどんなにきやあきやあ言っけていても止めなかった手を、葉月以外の全員が止めた。

四人は顔を見合わせて、ローザはにやりと口の端を吊り上げ、コニーは瞳を輝かせて、ミッシェルは微笑ましい物でも見るような笑みを浮かべた。

リスウは相変わらずの無表情である。

が、じいーつと葉月を見つめる視線は強い。

四人が四人とも興味津々なのは明らかだった。

「へえーえ。ケヴィン隊長、ねえ。さつきもケヴィン隊長から預かった繕い物を持ってきたし、葉月ってばもしかして……もしかしちゃう？」

ローザがにやにや笑いながら突っ込むと、コニーが両の頬に手を当てて黄色い声を上げた。

「たしか葉月とケヴィン隊長って十四歳くらい違ったわよね。突然現れた副長の隠し子とイケメン隊長の歳の差を超えた恋！ きゃー、恋愛小説みたい！」

実際はあちらの方が年下なんだけどなあ、と思いながら、葉月も針を動かす手を止めた。

「外見だけって言ったじゃないですか。中身は全然好みじゃありませんよ」

心外だと抗議する葉月に、ミッシェルが温かい視線を寄越す。

慈愛に満ちた笑みはまるで聖母のようだ。

「あら？ 恥ずかしがらなくてもいいのよ。歳の差だっていいじゃない。応援するわ」

「いえ、ないですから。あの人と恋愛なんて考えただけでうんざりしますよ」

葉月はそう言いながら、本当にうんざりとした表情を浮かべる。

しかも、はあつという実に重たいため息付きだ。

「本当に外見だけ？」

そのあんまりなうんざり具合に、リスウが首を傾げる。

尋ねられた葉月は、ひよいと肩をすくめて見せた。

「外見だけです。皆さんだって知ってらっしゃるでしょう？」 ケ

ヴィン隊長の性格は。あの人は完全なる観賞用です」

葉月はきっぱりすっぱり、一ミクロンの照れもなく言い切る。

四人とも、もちろんケヴィンの性格は知っていた。

ついでに、街での評判も耳に入っている。

いわく、難癖をつけてきた命知らずのチンピラの腹を蹴り飛ばした上、血反吐を吐きながら土下座した相手の頭をブーツの踵でぐりぐりと踏みつけたとか、あるスリ集団の内の二人を捕縛した際は一人の指の骨を一本ずつ折りそれでも吐かなかったので足の爪を一枚ずつ剥がして、見かねた相方に他の仲間を売らせたとか、色街で一番の売れっ妓に惚れられたがその嫉妬心がウザいと言ってあつさり捨てたとか、良くも悪くも——大抵は悪評だが——とにかく噂に事欠かない御仁なのである。

しかも、前の二つの件は、実に楽しそうにニヤニヤ笑いながら行ったのだという。

顔は良いが、性格はかなりの難あり。

それが戦列の<テーラン>実行部第四隊長の客観的な評価だった。

その事実思い当たったローザは、少し白けたようにつぶやいた。

「まあ、そうね。ケヴィン隊長は見る専門よね。というか、葉月ももつと照れたりしなさいよ。からかい甲斐のない」

ふうつとため息をついて、ローザが繕い物に戻る。

それを合図に、葉月を含めた他の四人も作業を再開した。

「やだ、ローザさん。そんな誤解を招くようなこと、するはずがないじゃないですか。ケヴィン隊長相手との間に照れるような関係性なんてこれっぽっちもないんですから」

葉月は朗らかな笑みを浮かべながら、糸切り鋏を手取る。

取り付く島もない葉月に、コニーは苦笑を浮かべた。

「葉月も結構言うよねえ。あ、ケヴィン隊長と言えば、さつき前の通りで起きた騒ぎの件、ケヴィン隊長とオズワルド隊長も呼ばれたみたいですよ。あたしお茶出しに行っただけですけど、押しかけてきた人たちの代表って、あのビルガさんとエーガーさんでした。なんでも娘さんたちが行方不明みたいで、例の＜黄昏の怪人＞事件が解決したなんて嘘なんじゃないかって難癖付けに来たみたいですよ」

「えー何それ。ちゃんと事件は解決したでしょ。犯人は捕まえたし、あれから十日以上経つけど犠牲者は出てないじゃない」

コニーが何気なく変えた話題を聞いたローザは、憤慨したように口を尖らせた。

いくら下働きとはいえ＜テーラン＞の本拠地で働いている身としては、身内を馬鹿にされたようで腹が立つらしい。

「殺人の方は起こってないけど、若い女性が失踪する件は続いているらしい。ただ、それが＜黄昏の怪人＞事件と関係しているかは疑問だ。自ら失踪したと思われる事例の方が多いと推測する」

リスウが買出しの際に聞いたと言うと、ミッシェルがその後を継いだ。

「そうですねえ。消えた娘さんたちは、大抵失踪してもおかしくない状態だったみたいですね。ビルガさんにしてもエーガーさんにしても、噂になる程ひどい親だったみたいですから」

「ああ、ビルガってあの呑んだくれ親父ね。それはあたしも聞いたことあるわ。あの親父の娘さんってフィオナでしょ？ あの子、酒代でこさえた借金返済の為に娼館に売られるトコだったって聞いたわ」

「それはエーガーさんのトコのパーティも似たようなものですよう。パーティ、お給料は全部父親に巻き上げられて、それが少ないってよく殴られてたみたいで。しかも、エーガーさんってばパーティの勤め先に押しかけてお給料を前借りさせるって騒ぎを起こしたって聞きましたあ。あ、パーティの勤め先ってあの角の金物屋さんなんですよ

お。その奥さんから聞いた話ですから信憑性ありありですう」

四人はわいわいと他にも“聞いた話”で盛り上がっていた。どれも街で聞いた噂話の類だが、その情報量は凄まじい。

耳の広さは諜報部顔負けなのではないだろうか。

葉月は相槌を打ったり、さりげなく質問を挟んで情報を引き出していたが、次から次へと出てくる噂に空恐ろしいものを感じていた。話には聞いていたが、これが下町ネットワークというものだろうか。なんで他人の家の家族構成から勤め先から趣味嗜好まで、ここまで詳しく知っているのだろう。

葉月とて、あちらでも利害関係にある人々の情報は頭に入れるようにしてはいたが、ローザたちは別に利害関係の為に情報を仕入れているわけではあるまい。

若い女性の失踪が続くのは確かに不審だし気になるが、それ以上に彼女たちの情報ネットワークの方が恐ろしい。

彼女たちは情報の受信者であると同時に、発信者だからだ。

葉月は<テーラン>の副長の隠し子ということで、街で声を掛けられる機会も多い。

その時になんでそんなことを知ってるんだろう、という話題を振られることがあった。

その全ての情報源が彼女たちだとは思わないが、割合の大部分を占めると今確信した。

繕い物が終わるまでに、この辺り一帯のダメ親と虐げられる娘たちの情報をひと通り得ることが出来た葉月は、決してローザたちだけは敵に回すまいと固く心に誓ったのだった。

ピリピリとした空気が肌を撫ぜる。

<テーラン>本拠地の裏庭の一角にある鍛錬場で、葉月はごくりと生唾を飲み込んだ。

実際に押されているわけではないのに、気を抜くと後ろに倒れそうだった。

息を吸って吐く。

いつもは意識などしない当たり前のことが上手く出来ない。

相手に飲まれかけているのは明白だった。

落ち着け。落ち着け。

こういう時にどうするべきか、自分は知っているはずだ。

自分より格上が相手なら、相手の目はいつそのこと見ない方がいい。相手の気迫をもろに受けて、動けなくなってしまうからだ。

どこか一箇所に集中するのではなく、相手全体を見る。

どちらかといえば、気配を感じると言っただ方がいいのだろうか。

実際に相手が動いてからでは遅い。

相手が動こうとする気配を感じ取り、最低でも同時に動き出さなければいけない。

コンマ何秒の遅れがいかに大きいか、嫌と言うほど身に染みて分かっていた。

あとは呼吸だ。

静かに息を吸って、ゆっくりと吐く。

静かに、ゆっくりと、周りの空気と同化するように。

自分の身体だけではなく、周囲の空間も己の知覚範囲に取り込むイメージを思い描く。

そうすることで感覚がどんどん研ぎ澄まされていく。

それと同時に、余計な物が削ぎ落とされていく。

耳に虫が止まっても、足下を木の実の殻が転がっていても気にし

ない。

自分の害となるか否か。

今の判断基準は、それだけでいい。

「どうした、お嬢。目を開けたまんま寝てんのか？」

対峙している相手、タイロンが獰猛に笑う気配がした。

葉月はそれに微かな笑みを浮かべて返す。

「無闇やたらに突っ込んで行くのは趣味じゃありません。後の先を取るのが私の流儀なんですよ」

「ふうん。そんじゃ、こっちから行くぜ！」

タイロンが動いたのは、威勢のいいかけ声を発する前だった。

その長身に似合わぬ速さで間合いを詰めてくる。

しかし、葉月とてそのまま呆然としていたわけではない。

タイロンが動くのと同時にあえて数歩前に出て、半円を描くようにするすると足を運ぶ。

葉月が避けた空間をタイロンの振るう剣が斬り裂いた。

刃は潰してあるものの、鋼鉄製の直剣だ。

そしてそれを振るうのは、戦闘面なら実行部の隊長格に勝るとも劣らないタイロンである。

であれば刃を潰してあることに何の意味もない。

直撃は死を意味する。

葉月は斜め後ろから、やや反りの入った片刃——こちらも刃は潰してあるが——の剣をすくい上げるようにタイロンの太股を狙った。

タイロンは狙われた脚を引き、葉月の剣を弾き飛ばそうと剣を薙ぐ。

葉月はそれもするりと避けた。

一度動き出せば、頭で考えるよりも先に体が動く。

葉月は自分を鼓舞するようなかけ声は発しない。

ただ静かに、相手の死角に滑り込み、隙を狙う。

するり、するりと実体のない蜃気楼のように攻撃を避け、殺気も闘気もなく視界から消え去り、思いがけない所から剣を振るう。

タイロンは動きが派手で無駄が多く見えるが、大柄な体躯に似合わ

ぬ柔軟さと野生に近い鋭い勘を持っている。

普通なら防げるはずのない隙を狙ったにも関わらず、でたらめに近い動きで防がれていた。

静と動。

対照的な闘い方をする二人の攻防はしばらく続いた。

動きがあつたのは、鍛錬場に第三者が現れた時だ。

「まだやってはったんですか？ はよせんと朝食食べそびれますよ」「やっべ、もうそんな時間か！ ミケーレ、教えてくれてありがとう！」

食堂に姿を見せない二人を心配して現れたのは、二人と同じ副長直属のミケーレだった。

タイロンはミケーレに礼を言うや否や、今までがよちよち歩きに思える速さで葉月との間合いを詰めてくる。

葉月はとつさに横に飛ぶことで攻撃を避けたが、余裕は一気に吹き飛んでいた。

顔には焦りの色が浮かび、呼吸にも足運びにも乱れが生じている。なんて様だと思ひながら、タイロンの攻撃を必死に避ける。

何せ、自分の命がかかっているのだ。

一瞬でも気を抜けば、間違いなく死ぬ。

必死にならないわけがない。

葉月は限界に近い速さでタイロンの剣を避け、相手の利き腕とは反対の右斜め後ろへと回り込む。

狙いは横腹。

行ける！ と確信したその刹那、タイロンが剣を持つ手を入れ替え、葉月の肩口目掛け剣を振り下ろした。

完全に葉月に背を向けていたのに、何というでたらめな動きだ。葉月は威力が下がることを承知で身を捻り、剣の軌道を変えた。

タイロンの剣が葉月の頭の、わずか十数センチ先をかすめていく。すさまじい剣圧に耐えきれず、葉月は思わずたたらを踏んだ。

その隙を逃すタイロンではない。

しまったと思った時には、剣を持つ両手に強烈な痺れを感じ、鼻先に剣を突きつけられていた。

緊張の糸が切れたのだろう。

いつもの五感が戻ってきた。

遠くで弾き飛ばされた剣が落ちる音が聞こえる。

「ま、まいりました」

葉月はどつと吹き出た脂汗と荒い呼吸に喘ぎながら、両手を小さく上げた。

心臓がばくばくいつている。

本当に死ぬかと思った。

気を抜けばへたり込んでしまいそうだ。

「嬢<sup>いと</sup>はん、腕上げはりましたなあ。でも最後はちいつと油断しはりましたやろ？ 自分の都合の良いように考えたらあきまへん」

ミケーレはいつものように柔和な笑みを浮かべながら、吹っ飛ばされた剣を拾って葉月に手渡す。

表情は優しいが、言っていることは結構辛辣だ。

それでも、その指摘は正しい。

葉月は礼を言つて剣を受け取り、鞘へと収めた。

「途中でつい『行ける』と思つてしまつたんです。慢心でした。相手はタイロンでしたのに……」

「相手は戦うこと以外残念な……間違おた、戦うことに関しては抜кин出ているタイロンですよつて、負けてしまふんは仕方ありまへん。でもその負けから学べるかどうかは当人次第ですわ。まあ、嬢はんやったらそない心配せんでもええ思いますけど」

「ありがとうございます、ミケーレさん。精進します」

「おい。今、さりげなく俺のこと馬鹿にしなかつたか？」

タイロンがミケーレをじろりと睨んだが、睨まれた当人は涼しい顔だ。

「何言つてますの。褒めてますやん。なあ、嬢はん？」

「ミケーレさんはタイロンはやっぱ強いと仰いたかったですよ。ちよつとばかり辛辣に聞こえるのは、ミケーレさんの愛情表現でしょう。タイロンはミケーレさんに愛されてますね」

ミケーレに話を振られた葉月は、疲れていることもあって適当なことを言ってみた。

案の定、二人ともすごく嫌そうな顔をしている。

「やべ、さぶイボが……」

「ほんに嬢はんは口が達者過ぎや。せつかく教えに来たというんにこの仕打ちとはなあ。喉も乾いてはるやる思おて飲み物も用意しましたんに」

ミケーレがそう言つて、足下に置いていた籠かごの中から竹筒のような物を取り出した。

この辺りでは外で飲み物を飲む為の容器として使われているものだ。それを見た瞬間、今度は葉月とタイロンの顔がひきつった。

「まあ、飲みなはれ」

ミケーレが満面の笑みで二人にその竹筒を渡そうとしたが、二人は断固として受け取ることを拒否した。

「いらねえよ！」

「私も全力で遠慮させて頂きます」

「何ですのん、二人とも。人の好意を無駄にしたらあきまへんよ」

両手に竹筒を持ち、おおいに気分を害したと書かれた顔をしたミケーレが至極真つ当なことを言う。

タイロンはそれを無視して葉月が持つ剣を取り上げた。

「お嬢、俺が片付けとくから先に食堂行つてな」

「いえ、私が片付けます。そういうのは下っ端の仕事です」

「無理すんなつて。さすがに今の殺り合やいは疲れたろ？ ちんたらしてたらホントに食いつばぐれるからな」

にかつと笑つて葉月の頭をわしゃわしゃ撫でるタイロンの手をまったくさりげなく外しながら、葉月は申し訳なさそうな笑みを浮かべた。

「すみません、タイロン。お願いします」

「おお。すぐに追いつくかな」

タイロンはそう言つて、さつさと納屋へと向かった。

葉月も鍛錬場脇の木に掛けておいた手拭いを取つて食堂へと向かう。二人にガン無視された形のミケーレは、籠に竹筒を戻しながら葉月の後を追つてきた。

「無視するなんて酷いやないですか」

葉月の隣に並んだミケーレが恨み言を言う。

確かにこのやり取りだけを見れば、葉月たちの方が恩知らずということになるだろう。

それでも葉月は嫌そうな表情かおを隠さず、ミケーレが持つ籠をちらりと見た。

「疲れ果てているうら若き少女に毒入りの飲み物を飲まそうつて方が、よっぽど酷いと思いますけどね」

「嬢はん程“うら若き少女”いう形容が似合わん少女も珍しなあ。なんでやる？ 年はそう言うてもかまへん頃のはずやのに……」

どうでも良い所で首を傾げるミケーレに、葉月は心の中で『まあ、中身はアラサーですからね』と相槌を打つ。

「というか、毒入りの所は否定しないんですね？」

葉月が横目で睨めつけると、ミケーレは相変わらず血色の悪い顔に柔和な笑みを浮かべて小首を傾げてみせる。

「死にはしまへんよ？」

「のたうち回るくらいはするでしょう？」

「後遺症も残らんよに計算尽くしてますやん。無味無臭で色やつて綺麗なもんやのに……」

「そういう問題じゃありません。私に被虐趣味ごめくはありませんし、ミケーレさんがやってることは犯罪です」

葉月は前を向いたまま、きつぱりと言い切る。

「いけずやなあ」

苦笑を浮かべて取り敢えず引き下がることにしたらしいミケーレに、

葉月はふうつとわざとらしいため息をつく。

「他人に迷惑をかけるような趣味は止めてくださいね？」

「んー、善処しますわ」

まったくそう思っていない声だった。

葉月が続けて抗議しようとした所で、それを遮るようにミケーレが口を開いた。

「そお言えば嬢はん、闘い方変えましたやろ？」

誤魔化しにかかったな、と思いながら、葉月は「ええ」と頷いた。

「物置の掃除をしていたら手頃な剣を発見したんです。あれは直剣よりも多少軽くて私向きかと思ひまして。ちゃんと刃がついているものと模擬剣と、両方あったんですよ。あの剣に合わせた闘い方にしようと思つたら、あんな感じになりました」

前半は本当のことだが、最後は嘘である。

正確に言えば、変えたのではなく、元に戻したのだ。

直剣での闘い方は、筋力の少ない葉月には向いていないと見切りをつけた。

日本刀に似た剣を見つけられたのは、僥倖だ。

師岡の剣術には表と裏があり、裏の方は所謂暗殺向きの技を主体とする。

元々は裏の方が主だったのだが、時代の変遷と共に宗家と極一部の高弟こうてい以外は学ぶことがなくなったのだという。

それはそうだろうと、葉月も思う。

表の方は武士道を取り入れ、礼を重視し、相手を制することを目的としており、活人剣の思想が根底に流れている。

それとは真逆の、いかに相手を殺すかを徹底的に昇華させた裏は、現代日本には必要のないものだ。

滅多な人間に教えれば、取り返しの付かないことになる。

葉月は曾祖父から、その裏の技を仕込まれていた。

「へえ。それにしても、扱い慣れてるよに思いましたけどなあ」

ミケーレの探るような眼差しに、葉月はおっとりとした笑みを浮か

べて返した。

「よほど相性が良いんでしょう」

「まあ、そういうことにしときましょか。確かに真つ当な闘い方より嬢はんには合ってるよですし。陰湿で陰険な感じが嬢はんらしいゅうてええ思いますよ」

「それ、褒めてないですよね？」

葉月が恨めしげな顔でミケーレを見ると、ミケーレはふにやりとした笑みを浮かべた。

「おや？　これが私の愛情表現や言ったんは嬢はんやないですか」根に持ってやがる、と葉月は舌打ちしたい気持ちを押さえ、ふわりと笑って頷いた。

「そうでしたね。ありがとうございます」

「いえいえ、どう致しまして」

ふにやりとふわり。

二人とも穏やかに笑っているはずなのに、どこか寒々しい空気が流れる。

それでも二人は割と仲が良い。

ミケーレ自身も秘密の多い男である。

その所為か、他人の事情にも無闇矢鱈には踏み行つて来ない。

その距離感が葉月には心地良かった。

これで他人に毒を飲ませてのたうち回る様に興奮するという悪癖さえなければなあ、と思う葉月であった。

そうこうしている内に、食堂に着いてしまった。

立派な檜の扉に手をかけながら、葉月が後ろを振り返る。

「それにしてもタイロン、遅いですね」

「さいですねえ。どないしはったんですやる？」

二人で首を傾げながら、食堂の扉を開く。

途端、嫌な予感を感じ取った葉月とミケーレは同時にしゃがみ込ん

だ。

その頭上を白い何かが飛んで行き、廊下の壁に当たって粉々に砕け散る。

元は皿であつたのだろう残骸から食堂内に視線を戻した葉月の目に映つたのは、何故か先に着いていたらしいタイロンと、そのタイロンに手当たり次第に食器を投げつける中年女性の姿だった。

食堂内は酷い有様だった。

十人掛けの長机が四つ配置された室内は椅子が倒れ、食器の残骸が散らばり、その上に乗っていた料理も床にぶちまけられていた。

壁際には騒動前に食事をしていたのだろう団員たちが、手々に自身の朝食を確保して避難している。

そんな異様な光景の中、動いている影は二つ。

「待ちなつ、この唐変木！ いい加減に白状しろ！」

「だあーつかつらつ、知らねえつつつてんだろぅがつ！」

鬼のような形相をした中年女性が手当たり次第に机の上にあるものを投げつけ、タイロンは床の障害物を軽々と飛び越えながら、それらを避けていた。

この状態を生み出したのは、間違いなくこの二人だろう。

葉月はこの惨状を見て、彼女にしては珍しくあからさまに眉をしかめた。

食べ物や粗末にしていることもそうだが、その苛立ちは逃げ惑うタイロンと手を出さずに傍観している他の団員たちに向けられていた。「どちら様ですか、あの女性は。タイロンが尻尾を巻くほど強そうには見えませんけど」

見知らぬ中年女性を半眼で睨みつつ、葉月は隣に立つミケーレに尋ねる。

ミケーレは残念ながらそれに対する答えを持っていなかった。

困ったように眉を下げながら、首を傾げる。

「さあ？ この辺りでは見いひんお人ですけど」

二人して訝<sup>いぶ</sup>しがっていると、答えは葉月の後ろから返ってきた。

「クリステイアータ>の女将だな、ありや」

眠たげな目をしつつぼりぼり無精ひげをかきながら中を覗き込んでいるのは、実行部第二隊所属のキーファンだ。

葉月とはあの街道で一緒に盗賊どもと戦った仲である。

キーファンはふぁあと気の抜けたあくび混じりで、

「まーた、厄介なのが来てら」

とつぶやいた。

「<リステイアータ>……ですか？」

葉月が目をぱちくりしながら振り返る。

おつむがえ

鸚鵡返し問いに対して、キーファンはにやつと粗野な笑みを浮かべた。

「おう。花水亭<リステイアータ>、春をひさぐ女神たちの店だぜ」

「ああ、娼館ですか。でも何で娼館の女将がタイロンを追っかけ回しているんでしょう」

葉月があっさり中年女性に目を戻したので、キーファンは鼻白んだようだった。

「おいおい、と嗜めるように首を振る。たしな

「嬢、俺がせっかく遠回しに言っただつのに、女の子が娼館なんて言っちゃあいけねえよ」

「ご忠告ありがとうございます。そうですね。男性の幻想を壊さないように気をつけます」

鼻で笑いこそしなかったが、葉月は中年女性に視線を向けたままキーファンの小言を受け流す。

その物言いに、今度はキーファンが目を瞬かせた。

ミケーレはくつくつ笑いながら、そんなキーファンの肩をぽんつと叩く。

「嬢はんにそないなと言わはったって無駄いとやと思いますよ。親分に女らしゅうせい言わはるよなもんです。ま、表面取り繕うだけマシでっしゃろ」

「そりゃ無駄だな」

ミケーレの言葉を受けたキーファンがしっかり頷く。

葉月は微妙そうな顔をしつつ、隣に移動してきたキーファンを横目で見上げた。

「そういう納得はされたくないんですけど……それより、あの女将が厄介っていうのはどういうことですか？」

「ああ、あの女将な、癪癪持ちで有名なんだよ。余所の女将と取っ組み合いの喧嘩してた時、仲裁に入った男に胸触られただのケツ触られただの難癖つけやがった上、押し倒されると思って怖かったとか周囲に吹聴しやがったんだ」

女将の評判は元々最悪だが、仲裁した男も悪趣味だのなんだの、根も葉もない噂のせいで酷い目にあっただけらしい。

「ああ、それで皆さん尻込みしてはるんですね」

「だろうよ。あのババア相手にそんな噂立てられたら恥もいゝことだぜ。ついでにこの床じゃあな。怪我でもさせた日にゃ、それこそ慰謝料だのなんだのでケツの毛まで<sup>むし</sup>取り取られるだろうさ」

キーファンはそう言って、足下に転がっていた陶器の破片を軽く蹴り、肩をすくめて見せた。

ミケーレも、

「何があつたかは分かりまへんけど、タイロンも災難やなあ」

と、生温かい視線をタイロンに送っている。

男二人は完全に傍観モードだった。

葉月は手に持った手拭いを<sup>もてあそ</sup>びながら、どう動くべきか思案する。両隣の男どもに動く気がないのは確かだ。

葉月の今の身分は、下働きである。

団員たちを差し置いて出しゃばるのは、まずい。

せつかく同情を得られているのに、それを台無しにしたくなかった。不安定な身の上だ。

どうしても保身を考えないわけにはいかない。

だが、タイロンと女将の間に何があつたにしろ、食堂で暴れられては困る。

止めなければ話も聞けないだろう。

そして何より、葉月は空腹だった。

さて、出しゃばってると思われずに止めるにはどうするか。

葉月があれこれ考え始めたその時、炊事場に繋がる扉がバァンと勢いよく開かれた。  
そこから出てきたのは、額に青筋を浮かべた五十代前半くらいの女性だった。

炊事場から出てきた女性は、がっちりした体格を割烹着に似た服で包んでいる。

彼女が使用人頭も兼任する料理人のマルゴだ。

あまりの騒がしさに様子を見に出て来たマルゴは、自分の城の惨状に目を剥いた。

「なんだい！ この有様は！」

「げっ、おばちゃん！」

マルゴに睨みつけられたタイロンは、しまったという顔で立ち止まった。

料理の腕も面倒見も良いマルゴは<テーラン>の団員たちから母親のように慕われており、親しみを込めて『おばちゃん』と呼ばれている。

猛虎と恐れられるタイロンも、マルゴの前ではいたずらを見つけた悪ガキのようだ。

しかしそんなマルゴの効力も、部外者の女将には通じなかった。

女将は好機とばかりに、足を止めたタイロンに水差しを投げつける。

「おわっ」

タイロンが体を捻って避けると、床に落ちた水差しは高い音を立てて砕け散った。

「なんで避けるんだ！」

「避けるに決まってるっつーの！」

再び始まった追いかけっこに、マルゴの眉間に青筋が浮かぶ。

「いい加減におし！ いい歳こいてみっともない！」

マルゴが声を荒げて制するも、女将は足を止めず嘲りあざけ混じりに怒鳴り返した。

「うっさいババアだね！ 引っ込んでな！」

「な、何だって！」

マルゴはわなわなと震える指を女将に向けて、事態を傍観している団員たちに向かい声を張り上げる。

「大の男が揃って壁の華気取りかい！ 何でさっさとこの女を取り押さえないのさ！」

しかし返ってきたのは団員たちの困惑の視線と、女将のヒステリックな声だった。

「わたしに指一本でも触れてごらん！ 痴漢として訴えてやるからね！」

「まあ、つ、ずうずうしい女だね！ 葉月！」

「はいっ」

名を呼ばれた葉月の背筋がピンと伸びる。

海千山千の団員たちを叱り飛ばすマルゴには、葉月も頭が上がりない。

<テール>に拾われてからの二月の間、こちらの知識を持たずに失敗続きだった葉月にあれこれ教えてくれたのは、このマルゴだった。

ブノワの娘であると公表され、見習いとして副長直属に配属になった後も、なにかと気にかけてくれている。

葉月にとっても、マルゴは第二の母のような存在だ。

葉月はマルゴに手招きされ、駆け足で近寄った。

「あたしじゃ上手いこと止められそうにない。悪いけど、あれを止められるかい？」

マルゴは葉月の右肩に手を置きながら、少女の灰青の瞳と目を合わせる。

あれが厄介な女だということは、あのふてぶてしい態度を見れば一目瞭然だ。

だが、ここにいる男どもは腰抜けだし、自分では新たな火種にしかないだろう。

幹部を呼んでくるにしてもその大半は男だし、首領のカーサは女性ではあるが、カーサを投入するのは燃え盛る炎に火薬を投げ込むよ

うなものだ。

火は消えるかも知れないが、代わりに周りも全て吹き飛ぶ。  
他の使用人たちにあの女を止めろというのも酷な話だ。

そうだった訓練は受けてない。

マルゴとて、普通ならば十三の少女に喧嘩の仲裁など頼まない。

普通の少女なら、物が飛ぶ中に割り入るのも癪癪かんしゃく持ちの女と関わるのも恐ろしかろう。

だが、この子なら大丈夫だという確信が、マルゴにはあった。

果たして、少女はふわりと笑う。

「はい。おばちゃん。すぐに止めて来ますね」

まるでちよつとそこまでおつかいに行ってくるというような気軽さで、葉月は頷いたのだった。

“マルゴからのお願い”という大儀名分を手に入れた葉月は、すたと女将の方へ近づいていく。

ヒートアップした女将は、タイロンに椅子を投げつけようとしていたところだった。

机の上にあつた物は、彼女自身があらかた投げてしまったからだ。

「危ないですよ」

葉月はそう言つて、女将が思い切り振りかぶつた椅子を後ろから引っ張つた。

ぎゃあ、という悲鳴をあげて、女将がバランスを崩す。

女将はそのまま、葉月が用意した別の椅子に座り込んでしまった。

葉月は女将の手から椅子を取り上げて、正面へと回る。

そして心配そうな表情で、椅子に座わらせた女将を見下ろした。

「お怪我はありませんか？」

「何すんのさ！」

女将がキツと睨み上げる。

葉月はそれには頓着じんちやくせず、おっとりとした笑みを浮かべて一人うな

ずいた。

「ああ、お怪我はなさそうですね。良かった」

「人の話を聞け！ 小娘が！」

女将は怒声をあげて立ち上がるうとしたが、葉月に額を押さえられて立ち上がることが出来なかった。

葉月は別に、力一杯に押しつけているわけではない。

右手の三本の指で、軽く額を押さええているだけだ。

それだけで立ち上がることが出来ないのは、人体構造上の問題である。

それを知らない女将は、うろたえた。

相手は自分の三分の一も生きてなさそうな小娘だ。

決して華奢ではないが、筋骨隆々なわけでもない。

それなのに易々（やすやす）と自分を押さえつけ、しかも場違いな程おつとりと笑って見下ろしてきている。

女将はその仕事柄、今まで多くの女を見てきた。

気が強いのも、根性がひん曲がっているのも、色々だ。

だが、こんな場面で怒るのではなく怯えるでもなく、笑っているような娘は初めてだった。

頭がおかしいのかと思ったが、一見柔らかい印象のたれ目と視線を合わせて、女将はびくり肩を震わせた。

柔らかく温かい笑みの中で、灰青の瞳だけが氷よりもなお冷たかった。

「落ち着いた所でお話を聞かせてくださいますか？ もちろん、タIRONも一緒です」

あくまでも柔らかく丁寧な口調で葉月は問いかける。

それなのに、ぞわりとした寒気が這いあがってくるのはどういふことだろう。

こんな小娘相手に気圧されているというのか？

生き馬の目を抜く花街<sup>かがい</sup>でのし上がって来た自分が？

本能的な恐怖とプライドが緬<sup>ま</sup>い交ぜになって黙りこむ女将に、葉月

は目を細めて呼びかける。

「女将さん？」

「あ、ああ、わかった。わかったよ。ちゃんと話す。話すから」

よく分からない恐怖にかられた女将が我に返ったのは、思わず了承の言葉を返した後だった。

葉月は女将が頷くと「少々お待ちくださいね」と言いおいて、く  
るりと背を向けた。

マルゴと二言三言会話を交わした後、それまで浮かべていたおつと  
りとした笑みを消し、難しい表情でミケーレ<sup>かお</sup>たちの元へと戻ってく  
る。

自分がこの場を収めたことを得意がる様子はない。

予想とは違う葉月の様子に、賞賛の言葉をかけようとしたキーファ  
ンが思わず口ごもる。

しかし、ミケーレの方は葉月の不機嫌さをもろともせず、ふにやり  
と笑って葉月を迎えた。

この辺りは葉月という人間を知っているか知らないかの差というよ  
りは、ミケーレのあえて空気読まないスキルが発動した結果である。  
「嬢<sup>いと</sup>はん、見事な手際でしたなあ」

「ありがとうございます。ええ、まあ、ああいう手合いの対応をし  
た経験がありますので……」

ミケーレの物言いに毒気を抜かれ、葉月は苦笑を浮かべた。

“向こう”では師岡流のトラブルシューターとして、いわゆるモン  
スターペアレンツやクレーマーの対応もしていた。

今までに相手にしてきた連中に比べれば、“言い聞かせて”分かる  
レベルの女将は可愛いものである。

しかし、解決どころか詳しい話も聞いていない状態では、事案自体  
が簡単かどうかは分らない。

いくつかの懸案事項の優先度を考えながら、葉月はこちらに戻って  
きた用件を果たすために口を開いた。

「申し訳ありませんが、お二人にお願いしたいことがそれぞれ二点  
ほどあるんです。引き受けて頂けませんか？」

「「お願いしたいこと？」」

異口同音に鸚鵡返しする二人に、葉月が頷く。

「ええ、キーファンさんには、ジェイル部長に『一度食堂に寄ってから応接室へお越し下さい』、ジークに『学問所へは一人で行って欲しい。先生には諸事情により休むと言っておいて』と伝えて頂きたいんですが……」

「ああ、それくらいならお安いご用だ」

どんな難問をふっかけられるかと内心おののいていたキーファンは、にっと笑って請け負った。

朝食を食いつぶぐれた上、やらされることは使いつぱしりのような伝言だが、快く引き受けたのは面倒くさそうなことに巻き込まれている少女への同情が勝った結果である。

葉月は申し訳なさそうな顔で、すっと頭を下げた。

「ありがとうございます。よろしく願います」

「ああ、急ぐんだろ？」

と言つて、キーファンは食堂を出ていった。

頭を上げた葉月は、見た目はむさ苦しいチンピラだが有能ないい人とキーファンの印象を上方修正する。

多分上から目線で失礼なのは、性分なので仕方がない。

それを表に出さないだけの分別はあるつもりだ。

「で、私は何をしたらええのですか？」

残されたミケーレは、どこか楽しげに問いかけた。

彼の方は騒動の前に朝食を済ませていたし、葉月がどのような采配をするか面白がっている節がある。

同じ部署である気安さもあって、葉月はキーファンに対した時に浮かべていた申し訳なさそうな表情は引っ込めた。代わりに再び難しい表情を浮かべる。

「ミケーレさんはブライアン隊長に……もしブライアン隊長がいらっしゃらなければ……ケヴィン隊長に応接室までお越しくださいと伝えてください。その後は……」

葉月が声を抑えて二つ目の“お願い”を伝えると、ミケーレは一瞬

驚いたように目を見張った。

「それは……いや、よう考えんでも必要なことやわ。このことも応接室に行かはる隊長はんには伝えておいた方がええですね？」

「そうですね、お願いします」

「まかせといてください」

何故か上機嫌で食堂を出ていくミケーレ。

葉月の隣にやってきたタイロンは、それを見て首を傾げた。

「お嬢、ミケーレのヤツになんて言ったんだ？」

「ちよつとしたお願いですよ。ミケーレさんが何で嬉しそうなのかは知りませんが……タイロン」

呆れ混じりの声で名を呼ばれたタイロンは、ばつが悪そうな顔で頭をかく。

「えーあー、そのー、ありがとな。助かった」

「どういたしまして。逃げ回る場所はアレでしたけど、手を出さなかったのは正解ですよ。怪我でもさせていたら厄介でした」

葉月がそう言うと、タイロンは何故か得意げに答えた。

「まあな。あの女将の噂はよく聞いてたかな。面倒な女だって」

「その面倒な人に絡まれるようなことをしたのはタイロンでしょう？」

じろりと葉月に睨み上げられて、タイロンは首と両手を横に振り全力で否定する。

「いやいや、マジで女将がなんで因縁つけてきたのか、全ッ然分かんねえんだって！」

「しいつ。声を抑えてください。まったく。理由は応接室で隊長にお話くださいね」

「はい……」

大きい体を縮こませて全身でしょんぼりするタイロンに、葉月はふうつとため息をついた。

これではどちらが指導役なのか分かったものではない。

体面をことさら気にする葉月だったが、タイロンとのやり取りはあ

る意味<テーラン>内では有名になってしまっている為、今更取り繕うのも馬鹿らしい。

「とりあえず、私たちも応接室へ向かいましょう。こちらはおばちゃんが何とかしてくださるそうですし」

「お嬢も一緒に行ってくれるのか？」

ほつとしたように尋ねるタイロンに、葉月は肩をすくめてみせた。

「あの女将には女性の立ち会いが必要でしょう。それに……」

葉月はそう言いながら、食堂の奥へと視線を動かす。

そこではマルゴの号令の元、今まで壁の花と化していた団員たちが食堂を片付け始めていた。

本来ならば片付けなど使用人の仕事であるが、なすすべなく事態を見守るしかなかった団員たちへのマルゴの怒りは深い。

ここで逃げ出せば食堂への出入りを禁止されるのは必死である。

無料で食べられる美味しい料理を手放すには、団員たちの舌は肥え過ぎ、財布は薄過ぎた。

今後の食生活の為に黙々と片付けている団員たちを尻目に、女将は足を組みむすつとした顔で腕組みしている。

まるでこの主のような態度のデカさだ。

しかしその女将も葉月がにつこりと笑いかけると、肩をびくつとさせてさりげなく視線を逸らした。

それを愉快げに見やりながら、葉月は続きの言葉を紡ぐ。

「ここまで派手に暴れてくださった理由とやらに、私も興味があるものですから」

（やべえ。つか、怖え！）

穏やかな笑みの中、すつつと細められた目は、獲物を見定める蛇の目。

ふふふと笑う葉月を見下ろして、タイロンは自身を厄介ごとに巻き込んだ張本人にも関わらず、思わず女将に同情していた。

戦列の<テーラン>は自警集団と名乗ってはいるが、新興地区の自治組織の下部組織でもなければ慈善事業でもない。

犯人の受け渡しなどで自治組織と契約を結んではいるが、辺りの商家等からみかじめ料を取っての地域の治安維持や用心棒の派遣、医療の提供などが主力の営利団体である。

その財務と総務を一手に引き受ける勘定部の部長、ジェイルはその童顔に青筋を浮かべながら応接室への道のりを歩いていた。

その迫力たるや凄まじく、すれ違う団員たちが恐れおののいて道を譲る程である。

力が入りすぎて手に持った帳簿にシワが寄っているが、今のジェイルにそれを気にしている余裕はなかった。

<テーラン>は副長の営業力と団員たちの実力でもってそこその稼ぎがあるが、食い扶持も多い分、内証が豊かとは言いがたい。

それこそ、様々なところを削りに削り、頭の血管が切れるのではないかというくらい考えぬいて回しているのである。

<テーラン>の財務を破綻させない為ならば首領のカーサさえ怒鳴り飛ばすし、備品の扱いを粗末にする者には相手が泣いて改心まで説教をし続ける。

その冷酷さとの確さと苛烈さとねちっこさで“鬼の勘定部長”の異名を取るジェイルは、乱暴なノックの後、中からの返答を待たずに応接室の扉を開け放った。

ガゴンツという音と扉が何かにぶつかった衝撃を覚えたが、構わず中に入る。

十畳ほどの室内には二組の長椅子ソファが背の低い机を挟んで向かい合っている。

奥の長椅子に四十代後半とおぼしき化粧の濃い女性が座っているのを見て、ジェイルはすかずかと近づく。

そして、ばしんつという小気味いい音を立てて帳簿を机の上に広げて見せた。

「あんたがクリスティアータの女将か？」

広げた帳簿の上に右手を置きながら、ジェイルは中年女性を睨みつける。

「ああ、そうだよ。あんたは誰だい？ 挨拶もないなんて躰がなつてない坊やだね」

侮りと嘲りの混じった目で見上げられ、ぴくり、とジェイルのこめかみが引きつった。

ジェイルは自身が童顔なことをとても気にしている。

背丈もあまり高くない為、三十を目前に控えた今でさえ、十五、六の小僧に間違えられることもしばしばだった。

が、腐つても戦列の<テーラン>の幹部の一人である。

女将のあからさまな挑発には乗らず、背筋を伸ばして見下ろすようにして答えた。

「ああ、失礼した。戦列の<テーラン>の財務を預っているジェイルという者だ。これでもとうの昔に成人している。あんたには損害賠償の話があつてやってきた」

「損害賠償？」

そう尋ねてきたのは、手前の長椅子にふんぞり返っている実行部第四隊長、ケヴィンだった。

ジェイルが説明の為に振り返ると、額を抑えてうずくまっているタイロンと、その脇に困った顔でしゃがんでいる葉月が目に入った。

「何やってんだ、お前ら」

呆れ混じりの声でジェイルがつぶやく。

「ジェイルがいきなり扉開けっからぶつけたんだよ！」

タイロンは涙目で額を抑えながら、それに抗議した。

が、

「阿呆。そんな所に立つてる方が悪いわ。それよりお前の石頭で扉に傷がついてないだろうな？」

「打つたの頭だぜ？　その俺より扉の心配かよ。馬鹿になったらどうしてくれるんだ！？」

「お前の頭に詰まってるのは脳味噌じゃなくて筋肉だろ？　それ以上馬鹿になりようがないから安心しろ。それよりも直すのに金がかかる扉の心配をするに決まってるだろうが」

「けちよんけちよんに言われた上最後に鼻で笑われて、タイロンがうな垂れる。」

「つーか、なんでジェイルが来るわけ？」

「あ、私がお呼びしました」

訝しげに尋ねるケヴィンに答えたのは葉月だった。

「タイロンから話を聞き出そうとした女将がタイロンを追いかけ回した際、食堂に少なくない損害が出ました。そちらはジェイル部長の管轄ですから」

「ま、そういうわけだ」

ジェイルはそう言いながら、開いた帳簿を指差す。

「皿が三十七枚、杯が三十三個、水差しが二個に、椅子が三脚、匙さじが十五本、あと割れた破片で傷ついた机や床の修繕費込みで、八十二万一千とんでハリंगा、耳を揃えて払ってもらおうか？」

「なっ」

具体的に細かく算出された帳簿の金額を見て、女将が顔色を変えた。

「そんなに高いわけがっ」

「ある。それらを購入した時の代金はきっちり帳簿に残ってるし、その時から上昇した物価も考慮してある。床や机の修繕は別室を修繕した時から出した概算だが、そう外れてはいはずだ。ま、その他慰謝料も含めてはあるがな。ああ、踏み倒そうなんて考えるなよ？　<テーラン>を敵に回すことの意味を知らないわけじゃないだろう？」

凄みのある笑みを浮かべ、ジェイルが女将の顔を覗き込む。

女将の顔は青を通り越して、土色に近かった。

散々でかい態度をとっていたが、やっと己の置かれた立場を理解し

たらしい。

<テール>の団員が個人的に女将の恨みを買っただけなら、悪い噂を立てられる団員の方が立場が悪いかも知れない。

だが、<テール>の本拠地で暴れたとなると、話は別だ。団員個人ではなく、戦列の<テール>自体を敵に回したことになる。

<テール>は忌避されることも多いとはいえ、方々（ほうぼう）に顔が利く。

やろうと思えば娼館の一つや二つ、潰すことも不可能ではない。

ジェイルはそれを金で回避させてやろうと言っているのだ。

この辺りが警察のようなヤクザと葉月が判ずる所以である。

戦列の<テール>は慈善団体でも無償の有志団体でもない。

非常に微妙かつ、厄介な集団だった。

とはいえ、娼館を潰して何か利益になるわけではないので、ふっかけてはいるが十分に払える額をジェイルは提示している。

大人しく金を払うか、血の滲むような思いをして興した娼館を潰すか。

女将が選べる選択は、一つしか用意されていなかった。

「は、払わせて頂きます……」

俯き消えそうな小さな声でつぶやいた女将に、ジェイルは葉月も敵わない真っ黒な笑みを浮かべて言った。

「まいどあり」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1141j/>

---

混沌なき箱庭

2011年12月3日21時46分発行